奈良文化財研究所国際遺跡研究室リレートーク

海外から見た日本考古学の魅力

監修
奈良文化財研究所

編集
庄田慎矢・西原和代・村上夏希

海外から見た日本考古学の魅力

奈良文化財研究所
国際遺跡研究室リレートーク

奈良文化財研究所 監修
庄田慎矢・西原和代・村上夏希 編

海外から見た
日本考古学の魅力

奈良文化財研究所国際遺跡研究室リレートーク

はじめに

本書の元となったのは、二〇二一年度に六回に分けて開催されたオンライン・トークイベント『海外から見た日本考古学の魅力』です。これは、日本考古学を研究している海外在住あるいは外国籍の日本在住の研究者が、それぞれが考える日本考古学の魅力を、日本国内の聴衆に向けて日本語で語る、という催し物でした。それぞれの熱い思いをつなぐという意味を込めて、リレー方式で研究者たちがバトンをつなぎ、合計一二名の方々からお話しいただくことができました。

そもそもなぜ、「国際遺跡研究室」に勤務する私たちがこのような企画を立てたのか、その経緯を、私たちの活動内容と合わせて、まずは述べておきたいと思います。国際遺跡研究室は、奈文研やその他の関連機関が行う国際的な調査研究に関しての実施・調整・協力・情報収集を行うことを主たる責務としています。具体的には、カンボジア・アンコール遺跡群西トップ遺跡の調査修復事業や、カザフスタンやウズベキスタンの文化財関連機関などとの学術交流を現在盛んに進めており、それ以外にもこれまで多くの海外機関との共同事業を展開してきました。地球上の様々な国や地域に出かけていき、多種多様な文化遺産を実見することや、そこで活躍する専門家たちの話を聞いたり意見を交わしたりすることは、楽しくも重要な職務であり、私たちの仕事の大きな部分を占めていました。また、海外の専門家を日本にお招きする機会を通じて、普段見慣れたつもりでいた日本の文化財について新たな視点を得ることも、少なくありませんでした。

二〇二〇年の冬、そんな私たちの活動にとっての緊急事態が発生しました。新型コロナウイルスの世界的な流行です。これによって、全地球的に、多くの人々の生活がガラリと変わったことは間違いないと思いますが、「国際」を冠する私たちの研究室にも、大きな変化が訪れました。全く海外に渡航せずに各種の「国際」交流事業を展開せざるを得ない、という事態になったのです。感染拡大に歯止めがかからないまま時間ばかりが過ぎてゆき、私たち自身、これほど長い間日本国内に留まるということは、仕事を始めてから初めての経験でした。

しかし、できないことを夢見て悲嘆にくれてばかりいるわけにはいきません。与えられた環境の中で最善をつくし、目的に向けて任務を遂行することが、私たちの責務です。国内にとどまらざるを得ないという状況を逆手にとって、むしろ国内に積極的に目を向けて、日本の文化財や考古学の魅力を改めて見つめ直したいと考えました。そうした思惑で改めて海外に目をやると、日本を訪問したくてウズウズしている、日本の考古学を愛する世界各地の研究者たちの存在が、否が応にも目に入ってきます。彼ら・彼女らからは、日本での経験を懐かしみ、一刻も早い再訪を望む声を数多く聞きました。それぞれに、日本で見たい物、聞きたい話、行きたい場所、会いたい人々がいるのです。言い換えれば、実に多様な視点から、日本の考古学の魅力を発掘・発見し、それに魅了されている人たちなのです。

したがって、私たち日本人が日本考古学の魅力を再発見していくうえで、彼ら・彼女らこそは、最も教えを乞うべき存在と言えます。日本に閉じ込められたことで得られた私たちの気づきと、海外にいる彼ら・彼女らの声から誕生したのが、オンライン・トークイベント『海外から見た日本考古学の魅力』でした。

実は、この企画は、最初からリレー形式にするつもりではありませんでした。計画の段階で、「日本語

で」「日本の聴衆に向けて」お話しいただける方々に、企画の相談をし始めたところ、瞬く間に賛同者が集まり、気が付くと通年のシリーズを開催できる運びとなっていたというのが、舞台裏で起きていたことです。このような経緯でしたので、自然とお声がけしたのは、この企画の発案者である庄田とそれまでに何らかの関わりのあった方々ということになります。個人的な付き合いの詳細についてはここで述べませんが、これだけ多くの方々からいただいたご縁に、改めて感謝申し上げる次第です。また、リレーの順番を決めるにあたり、海外における日本考古学の研究を長年牽引して来られたジーナ・バーンズさんを大トリとすることは心に決めていました。ご本人にも、紅白歌合戦を引き合いに出してご了承いただいたことは、心温まる思い出です。その他、リレー走者の方々のご都合もあったものの、世代や所属、テーマなどを合わせることで、各回の特色をうまく出せた例もありました。

リレートークはすべて、オンライン会議ツールZoomを用いたオンライン形式で行いましたが、より多くの参加希望者に対応するため、第二回目以降はYouTubeでの配信も行いました。全六回の合計で、延べ八〇〇名以上の方々が参加してくださいました。本企画を通じて、参加者の皆さん一人ひとりが、いろいろな思いを分かち合いながら、それぞれに新たな発見をしていただけていたら、これに勝る喜びはありません。本企画が、海外渡航の難しい状況下で、日本の文化財をめぐる海外との交流を深める場に少しでもなっていたとすれば、本当に嬉しいことです。

そして本書を手にとって下さった皆さんには、講演をもとに再構成されたそれぞれの個性的な文章をじっくりと読んでいただき、普段とは異なる視点から見た日本考古学の魅力を感じとっていただければと思います。

最後になりますが、講演をお引き受けいただいた演者の方々、そして大勢の参加者の皆様、出版にあた

って多くのご協力をいただいたクバプロの皆様に、この場を借りて篤く御礼申し上げます。
ワンダーでエンチャントな日本考古学の世界へ、ようこそ！

編者一同

《イベント開催の詳細》

第1回　二〇二一年五月一七日
サイモン・ケイナー（英国 セインズベリー日本藝術研究所 所長）
『奈良からノリッジへ：日本考古学への英国的まなざし』
マーク・ハドソン（ドイツ マックス・プランク人類史科学研究所 研究員）
『宮古島長墓遺跡の調査からみた日本考古学』

第2回　二〇二一年七月三〇日
羽生淳子（米国 カリフォルニア大学バークレー校 教授）
『学際的研究からみた景観利用の歴史的連続性とその変化』

マージョリー・バージ（米国コロラド大学ボルダー校 助教授）
『考古学的文学研究のために』

第3回　二〇二一年九月一七日
イローナ・バウシュ（オランダ ライデン大学 講師）
『縄文社会、宗教と交換』
アマンダ・ゴメス（北海道大学 博士課程）
『モノから人へ：考古学と地域社会の関係性』

第4回　二〇二一年一一月一日
温品ディアナ（ポルトガル リスボン大学 博士課程）
『縄文貝塚の魅力：西ヨーロッパからの視点』
ブリッタ・シュタイン（ドイツ マルティン・ルター大学 ハレ・ヴィッテンベルク校 講師）
『日本考古学の魅力：ドイツの考古学者の経験と印象』

第5回　二〇二二年一月一四日
ジョセフ・ライアン（岡山大学大学院 特任助教）
『鉄器研究から見た日本考古学』

スコット・ライオンズ（米国 カリフォルニア大学バークレー校 博士課程）
『分析が明かす昔の鍛冶』

第6回　二〇二二年三月九日
エンリコ・クレーマ（英国 ケンブリッジ大学 上級講師）
『時間と集落と人口の考古学』
ジーナ・バーンズ（英国 ダーラム大学 名誉教授）
『埴輪・勾玉・冠・直弧文の魅力』

目次

第1講　奈良からノリッジへ（ストーンヘンジ経由）―日本考古学への英国的まなざし …… 013

サイモン・ケイナー　セインズベリー日本藝術研究所 所長

はじめに　015
一．イギリスにおける日本考古学研究の歴史　017
二．日本考古学とのかかわり　022
三．イギリスの視点からみる縄文の魅力　030

第2講　宮古島長墓遺跡の調査から見たもう一つの日本考古学 …… 047

マーク・ハドソン　マックス・プランク地球人類学研究所 研究員

宮古島南嶺の長墓遺跡　049
長墓遺跡の規模　051
長墓遺跡の遺物と成立年代　052
貝塚遺構　054
長墓遺跡と先島の考古学　060
今後の課題　064

第3講　学際的研究から見た景観利用の歴史的連続性とその変化 …… 071

羽生 淳子　カリフォルニア大学バークレー校人類学科 教授・日本研究センター 所長
総合地球環境学研究所 客員教授

はじめに　073
一．日本考古学と海外考古学―北米との比較を中心に　075
二．小規模経済プロジェクトにおける学際的・超学際的研究　078
まとめ　089

第4講　考古学的文学研究のために

マージョリー・バージ　コロラド大学ボルダー校アジア言語文明学部日本語学科 助教授　097

なぜ、上代文学を考古学的に考えるか　099
研究の目的　100
『万葉集』に見る「からひと」　102
場（Place）、百済の出土木簡　103
近江京の文字文化　106
近江地方の木簡遺跡一覧　107
「文学」を「文字文化」と捉えなおす　110

第5講　『縄文社会、宗教と交換』ヒスイの視点から

イローナ・R・バウシュ　ハイデルベルグ大学 訪問教授　117

はじめに　119
先史時代のヒスイの用途　121
オランダにあるシーボルトの考古学コレクション　124
国際的なジェダイト研究　125
民俗学的資料　128
縄文社会の中のヒスイ利用と社会的価値観　129
縄文時代におけるヒスイ　130
穴が開いているもの　134
シャーマンの儀式道具か　136
結　論　138

第6講　モノからヒトへ―考古学と地域社会の関係性

アマンダ・ゴメス　北海道大学大学院文学院アイヌ・先住民学研究センター 学術研究員　145

はじめに　147
考古学的魅惑とエンチャントメント　148
個人的な魅惑「モノからヒトへ」　149
礼文国際フィールドスクール　150
フィールドスクール　154
考古学と地域社会の関係　156
考古学のエスノグラフィー　158
考古学の共同体　160
おわりに　161

第7講　縄文貝塚の魅力―西ヨーロッパからの視点

温品 ディアナ　UNIARQ リスボン大学考古学研究センター　167

はじめに 169
西ヨーロッパから見た日本考古学 170
西ヨーロッパの中石器時代貝塚と国際的な比較研究 172
縄文貝塚の魅力―豊富な情報量とアクセシビリティ 179
縄文貝塚の魅力―空間利用がわかる遺跡が多い 184
縄文貝塚の魅力―一般市民向けの情報公開 186
完新世狩猟採集民社会と貝塚 171
ポルトガル・フランスの貝塚の分布と問題点 174
縄文貝塚の魅力―多様性 182
縄文貝塚の魅力―保存活用 185
おわりに 188

第8講　日本考古学の魅力―ドイツの考古学者の経験と印象

ブリッタ・シュタイン　ハレ大学文学部日本学科 研究員　195

日本の考古学の魅力―個人的な印象 197
古墳時代の騎馬文化とユーラシア東西交流 201
鉄製品としての甲冑 204
ドイツと日本の考古学史 198
古墳時代における馬の利用法 202
埴輪に見る騎兵 207

第9講　鉄器研究から見た日本考古学

ジョセフ・ライアン　岡山大学文明動態学研究所 特任准教授　215

はじめに 217
理論的背景 218
古墳出現期の最高権力者 219
浦間茶臼山古墳 220

浦間茶臼山古墳の鏃　221
まとめ　233
口巻きと矢柄先端処理の意義　229
おわりに　236
有稜系鉄鏃の再検討　232

第10講　分析が明かす古代の鍛冶

スコット・ライオンズ　カリフォルニア大学バークレー校博士課程

243
鉄の魅力　245
製錬（製鉄）の工程　247
分析でどのようなことがわかるか　249
大県遺跡での分析結果　250
新しい分析法　252

第11講　データサイエンスと比較考古学から見た日本の考古学

エンリコ・R・クレーマ　ケンブリッジ大学考古学部 准教授

261
はじめに　263
きっかけ―縄文考古学の魅力　264
比較考古学の課題　267
不平等性の比較考古学　268
実年代と相対年代　269
相対年代の時間軸では研究が困難　270
「時間」の問題　271
人口考古学の研究事例　273
炭素年代と先史人口学　274
事例　櫛目文土器時代の人口変動　275
縄文から弥生への移行期の人口変動　276
データサイエンスと今後の課題　278

第12講　選択の一つひとつ―日本考古学者への道のり
ジーナ・L・バーンズ　ダーラム大学 名誉教授・SOASロンドン大学日本研究センター 専門研究員 …… 285

古墳、日本考古学との出合い　287
夢を追う決定木　291
ライデン大学日本語教師　299
ダーラム大学　304
結　婚　293
日本語、日本文学、東アジア文明　288
京都大学研究生時代　294
奈良盆地の復元　301
翡翠の研究　305
万博終了後　290
ケンブリッジ大学考古学科　297
中国・牛河梁女神廟の再調査　303
次の世代へ　307

パネルディスカッション …… 312

第1講

奈良からノリッジへ（ストーンヘンジ経由）
―日本考古学への英国的まなざし

サイモン・ケイナー　セインズベリー日本藝術研究所 所長

サイモン・ケイナー　Simon Kaner
一九六二年　イギリス生まれ
一九八四年　ケンブリッジ大学　卒業
一九八八年　ケンブリッジ大学修士課程　修了
二〇一八年より　セインズベリー日本藝術研究所　所長
専門は先史時代の考古学

著者紹介

日本にもお知り合いのとても多い有名人のサイモンさん。私自身もイギリスで、日本で、あるいはその他の外国で幾度となくお会いし、その度に英国紳士らしいユーモアと優しいお人柄に接してきました。セインズベリー日本藝術研究所の所長として、日本の文化・芸術をとりまく多種多様なテーマについて、星の数ほどのプロジェクトを同時にこなされていますが、ご本人が専門とされているのは縄文時代の考古学。大英博物館やストーンヘンジなど世界的に著名な場において、土偶や火焔型土器の魅力を海外に発信してこられました。「海外から見た日本の考古学の魅力」のトップバッターとして、サイモンさんほどふさわしい人はいないであろう、ということでお願いしたところ、ご多忙にもかかわらずお引き受けいただきました。

はじめに

奈良文化財研究所の皆様、特に庄田先生、この素晴らしい企画の最初のスピーカーとしてお招きいただきましたことに感謝いたします。このシリーズでは、日本の考古学に深い考察をされ、私よりも輝かしい経歴をお持ちの方々を含む一二名が話をすると聞いていますが、私は最初に、イギリス考古学の立場から、日本考古学についての個人的な思い出と印象を述べてみたいと思います。

本題に移る前に、現在、世界中で起こっているコロナウイルスによるパンデミックで大変な思いをされている皆様にお見舞いを申し上げます。

イギリスは、ここ一八か月間ひどい状態です。尋常ではありません。一三万人以上が亡くなっています。幸運なことに、現在までにイギリスでは成人の三分の二がワクチン接種をすませています。日本でも早くワクチン接種が受けられることを願っています。それにより、イギリスのような惨事を避けることができます。ただ、イギリスでは、これまで三回、全国規模でのロックダウンがありましたが、現在、そのロックダウンは緩和されつつあります。イングランドの博物館や美術館は本日五月一七日から、二〇二〇年一二月以来初めて開館しますし、私の大学では学生との対面授業が可能になりました。

ところで、イギリスでは考古学は文化遺産を扱う分野に含まれていますが、この分野はコロナの影響を非常に強く受けています。フィールド・アーキオロジスト、つまり現場で作業する考古学者は「エッセンシャル・ワーカー」とみなされ、コロナ禍でも必要不可欠であるとして発掘調査を続けてきたのですが、

ロックダウンにより臨時休業を余儀なくされました。

ちなみに、イギリス経済は二〇二〇年三月から一〇%縮小しています。このことによる長期的な影響はまだわかりませんが、考古学分野で影響を受けた方のことを考えると胸が痛みます。

本題に入ります。本日は、イギリスにおいて日本考古学への興味がどのように広がり、研究がどう進んできたかという話から始めます。次に、日本考古学の魅力、私はこれをワンダー（Wonder）と呼ぶことにしますが、それについて述べ、続いて、私の個人的な経験を振り返ったあと、世界中に日本考古学の魅力を知ってもらうためのプロジェクトを紹介し、最後に、コロナ後の世界における考古学について考察してみます。

今回お話しするにあたって、イギリスの考古学に日本考古学が与えるインスピレーションのトップテンを考えたところ、次のようになりました。第一に、縄文時代の考古学、第二に、日本とイギリスの考古学のつながりの歴史、第三に、考古学と芸術を通じて素晴らしいパブリック・エンゲージメント（公共参加）が行われていること、があげられます。第四に、『発掘された日本列島』という毎年行われる巡回展と災害考古学との関係、第五に、教育と考古学の関係です。日本ではイギリスと異なり、考古学の発掘調査は教育委員会と深くかかわっていますので、考古学と教育分野との関係について考えてみます。

第六に、日本の発掘調査のスケールの大きさ、第七に遺跡保存の方法です。日本は、現地で遺構・遺物を保存するための歴史公園を設置するなど、独創的な方法を創出しています。第八に、専門性の高さとネットワークの幅広さによる日本考古学情報の入手しやすさです。第九に、日本の考古学者です。そして最後は、「ニュー・ノーマル」、つまりコロナ後への展望です。

一．イギリスにおける日本考古学研究の歴史

ノリッジは、イングランド東部に位置する中世の建造物が多く残る小さな都市です（**図1**）。一二世紀に建てられた大聖堂の南側五〇メートルほどのところに、セインズベリー日本藝術研究所が二五年ほど前に設立されました。その建物は、戦前、日本藝術研究所として使われていました。

このノリッジとロンドンで、明治維新の年、一八六八年に第三回国際先史学会（International Congress of Prehistoric Archaeology）が開催され、非常に高名な大英博物館の学芸員オーガスタス・ウォールトン・フランクス（Augustus Wollaston Franks）が、日本の石器について発表しています[注1]。これはイギリスにおける日本考古学の最初の紹介だと思われます。

ノリッジの郊外に一九六〇年代に設立されたイースト・アングリア大学の美術館であるセ

注1　Wollaston, A.F. 1869

図1　上：イギリス・ノリッジの所在地、左下：上空から見た大聖堂とセインズベリー日本藝術研究所、右下：研究所の建物

インズベリー・ビジュアルアートセンター（Sainsbury Centre for Visual Arts）は亀ヶ岡式の遮光器土偶を含む、日本国外では世界最大級の縄文時代のコレクションを所蔵しています。このセインズベリーコレクションのいくつかを使って展覧会が開催されています（図2）。また、二〇〇一年にはケンブリッジ大学で、國學院大學の小林達雄先生などとの共同研究成果の一つとして『火焔土器（Flaming Pottery: Art and Landscape in Jomon Japan）』が開催されました。

二〇〇九年には大英博物館で土偶展『The Power of Dogu：Ceramic Figures from Ancient Japan』が開催され、二〇一〇年にはセインズベリー・ビジュアルアートセンターの企画展『Unearthed』で、縄文土偶だけではなくヨーロッパ新石器時代の土偶を集めて一緒に展示しました。比較考古学の立場から、日本の考古学はとても興味深いと思います。

また、二〇一三年には大英博物館で火焔型土器の企画展『Flame and Water Pots：Prehitsoric Ceramic Art

図2　セインズベリー日本藝術研究所コレクションを使ったイギリスでの特別展
左：ケンブリッジ大学での特別展『火焔土器（Flaming Pottery: Art and Landscape in Jomon Japan）』2010年。
中：大英博物館での展示『The Power of Dogu: Ceramic Figures from Ancient Japan』2009年。
右：セインズベリー・ビジュアルアートセンターでの展示『Unearthed』2010年。

from Japan』が開催されました。これは新潟県立歴史博物館および長岡市立科学博物館と共同開催したもので、開会式には小林達雄先生と長岡市長（当時）の森民夫氏が出席されました。この展覧会と同時に学術会議も開催し、イギリスの考古学界に日本考古学を紹介することができました。

さらに、二〇一八年には『縄文―日本における美の誕生（JOMON : NAISSANCE DE L'ART DANS LE JAPON PREHISTORIQUE）』がパリの文化会館で開催されました。これは好評でした。フランスの考古学者が集まり、最新の情報を学ぶことができました。その前年、東京国立博物館で初めての大規模な展覧会『縄文―一万年の美の鼓動』が開催されています。

こうした展覧会は二〇～二五年ほど前から開催されるようになりましたが、実は、日本とイギリスの考古学には一〇〇年以上前から交流があります。東京大学人類学講座の創設者である坪井正五郎先生は、一八八八年から一八九一年の二年半ロンドンに滞在し、社会人類学のエドワード・バーネット・テイラー（Edward Burnett Tylor）教授（ロンドン大学、後にオックスフォード大学）に師事し、イギリス考古学を日本に紹介されました。

ちなみに、坪井先生のイギリス留学にまつわる面白い逸話がいろいろあります。その一つは、坪井先生が『東京人類學會雑誌』（人類学雑誌の前身）連載の「ロンドン通信」に、大英博物館でシベリア民族資料の中から遮光器を見つけ、それを基に日本で「遮光器土偶」と名づけたことを、書いていることです。さらに、一八九五年に佐藤傳藏が同誌に書いたダンヴァースの論考の抄訳でストーンヘンジを日本で初めて紹介しました（図3）[注2]。

注2　ダンヴァース一八九五

現在、私はイングリッシュ・ヘリテージ（English Heritage）との共同研究で、ストーンヘンジと日本の環状列石の比較研究を進めています。この研究には非常に長い歴史があります。一九世紀にイギリス人のウィリアム・ゴーランド（William Gowland）は、お雇い外国人として一六年ほど日本の大阪造幣局に勤め、その間に日本の古墳を四〇〇か所ほど踏査してさまざまな研究を行っています。その後一九〇一年にイギリスに戻り、ストーンヘンジについても研究して報告書を刊行しています。この報告書[注3]では、日本の絵を使ってストーンヘンジの解釈を記述しています（**図4**）。これは非常に面白い資料で、もう少し検討してみたいと思います。

ちなみに、私の比較研究の成果に関して、二〇二一年九月から二〇二二年八月まで、ストーンヘンジの現地で特別展覧会『ストーンヘンジと日本』を開催しますので、可能でしたら是非いらしてください。

図３　佐藤傳藏によるストーンヘンジの紹介

私は縄文時代の環状列石の調査にも取り組み、比較研究を行っています。数週間前にもイングランドで縄文時代の環状列石について発表しましたが、参加者は日本列島にたくさんの環状列石があることに大変驚いていました。

この環状列石に関する研究も、それほど新しいものではありません。一九〇八年のニール・ゴードン・マンロー（Neil Gordon Munro）が著した『先史時代の日本（Prehistoric Japan）』[注4]では、北海道小樽市の忍路環状列石を紹介しています。つまり、日本とイギリス双方に環状列石に関する長い研究の歴史があるのです。

もう一人紹介したいのは、オランダの神父ゲルハルド・グルート（Gerhard Groot）です。一九六〇年代から新潟に住み、火焔型土器が最初に見つかった場所も訪れています。また、一九五〇年代初頭ころには、

注3　Gowland, William 1902. "Recent excavation at Stonehenge". *Archaeologia* 58: 113-24

注4　Munro 1908

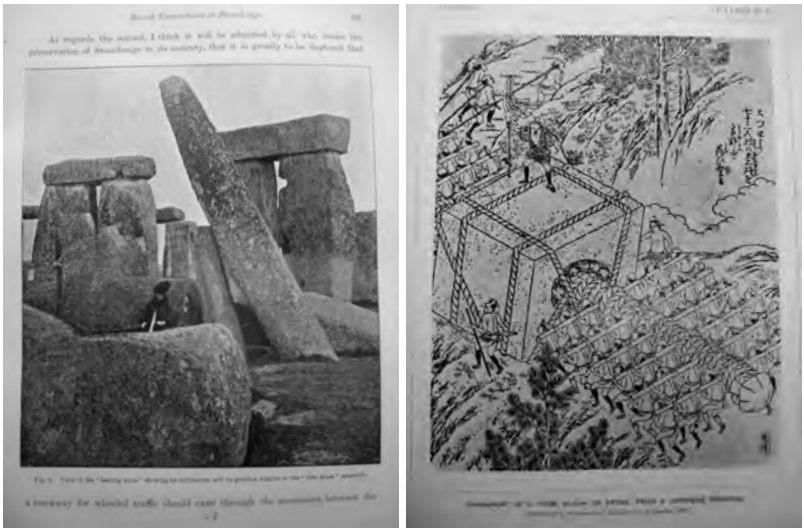


図4　ウィリアム・ゴーランドによるストーンヘンジの考察

ケンブリッジ大学で博士論文『縄文文化の起源（Proto Zyomon：The Origin of the Zyomon Culture）』を書いています[注5]。これは多分、イギリス初の縄文時代に関しての博士論文です。

私は学生時代にこの本を図書館で見つけ、この本で少しずつ縄文時代について学びました。それで縄文時代に興味を持ち、一九九九年に國學院大學の谷口康浩（たにぐちやすひろ）先生が青森県大平山元（おおだいやまもと）遺跡で発掘された、非常に古い土器の破片について書いたものを読みました[注6]。縄文土器をはじめとする世界中の狩猟採集民の土器について、ヨーク大学のクレイグさんが研究されています。非常に面白く楽しいテーマです。こうした土器について、私は二〇一三年に『Nature』に紹介しています[注7]。

二．日本考古学とのかかわり

（一）日本考古学の魅力との出会い

ここで少し、日本考古学との個人的なかかわりについてお話しします。

私が最初に日本考古学に触れたのは、ジーナ・リー・バーンズ（Gina Lee Barnes）教授との出会いがきっかけです。一九八〇年代初め、ケンブリッジ大学の学生だったとき、ジーナ先生の「東アジア考古学」という授業をとりました。ちょうど、樋口隆康（ひぐちたかやす）先生とメルビン・エイケンズ先生（Melvin Aikens）が『日

本の先史時代（Prehistory of Japan）』を出版されたころです。[注8] これを教科書にして、素晴らしい遺跡についてたくさん知ることができました。

ちなみに、ジーナ先生は几帳面な書誌学者でもあり膨大な参考文献リストを編纂されました。当時、日本考古学の本だけでも多すぎて読む時間がないのに、中国、韓国、インド、パキスタンの考古学まで勉強しなくてはならず、どうしたらよいのか考えていたことを思い出します。

一九八四年、ジーナ先生は奈良盆地の古代の田んぼ跡を調査するため、私と何人かの学生を連れていってくださいました。私の役目は、奈良盆地の各所でとても重たいオランダ製のボーリング機を使って掘り出した土壌サンプルのリン酸塩分析をすることでした。マニラ経由での日本への飛行機の旅は、とてもエキサイティングだったことを覚えています。私は、科学分析に必要な白い粉が入った袋を見ながら、税関で呼び止められたらどうしようと心配していたのですが、幸いにも、そのときのために用意していた書類を見せずにすみました。このときが私の初めての長距離フライトでした。記憶が正しければ、六回離着陸を繰り返したはずです。パキスタンのカラチ空港で、朝、カレー風味のオムレツを食べながら、東京はなんて遠いのだと考えていました。この一九八四年三月から四月にかけての四週間が、日本考古学との運命を決定づける出来事だったと言えます。

注5　Groot 1954
注6　青森県立郷土館 一九七九
注7　Kaner 2013
注8　Aikens and Higuchi 1982

初日に、新幹線で静岡へ向かい、弥生時代の登呂遺跡を訪れました。そこには復元された水田や藁葺屋根の竪穴住居がありました。ここは、ある意味で、現代日本考古学の誕生の地です。その後、岡山大学の近藤義郎教授が吉備にある古墳での発掘調査に招待してくださいました。近藤先生とお弟子さんたちに囲まれ、古墳を詳しく発掘調査することで、古墳に埋葬されている人だけでなく、古墳の造営に携わった人々の生活について知ることができるのだということを学びました。

その後、ふたたび奈良県の天理に戻り、二週間過ごしました。そこでは置田雅昭教授を紹介していただきました。その後、置田先生はとても大切な指導者、友人となりました。さらに、滞在中にこれまで読んでいた本の執筆者に会うことができました。コンピュータ考古学の先駆者である大阪の国立民族学博物館の小山修三先生、小谷凱宣先生、縄文土器の総括的な本を何冊も出版されている国際基督教大学のエドワード・キダー（Edward Kidder）先生です。

そして、奈良でのフィールドワークを行う間に奈良文化財研究所を訪問し、佐原真先生や田中琢先生にお会いすることができました。後に、奈文研は研究生時代の私の第二の家となりました。奈文研の考古学者の方々は、日本語もろくにできない無知な学生であった私に、日本考古学のさまざまな側面を辛抱強く教えてくださり、感謝の気持ちしかありません。特に松井章先生からは大きな影響を受けました。先生が日本の考古学をグローバルなオーディエンスに熱意を込めて紹介したことに、非常に大きなインスピレーションを受けました。また、日本全国からの発掘調査報告書が詰まった書庫は、私にとって宝の山でした。

私に日本考古学の驚き、ワンダーを垣間見る機会を与えてくれたのが、こういった日本での経験であり、

学生時代にジーナ先生が講義で見せてくださった日本考古学の資料、石器、土器、鏡、銅鐸、埴輪、古墳、住居跡、発掘などのスライドでした。初めて本物を目にしたときのことは忘れられません。私はいつもイギリスやヨーロッパの考古学を専攻している学生たちをうらやましく思っていました。勉強している資料がすぐに手に入るからです。

日本から帰国したとき、頭の中は日本考古学のことでいっぱいになっていました。幸運なことに、同じ年の後半に日本へ戻ることができました。文部省の助成を受けて、兵庫県の丹波篠山と三田市の高校で英会話を教えることになったのです。ロンドンでの面接のとき、面接官が、私の日本行きの動機が考古学であると知ると、「英会話の仕事に集中するために、気が散ることがないよう、考古学的に何もない場所へ派遣する」と言ったことは忘れもしません。面接官は、この地域に旧石器時代から江戸時代に至るまでの興味深い遺跡があることを知らなかったのです。

ちなみに、篠山鳳鳴高校と有馬高校の先生方は辛抱強く対応してくださいました。週末になると大阪や神戸に繰り出して丸善や紀伊國屋書店へ行き、買い求めた考古学に関する書物に書いてある難しい漢字の読み方について、職員室で質問攻めにしました。時間がかかりましたが、こうやって縄文時代に関する文献を読むための日本語を学んだのです。また、職員室で私の席の隣の国語の先生に、能について教えてもらい、篠山の寺院で演じられている能を見に行くことを薦められました。彼は、外国人がこんな小さい町に興味を持っているのが理解できないと言っていました。日本について知るべきことは奈良と京都にあるはずだと。のちに、彼のアドバイスどおり、文部省の研究員として京都大学で一年間、小野山節（おのやません）教授と山中一郎（やまなかいちろう）教授のもとで勉強しました。

（二）日本で考古学を研究することの驚き

初めて日本から帰国した後、ケンブリッジ大学のグレアム・クラーク名誉教授（Grahame Clark）にお会いしました。クラーク先生はいろいろな研究をされていますが、特に以下の三つの研究が有名です。世界の先史時代の研究と、経済・環境考古学の研究、そしてスター・カー（Star Carr）遺跡の発掘を含む中石器時代の研究です。そして、先生は、考古学の道へ進みたいのなら、日本において興味深い事象、つまり土器を使う狩猟採集民がいた縄文時代について研究するとよいと言われました。私はすでに日本で縄文土器に出会っており、非常に興味を持っていたことから、博士課程では縄文土器と集落について研究することにしました。縄文考古学は、今でも私の主要な研究課題です。そして、一九九五年に縄文時代の研究者とヨーロッパの中石器時代の研究者を集めて、初めて大規模な学会『スター・カー遺跡から縄文まで（From the Jomon to Star Carr）』を開催できたことは大きな喜びでした。さらに、二〇一五年にセルビアのベオグラードで開催された欧州中石器時代学会でも、ふたたびこのテーマに取り組み、ダニューブ川沿いにあるレペンスキ・ビール（Лепенски Вир）遺跡を訪れました。

学生時代は、もっぱらケンブリッジ大学東洋学部の図書室で過ごしたといってよいでしょう。東アジアとインドの考古学に関する本がある特別閲覧室があったのです。いつもガラガラでしたし、ケンブリッジ大学の図書館で一番座り心地のよい椅子がありました。そこで発見したのが、前述のグルートが著した博士論文です。グルートは一九三〇年代に新潟に住み、姥山（うばやま）貝塚の発掘にもかかわっていたようです。そのときに発掘した遺物は現在、南山大学に保存されています。

グルートに関する研究ももう少し続けたいのですが、ここ一〇年間はウィリアム・ゴーランドのコレクションについて研究しています。前述のように、ゴーランドは一六年間、日本に住み、四〇〇もの古墳を調査しており、柴山古墳で発掘した資料を含むコレクションとアーカイブは大英博物館に売却され、現在も大英博物館に展示されています。

ちなみに、ゴーランド・プロジェクトには、セインズベリー日本藝術研究所と大英博物館、そして一瀬和夫先生と菱田哲郎先生率いる日本の研究者チームが携わっています。このプロジェクトを通して、日本考古学の歴史、特に古墳時代について学ぶことができました。

このゴーランドは、二〇世紀の最も重要な発掘調査の一つであるストーンヘンジにもかかわっています。ですから、イギリスと日本のストーンサークルの共通点を、日本の皆さんと探求できることは感慨深いものがあります。

その後、私は博士課程在学中にケンブリッジ州議会の考古学室で働き始め、最終的には州内で土地開発者の資金で行われる考古学調査を監督する立場に就きました。つまり、建設計画の一環として行われる考古学的作業の質を確認することが仕事になったのです。ケンブリッジ州はヨーロッパの中でも最も開発が盛んな地域で、年間一〇〇件以上もの本格的な発掘調査が行われ、その多くが私が管轄する地域にありました。私がまだ京都大学にいたころ、ロンドンでシェークスピアゆかりのグローブシアターが発見され、修復されたことで一般市民の関心が高まり、イングランドでは考古学に関する新しい制度が導入されました。その一つが、土地開発者が発掘調査費用を負担するというものです。この制度は、日本ではおなじみのもので、サステイナブル（持続可能）な開発という考え方に基づいています。つまり、考古資料を、壊

れやすい、限りある資源とみなしています。

ケンブリッジ州議会考古学室での仕事は本当に楽しいものでした。この地域のいろいろな土地や現場を訪れることができ、さまざまな考古学の研究者と仕事をしながら、それぞれの現場における調査目的を定めることができたからです。この仕事を通して、日本考古学の本当の意味での「驚き（ワンダー）」が理解できるようになりました。つまり、日本の地方自治体の考古学センターとその発掘部門と保管、そして奈文研の提供する全国的資源と研修施設の素晴らしさです。この役職についている間、日本から多くの考古学者が訪れたので、イングランド各地の遺跡や発掘現場へ案内しました。坪井清足（つぼいきよたり）先生をストーンヘンジとエイヴベリー（Avebury）に案内した際、日本の制度や奈文研のことについて、いろいろ教えていただいたのを覚えています。

この仕事をしているとき、日本ではユネスコ世界遺産への関心が高いことに気づきました。ある日、松井章先生から、田中琢先生ご一行をイギリスの世界遺産に案内してほしいという電話がありました。産業革命の生まれたアイアンブリッジ渓谷や、ローマ帝国の一部であったブリタニアと野蛮な北部を隔てるハドリアヌスの長城、そしてストーンヘンジとエイヴベリーをご案内しました。当時、田中先生は島根県の石見銀山の世界遺産登録を推進されていました。以来、考古学が申請に際して重要な役割を果たすようになり、私も幸運にも宗像・沖ノ島と関連遺産群の登録にかかわらせていただきましたが、今年、登録五周年を迎える予定です。

このような長期にわたるプロセスに参加することで見えてきた日本考古学のもう一つの「驚き（ワンダー）」があります。それは、日本の考古学者の忍耐力、回復力、そして決意です。国際的に名をはせることで、国内における価値がよりいっそう上がることを理解されているということです。

（三）日本の考古学の「驚き、不思議（ワンダー）」を展示する

現在の私は、日本の考古資料をイギリスで展示紹介するという幸運な立場におります。最初の展覧会は、ケンブリッジのフィッツウィリアム博物館における『火焔土器、古代日本の景観と土器（Flaming Pots: landscape and pottery in ancient Japan）』で、オープンしたのは二〇〇一年九月一一日でした。同時期に大英博物館で開催された神道美術に関する展覧会は、古代のものに関する展示がたくさんありましたが、ニューヨークの世界貿易センタービルでの同時多発テロの影響で飛行機が飛ばず、来館者はごくわずかでした。しかし、私たちと國學院大學との共同企画の展覧会は、多くの入場者に恵まれました。同時期に、青森の大平山元遺跡で発見された世界最古の土器の重要性を探る学術会議も開催しました。最古の土器は、私にとって重要な研究テーマとなり、谷口康浩先生や佐藤雅一（さとうまさいち）先生と福井洞窟の再発掘現場を訪問することができたことを大変光栄に思っております。さらに、ヨーク大学のオリヴァー・クレイグ（Oliver E. Craig）先生率いるチームと、縄文時代の食物の残留物分析を行ったことは、国際協力研究プロジェクトの大きな収穫でした。

ところで、展覧会は、より幅広いオーディエンスに日本考古学を紹介し、大切な遺産を後世に残すという意味では欠かせないものです。二〇二〇年に奈文研と共同で『An Illustrated Companion to Japanese Archaeology』第二版を出版しましたが、この本は二〇〇四年に私の友人であるウェルナー・シュタインハウス（Werner Steinhaus）先生と、奈文研、文化庁とともに開催した日本考古学に関する最大の展覧会を基にしたものです。当時、私はロンドン大学で日本考古学を教えており、学生全員を連れてベルリンまで展

覧会を見に行きました。一六〇〇点以上の展示品があり、古代日本にどっぷりつかることができた、これまでにない機会でした。こういった経験により、人々のつながりやコミュニケーション、科学や解釈がいかに大切であるかを学びました。与えられたチャンスを逃さないことも大切です。

私たちは今、縄文ストーンサークルの展覧会を、ストーンヘンジで開催することを企画しています。これらすべてのプロジェクトは、日本の考古学や考古学者とヨーロッパの考古学や考古学者とを結び付けるまたとない機会です。同時に、より多くの人に資料を見てもらうこともできます。

三、イギリスの視点からみる縄文の魅力

この講演を準備するにあたり、日本考古学で最も印象深いことは何だったかと考えてみました。たくさんありすぎますが、日本考古学の魅力のトップテンを次に掲げておきます。

・縄文時代の期間の長さ
・戦争がない社会
・最初の土器
・最古の集落
・農業以前の植物管理

・先史時代の数学
・高度な造形
・平等社会
・現代のインスピレーション（美術、オリンピック）
・文化財として（世界遺産）

（一）ユネスコを通して日本考古学の「ワンダー」をグローバルステージへ

今年二〇二一年七月、日本の縄文時代は世界の注目を集めました。「北海道・北東北の縄文遺跡群」がユネスコの世界遺産へ登録決定されたからです。もう一〇年ほど前に、小林達雄先生と三内丸山遺跡の岡田康博さんと一緒にパリのユネスコ本部を訪問しました。縄文時代の遺跡は規模が大きく、見るものに驚きを与えますし、イギリスから見ると非常に魅力があると思います。

私は縄文時代の定住性について特に興味を持っています。イギリスでは新石器時代の集落遺跡は非常に少なく、学生時代に日本の縄文集落遺跡について京都大学の小野山節先生や山中一郎先生、矢野健一先生（現立命館大学）、冨井眞先生（現大正大学）にいろいろと教えていただきました。そして、イギリスに戻り、小林達雄先生の『縄文人の世界』を読んで、縄文ランドスケープという概念に関心を持ち、**図5**の絵をつくりました。[注9]

注9　Kobayashi 2004

そして一〇年ほど前から、新潟県立歴史博物館と長岡市立科学博物館と共同で、信濃川プロジェクトを進めています。アプリを使って、デジタル上で三次元に復元された縄文時代のランドスケープを世界中の人々が体感したり、遺物の3Dデータを見たりすることができます（図6）。今後さらにデータや写真を追加していくと面白くなると思います。

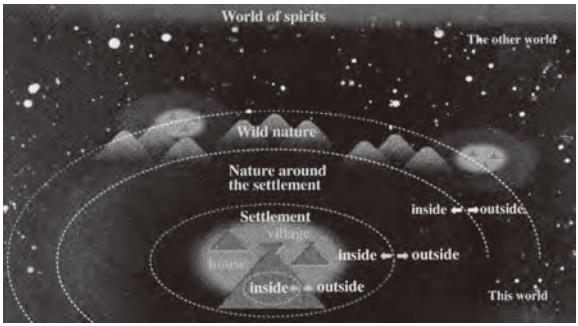


図5　縄文ランドスケープ

図6　上：信濃川プロジェクト、下：操作画面

（二）素晴らしいパブリック・エンゲージメント

「日本とイギリスの考古学的つながり」については冒頭で少し触れたので、ここではパブリック・エンゲージメント（公共参加）について考えてみます。

坂井秀弥（さかいひでや）先生（奈良大学）が文化庁に在籍中イギリスを訪れ、考古学研究所の私有化について調査され、イギリスの考古学者と会って出した結論の一つが、イギリスの考古学者は個人の興味で研究対象を選べるのに対して、日本の考古学者は過去についての記録を作ることを重視しているということでした。個人的な経験からも、確かに日本の考古学者にも自分の研究対象がありますが、考古学者としての責任の重要性が、特に第二次世界大戦後、増したと感じています。この伝統は、発掘調査の最中と終わりに開かれる現地説明会に表れています。出土したものを、一般市民と専門家両方に説明します。このようなことはイギリスでも少しは行われていますが、日本ほどきめ細かくありません。また、日本では発掘調査に多くの人々を駆り出す制度が整っています。これが上手くいった場合、地域にプラスの面で作用します。いわゆる「開発利益」です。

さらに、日本では、考古学に対するメディアの関心が高いことがあげられます。たとえば、『文化財発掘出土情報』という考古学に関する新聞記事の切り抜きを集めた専門誌があります。こういった月刊誌があることは驚くべきことです。私も、松井章先生のご紹介がきっかけで、二〇年ほど前からイギリスの考古学について寄稿しています。こういった雑誌はイギリスには残念ながらありません。もっとも、イギリスのメディアもセンセーショナルなストーリーがあると関心をよせてくれますが。

（三）発掘された日本列島展

私は、毎年日本に来るたびに『発掘された日本列島』展に行くようにしています。新しい発掘調査の結果を、みんなが見られる機会があることは重要です。以前ケンブリッジ州議会考古学室に勤めていたとき、年間一〇〇件ほど行っていた発掘調査の成果を集める場所はありませんでした。発掘調査成果を国内のあちこちで展示することはよいことです。地域の博物館が、その地方で発見された遺物を展示できるからです。イギリス人の同僚にこの展覧会について話し、こういう展覧会を是非開催して欲しいといつも言っています。

そして、二〇二一年二月、東日本大震災一〇周年で、震災後、考古学と文化財にどんな役割があったのかを考えました。その年のAntiquity誌の巻頭に「福島県浦尻貝塚災害後　アートと考古学」が掲載されました（図7）[注10]。私が特に興味があるのは、災害後、考古学と文化財がどんな役割を果たしてきたかということです。考古学とアート（Art and Archaeology）というプロジェクトは、もともとは赤坂憲雄（あかさかのりお）さん（福島県立美術館館長）が

図7　安芸早穂子「Tree on the shell mound」

イギリスにきて説明されたものです。これに関して、縄文アーティストの安芸早穂子（あきさほこ）さんが福島県南相馬市の浦尻貝塚で面白いプロジェクトを行っており、二〇二一年六月五日には浦尻貝塚でオンラインのイベントを開催します。

（四）考古学と教育

日本の高校の歴史教科書の内容についてさまざまな議論があることは承知していますが、先史時代と考古学がカリキュラムの一部であることにいつも感心しています。私が受けた学校教育では、歴史はローマ時代から始まりました。先史時代、考古学については触れていません。ただ、私は高校生時代から考古クラブを作ったりしてアマチュア考古学を楽しんでいました。そして、学校に考古学が大好きなラテン語の先生がいて、ラテン語の難しい文法について質問されないよう、先生にフィッシュボーンにあるローマ帝国のお城の発掘の経験について質問したものでした。

日本考古学協会総会に参加したとき、現役の高校生によるポスター発表があり、非常に感心させられました。考古学は、高校生だけでなく老人にとっても魅力があると思います。

ところで、私はノーフォーク州グライムズ・グレイヴス（Grimes Graves）にある先史時代のフリントの採掘跡と、長野県長和町（ながわまち）の黒曜石の採掘跡を結ぶ、世界初の「姉妹遺跡」にかかわっており、長和町の黒曜石

注10　Witcher 2021

親善大使の子どもたちとセトフォード（Thetford）のティーンエイジ・歴史クラブのメンバーがお互いに訪問しあう機会を作りました。考古学への関心は若い世代だけではありません。イギリスと日本の双方で、考古学ツアーを開催しています（図8）。こうした交流事業の一環で、長和町役場の玄関に長和町の黒曜石とグライムズ・グレイヴスのフリントを使ったアートが展示されました（図9）。二〇二一年七月から展示が始まっています。コロナのせいで私は見に行けませんが、皆さんは是非行ってみてください。

図8　イギリスと日本の考古学を通じた交流
左：イギリスから考古学ツアーで新潟県馬高遺跡へ
右：長野県長和町での考古学ツアー

図9　長和町の黒曜石とグライムズ・グレイヴスのフリントを使ったアート展示。長和町役場、2021年より

（五）発掘のスケール

私は常に、日本での考古学発掘におけるスケールの大きさに感心しています。最近はスケールの大きな発掘は数が少なくなってきているようですが、イギリスの現場ではベルトコンベヤーで土を運ぶことはしません。そのため、現場はわりと静かです。日本の発掘の究極の目的は、発掘後、全体写真を上から撮ることだと、よく日本の学生に話しています。イギリスでは、発掘が進むにつれて遺跡がなくなってしまいます。そのため、日本で撮っているような遺跡全体の航空写真はありません。「適正なサンプル」とは何か、ということに関する議論はあるでしょう。しかし、発掘することにより破壊されてしまうものをすべて記録することは不可能に近くても、記録を残すことを理想とすることは素晴らしいと思います。

（六）現地で保存するための独創的な解決策

次に、遺跡の保存についてイギリスと日本の違いについてお話しします。

一九九〇年にロンドンのシェークスピアが使ったローズ・シアターの発掘を契機に、遺跡保存に関するガイドラインが策定され、対応する考古学的な組織が設置されました。その後、発掘も開発の一部として行われるようになり、日本と同じように開発者が発掘調査費用を負担する方式になっています。

また、日本では、遺跡を保存するための独創的な方法が策定されています。北海道の森町にある鷲ノ木遺跡のストーンサークル（図10）の真下を高速道路の地下道が通ることになったため、北海道・北東北

の縄文遺跡群のリストから外れたことは少し残念でした。ご存じのとおり、イギリスの考古学会での熱いトピックは、世界遺産ストーンヘンジの下にトンネルを掘るという話です。この構想は、一八世紀からあります。

日本の考古学者が、国の重要な遺跡を、本来の場所で保存することに成功していることはすごいことだと思います。それを政府が援助しているのもすごいことです。三内丸山や伊勢堂岱などのように、開発途中からでも保存の援助をして、土地を買い上げたことは、もっと世界に知れわたり、参考にされて欲しいものです。

日本の遺跡保護は、平城宮跡のような大きなものから、より小さな地域の遺跡などに対しても、とてもすばらしいと思います。ただし、いつもそれができるわけではないことは、最近ニュースにも取り上げられた高輪築堤の例からも明らかです。

図 10　北海道森町鷲ノ木遺跡と下をくぐる高速道路

（七）専門性の高さとネットワークの幅広さ

日本ほど、考古学関連の研究会がある国はないと思います。仲間の先生方が私をさまざまな会合に連れていってくれ、たくさんの研究者に引き合わせてくれたことに大変感謝しています。日本で学会や会合に

参加する人の多さにいつも感心します。そして、専門性の高さです。これは、非常に詳細な卒業論文を、細かい考古学記録に絞って書くという訓練によって培われたものだと思います。この過程で、発掘調査報告書などの「灰色文献」が定期的に見直され、消化されているわけです。

（八）考古学情報の入手しやすさ

日本考古学協会の「図書交換会」では、驚くべき経験をしました。私が真剣に日本考古学を研究し始めたころ、イギリスには参考にする資料や文献がなくて困っているという仲間もいました。ただし、資料がないというのはけっして正しくはありません。ケンブリッジ大学の図書館がこの分野の資料を増やそうとしていたのは幸運でした。セインズベリー日本藝術研究所では、ここ二〇年でかなり大きなコレクションを構築することができました。日本考古学に関しては、おそらく発掘調査報告書も含めヨーロッパで一番の蔵書数を誇っています。それでも、まだまだです。日本から帰るたびにスーツケースいっぱいの本を抱えてくるので、妻に笑われています。寄贈の計画のあった日本考古学協会の図書を、イギリスに持ってこられなかったことは残念に思っています。実現していれば、日本国外の考古学者にとって非常に役立ったはずです。しかし、日本考古学について学んだことは数多くありました。今では素晴らしいデジタル情報源、たとえば、奈文研による全国遺跡報告総覧[注11]などもありますし、私たちも含め、すでにこの資料を活用

注11　https://sitereports.nabunken.go.jp/ja

しているプロジェクトがいくつかあります。早く全国の報告書がカバーされるとよいと思っています。

日本と海外の研究者の間での国際的交流はどんどん盛んにしていくべきです。私は日本の考古学者と共同で、あらゆるレベルで、国際的にはたらきかける機会を作っていくつもりです。日本考古学を研究する非常に恵まれた立場にいる者として、もっと野外研修をしたり、お互いの発掘作業や博物館にかかわったりする必要があります。私どもは、東京大学と共同で、夏期研修と冬期研修を開催しています。また、私が率いてきたイギリスと日本での研修ツアーを見てもわかるとおり、興味を持っている人たちは、レベルに関係なくたくさんいます。

（九）日本の考古学者

最後のポイントとして、日本の考古学者たちのオープンな気前のよさがあげられます。本当のところ、日本の考古学者自身にも、彼らの研究対象と同じくらい興味があります。日本の考古学者たちは日本の素晴らしい側面を体現する、素晴らしい集団だと思います。そういう人たちを通して、私が日本を知ることができたことは幸運でした。彼らの情熱、熱意、そして専門性には、目を見張るものがあります。個人的に多くの方と知り合いになれて本当に光栄です。外国人の私に一生懸命、自分たちが得たデータやアイデアをシェアしてくださる心の広さに感謝しています。私の手掛けているいくつものプロジェクトを通して、日本の考古学を海外の幅広いオーディエンスに広めることで恩返しできればと望んでいます。

（一〇）ニュー・ノーマル、つまりコロナ後への展望

まず、デジタル・テクノロジーによってもたらされた可能性をフルに生かさなければなりません。この新しいトークシリーズもその一環です。オリンピック・イヤーの今年、セインズベリー日本藝術研究所では、「オンライン縄文祭り」と「縄文リレー」を開催しています。ＳＮＳを通して英語話者に縄文考古学を少しずつ紹介しています。それから、八年前に学術雑誌『The Japanese Jornal of Archaeology』[注12]を創刊しました。これは日本考古学に関する英文誌で、日本の考古学者で日本の外に向けて発信したい方をサポートしています。

さらに、サステイナビリティ（持続可能性）について考えていく必要があります。今後、気候変動はパンデミックより大きな影響を私たちの社会にもたらすであろうことは、明らかです。我々は、考古学者として、きたるべき衝撃をどのようにやわらげるか、という議論をしていくにあたり、貢献できると考えています。日本の考古学の力、そして、それに対する興味を利用して、国連の提唱する「持続可能な開発目標（SDGs）」に貢献する必要があります。これには、人種・ジェンダー・年齢による差別の撤廃が含まれなければなりません。考古学者としての主張は、それがロマンチックに解釈された地域という概念であろうと、太古のＤＮＡの解釈に関することであろうと、公共の議論を形づくるきっかけになる大きな力を持っていると思います。

注12　https://jjarchaeology.jp/

最後に、セインズベリー日本藝術研究所とセインズベリー・ビジュアルアートセンターで、新しい研究プロジェクトがスタートします。このプロジェクトは「Nara to Norwich: Art and Belief at the Ends of the Silk Roads」といって、仏教の始まりとキリスト教の始まりとを比較研究するものです。二〇二四年にセインズベリー・センターで企画展を開催する予定です。

ご清聴ありがとうございました。

Q&A

Q　長和町と姉妹遺跡についてのお話がありました。長和町とセトフォードとの間で子どもたちの交流を続けてこられているプロジェクトが非常に印象的だったのですが、このコロナ禍の状況下で現在はどんな活動が行われているのでしょうか。これからどんなことが予定されているのでしょうか。

A　長和町では新石器時代（日本では縄文時代）の料理を作ってみるイベントを行ったりしています。パンデミックの影響でこうしたイベントも実施が難しくなってしまいました。去年の夏、グライムズ・グレイヴスの近隣の学生たちと長和町を訪れることを計画していたのですが、コロナの影

響で中止になってしまいました。また、今年の夏に長和町の学生がグライムズ・グレイヴスを訪問することになっています。これまで三〜四回こうした交流事業をやってきました。これからどうするか今話し合っているところです。イギリスの博物館は今日から再開するのでこれからです。他の交流事業としては、ストーンヘンジや大規模な環状列石のあるエイヴベリーと日本の縄文時代の環状列石の類似性ということでつながる可能性があるのではないかと思います。

Q　ケイナー先生やバーンズ先生、その他の先生方のご尽力で、日本の考古学と英・欧・米の考古学との太いパイプが築かれてきましたが、今後これをさらに発展させていくためにはどうしたらよいのでしょうか？

A　いろいろなチャンスがあると思います。たとえば、二〇二二年にチェコのプラハで開催される世界考古学会議などの場で、日本考古学を紹介する方法もあります。また、これからはデジタルの世界になります。現代においては、オンラインイベントやツイッターなどSNSでの情報発信もできます。また、現代社会において、研究者は非常に忙しくなり、自分の専門以外の論文や本を読める時間はごく短くなりました。そのため、短くて大事なことをサクッと読めるように紹介していくことが大事だと思います。そういうことを考えて、オンライン縄文祭りとか、縄文リレーなどをセインズベリー日本藝術研究所でいま企画しているところです。日本以外で日本考古学にかかわる人たちや学生たちとともに、いろいろなことができたらいいと思います。

Q　高輪築堤の話がでましたが、今、全面保存を求めて地域住民と保存運動を始めました。築堤の技術にはイギリスの技術もかかわっていますが、イギリスの研究者は関心を持っていますか。

A　イギリスで特に産業考古学に興味を持っている考古学者たちに高輪築堤の話をしました。可能な限りの保存が実現するように願っています。

参考文献

- 青森県立郷土館　一九七九『青森県立郷土館調査報告5・考古－2：大平山元1遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館
- ダンヴァース（原著）・佐藤傳藏（抄訳）一八九五「考古初歩 原人物語（第百拾六號ノ続）」『東京人類學會雜誌』第116号、六七－七三頁
- Aki, S. 2021. Tree on the shell mound. a collage painting by created as part of the Power of Invisibles project supported by the Toshiba International Foundation and exhibited at the National Museum of Ethnology, Japan, in 2021.
- Gowland, W. 1902. Recent excavations at Stonehenge. *Archaeologia* 58: 113-24.
- Kaner S. & Bailey D. (Eds.) 2009. The Power of Dogu: Ceramic Figures from Ancient Japan, London: British Museum Pubns Ltd.
- Kobayashi, T. (Kaner S. & Nakamura O Eds.) 2004. *Jomon Reflections: Forager Life and Culture in the Prehistoric Japanese Archipelago*. Oxford: Oxbow Books.
- Munro, N. G. 1908. *Prehistoric Japan*: Yokohama
- Wollaston, A. F. 1869. The stone age of Japan. In *International Congress of Prehistoric Archaeology: Transactions of the third session which opened at Norwich on the 20th August and Closed in London on the 28 the August 1868*. London. ongmans, Green and Co.
- Groot, G. J. 1954. *Proto Zyomon：The Origin of the Zyomon Culture*: Unpublished PhD dissertation. University of Cambridge.
- Kaner, S. A potted history of Japan. *Nature* 496, 302-303. 2013. https://doi.org/10.1038/nature12093
- Aikens, C. M, and Higuchi, T. 1982. *Prehistory of Japan*. New York: Academic Press

・ Witcher, R. 2021. Editorial. *Antiquity*, 95 (380), 283-291. doi:10.15184/aqy.2021.26

図版出典

図1（上）著者作成、（右下・左下）セインズベリー日本藝術研究所提供
図2（右・左）セインズベリー日本藝術研究所提供、（中）Kaner and Bailey (Eds.) 2009
図3　ダンヴァース（原著）・佐藤傳藏（抄訳）一八九五「考古初歩　原人物語（第百拾六號ノ続）」『東京人類學會雑誌』第一一六号、六七－七三頁
図4　Gowland, W. 1902
図5　Kobayashi 2004を改変して著者作成
図6　著者作成
図7　Aki, S. 2021
図8・9　黒曜石体験ミュージアム提供
図10　JOMON ARCHIVES（森町教育委員会所蔵）

第2講

宮古島長墓遺跡の調査から見たもう一つの日本考古学

マーク・ハドソン　マックス・プランク地球人類学研究所 研究員

マーク・ハドソン　Mark Hudson

一九六三年　イギリス生まれ
一九八六年　ロンドン大学　卒業
一九八八年　ケンブリッジ大学修士課程　修了
一九九六年　オーストラリア国立大学博士課程　修了
二〇二四年現在　マックス・プランク地球人類学研究所　研究員
専門は新石器～青銅器時代の考古学

私の出身研究室の先輩にもあたり、ファッショナブルな着こなしが素敵なマークさん。海外における日本考古学研究の最前線を常に走ってこられました。特に、国内からドイツのマックス・プランク人類史科学研究所（二〇二二年から「マックス・プランク地球人類学研究所」に名称変更）に移籍されてからは、次々と海外のビッグジャーナルに論文を発表されています。弥生時代に関するご研究成果が有名な方ということで、同世代で縄文時代の考古学を専門にされているサイモン・ケイナーさんとぜひ同時に出演していただきたいという私の勝手な希望で、リレートークの記念すべき第一回目はこのお二人の夢の共演となりました。今回の講演で紹介していただいた成果の一部は、その直後に国際学術誌*Nature*に掲載され、学術界のみならず広く一般からも注目を浴びることになりました。

サイモンさんから非常に広い話題を提供していただきましたが、私は狭い話をします。最近はコロナ禍で現場に行けないので、発掘に行きたいという気持ちで、これまでに私が行った発掘の思い出話も含めてお話しします。

宮古島南嶺の長墓遺跡

沖縄県宮古島の北部、島尻集落の近くにある遺跡（以下、長墓遺跡）は、海抜二七メートルほどの石灰岩堤の丘陵上に立地する、海蝕を受けてできた岩陰および貝塚遺跡です（**図1**）。岩陰の成立年代は不明ですが、遺跡の形成以前の地形は旧サンゴ礁と思われます。遺跡中央の位置は、北緯二四度五一分、東経一二五度一七分です。長墓遺跡が立地する石灰岩堤上は現在林に覆われ、北方五〇〇メートルほどのところにはマングローブ林があります。遺跡から東を望むと、大神島という小さな島が見えます。余談ですが、パリ大学のトマ・ペラーさんが大神島の方言について調査され博士論文を書いておられます。

長墓遺跡は先島諸島の風葬墓として昔から知られており、これまでに人類学調査が数回行われています。最近見つけた文献によると、一九六二年に金子エリカ、国分直一、韓国の金元龍らが琉球の支石墓について研究し、宮古島では狩俣の近くの洞窟遺跡を調査しています。ただし、それが長墓遺跡を指すのかどうかはわかりません。

一九七一年には、京都大学の池田次郎が、長墓遺跡で頭蓋骨の計測と前頭洞の調査を行いました。この調査に、当時大学院生だった西田正規、多賀谷昭が参加しています。

一九九〇年代に入ると、東北大学の百々幸雄や琉球大学の土肥直美が頭蓋骨の計測・非計測データを取り、四肢骨の計測も行っています。[注1] これらの調査は、人類学的に興味深い成果をいくつかもたらしましたが、墓地についての基本的な調査がまだ行われていなかったため、年代・埋葬法などの不明な点が多く残されていました。

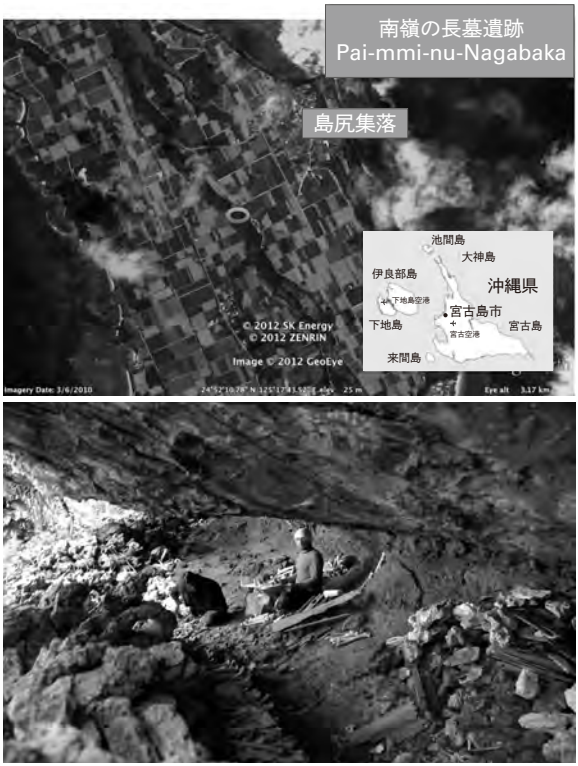


図1　上：沖縄県宮古島・南嶺の長墓遺跡所在地
　　下：発掘調査風景

図２　長墓遺跡の測量調査

長墓遺跡の規模

そこで私は、二〇〇五年から筑波大学先史学・考古学コースの「先史学実習」として、まず風葬墓の考古学・人類学的な総合調査を始めました。その時に貝塚遺跡を発見し、翌年から発掘調査を始めました。その後、西九州大学に移り、二〇一三年まで毎年発掘調査を続けました。ちなみに、先史学実習として最初に行ったのは測量調査です。学生は測量が初めての経験で、岩陰内部には図2のような場所もあるので、測量するだけで苦労しました。

長墓遺跡　現況略図

図３　長墓遺跡測量図

長墓風葬墓の内部は、人頭大の石灰岩の石垣で北区・中央区・南区に三区分されています（図3）。北区は全長

注1　Dodo et al. 1998

約一五メートル、中央区は約二メートル四方の区画、南区は若干北東側に曲がる形状を持ち全長約三〇メートルです。北区・中央区までは石垣は一列で構成されていますが、南区では列をなしておらず乱積みとなっています。南区の石垣の幅は五・二〇メートル、高さは二・六六メートルです。中央区では、西側の岩陰奥壁を除いた三方向が石垣でコの字状に囲まれており、東側はやや高く一メートル余り、南北はやや低く七〇～八〇センチメートルほどの高さまで人頭大の石灰岩が積まれていました。中央区の岩陰は、天井部まで高さ一メートル余りあります。

長墓遺跡の遺物と成立年代

この風葬墓内の遺物は少なく、正確な年代を決めるのは困難でしたが、一番古いものは一七世紀の終わりのもので、メインはたぶん一八世紀、一九世紀と考えられます。出土した遺物としては、褐釉陶器壺、染付碗およびキセル雁首が数点あります[注2]。木片は合計一八五点確認されています。池田次郎の報告で「残存する船形木棺の断片[注3]」と記述されていますが、二〇〇三年の調査では、船形木棺の部品と思われるものは認められませんでした。多くの木製品の破片は、もとの形状が不明ですが、板が数枚確認できたことから、機能としては木棺が一番有力と考えられます。また、いくつかの板には丸い穴が開けられており、中に木の目釘が残っていました。鉄の釘は発見されていません。同様な板は、久米島のヤッチのガマ風葬墓

遺跡[注4]からも出土しています。

長墓風葬墓の年代は、おおまかに近世と考えていますが、いつまで利用されていたかを決めることは困難です。埋葬されている人骨には、歯医者による治療の痕跡が見られません。調べていくと、宮古島に最初の歯科医院ができたのは一九二五年ですから、大正期が風葬墓の最下限であることがわかります。また、唯一の二〇世紀の遺物として、南区の前の斜面から表採された大正期のキリンビールの瓶があります。

二〇〇五～二〇〇六年に、土肥直美先生の科学研究費補助金を得て行った最初の長墓の人骨調査は、薩摩藩支配期の厳しい支配下で琉球住民の健康がどう変わったかを調べることを目的としていました。この調査では、長墓遺跡（八八体）、久米島のヤッチのガマ（八九体）、宜野座の漢那（九四体）の三つの遺跡出土人骨について、虫歯の有無やエナメル質減形成、眼窩篩（クリブラ・オルビタリア）、歯石、歯の磨り減りなどから健康状態を比較しています。その成果のすべてはまだ報告されていませんが、結果としては、長墓の人たちが一番健康的でした（**図4**）。その解釈としては、一六〇九年以降の薩摩藩による侵略下においても、首里から地理的に一番遠いことから比較的自由がきいていたためと考えています。ただ、長墓遺跡の場合、男性と女性の結果が少し異なるという点は興味深いところです。

これら風葬墓の一部の人骨からフランベジア（yaws）の痕跡が確認されました[注5]。これは当時ケンブリッジ

注2　長墓遺跡調査団編 二〇一三
注3　池田 一九七四：一五〇
注4　沖縄県立埋蔵文化財センター 二〇〇一
注5　Hernandez & Hudson 2015

大学の院生だったマルシオ・ヘルナンデスと一緒に発表しましたが、フランベジアはもともと熱帯の病気です。これまで沖縄や日本では文献などでも報告されていませんでした。しかし、最近のＤＮＡ研究で、一五世紀の北欧でフランベジアが報告され[注6]、今後、長墓遺跡の人骨もＤＮＡ分析でフランベジアが確認できると面白いと思います。

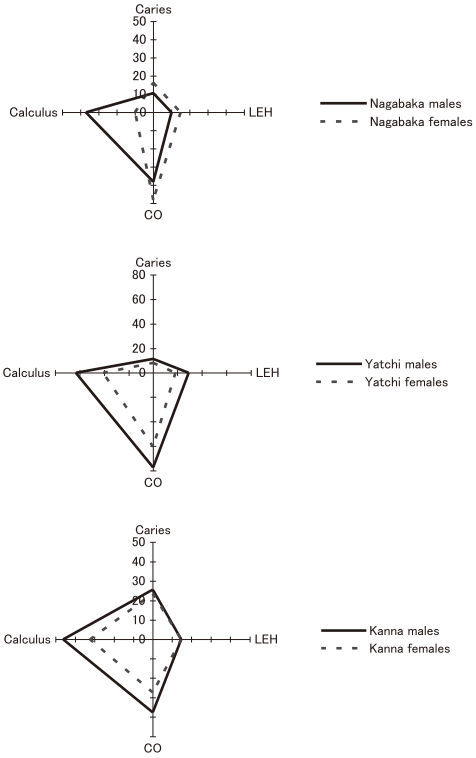


図４　出土人骨による健康調査
上：長墓遺跡（88 体）、中：久米島のヤッチのガマ（89 体）、下：宜野座の漢那（94 体）

貝塚遺構

二〇〇五年の測量調査中、風葬墓北部の前斜面から貝殻が数点見つかりました。その中にあったセンニンガ

イは、現在では沖縄や台湾で絶滅していることから、ここに何かがあっただろうということで、二〇〇六年から試掘を行い、貝塚遺構を発見しました。主なトレンチは二つです。先ほどサイモンさんの発表で日本の考古学は発掘面積が広いということを話しておられましたが、ご覧の通り私たちは狭い面積しか発掘していません。それでも非常に面白い結果が得られました。

図５　長墓遺跡の岩陰遺跡・風葬墓の位置関係

図５は、岩陰遺跡の外側斜面のトレンチ２と、岩陰のなかの風葬墓の位置関係を示したものです。最後の二〇一三年には、風葬墓北部の人骨をいったん横にまとめてから、その下を発掘調査しました。**図６**はトレンチ１の断面図です。上から下まで二メートルほど

注６　Giffin et al. 2020

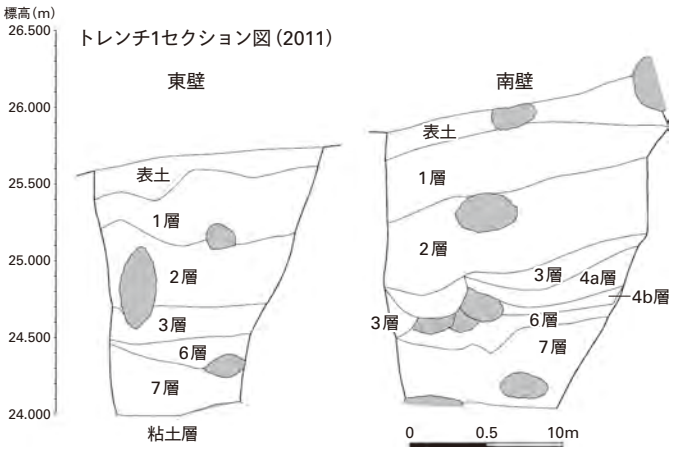


図６　長墓遺跡トレンチ１断面図

発掘し、七層が確認されました。このトレンチ1は、おそらく先史人の居住域であり、食べ物などのゴミを捨てたため、約二メートルの厚い貝塚が形成されたと考えられます。

トレンチ2を完掘したところ粘土層が出現しましたが、一メートル以上深掘りしても何も出土しないことから、そこが文化層の終わりと判断しました。出土遺物（**図7**）としては貝斧七点、貝玉、石器、サメ歯製品二九点などがありますが、土器はまったくありません。石器としては石皿一点と、石鎌・石包丁と推測しているものもあります。サメ歯製品はほとんど有孔

図7　長墓遺跡トレンチ1出土遺物
左：貝斧、中央：貝ビーズ、右：サメ歯製品

図8　長墓遺跡北区トレンチでの貝斧・石皿出土状況

です。ちなみに、サメ歯はこれまで沖縄から計一二〇点出土しています。そして面白いことに、北区トレンチからは貝斧と石皿が一緒に出土しました（図8）。ただし、それが当時の生活を反映しているかどうかは不明です。

また、石鎌・包丁といっているものは、両方ともスレート製で使用痕があります（図9）。宮古島ではスレートは採れないので、島外から運んできたものです。それが沖縄本島であるか台湾であるかはまだわかりません。

もう一点、不思議なものとして鉄の塊が出土しています（図10）。佐賀県工業技術センターによる蛍光X線分析で、表面には鉄分が七〇%以上含まれていることがわかりました。トレンチ1の第三層から出土して

図9　長墓遺跡出土
上：石鎌、下：石包丁

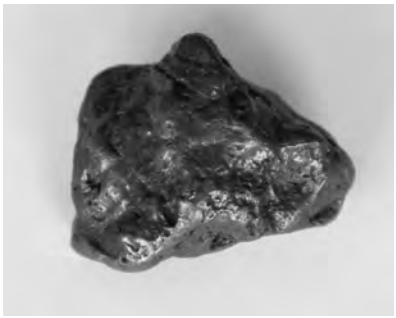


図10　長墓遺跡出土鉄塊

いるので、層序から判断すると二二〇〇年前のものになりますが、ちょっと解釈が難しいです。

動物遺存体については二〇〇八年度の報告書で詳しく報告していますが、魚類二三二一点、カメ類一五三点、イノシシ属二一九点、含むその他獣類八八五点、総数三五七八点の動物骨を確認しました。そのなかにジュゴン二点が含まれています。

さらに、イヌの骨が二点検出されたと報告書に書きましたが、その後、内山純蔵（うちやまじゅんぞう）さんと東海大の丸山真史（まるやままさし）さんに見ていただいた結果、一点はイノシシの幼児の骨であることが判明しました。もう一点は、ＤＮＡ分析をしないとはっきりしませんが、イヌの可能性があるということです。先島の先史時代のイヌについては、これまでピアソン先生（Richard J. Pearson）が西表・船浦遺跡を発掘調査した際にイヌの歯が数点検出されたと報告されているだけです。

また、高橋瞭平（たかはしりょうへい）さんがイノシシのＤＮＡ分析をした結果、一点だけが現在のリュウキュウイノシシと少し違うことがわかりました。[注7]

魚類もたくさん出土しています。その九五％ほどはブダイです（**図11**）。サンゴ礁を主な漁労の場としていたと考えています。

貝類もたくさん出土しています。トレンチ1とトレンチ2から六九五八点二七科五五種が出土しています。トレンチ1のいずれの層位においてもチョウセンサザエやヒサラガイが主体で、トレンチ2のいずれの層位でもヒサラガイ、イソハマグリ、チョウセンサザエが主体でした。ヒサラガイがたくさん出土するのは少し不思議です。**図12**はトレンチ1から出土した貝殻の数を示していますが、二層が一番多いものの、最下層まで連続して多量に出土しています。

注7　高橋二〇一二

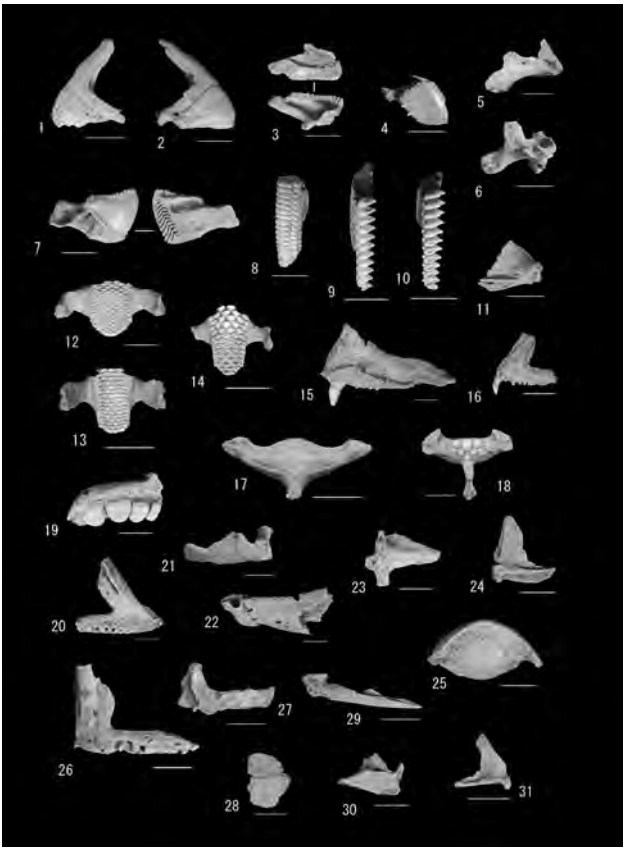


図 11　長墓遺跡出土魚類

1. イロブダイ属左前上顎骨、2. ハゲブダイ属右前上顎骨、3. キツネブダイ右前上顎骨、4. アオブダイ属右前上顎骨、5. キツネブダイ右主上顎骨、6. アオブダイ属右主上顎骨、7. ハゲブダイ属右歯骨、8. イロブダイ型右上咽頭骨、9. ハゲブダイ型左上咽頭骨、10. アオブダイ型左上咽頭骨、11. ベラ科右方骨、12. イロブダイ型下咽頭骨、13. ハゲブダイ型下咽頭骨、14. アオブダイ型下咽頭骨、15. シロクラベラ型右前上顎骨、16. ベラ科右前上顎骨、17. シロクラベラ型下咽頭骨、18. ベラ科 D 下咽頭骨、19. ヨコシマクロダイ左前上顎骨、20. フエフキダイ属ハマフエフキ型左前上顎骨、21. フエフキダイ属右主上顎骨、22. フエフキダイ科左歯骨、23. フエフキダイ科右角骨、24. フエフキダイ科右方骨、25. ハリセンボン科歯骨、26. カスミアジ近似種左前上顎骨、27. カスミアジ近似種右主上顎骨、28. アジ科稜鱗、29. イットウダイ科左歯骨、30. イットウダイ科左角骨、31. イットウダイ科右方骨。

＊スケールバーはすべて 1 cm

貝塚からは人骨も出土していますが、出方が非常に不思議です。すべて破片と歯です。一部火を受けていますが、一次埋葬（火葬）ではありません。他の貝塚出土遺物と基本的に一緒に出土しています。一部に動物骨と同じような割れ方（Spiral Fracture）をしているものもあります。最初に見つかった時点では、まだ石垣市の白保竿根田原洞穴遺跡から人骨がたくさん出土する前だったので、長墓遺跡の人骨は先島の完新世の最初の人骨出土例でした。しかし、竿根田原とは出方がまったく違います。

長墓遺跡と先島の考古学

後半は、年代と文化の位置づけ、遺跡の立地、先島先史文化の起源についてお話しします。

（一）先島（宮古・八重山）の考古編年

宮古島・八重山の考古学編年は、九州や本州とはまったく異なり、完新世、新石器時代前期（下田原

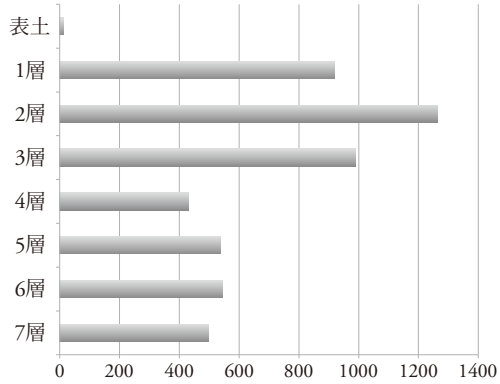


図 12　長墓遺跡トレンチ 1 層位別出土貝殻数

期）は、約四二〇〇年前から三五〇〇年前までです。八重山ではコブがついた下田原式土器を持った遺跡が見つかっています。新石器時代後期（無土器期）は約二九〇〇年前から宮古島と八重山の両諸島で始まり、九〇〇年頃に終わりますが、その間に遺跡の検出されていない空白期があります。新石器時代後期の代表的な遺物はシャコガイ製の貝斧です。この無土器期の長墓遺跡から出土した遺物二〇点の炭素一四年代測定を行い、この貝塚遺跡が約紀元前二二〇〇年から紀元後八〇〇年まで続いたことがわかりました。これは更新世のピンザアブ洞窟以外では、宮古島で一番古い遺跡となります。

一方、先島では従来の考古編年とは異なる側面が見られます。八重山では、紀元前約二二〇〇年から下田原式土器を伴う新石器前期文化が知られていますが、下田原土器は宮古島から発見されていません。長墓遺跡の年代は八重山新石器前期とほぼ同じですが、土器は伴っていません。また、八重山では新石器前期と無土器文化の新石器後期の間に空白期があったと多くの研究者は結論づけていますが、長墓遺跡では一〜七層の層位学的な連続性があるため、長い空白期はなかったと思われます。

（二）遺跡の立地と周辺環境

長墓遺跡は海から一キロメートルと近いものの、大多数の先島先史時代の遺跡のように砂丘にあるわけではありません。実際、長墓遺跡は砂丘以外の遺跡として、この地域・時代では最初の発見でした。また、長墓遺跡と海岸の間には丘陵・崖があり、アクセスは容易ではありません。宮古島のもう一つの先史時代後期のアラフ遺跡は、砂丘遺跡の典型的な例です（**図13**）。長墓遺跡は海にも近いのですが、近くに島尻マ

ングローブがあり、遺跡から出土する貝殻はそこから採取したものと考えられます。

（三）先島先史文化の起源

最後に、先島先史文化の起源、人はどこから来たかを考えてみたいと思います。地理的に台湾と八重山諸島は近く、与那国島は台湾から一一〇キロメートル程度の距離にあり（**図14**）、ピーター・ベルウッド（Peter Bellwood）先生が言っているようなオーストロネシア人の拡散が関連してきます。ベルウッド先生は一度、長墓の調査にも参加されています。

従来の考え方では、沖縄本島までが九州を起源とする琉球縄文文化ですが、先島は台湾が近いので台湾やフィリピンなどの南方起源の文化とする考え方が一般的でした。私もそういう論文を過去に書いています。この問題の解決には、貝塚出土人骨のＤＮＡ分析が参考となります。しかし、我々のＤＮＡ分析では、長墓先史人のゲノムは本土縄文人と同じでした（**図15**）。船泊、礼文島の縄文人とほとんど変わりません。もう一つ、近世の長墓人は現代宮古島の人々と一致することもわかりました。これは現代人の位置づけを考えるうえでも面白い結果です。

というのも、池田次郎先生が一九七四年の論文で、現地の人が、長墓遺跡の風葬墓は地元の人とは関係ないと言っていると書き残しているからです。我々が調査したときも、地元の方は、この墓は「外国人」

図 13　宮古島アラフ遺跡の景観

図 14　先島先史文化圏の地理関係

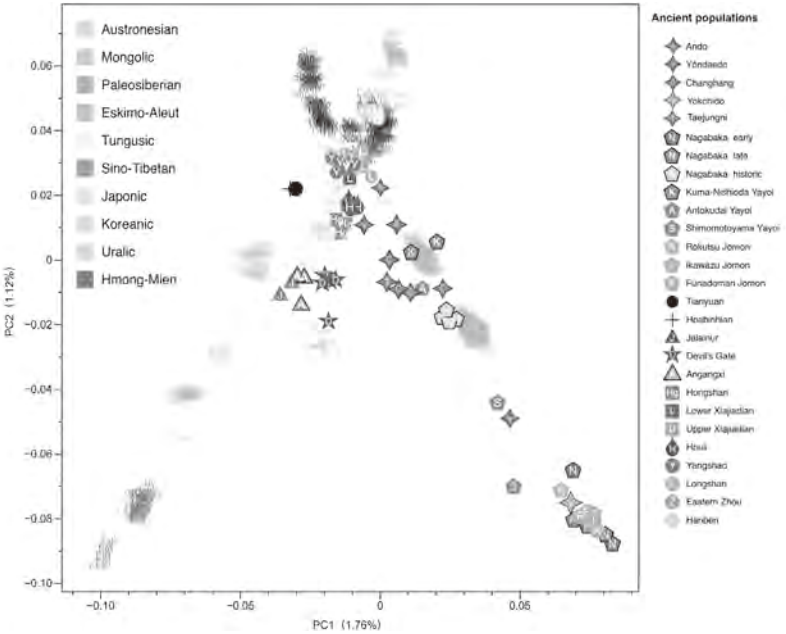


図 15　長墓遺跡出土人骨の古代 DNA 分析

のものですよと言われました。しかし、ＤＮＡ分析の結果からは、少なくとも近世の長墓人についてはそうではありませんでした。

今後の課題

宮古島の人が本州・九州の縄文人と同じであることはわかりましたが、八重山の人も同じかどうかはまだわかっていません。長墓先史人は沖縄本島あるいは九州から流れてきたと考えられますが、同じ人々がその後、八重山まで渡って、下田原土器文化を創ったかどうかはまだ不明です。台湾から八重山への渡来は十分考えられるでしょう。

長墓遺跡の先史時代と近世については今日お話ししましたが、中世（グスク時代）の層や遺物がまったくないので、九～一〇世紀には長墓の人がいなくなったのか、どうなったのかは謎に包まれています。また、イノシシは現在宮古島にはまったくいませんので、それがいつまでいたのかという動物考古学上の問題もあります。

長墓遺跡は、本来の日本考古学の一般的な理解と異なる側面を多く持っています。十分な解釈はまだできていません。調査の成果を少しずつ発表していきたいと思っていますので、皆様のご指導を今後もよろしくお願いします。

ご清聴ありがとうございました。宮古島では「タンディガタンディ」と言いますが、これで締めさせていただきます。

Q&A

Q　ハドソン先生は日本各地をご覧になっていますが、特に宮古・八重山地域をフィールドに選ばれた、その魅力はどんなところにあるのでしょうか。

A　まず、東京大学の学生のとき、当時いろいろ開発があって、伊豆諸島の神津島や大島、八丈島に行き発掘調査を行っていました。そのあと、沖縄本島に行きました。宮古島はあまり発掘されていない場所なんですね。それこそ明治時代は、日本の外側を調査しましょうということで、石垣島には鳥居龍蔵先生などが調査に訪れていました。宮古島は金子エリカさんなどが行っているみたいですが、あまり調査されていないので、新しいフィールドができるかなあと思っていたところ、課題も非常に多いのですが、想像以上に面白い遺跡が見つかりました。

Q　現代の宮古島の人々が長墓の人骨を無関係な人々と認識されているのは、どのような歴史的背景があるとお考えですか。

A　地元の方は、長墓は自分たちとは関係ないと、七〇年代から現在でもそうおっしゃっています。これについては歴史的な文献とかはなく、はっきりいってわかりません。しかし、江戸時代の文献には、薩摩藩が入ってきたため農業をやらなければいけなくなって、近くの、たとえば、池間島のような村の人を意図的に宮古本島に移住させたといった記述があります。そういった関係で、外国人ではないが違う島から移住してきたということかもしれませんが、よくわかりません。遺物からこういうことが言えるかなあと思ったのですが、遺物も少ないのでなかなか言えません。長墓の風葬墓をいつまで使ったのかもはっきりしません。いま行っている年代測定で面白い結果がでれば、もう少し詳しいことが言えるかもしれません。

Q　ハドソン先生は、かっこつきの日本人の境界領域を研究されてきましたが、その結果について語るときに、誰の立場から語られてきましたか。

A　誰の立場からというのは、ちょっと意味がわかりません。最初は日本考古学の弥生時代の研究をしていました。そこから弥生文化、稲作、農耕文化に広がっていきました。その次に、農耕文化以外の場所、それは必ずしも地理的な境目はないと思っていますが、そういうところに興味を持つようになりました。いまでも、いわゆる文明に対する野蛮的なところに一番興味を持っています。それが宮古島やオホーツク文化など、地理的な場所でもありますが、山の中に住んでいる人たちとか、海賊の人々の立場をどう考えればよいかという研究をしていました。最初はバラバラなテーマでしたが、やっと最近、それらがつながっていることに気がつきました。一言で言うと、国家と距離を持った人たちに興味を持っていると言えるかもしれないです。

これが質問に対する答えになるかどうかわかりませんが、どうでしょうか。

司会　（庄田慎矢）　おそらく日本人である私たちとは違った観点で研究されているということで質問されたのではないかと、私は想像しました。

Q　勉強不足で知らなかったのですが、南西諸島ではさきほどの病気のフランペジアは確認できるのでしょうか。日本にあるのを知りませんでした。

A　ほかからはまったく報告されていません。人類学的な人骨から言っている人もいないと思いますし、文献でも報告されていないと私は考えています。フランペジアの痕跡は人骨の残りがよいと区別ができるはずですが、日本では梅毒が多いので、一部、混乱されているのかも知れません。

Q　琉球では風葬墓の遺骨は女性が洗骨する風習があります。長墓の遺骨は私たちの祖先ではないとおっしゃるのなら、洗骨の風習もなかったということでしょうか。

A　難しいですね。二〇世紀にはほとんどなかったと考えていますが、長墓を使っているときはどうかはわかりません。長墓には一回だけでなく、少しずつ亡くなった人を弔っています。まず死体を置いて、肉がなくなると、木棺に入れたかもしれないと考えていますが、普通は骨になったとき、お酒かなにかで洗って、木棺に入れるので、使っている間には洗骨の習慣があっただろうと考えています。岩陰のなかにシャコガイがいくつか置いてあったので、もしかしてシャコガイのなかにお酒を入れて洗骨したかもしれません。補足ですが、『月間文化財情報』に長墓のことが一度でていますので見てください。

Q　（サイモン・ケイナー）　ハドソン先生に一つ質問があります。日本の方々は考古学に興味がある

と言っていますが、沖縄の方々はどうでしょうか。沖縄の先史時代とか、沖縄と日本のほかのところと比べてどういうイメージがありますでしょうか。

A　少なくとも宮古島の方々はすごい関心を持っています。外国人が発掘していたせいかもしれませんが、ちょっとした発掘成果が地元の新聞の一面にでたりしました。また、宮古テレビの夕方のニュースには毎日ではありませんが何回もでました。特に熱心な宮古テレビの方がほぼ毎日見学に来ていました。ものすごく関心を持っていました。

Q　（ケイナー）信じられませんね（笑）。僕たちの経験として、もし、ジーナ先生がいなかったら、僕たちは日本の考古学の研究をしていないんじゃあないかと思ったりします。もう一九八〇年代から、奈良盆地のボーリング調査とか、三輪遺跡で天理大学の置田先生と、奈文研の松井章先生とかが研究されていました。マークさんは、海外の立場から、日本の考古学の未来についてどのようにお考えですか。

A　私は最近、比較考古学に非常に興味を持っています。日本で働いていたときは、日本の純粋な考古学の立場だったかもしれませんが、いまはドイツで働いていて、比較のための立場が強くなっています。その立場から考えると、いままで気づかなかったことがたくさんあるので、いまは日本考古学について違う立場から魅力を楽しんでいるところです。

参考文献

- 江上幹幸他（編）二〇〇三『アラフ遺跡調査研究Ⅰ：沖縄県宮古島アラフ遺跡発掘調査報告』六一書房
- 池田次郎 一九七四「沖縄・宮古島現代人頭骨の計測」『人類学雑誌』八二（二）、一五〇－一六〇頁
- 池田次郎 一九八二「前頭洞計測値の集団間変異－近代日本人と縄文人の比較」『人類学雑誌』九〇別巻：九一－一〇四頁
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 二〇〇一『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書、沖縄県立埋蔵文化財センター六
- 高橋瞭平 二〇一二『Ancient DNAを用いた先史時代 琉球列島へのイノシシ・家畜ブタ導入に関する動物考古学的研究』総合研究大学院大学、博士学位論文 http://id.nii.ac.jp/1013/00003442/
- 長墓遺跡調査団（編）二〇一三『南嶺の長墓遺跡調査研究1』西九州大学持続的環境文化研究所
- Dodo Y, Doi N., and Kondo O. 1998 Ainu and Ryukyuan cranial nonmetric variation: evidence which disputes the Ainu-Ryukyu common origin theory. *Anthropological Science* 106: 99-120.
- Giffin, K., Lankapalli, A.K., Sabin, S. et al. 2020 A treponemal genome from an historic plague victim supports a recent emergence of yaws and its presence in 15th century Europe. *Sci Rep* 10, 9499. https://doi.org/10.1038/s41598-020-66012-x
- Hernandez M, and Hudson MJ. 2015 Diagnosis and evaluation of causative factors for the presence of endemic treponemal disease in a Japanese sub-tropical island population from the Tokugawa period. *Int J Paleopathol.* 10:16-25. doi: 10.1016/j.ijpp.2015.04.001
- Robbeets, M., Bouckaert, R., Conte, M. et al. 2021 Triangulation supports agricultural spread of the Transeurasian languages. *Nature* 599, 616-621. https://doi.org/10.1038/s41586-021-04108-8

図版出典

図1　上：©2012 SK Energy, ©2012 ZENRIN, ©2012 GeoEye・下：著者撮影
図2　著者撮影

図3　著者撮影
図4　長墓遺跡調査団（編）二〇一三
図5　著者撮影
図6　著者作成
図7〜12　長墓遺跡調査団（編）二〇一三
図13　著者撮影
図14　著者作成（R. Pearson 先生のベースマップを改変）
図15　Robbeets. et al., 2021

第3講

学際的研究から見た景観利用の歴史的連続性とその変化

羽生 淳子　カリフォルニア大学バークレー校人類学科 教授・日本研究センター 所長
総合地球環境学研究所 客員教授

羽生 淳子　Junko Habu

一九五九年　神奈川県生まれ
一九八二年　慶應義塾大学　卒業
一九八四年　慶應義塾大学修士課程　修了
一九九六年　マッギル大学博士課程　修了
同　　年　カリフォルニア大学バークレー校人類学科　助教授
二〇〇二年　同　准教授
二〇一〇年より　同　教授
専門は縄文時代の考古学・歴史生態学

著者紹介

お会いする前からご著作を通じて存じ上げていた有名な先生でしたので、ポスドク時代に青森県の三内丸山遺跡で最初にお会いした時の、羽生先生のあまりの物腰の柔らかさに大変驚いた記憶があります。その後、渡英のための研究費獲得に乗り出していた私を、強力に後押ししてくださいました。その頃から、海外における日本考古学の研究者の減少について危機感をお持ちとの話をたびたび伺いました。このリレートークをやってみようと思った動機の一つは、そのような危機感を共有する必要性を感じたことです。羽生先生は奈文研の客員研究員でもあるので、これからのますます緊密な連携を通じて、日本考古学の国際化を推進していきたいものです。

はじめに

私の専門は、縄文時代の考古学です。慶應義塾大学修士の頃から、縄文時代における生業の集約化の度合いと定住度が、土器をはじめとする物質文化や社会階層化を含む社会構造、祭祀・宗教、人口といった社会の諸側面とどのようにかかわっていたか、という研究テーマに興味を持っていました。このテーマを追求するためには、狩猟採集民の考古学と人類学が盛んな北米で勉強したいと思って、カナダのマッギル大学に留学したのが一九八八年です。一九九六年に博士論文を書き終わったときに、たまたまカリフォルニア大学バークレー校で東アジア考古学の教員募集が出ていたので応募し、その年からカリフォルニアで教え始めて現在に至っています。

定住と生業の集約化の問題を追いかけている過程で、過去の狩猟採集民文化を理解するためには、文化変化について、単線的な右肩上がりの進化論の視点から考えるだけでは不十分で、生態系の安定性という視点から食料生産の長期的な持続可能性を検討することが重要だ、と考えるようになりました。こうしたテーマを考える際に、考古学は、多様な時空間スケール、特に、数百年から数千年にわたる長期変化や、山・川・海を含む地域の景観のつながりなど、マクロな視点を扱うのが得意だ、という利点を持っています。

このような研究テーマを追いかけていった結果、二〇一四〜二〇一六年度にはバークレー校から研究休暇をいただいて、京都の総合地球環境学研究所で、「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性―歴史生態学からのアプローチ（略称「小規模経済プロジェクト」）」というプロジェクトのリーダーを務

めました。

このプロジェクトを通じて、先史時代の狩猟採集民の景観に関する考古学が、文化の長期的持続性についての学際的な研究にどのように寄与できるか、という点に興味を持つようになりました。景観の概念は、歴史生態学では、「文化的な影響を受けた土地、水、生物相のあり方」[注1]と定義されています。それは、「現実の世界に存在する事象」[注2]であると同時に、そこに住む各人にとっては、「日々の暮らしや記憶の中でそれぞれ固有の意味を持つ場所」でもあります。

日本の資料は、過去から現代に至る景観の歴史的連続性とその変化を考えるのに非常に適していると思います。このような研究の延長として、一昨年からは、生態系システムのレジリエンス（弾力性）について、アグロエコロジー（広義の農生態学）[注3]を含む生態学者や民族（俗）学者、歴史学者らと学際的な議論を進めています。もちろん、考古学者としては、道具を含む物質文化と景観、在来知の複合から見た知識の伝達や、知識の次世代への継承にも興味があります。このような研究を通して、短期から長期にわたる、交錯する時間スケールから見た文化変化のメカニズムについて考え、過去の事例から得られる知見が、現代と未来における人間と環境の相互関係を考える際の一助となれば、と思っています。

このような研究テーマを考える際に大事なのは、研究における国際交流です。慶應義塾大学で私の指導教授だった鈴木公男先生は、一九七〇年代にイェール大学に一年留学なさいましたが、その頃は、アメリカに留学するといえば、一大決心だったようです。これに対して、私の世代は、新型コロナウイルスの問題が起きるまでは、世界を自由に動き回れるのが前提となっていて、私も年に四〜五回は日本とアメリカを往復していました。去年から今年にかけては、コロナウイルスの蔓延によって、海外との行き来は大き

く制限されています。現在も、日本国籍の保有者か日本在住者以外は、ほとんど日本に入国できない状況ですが、これは長くは続かないでほしいと思っています。というのは、日本考古学と海外考古学には、それぞれ長所があり、お互いがその長所を理解したうえで議論を進めることがとても大切だからです。

一．日本考古学と海外考古学 ― 北米との比較を中心に

ここで、海外考古学のうち、私がよく知っている北米（アメリカ合衆国およびカナダ）と日本考古学の対比を交えながら、日本と海外考古学との関係について考えてみましょう。

北米考古学の特徴として、私は三点が重要だと思っています。第一は、演繹的思考です。北米の考古学の授業では、まず理論を教え、その理論に基づいて仮説を立ててからデータを集めて分析し、分析結果の解釈・考察から結論へと進みます。結論で重視されるのは、分析の結果が考古学理論にどのように寄与するか、という点です。また、演繹的な思考の一環として、データを集める際のサンプリング方法の重要性を強調します。

注1　Balée 2018:1
注2　Marquardt & Crumley 1987
注3　Altieri 1987 等を参照

第二に、北米における考古学は、人類学の一分野として発展したので、文化人類学・形質人類学・言語人類学と連携して人類学理論を前進させることを目標にします。特に、縄文時代の考古学を考える際には、北米における狩猟採集民考古学と生態人類学のこれまでの蓄積と新しい成果は重要です。

第三に、北米考古学では、多くの研究者が、学問における解釈は常に現代社会の脈絡に影響されている、と考えています。もちろん、学術的な議論において、論理的な整合性は重要ですが、それは解釈における一定の主観性を認識したうえでの議論ということになります。特に近年では、社会の多様性（diversity）・公平性（equity）・包摂性（inclusion）を強調する視点から、西欧中心主義の見直しが盛んになっていて、その一環として西洋文明の歴史を基準とする単線的な文化進化論の見直しが起こっています。その結果、世界における各地域の歴史的個別性が再評価されるようになりました。生態系のレジリエンスから見た世界各地の社会における長期的持続可能性の議論は、このような研究の視点の変化に合致する流れと言えます。

これに対して、日本考古学の特徴としては、第一に、質の高い多量のデータが存在する、ということがあげられます。日本の緊急発掘では一〇〇％の記録保存を目標にしますから、結果として膨大な考古データが蓄積されました。また、精密な科学的分析も日本考古学の得意とする分野です。

第二に、日本の考古学は、歴史学の一分野として位置づけられているので、文献史学との連携が進んでいます。さらに、民俗学との連携も長い歴史を持ち、各地方自治体の博物館や歴史民俗資料館では、考古資料が古文書や民具とともに展示・考察されることが一般的です。

第三に、日本考古学は、第二次世界大戦後の日本の文化・社会と一体となって変化を遂げてきました。行政発掘が盛んになったことにより、一般市民への成果還元が重視され、行政による考古資料の活用への

組織的なサポートも行われています。また、戦後の考古学教育では、戦争中の偏った皇国史観への反省から、「私たちの祖先の真の歴史」を解明するという使命感も強調されてきました。アマチュア考古学者も含めた裾野の広さも、日本考古学の特徴の一つです。

日本と北米の考古学にはそれぞれの長所があり、どちらのほうが優れているというものではありません。このような違いを念頭に置いたうえで私が注目しているのが、日本の農山村における食・暮らしと景観の歴史的連続性です。

日本では、①木の実や山菜、きのこ類の採集や狩猟を含む「山の幸」の重要性、②野焼きや焼畑を含む里山の人為的管理の重要性、③コメ、ヒエ、アワ、ムギ、イモ、クリ、ドングリ、トチノミ等、の主食となるデンプン質食料の多様性など、暮らしのさまざまな側面について、歴史的な連続性を検討できる地域がたくさん残っています。食の多様性は、地域の食料システムのレジリエンス（弾力性・災害時の復元力）と直結します。そして、山の幸の重要性と、多様なデンプン質の食料利用については、その一部は縄文時代までさかのぼることがこれまでの研究成果から明らかです。

また、日本の各地域の農村・漁村・山村の豊富な民族誌データからは、伝統知・在来知が、さまざまな形で現在まで継承されていることがわかります。たとえば、生漆の生産と漆器製作などです。これらのなかで特に私が注目しているのは、環境管理と資源利用に関する在来知です。

これらの在来知のうち、ドングリ食とその加工方法、生漆の生産と漆器生産などの知識の起源は、縄文時代までさかのぼります。**図1**は、私たちが発掘した青森市合子沢松森（4）遺跡から出土したウルシ属の種子の例です。

近年、私たちの研究グループでは、農生態学者や社会学者たちと共同で、焼畑や野焼きを含む里山の人為的管理の重要性についての議論を進めています。

日本列島における現代の植生を見ると、その三分の二は森林でおおわれています。そして、日本列島の地形は平地が少なく、その四分の三が火山地や丘陵を含む山地です。このような地形から考えて、先史時代から現代に至る歴史を通じて、丘陵地や山間部と森林の利用が重要だったことが推測できます。

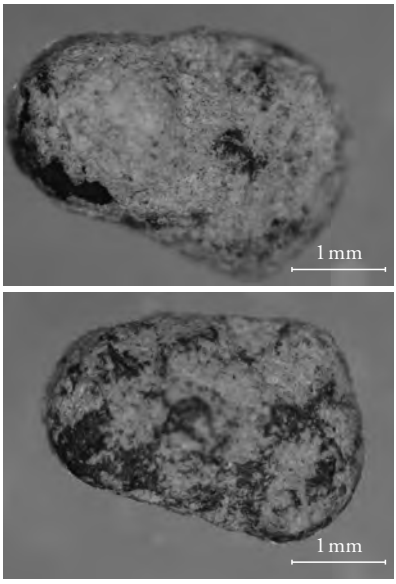


図 1　青森県青森市合子沢松森（4）遺跡出土のウルシ属種子

二．小規模経済プロジェクトにおける学際的・超学際的研究

それでは、次に、私たちが小規模経済プロジェクトで試みた学際的・超学際的研究について少しお話しします。「超学際的研究」とは、他分野の研究者との共同研究に加えて、地域住民など研究者以外の方々

と一緒に行う研究のことです。

近年、世界各地で、大規模で画一的な生産活動のさまざまな弊害が、食べ物の多様性喪失の問題とともに指摘されています。小規模経済プロジェクトでは、いろいろな分野の研究者が、地域の住民や任意団体のメンバーと協働して、食料生産の長期的持続可能性という観点から、生産規模の拡大と画一化の原因と結果について調べました。プロジェクトが進むにつれて、「多様性」「ネットワーク」「自立性」の三つがキーワードとして浮かび上がってきました。プロジェクト・メンバーの多くは、このプロジェクトの成果は、社会・経済の「成長モデル」から「持続可能モデル」への転換の必要性を示すものだと考えています。

このプロジェクトは、過去を研究する考古学者、古気候学者らを中心とする長期変化班、近現代を扱う文化人類学者、生態学者などを中心とする民族・社会調査班、これら二つの班の研究成果に基づいて未来を考える実践・普及・政策提言班の三つの班に分かれました。分析対象とした地域は、日本と北米西海岸を含む、環太平洋地域が中心です。

長期変化班の研究の焦点の一つは、過去の日本列島における食の多様性と文化・社会の長期的持続可能性でした。縄文時代の食生活において、主食になった可能性のあるデンプン質食料として、クリ、ドングリ、トチ、ワラビ、クズ、ユリ根などがあげられます。弥生時代以降の日本列島では、これに、コメとヒエ・アワ・キビ・ムギなどの雑穀類が加わります。

縄文時代の始まりは約一万六〇〇〇年前からと言われていますが、ドングリやクリ、根茎類などのデンプン質食料が主食となっていく転換期は、縄文時代前期、約七〇〇〇年前以降と考えられています。私は、この変化は、ある意味で、農耕の開始よりも重要な変化だと思っています。

歴史人口学の鬼頭宏先生は、日本列島における人口変動について、縄文時代以来の過去一万年間に、少なくとも四回の人口減退期があったと述べています[注4]。つまり、日本列島の人口増加は、常に右肩上がりだったわけではなく、人口の増減を繰り返しながら今日に至ったと考えられるわけです。大規模な人口減少の第一回目が、縄文時代の中期末から晩期です。なお、鬼頭先生の議論で使われた縄文時代の人口推定の元データは、小山修三先生による縄文時代早期から晩期の人口推定値です（**図2**）[注5]。

小山先生による縄文時代の推定人口はいくつかの仮定に基づいた試算なので、これから研究が進むにつれて、推定値の絶対数が変化する可能性はありますが、私は**図2**に示されているおおよその傾向は、少なくとも東日本についてはあてはまるだろうと考えています。特に、縄文時代の遺跡密度が特に高い関東や中部地方では、縄文時代中期の遺跡数が他の時期より圧倒的に多く、大集落も多いことが知られています。

東日本における縄文前期から中期にかけての遺跡数の増加と遺跡規模の拡大、および中期末における大規模集落の減少と、生業との関係については、いわゆる縄文農耕やクリの管理栽培の可能性も含め

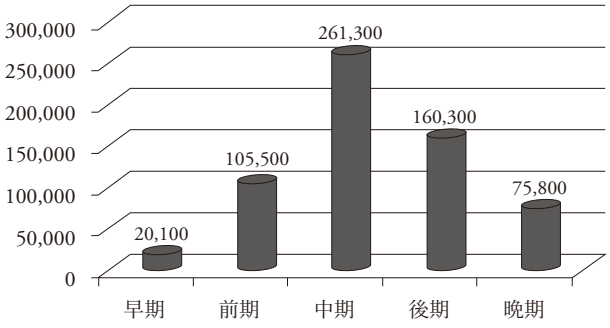


図2　縄文時代早期から晩期の人口推定値

て、これまで多くの研究者が議論してきました。議論の中心となってきたのは、中期における植物質食料加工・採集用具の増加をどう解釈するか、という点です。さらに、中期末における遺跡数と遺跡規模の減少については、これまでにたくさんの研究者が、約四三〇〇～四二〇〇年前の気候寒冷化、いわゆるボンド3イベント、略称四・二Kイベントによって引き起こされたとする考えを示してきました。しかし、寒くなったから人口が減ったというのは、説明としてはきわめて不完全です。実際に寒くなったタイミングと人口が大幅に減少した時期が一致するのか、また、もし一致するとしても、どのようなメカニズムでそれが起こったのかを検討することが必要です。

縄文前期～中期における人口の盛衰と生業の変化を考える際に示唆に富むのが、青森県青森市の三内丸山遺跡とその周辺の遺跡分布です。三内丸山遺跡の居住期間は、約五九〇〇年前から四三〇〇年前ごろと推定されています。青森県内の土器型式編年研究に基づいて、古いほうから、円筒下層a～d、円筒上層a～e、榎林、最花、大木式期の一二土器型式期に細分されています。一五〇〇年以上にわたって居住された遺跡ですから、当然その期間内にいろいろな変化が観察されます。

図3は、報告書に発表されているデータに基づいて、三内丸山遺跡における住居址数、石器組成、土偶数などの時間的変化をまとめたものです[注6]。グラフからわかるように、この遺跡では、住居址の数は、前期末の円筒下層d式期までにかなり多くなり、中期初めにいったん減少した後、中期中頃の円筒上層d・

注4　鬼頭 二〇一一
注5　小山 一九八四
注6　羽生 二〇一六：四三

e式期にピークを迎え、続く榎林式期には激減します。これと同時に、それまでたくさん出土していた祭りの道具と推定される土偶も姿を消します。

特に面白いのは、この遺跡における石器組成の特徴の変化です。前期後半から中期初めでは、石鏃や石匙、石錐など、狩猟・漁労に関連すると思われる剥片石器が多いのですが、前期の末頃から磨石（すりいし）と呼ばれる植物食加工具が増え始め、中期前半では、磨石類が石器組成の主体になります。もし、石器など道具箱の多様性を食と生業の多様性の指標と考えるならば、このデータは狩猟・漁労を主体とした生業活動から、植物質食料主体への生業活動への移行、そしてその終焉と解釈することが可能です。

そして、磨石類の割合の減少は、円筒上層d～e式期への移行期に起こり、そのあと、円筒上層e式期から榎林式期への移行期、約四九〇〇年前頃には、住居址数の大幅な減少が見られます。住居址数を人口の指標と考えるならば、三内丸山遺跡における人口の減少開始は、グローバルな気候寒冷化よりも六、七〇〇年前ということになります。

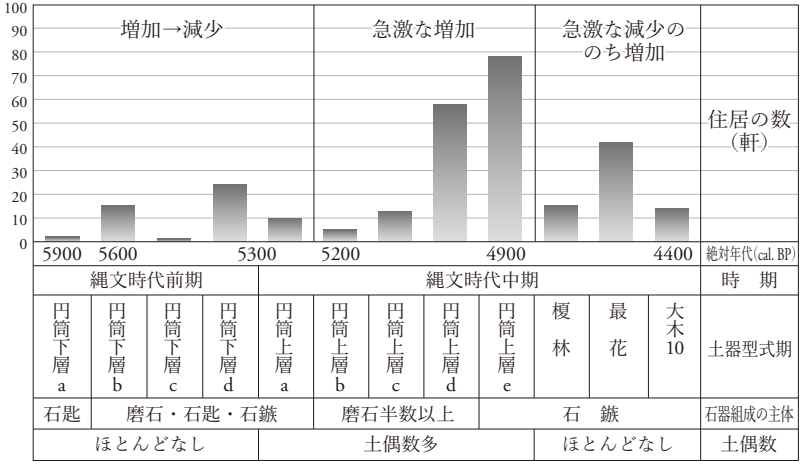


図３　三内丸山遺跡における住居址・石器・土偶数の時間的変化

縄文中期の遺跡の変遷を見てみると、青森市内については三内丸山遺跡と同様に、榎林式期以降、大規模遺跡が減少する傾向がうかがわれます。ただし、この時期の人口動態については、地域差が大きかった可能性も考えられます。

小規模経済プロジェクトでは、サブ・プロジェクトの一つとして、関東、青森県、北海道の縄文遺跡の^{14}C較正年代値の積算確率分布（summed probability distribution、略してSPD）のデータを用いて、七〇〇〇～三〇〇〇年前（縄文時代前期～後期）における人口の変動を推定しました（図4）[注7]。このサブ・プロジェクトを率いたのは、現在、ケンブリッジ大学で教えていらっしゃるエンリコ・クレーマさんです。図4は、関東（左）と青森県内（右）の分析結果を比較したものです。分析結果を巨視的に見ると、左側のグラフから、関東地方におけるSPDの値が有意に下がり始めるのは五〇〇〇年前頃で、四二〇〇年前の地球規模の寒冷化よりも数百年早いことがわかります。青森県については、SPDの値が大きく下がっているのは関東よりも遅

注7　Crema et al. 2016

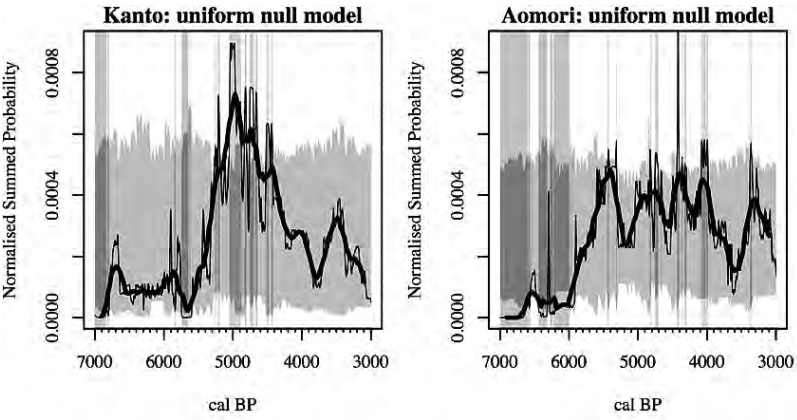


図4　積算確率分布手法による関東（左）と青森（右）の人口動態

く、縄文時代後期に相当する時代になってからです。さきほどお話ししたような、三内丸山とその周辺で見られる中期初め、中期半ば、中期末の遺跡規模と遺跡数の減少については、ほぼそれに対応する時期に、SPDのグラフに三つの谷が認められますが、統計的には、はっきりとしたことが言えるデータではありません。その理由としては、いくつか考えられます。第一に、このような分析では、遺跡規模の変化を考慮に入れることができません。第二に、青森県内でも、青森平野とそれ以外の地域とでは地域差が認められることが知られています。今後、分析の空間スケールを変えながら、青森平野と青森県内のセトルメント・パターンの変化と気候変動との関係について、さらに検討を加える必要があると思っています。

三内丸山遺跡とその周辺の人口動態を考えるためには、遺跡周辺の景観という、県単位よりもミクロな空間スケールから考えることも一つの方法です。**図5**は、青森市内の縄文前期・中期の住居址が報告されている主な遺跡の位置と標高を、それぞれの発掘報告書のデータに基づいて示したものです。三内丸山遺跡と、それに隣接していて、実際には三内丸山と同一集落と考えられる近野（ちかの）遺跡からは、縄文時代前期後半と中期の両方の住居址が発掘されています。この両遺跡は、星印と白丸で示してあります。白い四角は、主に縄文時代前期後半の円筒下層ａ～ｄ式期の住居が発見されている集落遺跡です。黒い印は、縄文中期の住居だけが報告されている集落遺跡です。

考古学者の皆さんはよくご存じの通り、東日本の縄文集落は、その大部分が台地上の縁辺部に立地しています。**図5**に白い四角で示した前期後半の集落立地は、三内丸山と近野以外は典型的な縄文集落の立地で、標高三〇メートル以上の台地上に位置しています。これに対して、三内丸山遺跡と近野遺跡の標高はきわめて低く、約一三～一八メートルしかありません。他の縄文前期の集落遺跡とは明らかに異なってい

ます。つまり、三内丸山の集落は、それまでは台地上に住んでいた縄文人が平地に下りてきた稀な例ということになります。

遺跡の立地は、居住者の生業活動と不可分と考えられることから、三内丸山遺跡に縄文時代前期に大きな集落が形成されたということ自体が、生業の大きな転換を示している可能性があります。さらに、中期前半になると、三内丸山集落の近辺の、同じく標高の低い場所に、三内、三内澤部、三内丸山（5）、三内丸山（9）などの集落遺跡も作られています。同じ中期の遺跡でも、中期後半、榎林期以降の集落遺跡は、三内丸山の近くでも、三内丸山（6）や安田（2）遺跡のようにもっと高台に作られるか、あるいは朝日山（2）、蛍沢、山吹（1）遺跡のように、立地が山側に移動します。

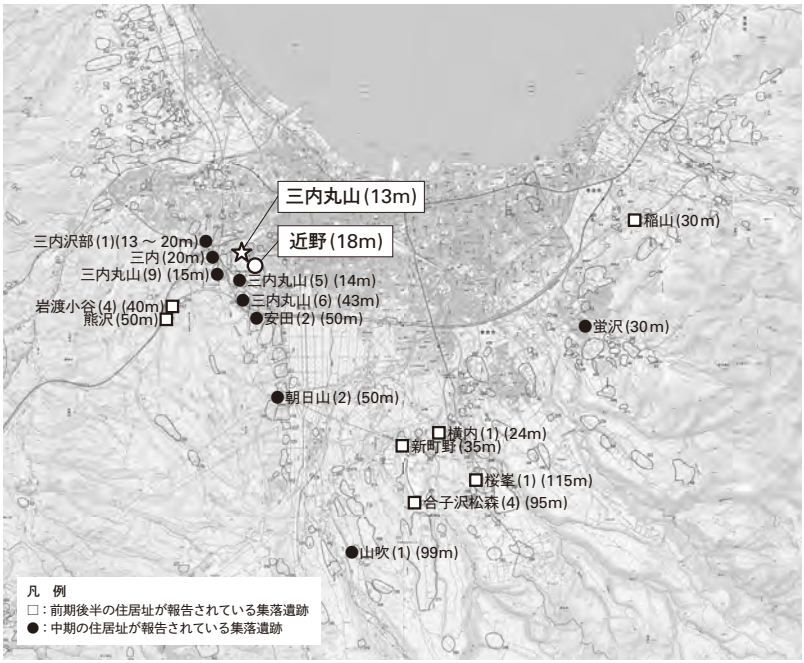


図５　三内丸山遺跡と周辺の縄文前期・中期（集落遺跡）の位置と標高

三内丸山遺跡について、東京大学の辻誠一郎先生は、縄文前期後半から中期中頃における三内丸山集落生態系モデルを示しています（**図6**）[注8]。これによれば、集落域に近接して人為的なウルシ畑やクリ林があり、その周りに二次林、さらにその外側は、主にブナ林からなる落葉広葉樹林となっています。人為的なクリ林が広い面積にわたって形成されていたと推定するならば、それが近隣の生態系の安定性に与える影響や、クリ林の管理方法、さらにその持続可能性や気候変動との関連について考える必要があります。これらの点を含めて、三内丸山遺跡とその周辺における遺跡分布を理解するためには、生業の多様性と生態系の安定性という視点から景観を総合的に考える必要があると思っています。三内丸山遺跡の縄文集落としては特異な立地は、このような検討を行う際に考慮すべき重要な要素です。

山側の生態系の一環として縄文遺跡を考えるという点では、たとえば、岩手県二戸郡一戸町の御所野遺跡がよい分析事例となりそうです。御所野遺跡は（**図7**）、八戸湾に向かって北に流れる川の上流に位置し、遺跡の標高は約一九〇～二〇〇メートルです。遺跡の西側を流れる馬淵川の普段の水位との比高差は約五〇メートル、遺跡の南北の崖下には馬淵川の支流が二つあり、いずれも比高差が四〇メートルを超える断崖となっています[注9]。現在、一戸町の農家の方々の暮らしは、畑作を中心としていますが、豊富な山の幸の利用は、地域の住民の暮らしの中に組み込まれています。また、近接する二戸市では、畑作と稲作に加えて、生漆の生産を行っています。

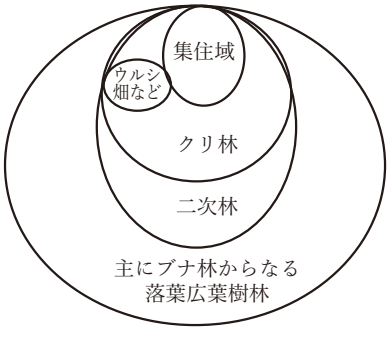


図6　縄文前期後半から中期中頃における三内丸山集落生態系モデル

一戸や浄法寺を含めて岩手県の県北地域は、民族誌データと考古遺跡との歴史的連続性を考えるうえで、きわめて条件のよい地域です。

小規模経済プロジェクトの民族・社会調査班では、近現代の食料生産について、フィールド調査を中心に研究を進めました。同時に、東北地方では、日本生命財団から学際的総合研究助成を受けて「ヤマ・カワ・ウミに生きる知恵と工夫」と題したプロジェクトを行って、小規模経済プロジェクトと連動するかたちで調査を行いました[注10]。このうち、北上山地に位置する岩手県宮古市の閉伊川上流地域での聞き取り調査の結果は、生業戦略のレジリエンスを考えるうえでとても興味深いものでした。この地域の第二次世界大戦前から戦後にかけての生業戦略は、①多様な山の幸と畑作物に支えられた食の多様性、②主食の多様性とバックアップ・プランの重層性、③食糧貯蔵、④緊密な社会ネットワーク、

注8　辻二〇一一、二〇一八
注9　一戸町教育委員会二〇一三
注10　羽生・佐々木・福永編二〇一八、羽生二〇一九

図7　岩手県御所野遺跡と周囲の景観（2019年6月19日、羽生淳子撮影）

などを特徴とし、常畑に加えて焼畑が断続的に行われていたことが知られています。[注11]

さきほど少しお話しした二戸市浄法寺での聞き取り調査では、漆掻き、畑作、稲作、林業、畜産業、養蚕を含む生業の多様性と季節性が精緻な周年サイクルを形成してきたことがわかりました。[注12] **図8**は浄法寺での生業の歴史的変遷を示したものです。

閉伊川上流地域と浄法寺のどちらの地域でも、生業複合の特徴の一部とそれに伴う在来知は、歴史的な変遷に伴ってかたちを変えながらも現在まで継承されています。在来知は、地域の暮らしの科学的な合理性を考えるために重要なだけでなく、人々のアイデンティティとも不可分です。このような景観全体を視野に入れた世界観は、短期的な経済成長モデルとは異なった思考体系です。[注13]

小規模経済プロジェクトの実践・普及・政策提言班では、長期変化班と民族・社会調査班の研究成果を活かして、持続可能な食料生産について、在来知の重要性を強調した環境教育ワークショップや実習授業などを行いました。特

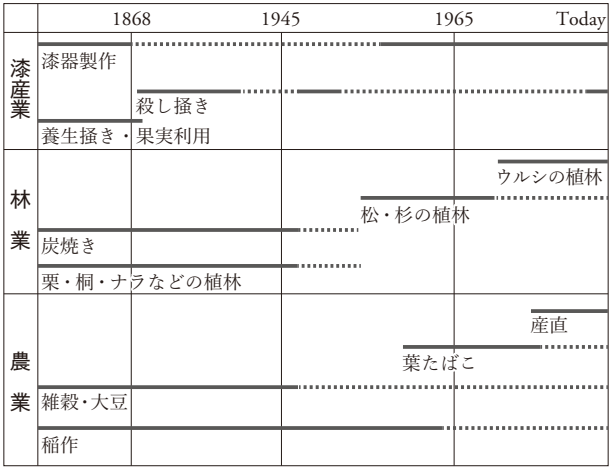


図8　浄法寺における生業の変遷

に農業については、化学肥料や農薬などの外部資材を多投入する慣行農業の長期持続性に疑問を投げかけ、オルタナティブな農業の科学的・社会的基盤を考えるアグロエコロジーの視点から、環境教育とワークショップ開催を行いました。プロジェクトの最終年度には、「二〇一六年京都アグロエコロジー宣言」を英文と和文の両方で発表しました[注14]。このような研究の延長として、二〇一九年からは住友財団の環境課題研究助成を受けて、アグロエコロジーに関する新しいプロジェクトを立ち上げています[注15]。

まとめ

考古遺跡は、過去と現在をつなぐ文化景観の重要な一部です。先史時代から現代に至る歴史的景観の連続性と変化を検討することによって、過去・現在・未来における地域の食と社会経済システムのレジリエンスにアプローチすることが可能になります。このような研究は、持続可能性の議論における主食の多

注11　真貝・羽生二〇一八、金子二〇一八
注12　伊藤・羽生二〇一八、羽生編二〇一九
注13　羽生・佐々木・福永二〇一八：二六六
注14　小規模経済プロジェクト二〇一六
注15　https://junkohabu.com/agro-e-project-jp/

様性の再評価につながるとともに、地域のレジリエンスにおける森林管理の重要性と生態系の安定性を見直すきっかけにもなります。こうした研究を進めるためには、考古学、生態学、アグロエコロジー、民族学・民俗学を含む学際的な視点が重要です。それと同時に、各地域の在来知を理解・実感するためには、地域の住民や地域研究者との協働による超学際的な研究が不可欠です。[注16]

私は、景観と食農システムに関する日本のデータとこれまでの研究の蓄積は、生態系のレジリエンスと長期持続可能性を検討するにあたって第一級の資料だと思っています。日本考古学は、このような研究に大きく貢献できます。そして、それは、最終的には、いわゆる「成長モデル」を含む単線的な文化進化論の見直しにつながると考えています。

今回のリレートークのテーマは、「海外から見た日本の考古学」でした。今日お話ししたようなアプローチは、「海外から見たさまざまな日本考古学」の一例にすぎませんが、このような視点が、次世代の市民と研究者にとって、日本考古学の面白さとその可能性を考えるきっかけとなれば幸いです。

注16　羽生 二〇一九

Q&A

司会（庄田慎矢）「超学際的」という単語がありましたが、これはどういう意味でしょうか？

A　学際的（interdisciplinary）とは、あくまで研究者の間のコラボレーションで学問の分野を超えていくということですが、超学際的（Trans-disciplinary）というのは研究者だけでなくて、子孫を含むステークホルダー（研究地域や研究対象と何らかのかかわりのある人）と一緒に考えていこうというアプローチです。

北米の場合には他者の文化を研究することが圧倒的に多いので、このアプローチは重要です。特に、ネイティブ・アメリカンの遺跡を発掘調査することについては、部族の人たちのOKがでなければ、それができなくなりつつあります。研究者が上から目線で何を研究したいかということではなく、子孫や地元の人たちが何を知りたいか、ということを前面に出さないと考古学という学問自体が成り立たなくなりつつあるのです。同時に、北米の考古学では演繹的なアプローチをとって理論を前に進めるということが重要視されています。この二つをどう両立させていくのかが、北米考古学のこれからの課題です。日本考古学からの発信が、超学際的な実践と理論的な議論を合わせたかたちで出していければ、世界の考古学、英米の考古学も日本考古学を無視できなくなるだろうと思っています。

そのためには、考古資料の解釈に役立つ民俗データを提示していくことも重要だろうと思いま

す。日本のデータだからこそできるという研究成果を発信していければ、日本考古学の意義が上がるのではないかなと思います。

Q　三内丸山遺跡の人口減少は何が原因だと考えられるのでしょうか。

A　私の仮説としては、三内丸山遺跡で植物質食料への依存が高まった結果、食べ物の多様性が減り、バックアッププランがなくなって、システムのレジリエンスが低下した。そういうときに一つ何かがうまくいかなくなると、急激な人口減少が起こりうると思っています。ただし、この仮説はさらに検証が必要です。

三内丸山遺跡は、ものすごく複雑な遺跡で、時期によって規模・住居址の大きさが変わるんですね。たとえば、住居址数がいちばん多い円筒上層ｄ式、ｅ式の時期は小さな住居址ばかりがたくさんあります。ですから、この時期の三内丸山が、普通の縄文集落だったかというところ自体を考えるべきだと思っています。また、クリ林の仮説にしても、前期についてはクリ林の花粉データはしっかりしているのですが、中期については花粉の保存状態のよいデータがたくさんあるわけではないので、縄文中期全般にわたってずっとクリ林があったかということについても、もう少し考えるべきかなと思います。

今後の研究で重要なのは磨石などの石器からの残存デンプン粒分析のデータや、土器の残存脂質分析といったデータだと思います。ただし、三内丸山遺跡では、低湿地の捨て場水に浸かっていて植物遺体の保存状態がよいのが縄文時代前期に片寄っています。そういったデータの不均質さもあって、解釈が難しいですね。

Q

奈良文化財研究所の馬場基です。私は専門が考古ではなくて文字資料を扱う文献史なのですが、その視点から一つ質問をさせてください。今日のご発表のように考古のデータを積み上げていくのはそのあたりゆるゆるの文献史からするとすごいなと思うのですが、網野史学に代表されるような主に中世以降の海の生業と山の生業のような視点について今日は言及されていなかったので、それについてうかがいたいなと思っています。また、焼畑の問題というのはイノシシの問題と絡んでくると思います。焼畑をやってて、イノシシが来たときに飼育するのか、それとも排除するのかという問題ですね。近世後期になると焼畑の多様性がなくなってそれで飢饉が起こったり。そのあたり、焼畑とイノシシの関係について何か見通し、可能性はありますでしょうか。

もう一つ、今日のお話のなかで食糧生産の弾力性が大事だという話と、生態系と食糧資源、総合的に見ることが大事だと指摘されていると思うんですが、私の勉強している古代史ではストック（貯蔵）というかたちでそれに対応しています。ストックというあり方と、食糧獲得の多様性というあり方の関係について、お考えを聞かせてください。

A

とても大きなテーマにつながる質問をいただきました。まずイノシシと焼畑について、知人でイノシシについて研究している人がいるんですけれども、飼育しているかどうかということについても単純にはわからないそうです。ブタがイノシシに戻ったりということも含めて、「これは飼育していた」ということが単純に言えなくなってきているということです。ご指摘のように、焼畑を含めて環境が変わるとそこへ来る動物が変わります。この前バークレーに来て話をしていた文化人類学者も、野焼きをしたらイノシシが来るという話をしていました。三内丸山遺跡につい

ては、海抜の低い立地であるということも関係していると思いますが、イノシシがほとんど出ていません。雑穀を作る焼畑や、広義の環境管理の中で、その地域で野を焼いたらどういった動物が来るようになるのかということは、各地域のデータを作っている人に聞くと、ある程度は見当がついてくるのかなと思います。

次に、焼畑も近世後期になるとかなり多様性がなくなってくるということについて。網野先生の仕事は大好きなんですけれども、稲作民と非稲作民をはっきり分ける点で、山の民を特殊化しているところがあると思います。私たちがフィールドで民俗調査を行った岩手県北部では、食べ物の多様性はかなり残っています。ストックか多様性か、ではなく、ストックと多様性だ、というのが私たちのニッセイのプロジェクトの結論でした。多様性は大事だけれども、多様性だけでなく貯蔵、さらに貯蔵した食物を交換するとネットワークがセットになっていることが多いので、どちらかということではなく両方ある、というのがシステムバランスを考えるうえでは大事なのだろうと思います。

引用文献

・一戸町教育委員会 二〇一三『御所野遺跡Ⅰ―縄文時代中期の大集落跡』一戸町文化財調査報告書三二

・伊藤由美子・羽生淳子 二〇一八「生業の多様性と漆―歴史生態学からみた二戸市浄法寺地区の漆産業―」『やま・かわ・うみの知をつなぐ―東北における在来知と環境教育の現在』羽生 淳子・佐々木 剛・福永 真弓編 一八九―二〇二頁、東海大学出版部

・金子信博 二〇一八「ヤマを生かす焼き畑―生態学から見た土と森」『やま・かわ・うみの知をつなぐ―東北における在来知と環境教育の現在』羽生淳子・佐々木剛・福永真弓編、一四一―一五九頁、東海大学出版部
・鬼頭宏 二〇一一『２１００年、人口３分の１の日本』メディアファクトリー新書、メディアファクトリー
・小山修三 一九八四『縄文時代―コンピュータ考古学による復元』中公新書 七三三、中央公論社
・小規模経済プロジェクト、二〇一六、京都アグロエコロジー宣言（日本語訳）
https://www.chikyu.ac.jp/fooddiversity/achievements/file/declaration_jp.pdf
・辻誠一郎 二〇一一『縄文時代前・中期の三内丸山集落生体系史』東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要 一〇、三七―五一頁
・辻誠一郎 二〇一八『隙間を生きる―植生史から生態系史へ』辻誠一郎教授退任記念事業実行委員会
・羽生淳子 二〇一六「食の多様性と気候変動―縄文時代前期・中期の事例から―」考古学研究 六三（二）、三八―五〇頁
・羽生淳子 二〇一九「在来知とレジリエンス―持続可能モデルへ転換する」『人と自然の環境学』公益財団法人日本生命財団編、四一―六〇頁、東京大学出版会
・羽生淳子編 二〇一九『漆の木のある景観 岩手県二戸市浄法寺における漆掻きと日々の暮らし』レジリエントな地域社会二、人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト
・羽生淳子・佐々木剛・福永真弓編 二〇一八『やま・かわ・うみの知をつなぐ―東北における在来知と環境教育の現在』東海大学出版部
・真貝理香・羽生淳子 二〇一八「主食の多様性、在来知とレジリエンス―歴史生態学からみた北上山地旧川井村地区の文化景観―」『やま・かわ・うみの知をつなぐ―東北における在来知と環境教育の現在』羽生淳子・佐々木剛・福永真弓編、九九―一四〇頁、東海大学出版部
・Altieri, M. A. 1987. *Agroecology: The Scientific Basis of Alternative Agriculture*. Boulder: Westview Press.
・Balée, W. 2018. Brief Review of Historical Ecology. *Les nouvelles de l'archéologie* 152: 7-10.
https://doi.org/10.4000/nda.4150
・Crema, E.R., Habu, J., Kobayashi, K., and Madella, M. 2016. Summed Probability Distribution of 14C Dates Suggests

Regional Divergences in the Population Dynamics of the Jomon Period in Eastern Japan. *PLOS ONE* 11(4): e0154809. https://doi.org/10.1371/journal.pone.0154809
・ Marquardt, W. H., and Crumley, C. L. 1987. Theoretical Issues in the Analysis of Spatial Patterning. In: Crumley, C. L. and Marquardt, W. H (Eds.)*Regional Dynamics: Burgundian Landscapes in Historical Perspective*. San Diego: Academic Press: 1-18.

図版出典

図1　著者撮影
図2　小山 一九八四に基づいて著者作成
図3　羽生 二〇一六：四三頁
図4　Crema et al. 2016
図5　青森県遺跡地図をもとに著者作成：青森県遺跡地図　https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kyoiku/e-bunka/isekitizu.html
図6　辻誠一郎 二〇一一「縄文時代前・中期の三内丸山集落生態系史」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』一〇：四九頁より、植生部分を模式図化
図7　著者撮影（二〇一九年）
図8　伊藤由美子・羽生淳子 二〇一八「生業の多様性と漆」羽生・佐々木・福永編『やま・かわ・うみの知をつなぐ』一九九頁

第4講

考古学的文学研究のために

マージョリー・バージ　コロラド大学ボルダー校アジア言語文明学部日本語学科 助教授

マージョリー・バージ　Marjorie Burge
一九八六年　アメリカ生まれ
二〇〇八年　ジョージ・ワシントン大学　卒業
二〇一八年　カリフォルニア大学バークレー校博士課程　修了
二〇一九年より　コロラド大学アジア言語文明学科　助教授
専門は三国時代朝鮮半島と古代日本の文字文化

著者紹介

日本語だけでなく韓国語も堪能なバージさん。二〇一六年に彼女が奈文研に外国人研究員として滞在されていた時には、滋賀に小旅行をご一緒する機会があり、車中でさまざまなことをお話しすることができました。話題が平城宮の発掘調査に及んだ時に、平城宮大極殿をめぐる歴史的事項を、年代順に、具体的な年号つきですらすらと誦じてお話しされたのが、衝撃的ですらあり、発掘者たる自分の浅学を恥じたものでした。バージさんの専門は文学ですが、考古資料・歴史資料を駆使して研究するという学際的な視野はとてもユニークで、海外にこのような研究をしている人がいるのだということを日本の方々にも是非知っていただきたいと思い、お声がけしました。

奈文研には、二〇一六年、博士論文の研究に際していろいろお世話になりましたが、今回の庄田先生の企画で講演までさせていただくようになるとは思っていませんでした。このような機会をいただき誠に有難く思います。さらに、大学院で指導してくださった羽生先生とともに発表できることは、不肖の身ではありますが嬉しく思っております。

なぜ、上代文学を考古学的に考えるか

私は今回のリレートークの講演者のなかでは、唯一、考古学者ではありません。研究分野は、文学です。大学院では文学を専攻しましたが、研究ではいろいろな分野に触れなければならず、言語学・考古学・歴史学などの方法論や理論なども使っていますが、特に考古学的に文学を研究しています。それはどういう意味か、なぜ日本の上代文学をそのように考えるようになったのかについて、お話ししたいと思います。

考古学的に「上代文学」を考える理由は三つです。①文学分野が依拠する伝統的な資料（テキスト）は、私が知りたい「文字生活」を伝えることができないことと、②文学の研究方法は古代の資料にふさわしくない場合もあること、③日本では考古学的発掘調査で出土した資料が多いため、日本の古代の研究者は考古学資料を無視できない、ということです。

さらに、戦後の日本考古学の発達は素晴らしく、データが山ほどあります。他分野の研究者も考古学の

成果を少しは探求する義務があると思います。こうしたデータを通じて、自分の研究対象を考えると、それまでとは異なる印象が浮かんできますし、その資料が生まれた世界がどのように具体化されてくるかを考えてみる必要性がでてきます。

歴史学者はかなり前からこうしたことをやっていると思いますが、文学研究者で利用している方はまだ多くないようです。文学資料、特に「本」はそれで完結したものとして扱うことが多く、その資料の中の世界に焦点を当て、その周辺について考えるとしても作者に限られることが多いと思います。しかし、本は、作者一人だけで生産するものではありません。作者を取り巻く世界によって生まれるものです。私たちの世界からかけ離れた世界で生まれた本を、私たちがどう受け取るべきかを考えるとき、考古学的データは重要です。

私の研究における重要な問いかけは、「文」はどんな生活の中で生まれ、文字生活において、どのように流行るかということです。このような疑問は、考古学的に考えなければ解くことができないと思っております。

研究の目的

もう少し具体的にお話しします。本日は、私の研究方法や教育活動が考古学とどう関係するかを説明し、どのように考古学的データを使おうとしているかについて述べます。次に、日本の考古学は特に学問分野

の境界を超えるポテンシャルがあるため、特に英語圏の「日本学」研究者は、ある程度考古学的データを知る必要があるということを述べます。

人類学的にいうと、「文」は人の活動の一つであり、生活の中で特別な意味がある活動の一つであるといえるでしょう。文学の分野では、「文」がひとりでに生じ、独立に存在すると考えることがありますが、「人」との関係を軽視しすぎる見方であると思います。テキストだけ見る現代からは、「文」をそのように受け取るのは簡単でしょうが、考古学的データがたくさんある日本の場合、文と生活の関係を無視することはできません。現存するテキストが少ない場合は、特に文を「文字生活」の観点から読みとる必要があります。

大学院で研究したいと思っていたのは、七、八世紀の日本文学への渡来人のインパクトはどうであったかということでした。しかし、資料があまりに少なく、また系統や起源などは文書からではわかりませんので、すぐに不可能なアプローチであることを知りました。例をあげると、『万葉集』で渡来人としてのアイデンティティに関する歌といえるのは、一首だけです。

辛人之 衣染云 紫之 情尓染而 所念鴨

（からひとの　ころもをそむといふ　むらさきの　こころにしみて　おもほゆるかも）

これは、『万葉集』巻四に麻田連陽春（あさだのむらじやす）の作品としてでてきます。『万葉集』で「からひと」という表現が出てくるのはこれしかありません。

「からひとの衣をそむという紫の」までは、ただの「序」として機能するというよりも、作家自身にとって意味がある序といえるでしょう。これは、上京する大伴旅人にむけた歌であり、自分の心を表すために「から人」という表現するのは、自分がから人であるからに違いないと思われます。

『万葉集』に見る「からひと」

この麻田連は、答本春初（とうほんしゅんしょ）の息子であったことは明確です。白村江の戦いから退却するヤマト水軍とともに日本に渡ってきた、百済の「達率」という位を持っていた人であり、『日本書紀』では天智四年（六六五）に天皇の命令で城を造りに長門国へ遣わされています。その息子である答本陽春は、『続日本紀』によると、七二四年に官位を受け、聖武天皇から麻田連という姓も与えられます。そして、七二九年に大宰府へ遣わされ、大伴旅人の下で活躍した筑紫歌壇の一人といえるかもしれません。『万葉集』には四首しか残っていませんが、『懐風藻』に漢詩が一首あるので、当時文化的に活躍していた人といえるでしょう。

ただし、この歌とこの作者は特別です。他に渡来人作家が少数いるといっても、その作品を見れば目立つところはほとんどなく、渡来人系ではない作家の歌と見分けることができる特徴はありません。八世紀になると、人の系統や祖先の起源などは明らかでなくなり、『新撰姓氏録』では、ある氏が政治的な意図により系統を変えたりすることが見受けられます。また、氏という概念も必ずしも血縁によるものではなかったので、「この人は渡来人系である、この人は渡来人系ではない」ということも判断が難しいわけです。個人の作家レベルで「渡来人」のインパクトを見ることは容易ではありません。

そこで、七世紀、八世紀の渡来人の文化活動について興味があったので、出土文字資料を調べることにしました。その理由は、日本考古学の魅力の一つでもあるのですが、このような問題を個人レベルではなく文化レベルで考えることができるためです。完全なテキストや個人の作者を考える文学分野と違い、考

古学では観点が幅広く、人を眺める視点も違うので、私の基本的な研究手法を考え直す機会になりました。「日本の七世紀、八世紀の文学に渡来人はどんなインパクトを与えたか」という疑問から離れ、「日本の七世紀、八世紀の文字文化において渡来人の活動にはどのような重要性があったか」を考えるようになったのです。微妙な違いであるかもしれませんが、伝存するテキストから焦点を外すことができ、「文」を「文化」の観点から見直せば、個人が作るテキストより「文」が生じる環境や人間集団の関係を考慮することができます。「文化」や「生活」としての「文」、いわゆる「文字文化」を研究しようとすると、やはり「場(Place)」[注1]が重要になります。

場(Place)、百済の出土木簡

文化がある空間に展開されるものであることは、考古学では当たり前のことですが、前述のように、文学ではテキストを孤立したものとして扱うことが多くなっています。しかし、出土遺物を考える際、それを孤立したものとして捉えてしまうと、いろいろな問題が生じます。ですから、博士論文の対象とした木

注1　このPlaceという語は著者独自の用語で、特にSheldon Pollock(2006)の"language of place"からの影響を受けている。ここでは「場」という訳語を充てておく

簡について研究するとき、場を重要視するようになりました。

場を重要視するということは、遺跡や遺構、遺跡の地理・環境や範囲、周辺の関連遺跡などを含む考え方であり、同時代の他地域の遺跡との比較的視点を持つという考古学的なアプローチであるといえます。木簡が、どんな遺跡の、どんな遺構で出土し、どうしてその遺構に埋蔵されるようになったかを中心に、木簡に書かれた文字が、その遺跡に存在した人々にとってどんな存在であったか、その人々の生活の中でどんな役割があったかという問題から考え始めることにしました。文字の意味より文字の文化的・生活的機能を重要視したのです。木簡の文字を見ないということではありませんが、その詳細にこだわる前に、木簡そのものから距離を置き、木簡そのものを生んだ世界を想像しようとしたのです。これは、考古学者の態度、アプローチだと思われます。

このアプローチを、百済の都の木簡を調査したと

図１　百済の木簡出土遺跡

きに用いるようにしました。[注2] 日本と比べれば百済や新羅からの木簡の出土数は多くありません。百済の都である扶余（ふよ）の遺跡から散発的に出土し、出土点数も各遺跡で一点、二点ほどです。扶余の都としての構造も明確ではないので、数点ずつの木簡を解釈しようとすると、遺跡や遺構の環境が重要になりますし、周りの遺跡との関連も考慮しなければなりません。**図1**の地図を見ればわかるように、木簡が出土する遺跡は山城の東側にあり、遺跡の一つひとつに管理機関のような建物遺構があるので、この遺跡群から出土したものが一つの木簡群であり、おそらく官僚の仕事と関係があると考えられます。しかし、日本とは違って遺跡群から木簡が一、二点しか出土しないということは、いろいろな理由はあるかもしれませんが、一つひとつを見ていくと、埋蔵場所が意図的ではないためと考えられます。百済の文字文化では、木簡を捨てる方法として埋めることはなかったと想像されます。そのため、残っている木簡はすべて意図的に残っているものではなく、木簡に書かれている文字を考える際、その地に放棄されるようになったことも考慮に入れなくてはなりません。特に百済、新羅のような遺存資料があまりない場合、考古学的に考える方法しかないかもしれません。一応の一貫性を保つために日本の木簡もこのように見るようになりました。やはり、木簡は、意図的に現代へ残したものではないので、考古学的に扱うべきだと思われます。

注2　百済の木簡については、著者の二〇一九年の論文（Burge 2019）に詳しい

近江京の文字文化

具体的な例として、先日カリフォルニア大学バークレー校で発表した、近江京の文字文化に関する研究についてお話しします。[注3]

近江地域は、私が見てきた朝鮮半島の文字文化と日本古代文字文化の交差が一番はっきり見えるところです。既存の研究では、近江地域は渡来人の影響があったという結論が出されていますが、私は近江京や近江地方の文字文化について次のように考えるようになりました。

①考古学的データを見れば、近江～大津という場は、六六〇年代の一五〇年ほど前から渡来人の定住地であることは明確です。その地域に王朝が遷されても、もともとの住民が消えるわけではありません。住民がいるからこそ遷都した可能性もあると認識しなければなりません。[注4]

②都が五年後に近江から遷った後も、近江地方の遺跡を全体的に見れば、その五年間で場が多く変更されることはなく、もともとの文化がそのまま存続し続けたと考えられます。渡来人の人口は白村江以降増えたようですが、その地域のもとの渡来人コミュニティに統合し定着したと思われます。

③近江の文字文化は、七世紀後半の日本の地方文字文化の代表として扱うことはできず、特定の場の文字文化として考える必要があります。個人的には、七世紀後半では、全国均一の文字文化はなかったと考えなければならないと思いますし、もうちょっと具体的に言いますと、日本全体を代表する「代表的地方文字文化」はこの時代にはなく、各事例はすべてそれぞれの特徴を持った個別のケー

スとして扱う必要があるというのが私の考えです。[注5]

大津宮の所在地を考えると、近江京への遷都の理由は、琵琶湖に沿った地理的有利さだけではなく、地域の人材が豊富だったためでもあったと思われます。そうすると、近江京の文字文化や文字生活は、渡来人によって営まれたものであるに違いありません。そう考えると、近江京の文字文化と他の近江地方の文字文化を明確に区別する必要はなく、二つとも近江国という場で起こった七世紀後半の現象であるといえます。

近江地方の木簡遺跡一覧

近江国の木簡遺跡を地図にすると**図2**のようになります。大津にあるのは二つだけで、そのほかに、近江国の七世紀後半の遺跡は琵琶湖の東方、特に現在の野洲市に多くあります。この地域は『日本書紀』によると、天智天皇の時代に百済の難民が多く定着したところです。ご存知のように、野洲市遺跡群の出土木簡は、以前から渡来人の影響が多く見られるものとして注目されてきました。

注3　カリフォルニア大学バークレー校日本研究センターのAspects of Japanese Studies シリーズで発表した「Re-imagiining the Lost Written Cutlure of the Ōmi Capital: Insights from Mokkan」という講演で、Youtubeで視聴可能。 https://www.youtube.com/watch?v=iK9HNftl3VI

注4　近江～大津の渡来人の定着と大津京の遷都との関係については、井上 一九九九、二〇〇四を参照

注5　近江地方の七世紀後半の文字文化については、安土城考古博物館 二〇〇八、大橋 二〇一五を参照

近江京の木簡といえる確実な例はないと言っても過言ではありません。南滋賀遺跡と北大津遺跡出土の木簡二点は近江京の時期に属する可能性はあるといっても、そうでない可能性もあります。そのわずか五年間のものではなくても、近江京は近江・大津という場の瞬間的な存在であり、その地域の基本的な文化・生活に大きな影響はなかったと考えられます。「近江京の文字文化」は、その場の瞬間的現象であり、場の文化と王朝の文化が特別に直接混ざりあう機会でしたが、場の基本は大きく変化しなかったように見えます。

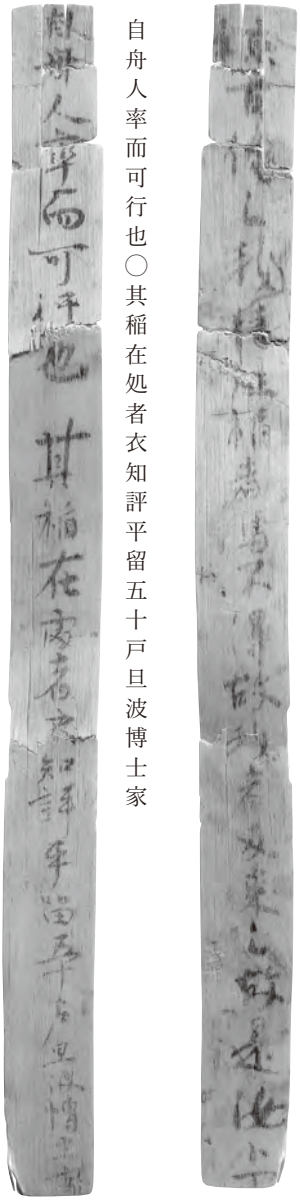
七世紀第4四半期の近江地方の木簡を見ると、中央の例とは大きく異なっていますし、特定の渡来人定住地文化を反映するものであると思われます。特に有名な西河原森ノ内木簡（**図3**）は、とても興味深い書簡ですが、類例は中央からは少なく、代表的なものというより、場の文字文化を反映するものだと思われます。日本の書記史の議論ではこの木簡が重要視され、代表的なものとして扱われることはありますが、「近江」という場の文脈

遺　跡	木簡数
十里（栗東市）	4
西河原宮ノ内（野洲市）	5
西河原森ノ内（野洲市）	16
西河原（野洲市）	6
湯ノ部（野洲市）	1
光相寺（野洲市）	5
北大津（大津市）	1
南滋賀（大津市）	1
合計（8）	39

図2　近江地方の木簡出土遺跡

で見るべきです。[注6]

こういった私の意見は、既存の研究と大きく隔たっているところはないと思います。ただ考古学的観点を持ちつつ近江の木簡を見ていると、七世紀の日本の書記史の議論に近江地方が含まれるものと規定して記述するより、場のそれ以外の書記史を書く必要があると認識しなければなりません。七世紀後半は、さまざまな文字文化があることを認識し、一つの統一したものはなかったと見ます。もちろん、八世紀の地方の文字文化は七世紀と比べれば中央との関係が強いものの、七世紀の場合、場の役割を重視する必要があります。場のそれぞれの文字文化には交差する機会があったと言っても、中央の影響はそれぞれに浸透していなかった時代であると考えます。



椋□傳之我持往稲者馬不得故我者反来之故是汝卜部

自舟人率而可行也○其稲在処者衣知評平留五十戸旦波博士家

図3　西河原森ノ内木簡

注6　西河原森ノ内木簡や西河原遺跡群については、市二〇〇八、畑中二〇〇八、渡辺二〇〇八などを参照

「文学」を「文字文化」と捉えなおす

考古学的視点、特に場を中心的に考えることは、「文学」を考えるうえでも役に立ちます。「文学」という用語はとても現代的で、古代人が考えた「文」ともかなり異なります。また、「文字」が新しく使用され始めた時代においては、とても面倒な概念であると思われます。「文字」を新しいテクノロジーとして扱い始めた際に、芸術的に使用する人も少々いたかもしれませんが、それをどのように便利に使うかはその先の問題でしょう。ここで、考古学的観点が役に立ちます。考古学者は出土遺構・遺物の中で新しいテクノロジーに注目する場合、それをどのように使うようになったか、それによって人々の生活がどういうふうに変わっていくようになったか、という疑問を持って分析するでしょう。

たとえば、文学の授業で『古事記』『日本書紀』『万葉集』などの上代文学を紹介する場合、まず、その時代の文字の使用法などを考えさせ、テキストの構造の意義などを中心に話します。アメリカの大学生はもちろん原文を読めませんが、翻訳本を見ながら「文字を書くことにどんな意味があるか」ということから討論を始めます。文字がどれだけ自分の生活に浸透しているか、文字なしで生活ができるか、などと問いかけると、活発な議論が交わされます。日本古代の伝存資料の内容も重要で、面白くもありますが、新しいテクノロジーの受容過程を考えるうえでも重要なものです。もちろん、さまざまな遺物を見せながら話をします。

このような研究や授業ができるのは、最初に述べたように、日本では考古学的データが多く蓄積されて

いるためです。他の国と比べると、日本の埋蔵文化財の知識レベルは高いといえます。日本では奈文研のような考古学研究機関もたくさんあり、便利な研究ツールもだんだん増えてきています。たとえば、「文化財総覧WebGIS」（図4）は大変便利です。情報をすぐに見つけることができます。そして、考古学データに誰でもアクセスできるようになっているので、考古学者ではなくても考古学データを使わないといけない時代になっていくと思います。たとえば、アメリカで『平家物語』のような軍記物を研究する方が、興味を持っている合戦が起こった地域周辺の関連遺跡をすぐに調べることができますし、平安時代の仏教文化について研究する方も寺院遺跡をすぐ調べることができます。「考古学データについて無知でもよい」という時代はもう終わっています。そして、教室でもこういう

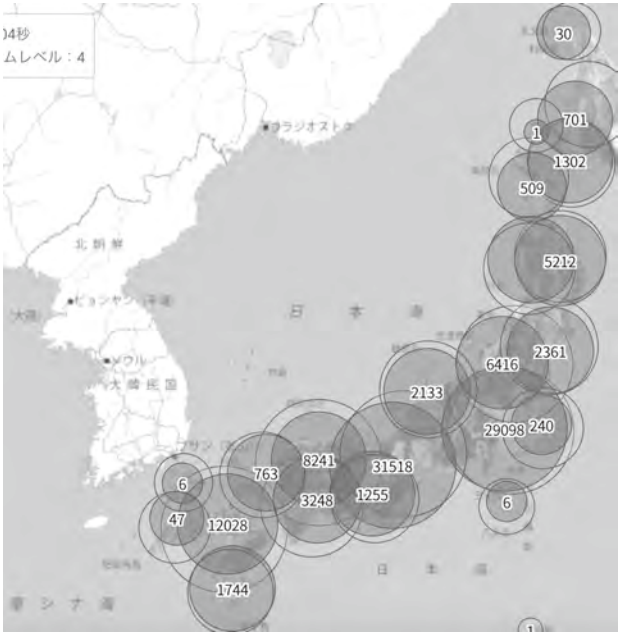


図4　文化財総覧 WebGIS

ツールの使用によってできることがたくさんあります。来年の春学期に院生のセミナーを開くとき、研究ツールに慣れる機会として、文献資料と考古学データを一緒に見るようにしたいと考えています。この機会に、文化財総覧WebGISを作製された皆さんに、特に「ご苦労様でした」「ありがとうございます」とお伝えしたいです。

話が長くなりましたが、私にとって日本の考古学の魅力は、学際的ポテンシャルが幅広いことです。私のように文学研究者であっても考古学との関係は必須ですし、蓄積したデータがよく整理されているため、さまざまな分野の研究者がそのデータを活用して、もっと学際的な研究を生む時代になっていくと信じています。これから一〇年、二〇年たてば、私のような研究者がこうした場で発表するときも、「考古学者じゃなくてすみません」と謝る必要はなくなるのではないでしょうか。

Q&A

Q　近江地域の特殊性を述べられましたが、七世紀第3四半期の文字の形状は比較的全国で統一性が高いように思います。発表の中で「文字文化」という言葉を使われていましたが（英語ではもっと整理された概念なのだろうと思いますが）、文字文化って何なんでしょうか。この言葉の意味

によって、Placeという言葉で表現されていたもので何を見るのか、木簡から何を見るのかが変わってくるのではないでしょうか。石碑にも文字は使われていて、文字文化はある、文字文化って使ってますが、そのあたりはどうお考えですか。

A　英語ではWritten Cultureといい、「文字文化」ですね。個人的には、「文字生活」のほうが適していると思っています。つまり、本のような（特殊な）ものより、日常的な場面で使われる文字（木簡がそういえるかはまた別の問題ですが）について考えるために、他に適切な用語がないので使っています。

Q　となると、Written Cultureにはもっとたくさんの要素があると思いました。たとえば、どういう内容なら文字として書かれるのか、どのようなものに書くか、紙なのか、石なのか、金属なのか。身体の動きとしての文字を書く行為。どういう図像を選ぶのか。

私が見た印象でいうと、西河原森ノ内遺跡の木簡の文字の書き方は、百済の木簡とまったく一緒で、新羅とは異なります。一方で、七世紀の日本の木簡はほぼすべて同じだと思います。筆の入りとか、道具ももっとたくさんあって、こうした考古学的成果も見てもらえると、バージさんの研究にも資すると思います。

ちなみに、日本列島は、中華文明の端っこで、その滓が溜まっているような場所でとても面白く、文明の端っこで何が起こっているのか、文字文化はその象徴的なものだと思っています。逆に、百済・新羅では中華文明の影響が純粋なかたちで入ってきています。文字でいうと、篆書・隷書・楷書が日本古代の木簡ではいちどに、同じときに出現するというカオスなことが起きてい

ます。そういうことも見ていただけると面白いと思います。

Q　新羅と百済の木簡は、書かれた文字の形状や文体から、明確に区別できるのでしょうか。百済から出土した木簡の中に、百済滅亡後のものなどはあるのでしょうか。

A　これまで出土したものの中で、遺跡にはよりますが、百済と新羅の書式があるというより、それぞれ個別の遺跡の書式があると私は思っています。場が重要です。羅州伏岩里という遺跡は百済の遺跡ではありますが、地方にある遺跡としてはただ一つで、それを他の遺跡と比べるのはいろいろ問題があります。

滅亡後の木簡が出土しているのかというのは、非常に面白い質問です。都から出土しているのは、滅亡以前のものであると発掘調査からわかっています。私の知る限り、滅亡後の木簡が都（忠清南道扶余郡）から出土している例はありません。都以外では、弥勒寺趾という全羅北道益山市にある遺跡から二点例がありますが、七世紀後半・八世紀初頭のもので、「百済滅亡後」のものと見るか、「統一新羅」のものと見るかは問題です。今後、「滅亡後」の木簡が発見されたら非常に面白いですね。

参考文献

・安土城考古博物館 二〇〇八『古代地方木簡の世紀―文字資料から見た古代の近江』安土城考古博物館
・市大樹 二〇〇八「西河原木簡群の再検討」『古代地方木簡の世紀―西河原木簡から見えてくるもの』サンライズ
・井上満郎 一九九九『古代日本と渡来人―古代史にみる国際関係』明石書店

・井上満郎 二〇〇四「古代近江の宮都論～渡来人と渡来文化をめぐって～」『近江・大津になぜ都は営まれたのか―大津宮・紫香楽宮・保良宮―』大津歴史博物館
・大橋信弥 二〇一五「近江における文字文化の受容と渡来人」国立歴史民俗博物館研究報告１９４、四一－六三頁
・中主町教育委員会 一九九〇『西河原森ノ内遺跡第１・２次発掘調査報告書Ⅰ』サンライズ
・畑中英二 二〇〇八「西河原遺跡群を掘る」『古代地方木簡の世紀―西河原木簡から見えてくるもの』サンライズ
・林博通 一九九八『古代近江の遺跡』サンライズ
・林博通 二〇〇五『幻の都、大津京を掘る』学生社
・渡辺晃宏 二〇〇八「古代地方木簡の世紀―七世紀の木簡と西河原遺跡群出土木簡」『古代地方木簡の世紀―西河原木簡から見えてくるもの』サンライズ
・Marjorie, B. 2019. Wooden Inscriptions and the Culture of Writing in Sabi Paekche. *Asian Perspectives* 58(1): 47-73.
・Pollock, S. 2006. *The Language of the Gods in the World of Men: Sanskrit, Culture, and Power in Premodern India*. Berkeley: University of California Press.

図版出典

図１　著者作成、©ESRI。この図は著者がEsri®のArcGIS®ソフトウエアで作成したものである。ArcGIS®とArcMap™はEsri®の知的財産であり、ライセンスに基づき使用されている（www.esri.com）。https://www.esrij.com/question/6118/
図２　著者作成、©ESRI。この図は著者がEsri®のArcGIS®ソフトウエアで作成したものである。ArcGIS®とArcMap™はEsri®の知的財産であり、ライセンスに基づき使用されている（www.esri.com）。
図３　安土城考古博物館 二〇〇八
図４　文化財総覧 WebGIS
https://heritagemap.nabunken.go.jp/main?lat=34.68&lng=135.82&zoom=12&bearing=0&pitch=0&ol=1%2C2%2C10%2C11%2C12&bg=slope%3A0.8%2Cpale%3A1&hz=

第5講

『縄文社会、宗教と交換』ヒスイの視点から

イローナ・R・バウシュ　ハイデルベルグ大学 訪問教授

イローナ・R・バウシュ　Ilona R. Bausch

一九六九年　オランダ生まれ
一九九四年　ライデン大学　修了
一九九七年　日本国文部省国費奨学金プログラム　修了（國學院大學修士課程）
二〇〇五年　ダーラム大学博士課程　修了
二〇二三年より　ハイデルベルグ大学　訪問教授
専門は縄文時代の考古学・先史時代の採集民の初期の交易・社会的交流・儀式・世界観

著者紹介

翡翠に魅せられたイローナさんは、大きな瞳がまさに翡翠の大珠を思わせるような方。二〇一六年、彼女が東京大学文化資源学講座に在職時にお会いした際、三四郎池を散歩しながら、いつも忙しそうにされているイローナさん相手に、時間を忘れて他愛のない会話を楽しんだことは、よい思い出です。ご自身の研究を深めるだけでなく、海外からの来訪者を日本のさまざまな遺跡に案内し、その魅力を発信してくださっている彼女は、このリレートークの演者としてまさにふさわしい方と言えるでしょう。これからも、翡翠はもちろん、土偶や装身具などの縄文時代の造形・アート・世界観について、海外に広く発信していっていただけるものと信じています。

はじめに

私が日本の考古学と縄文文化に夢中になったのは、オランダのライデン大学で日本語と日本文化を勉強していたときからです。初来日の際に東京国立博物館の特別展で縄文時代の土偶を見た後、縄文時代の儀式や社会に魅了されました。エラスムス交換プログラムのおかげで、ケンブリッジ大学に一年間留学し、のちにダーラム大学で私が博士論文を執筆する際に指導教授となるジーナ・バーンズ（Gina Barnes）先生の下で東アジアの考古学を勉強することができました。ケンブリッジ大学では、先輩のサイモン・ケイナー（Simon Kaner）さんにもお会いしました。彼は私が縄文文化を研究するのを励まして、山梨県釈迦堂遺跡の縄文土偶にかかわる儀式を修士論文の研究テーマにするように勧めてくれました。バーンズ先生とケイナーさんは親切にも國學院大學の小林達雄教授を紹介してくれました。ライデン大学を卒業した後、私は日本の文部省の奨学金を受け取り、國學院大學の小林先生の下で二年間、縄文時代の考古学を学ぶことができました。

小林先生のおかげで、中部、関東、東北の多くの縄文遺跡を訪れることができ、山梨県の縄文中期集落や秋田県の縄文後期集落の発掘調査にも参加させていただきました。すると、祭祀活動が盛んで長期にわたって安定した集落があることと、貴重なヒスイ製品が出土することに相関関係があることがわかってきたのです。そこで、ヒスイを中心に、縄文人の遠距離交流ネットワーク、社会構造、宇宙観を研究することにしました。それから私は、イギリスのダーラム大学でバーンズ先生の下で博士論文を執筆し、二〇〇五年に博士号を取得しました。この間、シンポジウムやプロジェクトを通じて、多くの日本や海外

の優秀な研究者と知り合い、親しくなりました。

オランダに帰国してからは、最初はライデン大学で、さらには東京大学の文化資源学部の客員教員として、日本の考古学と文化遺産に対する私の愛情を学生たちに伝えることができました。さらに、いくつかの国際的・学際的研究プロジェクトにも参加することができました。たとえば、自然・文化的景観の形成に関するNEOMAPプロジェクト[注1]、近代の骨董品流通ネットワークと博物館コレクションの形成に関するプロジェクト[注2]、先史時代のヒスイの世界的利用に関するプロジェクト[注3]、考古遺産の活用と芸術の振興における地元住民参加の重要性に関するプロジェクト[注4]などがあげられます。

今日は、縄文時代のヒスイ文化研究の観点から、「縄文社会、宗教と交換」という非常に幅広いトピックを取り上げます。縄文時代のヒスイに関する研究が世界中のヒスイ文化に関する現在の国際的な研究に強く関連している理由を示すことを目的としています。また、縄文時代中期の大珠と後期・晩期の小さなビーズを別の観点から検討します。

ヒスイは先史時代から世界中で特に珍重されてきた石材です。斧や装身具、小像などの丁寧に磨かれたヒスイ製品は、世界中の先史時代の人々の交換ネットワーク、社会構造、信仰体系において特別な役割を果たしており、考古学者によって「威信財」または「象徴的な」アイテムとして解釈されています。先史時代のヒスイの価値に関する世界各地の研究では、希少性、非常に硬いこと、耐久性、美しさ、そして緑色が持つ特別な意味といった要素が繰り返し取り上げられています。産地は孤立していて、そこを発見したり、そこに到達したりするのは困難です。また、その硬さゆえに、製品にするのが非常に難しく時間がかかるため、しばしば秘密にされた特別な製造技術が必要でした。こうした特徴も、ヒスイの貴重さと神秘性を高めています。

先史時代のヒスイの用途

ヒスイとは何かについて、はじめに簡単に説明します。ヒスイは非常に硬い変成岩です。モース硬度で六・五～七を測り、優れた耐久性があります。ヒスイには、ジェダイト（硬玉）とネフライト（軟玉）の二種類があります（**図1**）。ネフライトの化学式が$Ca_2(Mg, Fe)_5Si_3O_{22}(OH)_2$であるのに対し、ジェダイトは$Na(Al, Fe)Si_2O_6$で、外見は似ていますが、組成は異なります。特にジェダイトの生成は非常に特殊な地質学的条件に拠っているため、世界的に見てもその産地はきわめて限られています（**図2**）。現代では最も有名な産地はミャンマーとグアテマラにありますが、カナダ、カリブ海の島々、ヨーロッパ、ロシア、パプアニューギニア、日本にも産地があります。ほとん

注1　総合地球環境学研究所、研究代表者：内山純蔵、二〇一二年まで継続
注2　國學院大學、研究代表者：内川隆志、内川編 二〇一六
注3　研究代表者：ラッセ・ソーレンセン Lasse Sorensen
注4　研究代表者：安芸早穂子

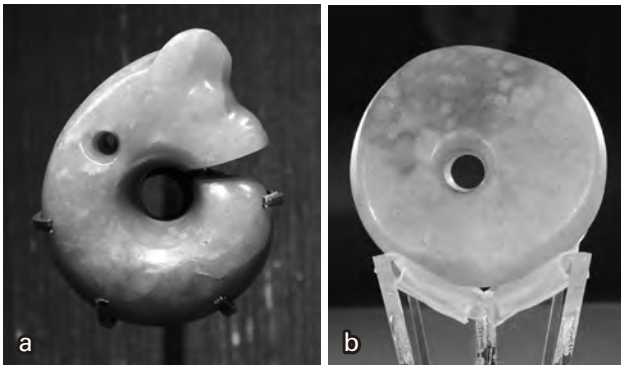
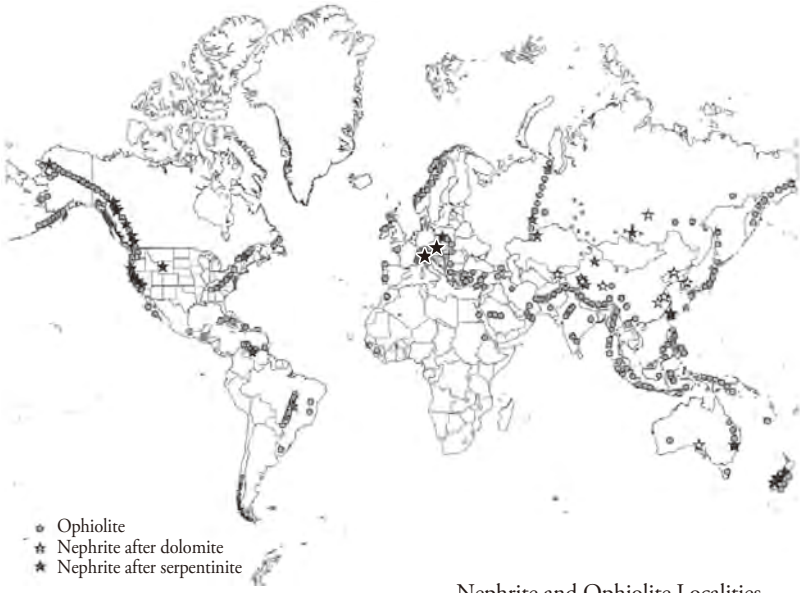


図1　a：ネフライト、中国新石器時代・紅山文化、遼寧省出土、紀元前約3500年。b：ジェダイト、青森県三内丸山遺跡・祭祀的遺構の盛土から出土した縄文中期の翡翠大珠。



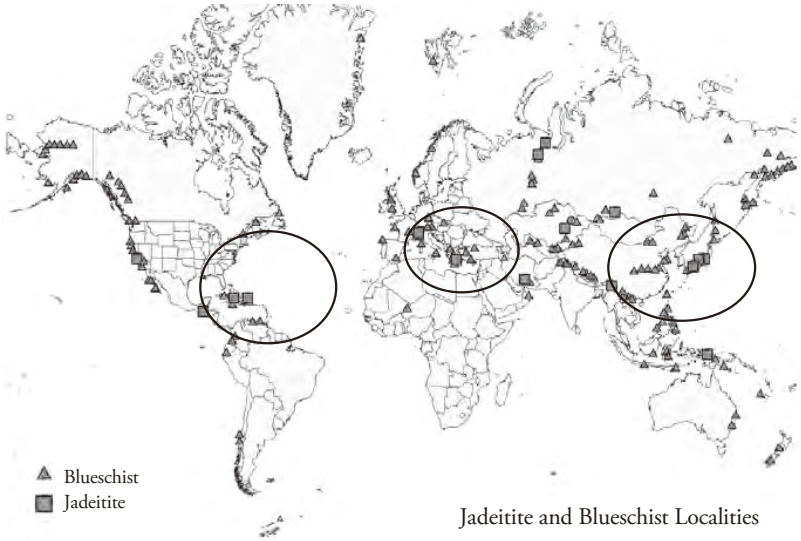


図２　世界各地のネフライト・ジェダイト産地

どの産地が孤立していて、そこへの到達が困難であることが、この物質の象徴的、経済的価値を高めています。ヒスイは長距離の交換ネットワークを形成し、ときには異なる社会的複雑性を持つ社会も繋いできました（図3）。現在知られているすべてのヒスイ産地が先史時代に使われていたわけではなく、またすべての先史時代の産地が現代において再発見されたわけでもありません。ジェダイトは、メソアメリカとカリブ海地域、ヨーロッパの新石器時代、日本では縄文時代やその後の弥生時代後期と古墳時代において重要な文化的役割を果たしました。ネフライトは、新石器時代の初期から中国で非常に重要な役割を果たし、シベリア、カナダ、パプアニューギニア、ニュージーランドでも珍重されました。[注5]

私は、先史時代のヒスイの社会的価値、その意味と使用が時代を通じてどのように変容していくか、そしてそれが経済的、社会的、思想的変化という点で何を意味するのかに興味があります。文化的脈絡の中でのヒスイ製品の意味を理解するためには、そのヒスイ製品が発見されたときの脈絡（たとえば、墓の中、宝物庫、神への供

注5　Barnes 2018, Harlow et al 2014, Harlow et al 2019

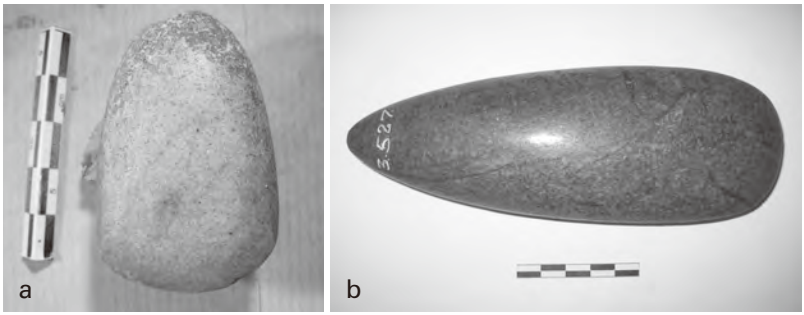


図3　a：エーゲ海のキクラデス諸島原産、ギリシャ出土の磨製石斧。紀元前6300～6100年。b:イタリア･アルプス原産、デンマーク出土の磨製石斧。紀元前4000～3500年。

物として貴重なものが捧げられた特別な場所など）を知ることが重要です。一八世紀以降、ヒスイを含む多くの貴重品は博物館や個人のコレクションに収められましたが、その後に好古家・収集家や考古学者がどのような解釈をしたのかにも関心があります。日本では縄文時代の発掘調査、または江戸時代からの長い研究史のおかげで、縄文社会とヒスイの出土状況について豊富な考古学的データがあります。

オランダにあるシーボルトの考古学コレクション

次に、博物館に収められた縄文文化コレクション全般と、そのなかでも特にジェダイトに注目して、それらとオランダとの繋がりを紹介します。あまり知られていませんが、出島で医師として働いていたフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（Philipp Franz von Siebold. 一七九六～一八六六）は、オランダ王からの依頼で日本文化のコレクションを作り、一八二六年にオランダのライデン市に持ち帰りました。これは、日本国外に現存する日本の考古遺物のコレクションとしては最も古いものです。[注6]

シーボルトは、将軍の医師の助けを借りて、縄文石器と装飾品を中心とした考古学コレクションを購入し、彼の著作『日本』に掲載しました。「考古学」の章では、弟子の伊藤圭佑（一八〇三～一九〇一）が著名な好古家の木内石亭（一七二五～一八〇八）の作品『曲玉問答』に基づいて装飾品の背景情報を記載しました。内川隆志が率いる國學院大學博物館プロジェクトは、二〇一七年にライデン市のシーボルトハウ

スのコレクションを訪れ、シーボルトの考古学コレクションを調査し、二つの装飾品がジェダイトで出来ていることを確認しました。一つは古墳時代の勾玉、もう一つは縄文時代後期の垂飾です。[注7]

国際的なジェダイト研究

先史時代に利用された最も重要なジェダイトの産地は、糸魚川（日本）、イタリアアルプスとエーゲ海（ヨーロッパ）、およびグアテマラ（メソアメリカ）にあります。それらを調査するいくつかの進行中のプロジェクトがあります。ジェダイトの最初の本格的な採掘は、ヨーロッパの紀元前七〇〇〇年紀、日本の紀元前五〇〇〇年紀、メソアメリカとカリブ海の紀元前一〇〇〇年紀に始まり、どこでもすぐに地域間交換ネットワークの一部になりました。

ヒスイの社会的価値に関しての重要な研究目的は、変化の触媒としての可能性を調査することです。つまり、世界中の先史社会における社会経済的ネットワークの拡大、新技術の出現、価値形成と社会的不平等の出現において、さらに、社会政治的およびイデオロギー的変化の加速において、ヒスイ採取が果たし

注6　バウシュ二〇一六
注7　内川編二〇一八

た潜在的役割を考察します。

新石器時代のヨーロッパでは、ヒスイの使用は磨製斧に限られていました。プロジェクト・ジェイド（"Projet Jade"）は、ピエール・ペトルキン（Pierre Pétrequin）とアンヌ＝マリー・ペトルキン（Anne-Marie Pétrequin）を中心とする国際研究チームで、先史時代のヨーロッパのヒスイ使用に関する研究に貢献し、イタリアアルプスで紀元前五二〇〇年から使われていたヒスイ採取場（モンヴィソとモンベーグア）の特定に成功しました（図4）[注8]。このプロジェクトは、大西洋から黒海、そしてポルトガルからデンマークに至るまでの、巨大な長距離ネットワークを明らかにしました。一万四〇〇〇個の磨製ヒスイ斧には、使用や修理の痕跡がある小型の斧と、外観が非常に目立ち（長さ一三・五～四六）、精巧に磨かれた長刃斧一八〇〇個がありました。多くの場合、出土状態は不明ですが、長斧は超自然的な力を畏れて特別に埋納された状態で発見されることが多く、湿地や岩陰・洞窟の入り口のような境界域から出土することが多いため、信仰にかかわる供え物だった可能性が高いと考えられています。磨製ヒスイ斧はフランスで最も密に分布しており、特に紀元前五〇〇〇年にはブルターニュのモルビアン地方とパリ盆地に大量の磨製ヒスイ斧が埋蔵されました。この地域では、宗教的エリートが大量の斧を墳丘墓の中に埋めるという階層的な社会があり、カルナックの石造物やドルメンに刻まれた斧のイメージは、彼らの観念的な力を象徴していました（図5）。

図4　新石器時代のヨーロッパの広域に分布したヒスイの原産地となったイタリアアルプス

二〇一九年以来、私もメンバーである、ラッセ・ソーレンセン（デンマーク国立博物館）が主導する学際的プロジェクト「国際ヒスイ文化ネットワーク」は、ヨーロッパ、カリブ海、日本における先史時代のヒスイの産地、鉱物学、分布、社会的価値を調査しています。[注9] 最近始まったプロジェクト・ジェイドの第二フェーズ[注10]では、ネフライトとジェダイトの露頭が見られるいくつかの産地を特定しました。ソーレンセンを含むチームは最近、エーゲ海のキクラデス諸島の産地を探索して、シロス島のヒスイ産地の跡を発見しました。キクラデス産のジェダイトから作られた磨製斧は、アルプスのものとは見た目が異なります。さまざまなタイプがあり、あまり磨かれておらず、実際の使用による損傷が見られます。近年では、エーゲ海やアナトリアの遺跡で紀元前六三〇〇～六一〇〇年頃と推定される層から、キクラデス産のヒスイ斧が次々と発見されています。これは、東地中海地域でヒスイが利用された最古の証拠であり、西アナトリアでの最初の農民と同時期です。

注8　Pétrequin et al 2012, Pétrequin et al 2017
注9　https://pure.kb.dk/en/projects/the-international-network-on-jade-cultures
注10　Pétrequin et al. 2017

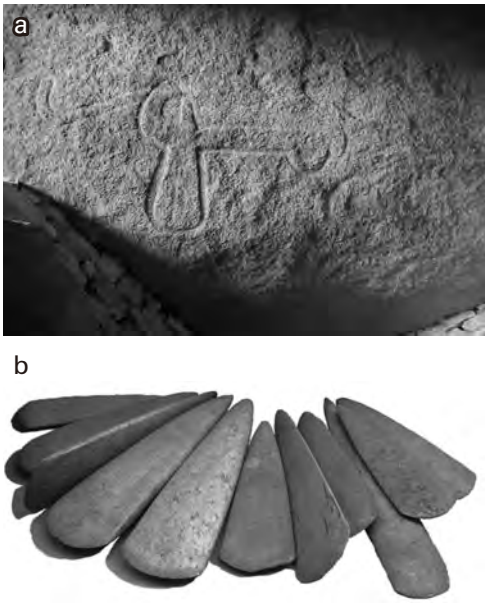


図5　a：観念的な力を象徴する石斧のイメージ、b：墳丘墓に大量埋納された石斧副葬品。

このことは、エーゲ海のキクラデス諸島のヒスイ交換ネットワークは、規模が小さいながらも、アルプスのヒスイ交換ネットワークより一〇〇〇年以上前の紀元前七〇〇〇年に始まったことを意味します。[注11]

民俗学的資料

ニュージーランドのマオリ族にとって、「ポウナム（*Pounamu* greenstone）」（ネフライトとボーエナイト）[注12]は最も貴重で神聖な石材です。生命力と精霊が宿ると信じられ、土地とつながり、祖先とみなされるタオンガの宝物です。すべての産地は南島にあり、一つの部族によって管理されています。マオリ神話では、ポウナムとその起源が重要な役割を担っています。グリーンストーンは、磨き上げられた斧（*Toki*トキなど）や木を切る道具、カヌーや木工の道具、戦いのための武器（*Mere*メレ）、イヤハンガー「*Kuru*クル」やお守りペンダント「*Tiki*ティキ」などの装飾品に使われます（**図6**）。メレと一部のトキは、首長の威信の象徴として首長が携帯し、これらは神聖な部族の家宝であり、公的儀式（主に冠婚葬祭）で飾られ、重要な外交条約の締結や戦争の終結のために贈られることもあります。また、歴代の「所有者」の名声や行いがその力を増し、民族の歴史が刻まれています。「ヘイティキ」などのよく知られた擬人化されたペンダントは、特に女性が使用するもので、子宝と安産のお守りです。[注13]

縄文社会の中のヒスイ利用と社会的価値観

縄文のような狩猟採集社会では、自給自足、社会的、精神的領域が密接に絡み合っていました。小林達雄などの日本の学者の研究によると、縄文のコミュニティには独自の領域とアイデンティティがありましたが、他のグループと協力して、土偶祭祀などの多くの習慣を共有していました。[注14] 特定の産地で調達できる黒曜石やヒスイなどの材料と製品の流通に関する研究は、黒曜石やヒスイなどを交換するための長距離交易ネットワークがあったことを明らかにしました。縄文人は、食べ物、情報、結婚相手も交換していた可能性があります。ジェダイトで作られた装身具は縄文前期以降に登場し、最も古い遺物は約六〇〇〇年前に年代付けられます。ヒスイの装身具はしばしば埋葬跡や特別な出土状態で見つかります。

図6　a：マオリのポウナム、b：ポウナムの装着例

注11　Sørensen et al.2017; Schwall et al.2020
注12　Keane 2006によれば、マオリ族は四種類のポウナムを認識している。そのうちの三つはネフライトだが、四つめはボーエナイト、半透明の蛇紋岩の一種である。
注13　Best 1912; Keane 2006; Ellis 2016
注14　小林 一九九六、Kobayashi 2004

縄文時代におけるヒスイ

日本にはジェダイトやネフライトの産地がいくつかありますが、藁科哲男の研究によれば、縄文ヒスイの多くは糸魚川産です。[注15] 青海、小滝などの産地は高山地帯にありますが、浸食されたヒスイは海まで運ばれ、「ヒスイ海岸」では自然に磨かれたヒスイが採取できます。近くの白馬にもネフライトの産地があります。新潟県糸魚川市大角地遺跡からヒスイ製ハンマーストーンが発見されたように、ヒスイは少なくとも縄文時代前期の約七〇〇〇年前以来、縄文文化の狩猟採集民によって利用され、最古の装飾品は、六〇〇〇年前の富山県呉羽町小竹貝塚の未完成ペンダントでした。[注16] 最初の完成品は、五五〇〇年前、産地から一五〇キロメートル近く離れた山梨県大泉村天神遺跡の縄文前期集落の墓地で発見されました。しかし、安定した生産集落が出現し、流通が拡大し、長距離の交流ネットワークが広がっていくのは、縄文中期以降です。縄文晩期までにその製品は北海道から琉球列島まで、列島全体に広がりました。富山県朝日町境A遺跡や新潟県糸魚川市長者ヶ原・寺地遺跡などは、縄文時代にその採取と加工に従事していた磨製石斧やヒスイ製装飾品の製作集落でした（**図7**）。

これらの村では、研磨された斧を生産する長い伝統もありました。飯塚義之はHH-XRF法（ハンドヘルド蛍光X線分析装置）の完全非破壊化学分析によって、縄文時代の磨製石斧および石製装身具の石材研究を行い、それらがヒスイ製かどうかの確認を行いました。その結果、蛇紋岩製と推定されていた磨製石斧の多くが実はネフライト製だったと明らかになったのはとても興味深いです。[注17]

ヒスイは主に穴の開いた製品に使用されることから「装飾品」と解釈され、墓の中から頻繁に発見されます。このような埋葬例は、通常、社会の指導的人物、しばしば男性と想定される人物が身につける神聖な権威の象徴として解釈され、さまざまな研究が行われてきました。性別に関しては、多くの場合、ヒスイの垂飾を身に着けることは男性の権威と結びつけて考えられてきました[注18]。しかし、人骨に伴って見つかったヒスイ、あるいはグリーンストーンの垂飾が出土した事例はすべて後期前半の四つ

注15　藁科 一九九五 https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-07831006/; https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-04610244/

注16　Miyajima 2017

注17　飯塚 二〇一七、飯塚・小野 二〇二〇、飯塚・杉野 二〇二〇

注18　栗島 二〇一五

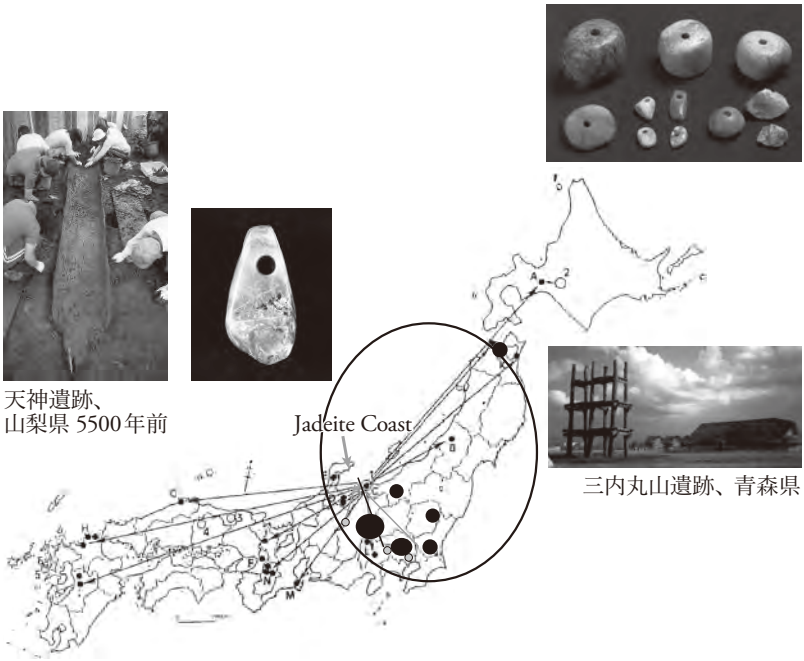


図7　縄文時代のヒスイ交易ネットワーク

だけで、しかも男性（北海道礼文島の船泊遺跡・静岡県の蜆塚貝塚）と女性（北海道礼文の船泊遺跡・福岡県の山鹿貝塚）の両方に伴っていました。[注19] これらの人物はいずれも、特別な精神力と指導力を発揮して、地域社会で重要な役割を担っていたと思われます。

私自身の博士課程の研究では、北陸、中部、関東地方における縄文ヒスイの社会的・象徴的価値に焦点を当てて、それ以来、この研究を発展させてきました。[注20]

縄文前期から後期初頭まで、ヒスイの遺物はすべてユニークでその大きさが際立っているため、「大珠」と呼ばれています。そのスタイルには地域的な多様性が見えます。小林達雄や栗島義明は、おそらく大型のヒスイ製垂飾は個人的に所有されたのではなく、コミュニティ全体を代表して一人の「管理人」（司祭）によって保管されていたのではないかと考えています。[注21] ヒスイ大珠は通常、墓から見つかるとよく言われていますが、これは必ずしも正しくはありません。ここでも地域的な習慣の多様性が見られます。

博士課程での研究で、私は次のことを発見しました。ヒスイ海岸との良好な関係によって多くのヒスイを獲得した中部高地では、実際に墓から多く見つかっています。しかし、関東平野では、ヒスイの垂飾は通常、空き家となった竪穴住居の中や居住地内に散らばって見つかっています。[注22]

ヒスイが最も多く見つかった集落の場合、出土状態はまた異なります。青森の三内丸山遺跡では、ヒスイが墓壙から見つかることはめったにありませんが、ほとんどのヒスイは、その地で行われた特別な儀式に関連した堆積物の中から見つかりました。祭祀関連の盛り土の二つの場所で、日常生活にかかわるものも、ヒスイや装身具、土偶やミニチュア土器なども一緒に出土しました。[注23] しかし、縄文中期の間に共通して見られる特徴の一つは、墓地を含む儀式の場所が村に密接に統合され、日常生活の一部になっていたと

いうことです。ニュージーランドのマオリ族のネフライトに関する社会的価値観に照らして考えると、コミュニティ全体の社会的価値観、文化的物語、記憶が永続性を持つヒスイの垂飾に結びつくように、ヒスイが生者を先祖に繋げるという意味を持っていた可能性があります。ヒスイの埋葬は縄文後期に多くなるので、その頃に社会的、環境的に大きな変化があり、ヒスイを生者に伝えるよりも、あの世に贈り、祖先との関係を強化することが重要になったのではないかと考えられます。ともかく、貴重なヒスイが埋もれて見えなくなったとしても、それらは村の中心、この世とあの世の間に存在し、コミュニティを守り続けていた可能性があります。

さらに、その形状から「大珠」がペンダントや装飾品としてだけ使われていたのではない可能性も探ってみたいと思います。このような貴重なものがさまざまな用途に使われた可能性はゼロではありません。

注19　北海道礼文町教育委員会 一九九九／二〇〇〇、山鹿貝塚調査団 一九七二、浜松市博物館 一九八二
注20　Bausch 2003, 2010, 2019、バウシュ二〇〇四
注21　Kobayashi 2004、栗島 二〇一四
注22　Bausch 2003, 2010、バウシュ二〇〇四
注23　青森県史編さん考古部会 二〇〇二

穴が開いているもの

別の解釈は、「穴」の魔法、つまり空間の欠如に関するものです。縄文中期のヒスイ製品は自動的に装飾品として分類され、いわゆる「大珠」と呼ばれます。しかし、大珠に穴が開けられていることは、自動的に「垂飾」または「装飾品」としてのみ使われたことを意味するのでしょうか。穴とは、空間の欠如であり、別世界への入り口になり得ます（図8）。

「穴」の概念を考えてみましょう。穴は何かの欠如、物質の欠如です。この現象は、数学、物理学、生物学、工学、写真、心理学、哲学、古代宗教、民俗学など、多くの分野で研究されてきました。古代宗教の観点から、穴は恐ろしいものになる可能性があります。たとえば、風景に発生する穴は、未知の世界、「他世界・あの世」への入り口になる可能性があります。先史時代には、洞窟は別の世界への入り口を提供する境界地帯とみなされていました。そこでは、神々への奉納品が入り口に残されていました。上記の新石器時代の

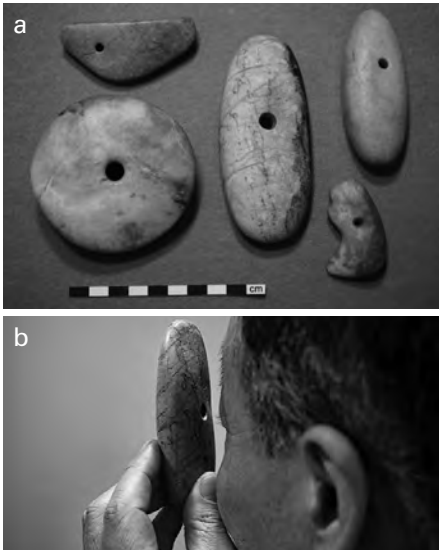


図8　a：縄文時代の大珠（新潟県立歴史博物館所蔵）、b：「穴をのぞく」

ヨーロッパの洞窟に堆積したヒスイの斧はよい例です。また、世界には、自然の穴が開いた岩をあの世への入り口とみなす民間伝承があります。たとえば、コーンウォール州メーン・アン・トール（イギリス）やアントリムの「ホール・ストーン」（アイルランド）などがあります（**図9**）。そのうえ、自然に穴の開いた石は魔法の物体で、世界中でお守りとみなされています。そうした石が持つ守護の力については数え切れないほどの民話があります[注24]。また、歴史的なアイヌの伝統では、ヒスイのペンダントは使われませんが、アイヌの結城幸司（ゆうきこうじ）氏は大珠を見て、このように穴の開いた石は異世界を覗く手段ではないかと考えました。この意味で、大珠の比較的大きな穴は重要かもしれません。縄文中期の大珠は、その穴に紐を通して吊るされていた可能性が高いですが、ほかにも複数の使用法や意味があった可能性もあります。

注24　Varner 2004

図9　あの世への穴：イギリス・コーンウォール州　メーン・アン・トール

シャーマンの儀式道具か

縄文時代後期・晩期には、特に北日本で重要な社会的変化が起こりました。儀式空間や墓地は、村や日常生活空間からは離されるようになりました。いくつかの埋葬には異常なほど多くのヒスイ製副葬品が伴っていました。ヒスイの使われ方も大きく変わり、小さなビーズをいくつも繋いで首飾として着用されるようになりました（図10）。この傾向はしばしば、社会的不平等や社会の階層化が増した証拠と考えられています。[注25] 別の解釈は、シャーマンの墓地です。私は、どちらの解釈も正しいと思います。

一方、ビーズは交換用の商品として機能しやすく、一連のビーズは格調高い個人の装飾品として非常に適しています。また、美しいだけでなく、触覚や聴覚も満足させることができます。世界各地で人々は記憶や癒しのために「数珠」を使っています。[注26]

サラ・ネルソン（Sarah Nelson）が指摘するように、「シャーマン」は、この世とあの世を仲介する男性または女性です。彼らは、トランス状態になることによって霊と交信する特殊な能力（才能または技能）を持っています。音楽と舞も、トランスに到達したり、精霊と接触したりするのに役割を果たすことが多いです。ネルソンは、魔法の能力によって社会的位置や勢力を得たシャーマンの考古学的事例に言及しています。シャーマンは特別な衣装や、霊の注意を引く重要な方法として音を出す楽器のような道具を持っています。[注27]

また、数珠を振るリズミカルな音は霊にとって心地よく、霊や神とのコンタクトに重要な役割を果たすという民俗学・音楽学の研究もあります。[注28] 茂手木潔子（もてぎきよこ）によれば、青森在住の現代のイタコはしばしば、珠

どうしがぶつかり合って音を出す数珠を使います。[注29] 縄文時代後期・晩期に現れた小型のヒスイ珠を繋いだ「首飾」もまた、そのようにして音を出していた可能性はないでしょうか。

しかし、これらはいずれも分析に基づくデータによる裏付けが必要な仮説です。遺物の出土状態の脈絡を理解することと合わせて、使用痕の分析などは、遺物の用途や意味について解釈するための重要なツールとなります。遺物はどれくらいの期間、

注25　中村二〇〇〇など
注26　Dubin 1987
注27　Nelson 2008
注28　Sasamori 1997
注29　Moregi 2021

図 10　縄文後期・晩期のヒスイ製ビーズと首飾
a：青森県風張遺跡土壙墓におけるヒスイ製ビーズ出土状況
b：風張遺跡出土　ヒスイ製ビーズ首飾（a、bともに是川縄文館所蔵）
c：ヒスイ製ビーズ装着想定図（復元画：安芸早穂子）

どれくらいの頻度で使用されたのでしょうか。神々への捧げ物や葬儀の贈り物、あるいは一個人の社会的地位を示す威信財のような、たった一つの目的のために手に入れられたものだったのでしょうか。それとも、何世代にもわたって受け継がれてきた大切な家宝だったのでしょうか。表面や穴の部分に、特定の方法で一貫して使用されたことを示す摩擦の痕跡があるのでしょうか。

結　論

結論として言えるのは、先史時代のヒスイは、それが神聖な石材として普遍的に評価されていたということです。魔法、再生、保護、治癒の特性があると考えられていますが、同時に威信と地位の指標でもあります。ヒスイ製品は魔力を持ち、神々に好まれるものとされ、さらに、扱う人がもともと持っている霊的な資質がヒスイのパワーと価値を高めることになります。先史時代のヒスイと魔法、そしてリーダーシップとの結びつきは非常に強かったように見えます。縄文時代の日本でも、ヒスイの出土は一般的に儀式的な要素の強い遺跡で発見されています。また、土偶のような副葬品や儀式用の構造物が常に共存しています。より階層的な社会では、神や祖先とコミュニケーションをとるために用いられ、エリートのみが携帯・使用でき、埋葬もされました。弥生後期や古墳時代の日本においても、ヒスイ勾玉は神と交信する貴族の支配者と結びつけられ[注30]、その後の時代においては「八尺瓊勾玉」が皇室の「三種の神器」の一つになりました。

最後に私が強調したいのは、縄文時代や日本の考古学が世界の考古学のより広い脈絡において大きな価値を持っている、ということです。たとえば、社会的価値と社会的差別化のプロセスを比較調査し、地域の変動性とアイデンティティを考慮することが重要です。使用痕からヒスイ製品の使用期間や意味について何がわかるでしょうか。家宝や共同体のお守りとして、何世代にもわたって使用されることを意図していたのか、それとも、ある出来事や所有者のために作られ、大量に収集されたものだったのでしょうか。新石器時代のフランスなど他の地域の例が示唆するように、もし、ある地域でヒスイ製品にかかわる習慣の変化が起こったら、それはより大きな経済的、社会的、思想的な変化、または社会的不平等の発生を示しているのかもしれません。私は、縄文時代のヒスイの使用法と社会的価値の研究を継続し、使用痕分析のスキルを学び、応用し、International Network of Jade Culturesプロジェクトに貢献していきたいと思っています。

Q&A

Q（サイモン・ケイナー）穴から覗いているお話のところ、穴の存在論（Ontology of the hole）につ

注30 Barnes 2014 他

いてもう少し教えてください。

A

穴というのは、「ない」という特別な状態なのですね。哲学やさまざまな分野でこの「ない」という状態についての考察があります。たとえば、世界中の神話でも穴に入って違う世界に行く、という話があります。『不思議の国のアリス』もそういう話です。そういう少し恐ろしいところがある状態なのです。

私がインスピレーションを受けたのは、穴に入らなくても、のぞくだけでも、違う世界、あの世を覗き見ることができるというアイディアで、とても面白いと思いました。ものについてたった一つの解釈を与えるというのは私はあまり好きではありません。たとえば、自分の歳や経験によって知識が増えていくということがあります。穴についても、さまざまな意味が付与できると思います。縄文時代の大珠についても、簡単な解釈はできず、それが面白いと思います。

司会（庄田慎矢）　ありがとうございます。豊かな解釈ができるというのが面白い点だと思いました。

参考文献

・青森県史編さん考古部会 二〇〇二「第Ⅳ章人々の暮らし・第5節：祭りと祭祀」、二一五－二二四頁、「第Ⅶ章北方世界と三内丸山遺跡・第三節：中国東北地方の先史文化」、三五九－四〇〇頁。『青森県史・別編・三内丸山遺跡』、青森県史友の会

・飯塚義之 二〇一七「ハンドヘルド蛍光X線分析装置を用いた石器石材分析の試み」『富山市の遺跡物語』第一八号、三六－三九頁

・飯塚義之・小野章太朗 二〇二〇「完全非破壊化学分析による宮城県地域の縄文時代磨製石斧および石製装身具の石材研究」『宮城考古学』第二二号、一三七－一五六頁
・飯塚義之・杉野森敦子 二〇二〇「完全非破壊化学分析による石器石材研究―青森県立郷土館収蔵石製品の石材同定―」『青森県立郷土館研究紀要』第四四号、三五－四〇頁
・内川隆志（編） 二〇一八「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究」I、平成二九年度　科学研究費助成事業　基盤研究B　研究課題番号17H02025、近代博物館形成史研究会、http://hcra.sakura.ne.jp/hvsiebold/2018/05/
・栗島義明 二〇一四「貴石利用から見た縄文社会―ヒスイ・琥珀製大珠が制作された意味」阿部芳郎（編）『縄文の資源利用と社会』雄山閣、八二－九〇頁
・栗島義明 二〇一五「大珠を佩用する人物・The man who wear large bead」『季刊考古学』第一三〇号、八三－八七頁
・小林達雄 一九九六『縄文人の世界』朝日選書五五七、朝日新聞社
・高橋浩二 二〇〇五『ヒスイ製品の流通と交易形態に関する経済考古学的研究』平成15－16年度科学研究助成金、若手研究（B）、研究成果報告書課題番号：15720180、富山大学人文学部
・寺村光晴 一九九五『日本の翡翠：その謎を探る』吉川弘文館
・中村大二〇〇〇「採集狩猟民の副葬行為：縄文文化」、『季刊考古学』第七〇号、一九－二三頁
・バウシュ イローナ二〇〇四「北陸沿岸に見る縄文時代の蛇紋岩製磨製石斧と硬玉製装飾品製作跡」『国際縄文学協会紀要』二、一〇五－一一一頁
・バウシュ イローナ二〇一六「オランダにおけるシーボルトのコレクションの日本考古学遺物について」、平藤喜久子編集責任『國學院大學博物館国際シンポジウム　ワークショップ二〇一五、博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究報告書平成28年2月』國學院大學博物館出版、五三－五六頁
・浜松市博物館 一九八二『蜆塚遺跡発掘調査概報』
・北海道礼文町教育委員会 一九九九／二〇〇〇『礼文町船泊遺跡発掘調査報告書―平成10年度発掘調査の報告』
・山鹿貝塚調査団 一九七二『山鹿貝塚』

- 藁科哲男 一九九五「ヒスイ玉類の原産地を探る」藁科哲男（編）『玉類の原材産地分析から考察する玉類の分布圏の研究－1994年科学研究補助金（一般研究C）研究成果報告書』一八八－一九四頁、京都大学原子炉実験所
- Barnes, G.L. 2014. A hypothesis for Early Kofun rulership. *Japan Review* 27: 3-29.
- Barnes, G.L. 2018. Understanding Chinese jade in a world context. *Journal of British Academy* 6: 1-63.
- Bausch, I.R. 2003. *Middle Jōmon exchange networks in Central Japan: The dynamics of the production and circulation of obsidian, serpentinite, jadeite and amber.* Unpublished PhD dissertation, Durham University.
- Bausch, I.R. 2010. Jade Landscapes: changing social values of jade in Jomon Japan. In: Neomap project (ed) *Studies of Landscape History on East Asian Inland Sea*. Kyoto: Research Institute for Humanity and Nature: 57-68.
- Bausch, I.R. 2019. Adornments at Odake Shell Midden site: Perceptions of Early Jomon Hunter-gatherer Gender and Identities. In: Leslie Wallace L. and Lullo S. (eds.) *The Archaeology of Bodily Adornment: Studies from Central and East Asian Mortuary Contexts*. London and New York: Routledge: 22.
- Best, E. 1912. *The stone implements of the Maori*. Wellington: A.R. Shearer, Government Printer. Copyright Victoria University of Wellingtono Library (2011) https://nzetc.victoria.ac.nz/tm/scholarly/tei-BesSton.html (accessed 10 June 2022)
- Dubin, L.S. 1987. *The History of Beads: from 30.000BC to the Present*. New York: H.N. Abrahams
- Ellis, Ngarino. 2016. Te ao hurihuri o nga taonga tuku iho: the evolving worlds of our ancestral treasures. *Biography* 39(3): 438-460.
- Harlow, G., Sorensen, S.S., Sisson, V.B., and Shi, G. 2014. The geology of jade deposits. *Mineral. Assoc. Can. Short-course Ser.* 44: 305-374.
- Harlow, G., Berman, M., Cardenas Parraga, J., Hertwig, A., Garcia-Casco, A., and Gnivecki, P. 2019. Precolumbian jadeite artefacts from San Salvador Island, Bahamas and comparison with jades of the eastern Caribbean and jadeites of the greater Caribbean. *Journal of Archaeological Science* 26: 1-19.
- Keane, B. 2006. Pounamu- Jade or greenstone. *Te Ara –The Encyclopedia of New Zealand*, New Zealand Ministry for

Culture & Heritage. https://teara.govt.nz/en/pounamu-jade-or-greenstone (accessed 10 June 2022)
- Kobayashi, T. 2004. *Jomon Reflections. Forager life and culture in the prehistoric Japanese archipelago*, Kaner S. and Nakamura O (eds.). Oxford: Oxbow Books.
- Miyajima, H. 2017. Jadeitite from Itoigawa, Niigata prefecture, central Japan. *Journal of Mineralogical and Petrological Sciences* 112: 227-236.
- Motegi, K. 2021. Japanese Sounds: spiriting away and praying for peace. Japan Foundation Online webinar, September 15th 2021, http://kiyoko-motegi.com
- Nelson, S.M. 2008. *Shamanism and the origin of states. Spirit, power and gender in East Asia.* Left Coast Press.
- Pétrequin, P., Cassen, S., Errera, M., Klassen, L., Sheridan, A., and Pétrequin, A-M. 2012. *JADE*. Grandes haches alpines du Néolithique européen. *Ve et IVe millénaires av J.-C. Tomes 1 & 2*. Presses universitaires de Franche-Comté et Centre de Recherche Archéologique de la Vallée de l'Ain, Besançon.
- Pétrequin, P., Gauthier, E., and Pétrequin, A-M (eds.) 2017. *JADE*: *Objets-signes et interprétations des jades alpins dans l'Europe néolitique, Tomes 3 & 4*. Presses universitaires de Franche-Comté & Centre de Recherche archéologique de la Vallée de l'Ain, Besancon.
- Sasamori, T. 1997. Therapeutic rituals performed by Itako (Japanese blind female shamans). *The World of Music* 39 (1): 85-96.
- Schwall, C., Brandl, M., Gluhak, T.M., Milic, B., Betina, L., Sørensen, L., Wolf, D., and Horejs, B. 2020. From near and far: Stone procurement and exchange at Çukuriçi Höyük in Western Anatolia. *Journal of Lithic Studies* vol 7(3): 25. https://doi.org/10.2218/jls/3093
- Sørensen, L., Pétrequin, P., Pétrequin, A-M., Errera, M., Horejs, B., and Herbaut, F. 2017. Les limits sud-orientales des jades Alpins (Grèce et Turquie). In: *JADE: Objets-signes et interprétations des jades alpins dans l'Europe néolitique Tome 3*: 491-520.
- Varner, G.R. 2004. *Menhirs, dolmen and circles of stone: the folklore and magic of Sacred Stone.* New York: Algora Publishing.

図版出典

図1（a） 大英博物館所蔵　Photo by Vassil, CC0, via Wikimedia Commons. https://commons.wikimedia.org/wiki/File:British_Museum_Chinese_jade_Neolithic_period_Hongshan_culture_Coiled_dragon_Pig-dragon_11022019_1393.jpg

図1（b） 三内丸山遺跡センター所蔵　Photo by あおもりくま, CC BY-SA 3.0〈https://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0〉, via Wikimedia Commons. https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Sannai_Maruyama_Jade_Jewel_PB250065.JPG

図2 Harlow & Sorensen 2005 および Harlow & Sorenson 2014 を改変

図3 デンマーク国立博物館所蔵　Lasse Sørensenž 撮影

図4 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Monviso001.jpg

図5（a） Photo by Karsten Wentink, https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Table_des_Marchard_Dolmen_01.JPG CC BY-SA 4.0〈https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0〉, via Wikimedia Commons

図5（b） Photo by Pline, https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Haches_pierre_polie.jpg CC BY-SA 3.0〈http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/〉, via Wikimedia Commons

図6（a） Gifted by Riwai Keioni Te Ahu, Te Ati Awa to Sir George Grey. Currently loaned to the Auckland War Memorial Museum, New Zealand. https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Kataore,_Mere_pounamu_(42cm_x_12cm).jpg Attribution: Sladew, CC BY-SA 3.0〈https://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0〉, via Wikimedia Commons

図6（b） Alexander Turnbull Library, Reference: G-516. https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hinepare.jpg Attribution: Gotfried Lindauer (1839-1926), Public domain, via Wikimedia Common

図7 寺村一九九五、バウシュ二〇〇四、高橋二〇〇五、Bausch 2003, 2010, 2019 をもとに著者作成

図8 新潟県立歴史博物館所蔵　著者撮影

図9 Wellcome Library, London. Wellcome Images images@wellcome.ac.uk http://wellcomeimages.org Holed megalith, Men-an-tol, Penzance, resorted to for cures

図10（a、b） 是川縄文館所蔵

図10（c） 安芸早穂子氏製作　著者提供

第6講

モノからヒトへ
―考古学と地域社会の関係性

アマンダ・ゴメス　北海道大学大学院文学院アイヌ・先住民学研究センター　学術研究員

アマンダ・ゴメス　Amanda Gomes
一九八一年　アメリカ生まれ
二〇〇三年　ディッキンソン大学　卒業
二〇一三年　ハワイ大学修士課程　修了
二〇一六年　ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン修士課程　修了
二〇二四年現在　北海道大学アイヌ・先住民研究センター　学術研究員
専門は考古学と地域社会

著者紹介

日本の漫画やアニメが好きというアマンダさんに初めて会ったのは、二〇一五年ロンドンでのこと。ロンドン大学ＳＯＡＳ研究所で、私がイギリスの研究者らと企画した講演会に参加してくれました。講演会の後、近くの中華料理店で円卓を囲みながらお話しすることができましたが、当時大学院生だった彼女は、日本ではまだ認知度の高い分野とはいえないパブリック・アーケオロジーを研究しているということで、いつか日本に来て研究をされたら面白いだろうにな、と思っていました。そのわずか数年後、北海道大学に籍を移されたとお聞きし、その行動力に敬服しました。札幌で再会した彼女の話を聞き、外国人としての視点から日本がどう見えているのか、ぜひお話を聞きたいと思い、お願いすることになりました。

はじめに

本日のタイトルは、日本におけるパブリック・アーケオロジー研究者のお一人、岡村勝行（おかむらかつゆき）氏の論文タイトルから引用しております。パブリック・アーケオロジーとは、考古学と市民との関係についての研究を意味しており、私の博士課程の研究テーマでもあります。また、このタイトルは、日本考古学に対する私の関心が年々モノからヒトへと移行していることを示しています。本日は、近年の私の関心の発展に沿って話を進めていきたいと思います。

まず、考古学的魅力とエンチャントメント（Enchantment）の関係について考えてみます。このリレートーク第一回で、サイモン・ケイナー先生は英語のワンダー（Wonder）をキーワードに考古学の魅力を説明されました。考古学的魅力はこのシリーズの重要なテーマでもありますので、この話を発展させます。次に、私が最初に日本考古学に魅了された個人的な経験について述べます。続いて、考古学研究を通じた地域に根ざした取組みについて触れ、最後に、現在行っている研究とこれまでの経験に基づいて、北海道における考古学と地域社会の関係について考えてみたいと思います。

考古学的魅惑とエンチャントメント

このリレートークのタイトルを聞いたとき、ヨーク大学のサラ・ペリー（Sara Perry）教授の最近の論文「考古学的記録のエンチャントメント（The Enchantment of the Archaeological Record）」を思い出しました。そのなかでペリー氏は、エンチャントメントの定義を「驚き、満足感、不思議さ、緊張感、存在感、感覚を研ぎ澄ますことで魅了された状態であり、これは世間の中で、また世間に対して行動を起こし、計画および自発性から生み出される」と紹介しています[注1]。

遺跡や文化遺産には人を魅了する力があります。言い換えれば、考古学は誰にでも力を与え、刺激を与えることができます。

また、ペリー氏は同じ論文の中で、考古学や文化遺産に関して、愛着、コミュニティの絆、寛大さ、心遣い、他人への気遣いなど、さまざまなものが魅力（魅了する力）として現れると述べています。この点は、日本におけるパブリック・アーケオロジーや活用の目的である地域のアイデンティティの醸成、文化財の管理や保護に対する意識にも似ています。

私にとっての考古学的な魅力は、日本考古学に関連する分野において、長い期間にわたって専門家と非専門家の関係が構築され、協働が行われてきたことを意味しています。

本日は、エンチャントメントと考古学の関係を探求し、単にエンチャントの定義や識別にとどまらず、エンチャントメントがどのように生成されるか、その結果と影響を調査する意味について述べます。この

ような調査では、研究対象をモノからヒトへ転換する必要があります。そして、人はなぜ、あるいはどのように考古学に魅力を感じるかを知るため、主にインタビューや観察などの質的研究手法を用いましたので、ゆるやかなオートエスノグラフィーの一つとして話を始めたいと思います。

個人的な魅惑「モノからヒトへ」

何かに魅了される瞬間は、偶然に起こります。私の場合、日本考古学に興味を持ったのは自然発生的に、奈良県で起こりました。大学を卒業したばかりの私は、古墳に囲まれている奈良県で外国語指導助手（ＡＬＴ）として採用されました。大学で日本語や芸術、文化を勉強したはずでしたが、古墳を知ったのは奈良に来て初めてでした。外国人として古墳に対する認識が不足しているのは、私一人だけではないとわかっていましたので、古代景観に触れ合うため、外国語指導助手の社会行事委員会のリーダーとして、飛鳥周辺の歴史散策を企画しました。近年、状況は変わってきていますが、欧米の大学において、考古学や日本研究は一様に教えられているわけではありません。また、アメリカでは、エジプトやギリシア、ローマなどの考古学と比較すると、日本考古学がマスコミに取り上げられることは多くありません。これは、

注1　Perry 2019

西洋考古学のある種の偏りを示すものです。このリレートークの参加者は、まさにこうした傾向を是正しようとしているのだと思います。

ちなみに、日本考古学を研究しようと思った契機となった出来事があります。奈良に住んでいたとき、高松塚古墳壁画の劣化とその対応がニュースで報道され、テレビに映し出された美しい壁画に魅了されました。壁画は、他の多くの場所では視覚的にはわからない、埋葬の意味の深層を表しています。そこで、大学院での研究は、装飾古墳が中心になりました。考古学に興味を持ったこの段階は、「モノとヒト」と言えるでしょう。古墳との出会いは、奈良での生活に意味を与え、福岡で研究生として考古学をさらに研究する原動力となったのです。

礼文国際フィールドスクール

モノからヒトへの興味の転換は、自然発生的かつ計画的に進んでいきました。一〇年ほど前、礼文島で開催された考古学プロジェクトに参加しました（図1）。このプロジェクトは現在、北海道大学の礼文国際フィールドスクールに発展しています。このプロジェクトに外国人研究者が参加していたため、主催者は日本考古学の経験があり、英語と日本語を話せる外国人を探していたのです。私は、留学中に福岡で知り合った知人から連絡を受け、自分のスキルや経験を活かして日本での発掘調査に参加できるチャンスだと

思い、飛びつきました。しかしこのときは、地域社会向けの実践に自分自身が深くかかわっていくことになるとは予想していませんでした。

まず、このプロジェクトについて簡単に紹介します。

発掘調査は礼文島北部の礼文町浜中二（はまなかに）遺跡で行われました（**図2**）。遺跡が位置する浜中砂丘では、長年にわたっていくつかの考古学研究が行われており、縄文時代後期までさかのぼって人類が居住していたことが確認されています。このプロジェクトの目的は、北方民族の生業、集落形成、狩猟採集民の民族形成、古気候学などの様相を

図1　北海道礼文島の景観

サイエンスとしての考古学

・北方民族の生業
・集落形成
・狩猟採集民の民族形成
・古気候学

地域に根ざした考古学

・パブリック考古学に基づく教育・普及活動
・先住民考古学に基づくアイヌ民族との協働

図2　礼文国際フィールドスクール　礼文町浜中2遺跡での発掘調査

明らかにすることに加え、パブリック・アーケオロジーに基づく教育・普及活動と先住民考古学に基づくアイヌ民族との協働を含む地域に根ざした考古学の確立を目指すことです。前者は地域の学校教育を通じた普及活動、体験発掘・現場説明会、郷土資料館における発掘成果の展示であり、後者はアイヌ民族の発掘調査・研究への参画です。このフィールドスクールでは、発掘調査や整理作業などの実習を行う一方、礼文の歴史や普及教育活動などの専門的な講義を行いました（図3）。数年後には、美術と考古学、文化人類学などの特別プログラムも実施しています[注2]。

ところで、日本におけるパブリック・アーケオロジーの魅力を語るには、いろいろな方法があります。パブリック・アーケオロジーにはさまざまな側面があるからです。簡単に言えば、地域社会や観光客を対象とした活動でも、私のような外国人にとっては過去を体験したり触れ合う機会となります。このような経験は、日本考古学への尊敬や関心を高めることにつながります。

礼文国際フィールドスクールに参加したことで、日本におけるパブリック・アーキオロジーの実践について独自の理解を深めることができました[注3]。また、考古学に関する異なる見方や考え方ができる

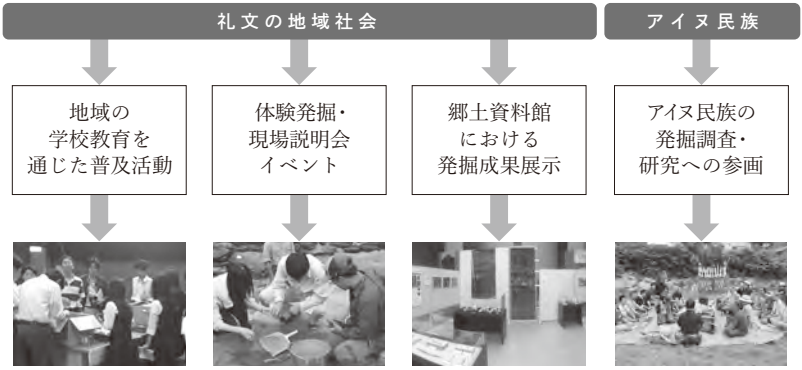


図3　礼文島における教育普及活動

ようになり、考古学を行うための新しい道を開いてくれました。困難な経験や挫折することもありましたが、やりがいがありました。もちろん、「モノ」から「ヒト」とのかかわりもあります。

日本においてパブリック・アーケオロジーが発展することは、考古学研究が地域社会との交流の扉を開くことに意義があると考えています。長年にわたって発掘調査に参加していると、地域社会と考古学との新しい関係を構成しようとするプロジェクト側の努力だけでなく、その努力に対する地域社会の反応も知ることができます。たとえば、プロジェクトでは地域の代表者と協力して、地域の学校の生徒や子どもたちを対象としたさまざまな教育活動を展開し、地域の住民から好意的な反応を得ることができました。礼文島のような遠隔地では、地域の子どもたちに考古学を教える機会を与えることは多くはありません。このプロジェクトは、地域のニーズに応えることで、考古学の利点を示すことができました。そして、礼文の教育者と地域社会の双方に、地域の学校教育を通じた普及活動が受け入れられ、他の活動にも参加する関心が示されました。このことは、地域社会と協力する考古学者にとって、対話と関係構築が発掘道具の移植ごてと同じくらい重要なツールであることを示しています。[注4]

また、地域住民の一員ではない考古学者は、地域社会との対話を通じて、考古学が地域生活の中で果たす役割をより深く認識し、理解することができます。私は、地域社会向けの取組みの有効性を評価するため、地域住民に対するエスノグラフィー研究を通じて、数世代にわたる文化財管理の歴史について理解す

注2　岡田真弓ほか二〇一四
注3　五十嵐・斎藤二〇一五、平川ほか二〇一二など
注4　Gomes 2016

ることができました。

さらに、聞き取り調査では、過去と地域住民のアイデンティティとの関係を探りました。ちなみに、地域住民の中に、埋蔵文化財の活用による地域活性化を期待している人がいることも明らかになりました。地域の考古学的遺産を利用して礼文島をブランド化し、経済効果を期待する取組みは、地域住民の間で共有されています。

こうした活動においては、プロジェクトの活動に対する地域社会の関心だけでなく、躊躇等についても考慮するようにしています。なぜなら、地域住民が主体となった実践がなければ、プロジェクトの限界を地域住民の意識の持ち方や知識不足など地域社会側のせいにしてしまいがちだからです。ただし、過去に対する地域の認識は複雑なニュアンスを持っていることがあります。それを調査することが不可欠であることがわかるようになりました。[注5]

フィールドスクール

礼文国際プロジェクトの共同作業や実験的な性質は、日本の考古学を代表するものではないと感じていました。私の日本での経験は、現地調査に参加したことと、発掘現場を訪れたことがあるだけです。比較的限られています。しかし、名前には何らかの重要な意味があります。このプロジェクトが考古学実習で

はなく、フィールドスクールと呼ばれていることは、日本での発掘調査の実践の教授法および学習の様相をよく示しています。考古学実習は学生に実技を学ぶ機会を提供しますが、外国人学生はあまり参加していないようです。このことは実習の内容というより、言語の障壁と関係するのではないでしょうか。

そして、これらの能力がどのように応用されるかには、文化遺産管理体制の違いが影響しているように感じます。日本の考古学実習は、大学卒業後のためのトレーニングに主眼が置かれているのに対して、海外では研究能力を高めることに重点が置かれていると言われることがあります。フィールドスクールは、日本の考古学実習とは異なり、海外の事例に共通する部分を感じます。[注6]

欧米では、多くの学生が自国外の国に行って、世界中の学生や研究者たちと交流するようになっています。フィールドスクールは、海外留学や地域社会との交流の機会にもなっています。スクールによっては、コミュニティとの協同作業など追加のトレーニングを行っています。フィールドスクールの学生にはさまざまな機会が与えられますが、そこには植民地的な起源や慣習があることも忘れてはなりません。そのため、フィールドスクールに関する学術的な議論の高まりにより、こうした慣行に対処するため、新世代の考古学者に対して考古学や文化財管理に対するより倫理的なアプローチを教育する方法が模索されています。[注7]

礼文国際フィールドスクールでは、現在の考古学のトレーニングとその将来についての議論を深めることの重要性が強調されました。日本では文化財の活用が年々重要視されていますが、日本の学生は、いつ

注5　Hodder 2008
注6　Gomes and Kondo 2020
注7　May et. al 2017

実践的なスキルを獲得するトレーニングを受けるのでしょうか。そのための機会を提供することは、考古学の学部の責任なのでしょうか。

私は、イギリスの博物館学科のコースで実習を受けました。先述のように、海外のさまざまなフィールドスクールには、考古学に関する教育普及の学習も含まれるようになっています。フィールドスクールのモデルは、日本の学生にとっても有益であり、国際的な参加と交流をもたらす可能性があると考えています。

礼文国際フィールドスクールに参加する学生の多くは考古学を専攻しており、日本に興味を持っていました。礼文国際フィールドスクールはこの二つの興味を結びつける唯一の機会でした。また、日本を訪れて考古学をより深く知る機会となった学生もいました。生徒の何人かは、後にボランティアや大学院生として戻ってきましたが、これは「エンチャントメント」が作用していることを示している可能性があります。このフィールドスクールのような機会がもっとあれば、海外の若手研究者がもっと日本の考古学に参加してくれると思います。

考古学と地域社会の関係

考古学研究を脱植民地化し、先住民考古学の発展を支援するプロジェクトの取組みは、私がアイヌ文化に触れ、北海道考古学の歴史を学ぶ初めての機会でもありました[注8]。このプロジェクトでは、モノだけでは

なくヒト、特に歴史的に遺産管理から排除されてきた先住民族の積極的な参加を歓迎しています。また、このフィールドスクールに世界中から先住民考古学者や関連する研究者を招くことで、アイヌ民族を支援し、考古学や遺産管理への参加を促す場が設けられていました。参加者は、先住民族の声を聞き、北海道考古学に対する理解を深めることができました。先住民族の声が尊重され、差別や批判、嫌がらせに晒されることのない環境、セーフスペースを確立することは、植民地時代の慣習の遺産に対処し、その影響を受けた集団に力を与えるための不可欠な一歩です。[注9]

このような進展により、考古学はより包括的で倫理的な学問となります。アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議案、先住民族の権利に関する国際連合宣言の採択、そして北海道大学アイヌ先住民研究センターの創立などの直後に発掘調査に参加した私は、フィールドスクールの担当者が日本考古学の可能性を模索する積極的な取組みを目の当たりにしました。北海道内の多様な団体の声を積極的に取り入れた未来の考古学には、期待できると思います。

現在、北海道大学大学院文学研究科の博士課程に在籍して三年になります。ここでは、自分の研究内容だけでなく、学生時代の経験についてもお話ししたいと思います。計画通りには進まないこともありますが、学生としても個人としても学問的探究に挑戦させてくれる環境に対しとても感謝しています。博士課程では、修士課程で行った研究テーマを広げることに挑戦しています。日本における考古学的実践のニッ

注8　加藤 二〇一五
注9　岡田 二〇一三

チな例である学術的な発掘やパブリック・アーケオロジーに焦点を当てるのではなく、文化財専門家が北海道での活用を通じて地域社会と考古学的遺産との関係をどのように育んだかを把握したいと考えています。そして、考古学の社会的文脈を理解し、活用の取組みを強化するためのレンズを提供することを目的としています。

考古学のエスノグラフィー

私の研究は、アメリカやヨーロッパでは考古学科で行われる可能性がありますが、日本では文化財研究や人類学などの分野に位置づけられるでしょう。

日本の博士課程に入学することを選択した私は、考古学を研究するために、日本考古学とは遠く離れることにしました。しかし、エスノグラフィー的手法を用いて考古学の社会的文脈をさまざまな範囲から検討している研究者がいらっしゃいます。[注10] こ

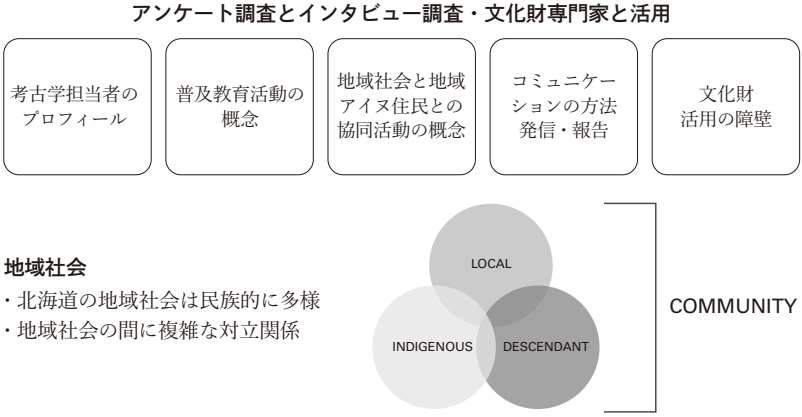


図４　考古学のエスノグラフィー

れらのアプローチは、考古学という学問を理解し、社会からの問いかけに答えたり、社会が抱える問題を解決するための社会的関連性を確保するために、従来の考古学実践に対して内省的なまなざしを向けています。[注11] さらに、この研究には、考古学的魅力の定義と識別にかかわる側面もあるといえるでしょう。[注12] 自分の研究と先行研究との間に、日本考古学においてエスノグラフィーの手法を、パブリック・アーケオロジーや活用などの考古学の実践に広く適用する「エスノグラフィー的転回」を起こせるのではないかと期待しています。

ただし、パンデミックの影響で、自分の研究の多くは間接的な手段で行わざるを得ませんでした。それでも、文化財専門家へのアンケートやZoomでの聞取り調査により、北海道内の活用、参加、協力の傾向を把握することができました（**図4**）。近い将来、地域住民の方々にも連絡をとり、活用や埋蔵文化財についてのより詳細な観点を得たいと考えています。

北海道の地域社会は、アイヌの伝統的な大地の一部であることから、民族的に多様であるといえます。北海道の植民地の歴史と考古学は、考古学的遺産、管理、地域社会の間に複雑な対立関係を生み出しています。では、北海道のコミュニティをどのように定義すればよいのでしょうか。英語ではコミュニティという言葉の前に、**local**や**descendent**という単語を使うことで、このことを認識しています。[注13] コミュニティの人たちと協力して、このような過去と異なる関係を理解し、北海道の文化財の活用を通してどのように認識

注10　多々良二〇一五、坂井・小林二〇一八など
注11　Castañeda and Matthews 2008
注12　Yoshida and Ertl 2016
注13　Smith and Waterton 2012

されているのか、最適な用語を見つけたいと思っています。

考古学の共同体

考古学は、地域によって決定された共同体の形成に貢献することができる一方で、実践の共同体、つまり参加者が参加を通じて知識や技術の修得が可能になる集団を生み出すことができます。日本での大学院生として、考古学に関する研究を通じていくつかのコミュニティに参加しました[注14]。今年、専任教員の石原(いしはら)真衣(まい)さんや、博士研究員の新井(あらい)かおりさんと、国内外のアカデミズムにおける先住民と非先住民の関係性について議論を進めています。

また、礼文国際フィールドスクールで普及活動を担当している岡田(おかだ)真弓(まゆみ)さんとは、日本における遺産教育の研究など、他のプロジェクトでも一緒に仕事をすることができました。さらに、北大キャンパスのさまざまな学部で学ぶ学生や、日本の大学で考古学を学ぶ他の留学生との交流は、とても心強いものでした。

このリレートークシリーズの発表者の何人かは、少なくとも日本で学位を取得しており、私たちはかなりユニークなコミュニティの一員となっています。これまでにも何人かにお話を伺ったことがありますが、今回のシリーズを通じて、他の方々から学ぶことを楽しみにしています。もしかしたら、いつか誰かが私たちのことを研究してくれるかもしれません。

おわりに

本日の発表をまとめると、私と日本考古学との関係は、日本におけるパブリック・アーケオロジーの普及により、「モノ」から「ヒト」へと発展してきました。考古学と地域社会との関係性を研究することは、現在の文化財活用の地域社会に与える影響を評価するためにも、将来の取組みを拡大・進歩させる方法を探るためにも重要だと考えています。地域社会の声を聞くことで、考古学者は自分たちの仕事をより社会的に適切で倫理的なものにする方法を模索することができます。さらに、文化財活用が地域社会にどのような影響を与えるかを理解することで、考古学的な魅力の本質および地域社会にとって過去が「わたしたち」と感じられるようになること、さらに過去の遺産を地域社会が主体となって継承していくことの重要性を認識することができます。

今回のシリーズは、共同学習、再帰性、他者への意識が、考古学とその意義についての理解を深めるのに役立つことを示す好例だと思います。

このような機会を与えていただき、ありがとうございました。

注14　Zorzin 2013

Q&A

Q　アメリカのいろいろな博物館などでパブリック・エンゲージメントのお仕事をされていたと思いますが、そういった経験と日本での経験で大きな違いを感じたところはありますか？

A　私は外国人として日本でパブリック・エンゲージメントの仕事にかかわるのはとても難しいですから、日本での経験が狭いと思います。ですが、私が一〇年間かかわっていた間に、礼文島のプロジェクトでは（パブリック・エンゲージメントの仕事に）大きな発展を経験することになりました。簡単に比較すると、海外では博物館が数十年来、教育や観光などと深くかかわってきましたが、一方、日本遺産のような遺産を資源化する取組みと観光のかかわりはもっと最近の発展のように思います。

　現在では、アメリカでも、日本でも、博物館などの施設にパブリック・エンゲージメントの取組み等を期待しています。しかし、アメリカでは、教育的な活動に代わり、展示や知識の生産に地域社会を参加させる方法をとることが普及しています。来客者がこうした経験をするために博物館に来ます。一方、日本では考古学に関する活用が市民の関心を高めるために行われているように見えます。これらの取組みは、教育と推進の二つに分類されるでしょう。今後、日本でのパブリック・エンゲージメントがどうなっていくのか関心があります。

Q　奈良での経験についてお聞かせいただけますか。

A

奈良での体験は、私にとって宝物でした。私の周りにある歴史的・文化的な環境が好奇心をそそってくれました。飛鳥から電車ですぐのところに住んでいたのはとても幸運でした。近くにある古い史跡の見学を楽しんでおりました。私の興味を知った日本人の同僚は、それを支援してくれました。しかし、日本語で考古学者たちに声をかける自信がありませんでした。大量の情報があるのに、手の届かないところに位置することを意識しました。

そして、日本の古墳に関する英語の本を必死で探しましたが、アマゾンでジーナ・バーンズさんらの本を見つけることしかできませんでした。その本の影響を受けましたが、多くの疑問が残っていました。そのため、日本語を一生懸命に勉強して、古墳を研究する目的で研究生として日本の大学院に入りました。しかし、当時は奈良からかなり離れていました。いつの日かまた奈良を訪れることができれば幸いです。

Q

今後日本でパブリック考古学の取組みが進んでいくなかで、どういったことがなされるとよいと思いますか。

A

大事な質問だと思います。博士課程を始めるときにはパブリック・エンゲージメントが日本ではあまり発展していないと考えていました。しかし、文献を集めるにつれて、日本列島中にさまざまな例があることがわかりました。ですが、海外と比較すると、この取組みについての文献や論文が少ないという状況です。パブリック考古学が学問として発展し、より多くの研究者が積極的に研究するようになることを期待しています。そのうえに、日本の大学の考古学科・考古学研究室ではパブリック考古学がもっと教えられるようになればいいと思います。そして、エスノグ

ラフィーなど、地域社会とつながる方法が大学でも推進されるとよいと思います。最後に、日本考古学が実践と理論を通じて、世界の先住民族考古学の議論にどのように貢献できるかを考えてみたいと思います。いま、世界の先住民考古学の理論と実践は、アングローアメリカン的モデルが強い影響力を持っていますが、日本考古学はそうした状況のなかで十分に代表されていない地域・立場から、新しい視角を提供しうると思っているからです。

引用文献

・五十嵐 聡江・齋藤 友里恵 二〇一五「パブリック・アーケオロジーによる復興支援（特集「等身大の文化資源」の広がり）」『遺跡学研究：日本遺跡学会誌（12）』九七－一〇四頁
・加藤 博文 二〇一五「アイヌ考古学とパブリック考古学（特集 アイヌの考古学）－（アイヌ考古学と近現代）」『季刊考古学（133）』七二－七五頁
・岡田 真弓 二〇一三「遺跡・遺産が伝える先住民族の歴史と文化」『パブリックな存在としての遺跡・遺産、平成24年度 遺跡等マネジメント研究集会（第2回）報告書』、九八－一〇七頁
・岡田 真弓ほか 二〇一四「二〇一三年北海道礼文町浜中2遺跡の発掘調査を利用した学校向け考古学教育普及プログラム」Anthropol.Science.Vol.122（94-97）
・坂井 秀弥・小林 青樹 二〇一八「考古遺産の調査・公開・活用に関する実践的研究」『奈良大学紀要』46号、一三一－一四頁
・多々良 穣 二〇一五「社会還元に向けた遺跡公園の活用：東北地方を中心に（40周年記念号）」『金沢大学考古学紀要（36）』一三九－一五三頁
・平川 ひろみ・川宿田 好見・太郎良 真妃 二〇一二「島県三島村黒島の滑石製石鍋－文化財の記録と博物館活動の一環としての三次元化を兼ねて」『国際文化学部論集』一三（二）一六五－一七七頁
・Castañeda, Q.E., and Matthews, C.N. (Eds.) 2008. *Ethnographic archaeologies : reflections on stakeholders and archaeological*

practices. Lanham, MD: AltaMira Press.
- Gomes, A. 2016. *The Effectiveness of Public Archaeology in Challenging Nationalist Narratives: A case study at Hamanaka 2 Site, Rebun Island, Japan* (Unpublished masters dissertation). London: University College London.
- Gomes, A., and Shiaki Kondo. 2020. Reflections on Ethnographic Methods Training at an Archaeological Field School: A Case Study from Rebun International Field School in Japan. *Journal of the Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University* 15: 49-58.
- Hodder, I. 2008. Multivocality and Social Archaeology. In: J. Habu, C. Fawcett and J. M. Matsunaga (Eds.), *Evaluating Multiple Narratives: Beyond Nationalist, Colonialist, Imperialist Archaeologies.* New York: Springer, 196-212.
- Okamura, K. 2012. In A. Matsuda and K. Okamura (Eds.), *New Perspectives in Global Public Archaeology.* New York: Springer: 77-86.
- Okada, M., Gomes, A., and Hughes, G. 2016. Archaeological Education and Outreach: Initiatives at Hamanaka 2 Site in Hokkaido, Japan. World Archaeological Congress.
- May, S., Marshall, M., Domingo Sanz, I., and Smith, C. 2017. Reflections on the Pedagogy of Archaeological Field Schools within Indigenous Community Archaeology Programmes in Australia. *Public Archaeology*, 16(3-4): 172-190.
- Perry, S. 2019. The Enchantment of the Archaeological Record. *European Journal of Archaeology*, 22(3): 354-371.
- Smith, L., and Waterton, E. 2012. *Heritage, Communities, and Archaeology*. London: Bloomsbury Academic Press.
- Yoshida, Y., and J. Ertl. 2016. Archaeological Practice and Social Movements: Ethnography of Jomon Archaeology and the Public. *Journal for the International Center for Cultural Resource Studies* 2: 47-71.
- Zorzin, N. D. 2013. The political-economy of Japanese archaeology - reflective thoughts on current organisational dynamics. *Japanese Journal of Archaeology.* 1(1): 5-21.

図版出典
写真は全て著者撮影
図2・3はOkada 2016を改変

第7講

縄文貝塚の魅力——西ヨーロッパからの視点

温品 ディアナ　UNIARQ リスボン大学考古学研究センター

温品 ディアナ　Diana Nukushina
一九八九年　ポルトガル生まれ
二〇一〇年　リスボン大学　卒業
二〇一三年　リスボン大学修士課程　修了
二〇二四年　リスボン大学博士課程　在籍
専門は貝塚から見た西ヨーロッパと日本の完新世の狩猟採集文化の比較考古学

著者紹介

完璧な日本語を駆使される温品さんは、ポルトガルに本拠をおいて大西洋沿岸地域の貝塚遺跡の考古学研究を専門にされると同時に、日本の貝塚を比較対象とした視野の広い研究を進められています。温品さんが二〇一七年に岡山大学に短期留学に来られた際に、日本の貝塚研究者らとつれだって、一緒に木更津へ潮干狩りに行ったこと、その後に浜焼きを一緒に食べに行ったことは、よい思い出です。温品さんの講演を、その時の潮干狩りを企画してくださった方々や、一緒に参加された方々も聴講してくださり、オンラインながら嬉しい再会となりました。これからも、大陸の両端を行き来しながら、視野の広い研究と、国際交流を進めていってくださることを期待しています。

はじめに

現在、私はリスボン大学の文学部博士後期課程の大学院生で、貝塚から見た西ヨーロッパと、日本の完新世の狩猟採集文化の比較研究を行っています。この度はポルトガルからオンライン形式で日本の考古学イベントに参加させていただき、大変光栄に思います。

私が初めて日本の考古学に触れたのは、修士課程修了後の二〇一三年に国立歴史民俗博物館で短期滞在の研修を行ったときです。その後、二〇一七年に博士課程の一部として岡山大学に半年間留学しました。当時は、大学、研究機関、博物館、埋蔵文化財センターなどで日本の考古学にかかわっているさまざまな方に出会い、大変お世話になりました。現在は博士論文の作成中ですが、日本からのサポートにいつも感謝しています。

去年（二〇二〇年）三月以降、新型コロナウイルスのパンデミックにより、EUの国から日本への外国人の入国はほぼ不可能となりました。外国籍の学生や研究者の移動が長い間停止されており、先が見えない厳しい状況が続いています。しかし、今回のリレートークを含む日本文化関係のオンライン講演やイベントの増加は、世界各国の日本に興味がある方々にとっては大変有難く、パンデミックがもたらした、おそらく唯一のポジティブなものかと思います。

西ヨーロッパから見た日本考古学

私が住んでいるポルトガルは、ヨーロッパの最西端、イベリア半島に位置しています。日本との関係は、一五四三年に初めてポルトガル人が日本に到来した大航海時代まで遡ります。しかしながら、国は小さく、ポルトガルにおける在留邦人数は、外務省情報によると二〇一九年現在七〇〇人未満です。近年、日本文化・歴史や日本語についての関心が高まっていますが、日本研究機関はなく、アジア研究課程は私が在籍しているリスボン大学で数年前に発足したばかりです。

ポルトガルの考古学研究において、スペイン、フランスや北アフリカとの比較は一般的であり、西アジアの情報もかなり入っていますが、日本を含む東アジアの考古学は教育・研究機関でほとんどアプローチされていません。

この状況は、他の西ヨーロッパの国と異なります。たとえば、留学経験のあるフランスでは、在留邦人は四万人を超えており、日本文化交流機関や日本研究関連組織が設立されています。考古学に関しても、日本の情報がかなり入っています。たとえば、日本考古学に関するフランス語文献が多少あり、博物館で日本の遺物が展示されていることもあります。また、古くから研究者が両国の間を往来しています。有名なフランスの考古学・人類学者アンドレ・ルロア・グーラン（André Leroi-Gourhan）も日本に留学していたということを、フランス留学時に初めて知りました。

同じ西ヨーロッパでも、日本研究が昔から充実している国もあれば、ポルトガルのようにいまだにほと

んど行われていない国もあります。その違いは、各国の研究者がどれだけ日本考古学に目を向けているかにも影響しています。そのため、特にポルトガルのような国では、今後も日本考古学を紹介していくべきだと思います。

完新世狩猟採集民社会と貝塚

前述のように、私の博士論文研究は貝塚を対象としているため、今回は西ヨーロッパ、特に一番親しみのあるポルトガルとフランスの貝塚考古学の視点から、日本の縄文貝塚の魅力についてお話をさせていただきます。

貝塚は世界各地で発見されており、さまざまな時代の遺跡が知られています。西ヨーロッパおよび日本列島では中期・後期完新世初頭、約八二〇〇～三三〇〇年前の狩猟採集文化によって形成された貝塚が数多く知られています。西ヨーロッパでは、貝塚は日本の縄文時代の一部と併行する中石器時代（Mesolithic）、特に中石器時代後期（Late Mesolithic　約八二〇〇～六〇〇〇年前）に多く形成されています。また、日本列島でも貝塚は縄文文化を特徴づける現象の一つです。縄文早期から知られていますが、前期、中期および後期（約七〇〇〇～三三〇〇年前）の遺跡が最も多くなっています。[注1]

注1　鈴木 一九八九、樋泉 一九九九、Habu et al. 2011

両地域での大量の貝塚の形成は、完新世初頭から中期にかけて起こった温暖化、そして海進による豊かな海域環境の形成、貝類や魚類などの水産資源の積極的な利用の開始、中間温帯林の広がり、食料の多様化と増加、人口増加や定住生活の進行などが関係していると考えられています[注2]。貝塚は、貝殻の炭酸カルシウム成分によって土壌が有機質遺物を保護する作用を持つため、西ヨーロッパや日本列島のように酸性土壌が広く分布している地域に形成された場合でも、人骨や鳥獣魚骨、骨角器などが良好な保存状態で出土することが多くなっています。そのため、貝塚は中石器時代および縄文時代の生活・社会のさまざまな面を理解するのに重要です。

西ヨーロッパの中石器時代貝塚と国際的な比較研究

貝塚の国際的な比較研究は、貝塚の科学的な考古学研究が開始された時点から行われています。西ヨーロッパでは一九世紀前半にデンマークで貝塚研究が始まり、後半にはイギリス、アイルランド、フランスやポルトガルでも次々と遺跡が発見されていきました[注3]。日本では、一八七七年にエドワード・モース（Edward Morse）が東京都の大森貝塚を発見し、発掘調査を行っています。モースは、大森貝塚をアメリカやデンマークの貝塚と比較しています。そして、当時のデンマークの貝塚研究の発達や自身のアメリカでの貝塚調査経験により、モースは日本で発見した貝塚の重要性を理解したことがわかります[注4]。

ヨーロッパの研究者の間でも、その頃の日本の貝塚の発見は急速に知られました。たとえば、フランス人考古学者のエミール・カルタイヤック（Émille Cartaillac）が一八八六年に出版した『スペインとポルトガルの先史時代（Les Âges Préhistoriques de l'Espagne et du Portugal）』では、ポルトガルのムージュ地方の巨大貝塚の発見などに注目していますが、ヨーロッパの国と同様に日本にも貝塚が存在することも指摘しています。[注5]

このような長い研究の歴史により、現在、西ヨーロッパの大西洋沿岸で六〇〇か所以上の中石器時代貝塚が知られています（図1）。貝塚は、デンマーク、イギリス、ア

注2　Bailey 1978; Erlandson 2013 など
注3　Gutiérrez-Zugasti et al. 2011
注4　Morse 1877; 1879
注5　Cartailhac 1886

図1　西ヨーロッパ大西洋沿岸における中石器時代貝塚分布

イルランド、フランス北西部、北スペインとポルトガルの岩海岸および河口域で分布密度が特に高く、中石器時代後期のものが一番多くなっています[注6]。日本と違って、遺跡統計やデータベースを公開している国が少ないため、残念ながら正確な中石器時代の貝塚数は不明ですが、デンマークだけでもエルテベーレ時代、つまり中石器時代後期の貝塚は四〇〇か所以上知られています[注7]。また、北スペイン西カンタブリア地方でも、中石器時代貝塚は一三〇か所以上報告されています[注8]。

貝塚は主に開地遺跡が一般的ですが、地域によっては貝層が洞窟や岩陰内で形成されたことも多くなっています（たとえば、スペインのカンタブリア地方）。貝層の規模は大型のものもあれば、小型であまり目立たない貝塚もあります。遺構に関しては、埋葬や炉の検出が一番多く、その数は遺跡によって異なります。遺構が比較的多く残っている場合もあれば、まったく検出されていないこともあります。そして、農耕・牧畜の開始を特徴とする新石器時代前期（Early Neolithic）の貝塚も、西ヨーロッパで確認されていますが、日本の弥生時代と同様に（鈴木 1989）、この時期の遺跡数は比較的少なく、貝層の規模も大きくありません[注9]。

ポルトガル・フランスの貝塚の分布と問題点

ポルトガルの遺跡国立データベース（Portal do Arqueólogo）には、中石器時代後期の貝塚が約三八か所

登録されており、そのほとんどは河口域および海岸域に位置している開地遺跡です。テージョ川とサード川の河口域で形成された貝塚群からは（図2）、あわせて四〇〇体以上の埋葬人骨が見つかっており、古くから国際的に知られています。また、貝塚の規模や形態は多様です。たとえば、テージョ川の貝塚群には厚さ四～五メートルの大規模のマウンド状の貝塚がありますが、サード川の貝塚群の場合は厚さ五〇～八〇センチメート

注6　Gutiérrez-Zugasti et al. 2011
注7　Bailey・Milner 2008
注8　Fano 2018
注9　Gutiérrez-Zugasti et al. 2011

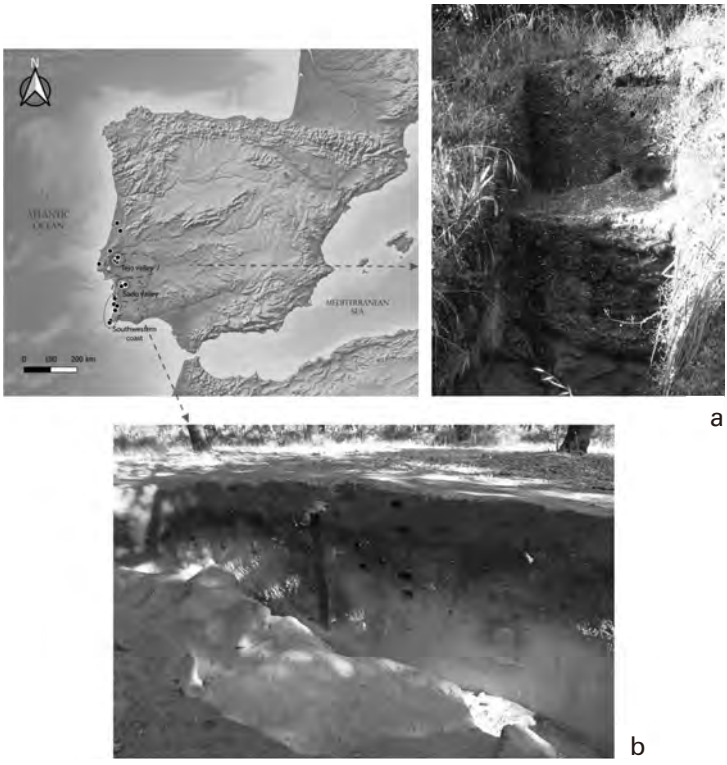


図2　ポルトガル・テージョ川およびサード川河口域の中石器時代貝塚群
a：カベソ・ダ・アモレイラ貝塚、b：ポサス・デ・サンベント貝塚

ル程度の貝層が一般的で[注10]、あまり目立たない貝塚が多くなっています。

一方フランスでは、中石器時代後期の貝塚が六か所知られており、北西部のブルターニュ地方およびペイ・デ・ラ・ロワール地方に分布しています[注11]（**図3**）。これらの貝塚はすべて岩海岸に形成された開地遺跡です。現在残っている貝層の厚さは二〇〜一〇〇センチメートル程度ですが、浸食の影響をかなり受けており、遺跡本来の規模は現状とは大きく異なっていたと思われています。フランスの貝塚の中では、装飾品で飾られた複数の埋葬人骨によって国際的に知られているモルビアン地方のテビエック（Téviec）およびオエディック（Hoëdic）貝塚が有名です[注12]。

ポルトガルとフランスの中石器時代貝塚研究の問題点として、まず残りが悪い貝塚が多いことがあげられます。特に、海辺に位置す

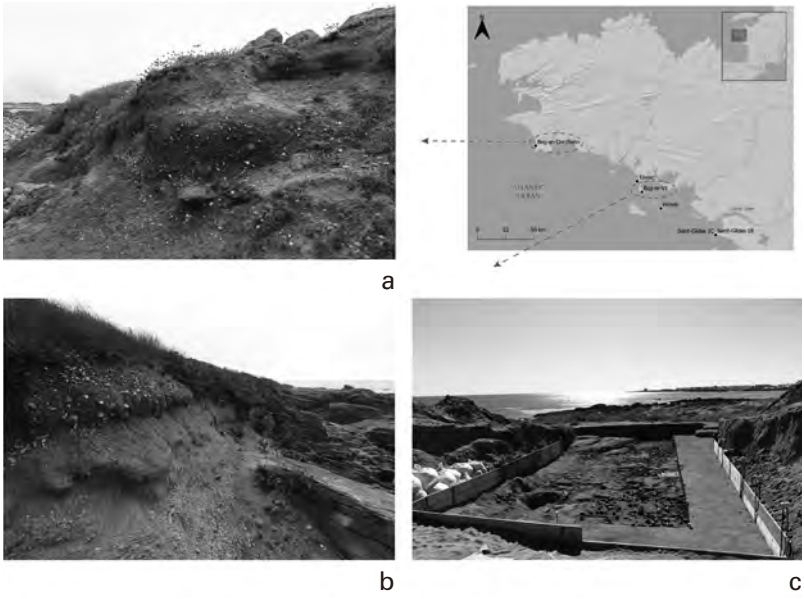


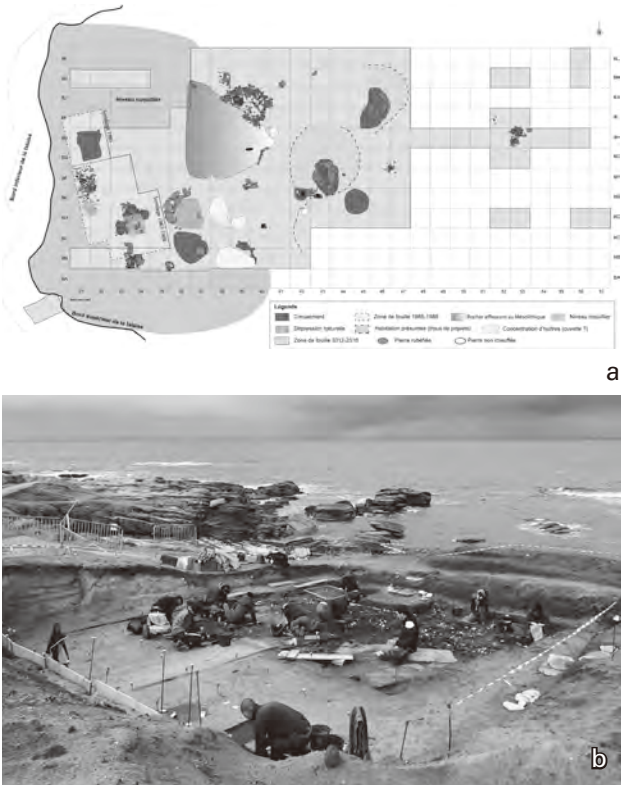
図3　フランス北西部における中石器時代後期の貝塚
a：ベグ・アン・ドルシャン貝塚、b・c：ベグ・エル・ヴィル貝塚

る遺跡は浸食等の強い影響を受けているものが多く、原状を残していない場合が少なくありません。河口域に分布している貝塚も、砂質土層で形成されており、頻繁に攪乱を受けています。また、貝層の違いやその意味がわからないことがあるため、層序の理解が大変困難な場合があります。埋葬以外の遺構に関しても、他の中石器時代の遺跡と同様、比較的シンプルな構造のものが多いため、検出や理解が難しくなっています。近年は貝塚の発掘調査でジオアーケオロジー的分析が多くなっており、堆積状況に関してより詳細な情報が得られてきています。ただし、このようなアプローチは長時間を要し、コストも高いため、実際分析できるのは調査範囲の一部に限られてしまいます。[注13]

ポルトガルとフランスでは、一九世紀後半および二〇世紀前半に調査されている貝塚が多く、当時は日本と同様に大量に検出された埋葬人骨が研究の中心となっていました。[注14] その結果、現在も中石器時代のいわゆる死生観、人骨のDNA分析や炭素・窒素同位体分析による食生活の復元に研究が集中しています。[注15] また、鳥獣魚骨や貝類の分析による古環境や生業の研究もかなり充実しています。[注16] しかし、最近は広い範囲を対象とした調査が少ないため、貝塚自体の構造、形成過程や機能などにアプローチする研究は比

注10　Roche 1972; Arnaud 1987
注11　Marchand 2003; Dupont et al. 2007
注12　Péquart et al. 1937; Péquart・Péquart 1954
注13　Duarte et al. 2017 など
注14　Péquart and Péquart, 1954; Roche, 1972 など
注15　Guiry et al. 2015 など
注16　Rowley-Conwy 2015 など

較的少なく、不明な点が多くなっています。さらに、現在も発掘は貝層がある部分を中心としていることが多く、遺跡の他の場面の積極的な調査は多くありません。フランスのモルビアン地方に位置するベグ・エル・ヴィル貝塚（Beg-er-Vil）で近年行われた発掘調査では、貝層のない地点も発掘調査対象に含めた結果、複数の炉と中石器時代貝塚では非常に珍しい住居跡が二軒発見されました[注17]（**図4**）。そのため、貝塚遺跡において貝層がない部分の調査



a

b

図4　ベグ・エル・ヴィル貝塚の発掘調査
a：調査区遺構配置図（G.Marchand 提供）
b：発掘調査風景（2014 年）

も重要であることが明らかになりました。また、ポルトガルの場合は、貝塚以外の中石器時代遺跡がほとんど知られていないため、この時代に関する情報はかなり限られていることも指摘できます。[注18]

現在のポルトガルとフランスでの発掘調査は、開発事業に伴う緊急発掘・事前調査が多く、中石器時代貝塚の発掘はほとんど学術調査に限られています。これは一般的な問題ですが、貝塚研究は発掘、貝層の採取、水洗や整理作業、必要な科学分析などで多くの時間、人力、費用を必要とします。そのため、大きな研究助成金がないと、ポルトガルやフランスで調査を行うことは困難です。

縄文貝塚の魅力―豊富な情報量とアクセシビリティ[注19]

フランスやポルトガルの中石器時代貝塚と比較すると、縄文貝塚のさまざまな魅力が見えてきます。まず、日本には非常にたくさんの貝塚があります。文化庁の情報によると、二〇一六年の時点では縄文貝塚は約二四四三か所確認されていました。この数値は西ヨーロッパ全体の中石器時代貝塚と比較しても非常に多くなっています。世界的に見ても、日本は中期・後期完新世初頭の貝塚が濃密に分布していると言え

注17　Marchand et al. 2019
注18　Balbo et al. 2011
注19　近づきやすさ、利用のしやすさの意味

ます。

縄文貝塚は東日本、特に東京湾に集中しており、太平洋側の浅い内湾水域や河口域で分布密度が一番高くなっています[注20]。大きな地域差がありますが、貝塚は北海道から沖縄まで日本全国の沿岸部に分布しています（図5）。

貝塚は縄文時代の研究に大きな役割を果たしてきており、縄文は「貝塚文化」と名付けられていた時期もありました[注21]。しかし、日本ではポルトガルの中石器時代研究とは異なり、貝塚のない縄文遺跡も多く知られており、その研究も進んでいます[注22]。貝塚以外についての縄文遺跡の研究は、全体としての集落や生業組織の中の貝塚を理解するために重要であり、もう一つの魅力としてとらえることができます。

西ヨーロッパと同様、縄文貝塚は一九世

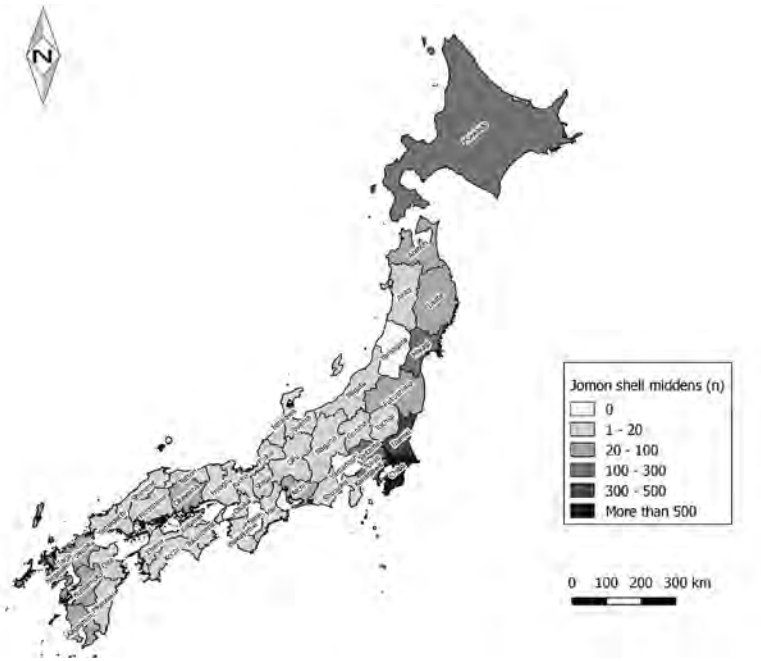


図5　日本における縄文貝塚の分布

紀から発掘されていますが、広範囲の調査が行われた遺跡が多く、大きな研究成果が得られています。[注23] また、一九八〇年代の開発期とは状況が大きく変わっていますが、現在も遺跡の発見や調査が続いています。ポルトガルやフランスとは異なり、日本では開発や遺跡の整備に伴う貝塚調査が多く、そのなかでも詳細な分析が実施されているケースがあり、多大な情報が引き出されています。[注24]

また、縄文貝塚に関する考古学情報が積極的に公開されていることも魅力の一つとしてあげられます。もちろん、貝塚に限られたことではありませんが、日本では遺跡調査の報告書が多く発行されており、購入または図書館やオンライン上でのアクセスが可能です。特に、奈良文化財研究所が運用している『全国遺跡報告総覧』のウェブサイトからの遺跡情報や報告書へのアクセスは、海外からでも制限がなく、手軽にできることは、他国と比較して実に素晴らしいことです。たとえば、ポルトガルでは発掘調査の報告書は調査の担当者が文化庁に提出することになっており、出版物ではありません。したがって、提出された報告書へのアクセスは限定されており、研究者は観覧許可を得てから、リスボンの国立アーカイブに出向かなくてはなりません。近年、提出された報告書へのオンラインアクセスがようやく可能になってきていますが、まだ検索不可能な報告書が多く残っています。

注20　鈴木 一九八九、樋泉 二〇一四
注21　戸沢 一九八九
注22　Habu 2004 など
注23　Habu et al. 2011; 小池 二〇一七
注24　佐賀市教育委員会 二〇一六

縄文貝塚の魅力
―多様性

日本の縄文貝塚は数が多いだけではなく、その種類も多様です（図6）。西ヨーロッパと日本では、貝塚は「ゴミ捨て場」というシンプルな認識が今も残っていますが、縄文貝塚の特徴に目を向けると、規模、立地、形状、形成過程、形成期間・時期、出土遺物、自然遺物や遺構が実に多様であり、遺跡の機能や意味あいも当然多様であったことが理解できます。

有名な千葉県加曾利（かそり）貝塚のような環状と馬蹄形の大型貝塚もあれば、小規模な貝塚もたくさん知られています。[注25] 貝層が面状に堆積している場合が多い

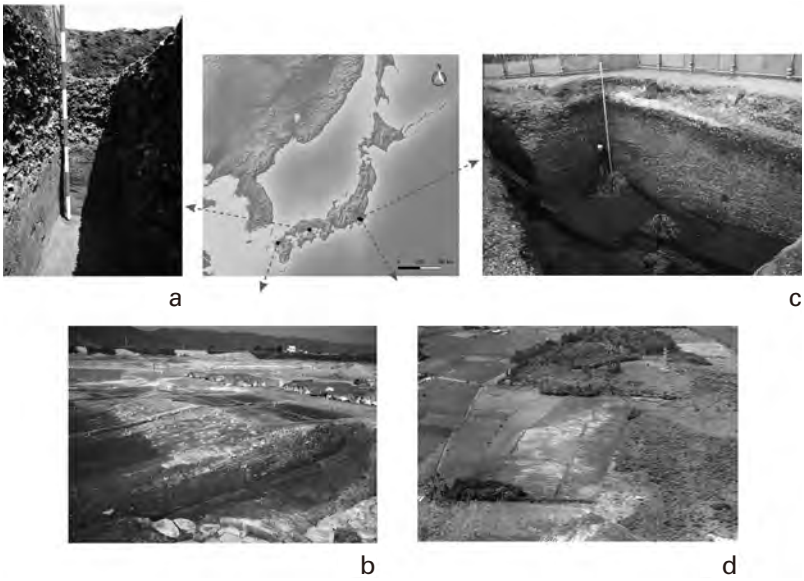


図6　縄文貝塚の多様性
a：西日本では希少な大型貝塚（岡山県岡山市彦崎貝塚）
b：湿地性貝塚（佐賀県東名遺跡）
c：貝処理遺構を伴う湿地性貝塚（東京都北区中里貝塚）
d：大型環状貝塚（千葉県千葉市加曽利貝塚）

ものの、住居跡などの遺構内で形成されたものもあります。台地上などの小高い場所に貝塚が形成されることが多い一方、より海岸に近い低地で形成されたものもあります。[注26] また、遺構や遺物を多く含む集落内に形成された貝塚もあれば、貝以外の資料がほとんど見つかっていない遺跡もあります。たとえば、東京都北区中里貝塚では、遺物は少ないものの、貝類の加工施設と認められている遺構が検出されており、同貝塚はハマグリとカキの採集・処理専門の作業場として形成されたものだと考えられています。[注27]

比較的貝塚の少ない西日本でも、岡山県岡山市の彦崎（ひこざき）貝塚のようなかなり大きい貝塚も知られています。

西ヨーロッパの中石器時代貝塚からも、遺跡の多様性を読み取ることができますが、特に貝塚の機能については不明な点が多くなっています。一般的には、貝塚は遺構や遺物を多く含み、規模が大きな場合は「集落貝塚」、小規模で遺構や遺物が少ない場合は「テンポラリーサイト・専業貝塚」と分けられています。[注28] しかし、縄文貝塚の多様性を見ると、ヨーロッパで使われている単純な貝塚分類は過去の現実に対しての情報不足を反映しているように感じられます。

縄文貝塚では、佐賀県東名（ひがしみょう）遺跡や滋賀県粟津湖底（あわづこてい）遺跡などの湿地性貝塚が特に注目されています。[注29] 貝塚は基本的には情報量の高い遺跡ですが、湿地性貝塚からは普段保存されない植物性遺物も残りのよい状

注25　西野二〇〇七、山口・山本・岩崎二〇一五、千葉市教育委員会二〇一七など
注26　植月二〇〇一、幸泉二〇一六
注27　阿部二〇一四、東京都北区教育委員会事務局教育振興部飛鳥山博物館二〇一八
注28　Gutiérrez-Zugasti et al. 2011
注29　佐賀市教育委員会二〇一六、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会二〇一三

態で発見されています。このような貝塚は日本以外でも珍しく、通常の貝塚より植物資源の利用などに関する情報を多く引き出せる貴重な遺跡だと言えます。つまり、貝塚を形成した人々の水産資源の積極的な利用のみを示しているのではなく、植物資源を含む縄文人の食や資源利用の多様性を証明する資料として注目されています。

縄文貝塚の魅力―空間利用がわかる遺跡が多い

縄文貝塚は、過去の環境変化や生業活動に関する資料を多く含みますが、遺跡の空間利用に関する情報も与えてくれる場合があります。特に関東では、広い範囲の貝塚の調査が多数行われているほか、千葉県加曾利貝塚や西広貝塚のような大規模な集落貝塚が存在するため、貝層、住居跡、土坑等の遺構および遺物の分布や時期的な変化がわかるケースが多くなっています[注30]。大規模な貝塚や調査が少ない西日本でも、近年研究が進んでおり、そのような情報が増えてきています。たとえば、前述の縄文早期の東名遺跡では、貝の廃棄場所、ピットの集中場所、墓地や居住域などが確認されています。縄文時代の比較的古い段階の貝塚を含む遺跡であっても、空間利用に関する規則が、ある程度連続的に守られて遺跡が形成されたことが理解できます。

さらに、縄文貝塚からは、ヨーロッパの中石器時代貝塚でも数多く検出されているヒトやイヌの埋葬址

のほか、動物祭祀、道具儀礼や廃棄儀礼の跡などの精神生活に関する情報が得られています[注31]。

このように、縄文貝塚には単なる「ゴミ捨て場」やランダムな廃棄跡というイメージから明確に離れている遺跡が多いため、貝塚の意味や形成の本質を理解するために非常に重要です。

縄文貝塚の魅力―保存活用

縄文貝塚については研究面だけが魅力的ではありません。遺跡の保存活用の取組みも積極的に行われています。これは日本考古学全体の魅力とも言えますが、貝塚遺跡は古墳とともに古くから存在が知られており、日本人が特に親しみがある遺跡の一つです。国史跡として保存整備されている貝塚が多いため、比較的簡単に多くの遺跡にアクセスすることができます。そのうえ、日本各地で貝塚に関する展示をさまざまな博物館、埋蔵文化財センター、資料館などで観覧することができます。もちろん、遺跡数の多い東日本のほうが多いのですが、西日本でもさまざまな博物館や遺跡を目にすることができます。

留学中に訪れた遺跡の中で印象に残っているのは、滋賀県大津市石山（いしやま）貝塚です（**図7**）。遺跡があった場

注30　千葉市教育委員会二〇一七、市原市教育委員会・財団法人市原市文化財センター二〇〇五
注31　西山一九九五

所に石碑があり、観光会館の中にも小さな展示があって、「縄文しじみ貝塚の塔」という謎のモニュメントもありました。貝層の剥ぎ取りが展示されていることがよくありますが、これは貝層の堆積状況の発掘後の確認、保存や公開に便利な日本独特の方法だと言えます。また、多くの機関で、子どもを対象とした貝塚関連の体験学習、一般向けの講習や講座も行われています。

残念ながら、ポルトガルやフランスでは、ほとんどの貝塚は私有地内に存在しており、一般の方は簡単にアクセスできない遺跡が多くなっています。また、日本の貝塚のように復元などを含む保存活用がされている遺跡もないため、貝塚の存在自体を知っている人はとても限られています。

図7　滋賀県大津市石山貝塚「しじみ貝塚の塔」

縄文貝塚の魅力―一般市民向けの情報公開

日本では、縄文貝塚に関する一般向けの情報公開も大変進んでいます。まず、内容的にアクセシブルで

購入可能な書籍が多く出版されていることが目立ちます。[注32] 近年のヨーロッパの考古学研究者は評価の高い研究ジャーナルに論文を投稿することに集中しており、その結果、遺跡に関する単行本の発行や現地のジャーナルでの投稿は多くありません。一般向けの情報公開があまり重要とされておらず、その点は見直す必要があると思います。

また、縄文貝塚に関する一般向けの情報は、オンライン上でも簡単に得ることができます。遺跡に関する情報は魅力的に公開されているケースがたくさんあります。たとえば、千葉市立加曽利貝塚博物館のウェブページでは、かわいいマスコットが使われていたり、実際に行われている発掘調査の情報を観覧することが可能ですし、学習等での活用を目的としたコンテンツも公開されています。[注33] 縄文遺跡群世界遺産登録推進事務局が公開している「世界遺産北海道・北東北の縄文遺跡群」のウェブページには多数の貝塚が含まれており、遺跡に関する詳細な情報の検索が可能なほか、子ども用の専用ページもあります。[注34] このような工夫は、貝塚というあまり目立たない遺跡を理解してもらうために大切であり、もう一つの日本考古学の魅力だと言えます。

注32　村田 二〇一三、佐賀市教育委員会 二〇一七 など
注33　https://www.city.chiba.jp/kasori/index.html
注34　https://jomon-japan.jp/

おわりに

このように、西ヨーロッパ、フランス、ポルトガルの視点から見ると、縄文貝塚は研究から保存活用、情報公開まで、さまざまな面で大変魅力的であると言えます。

縄文貝塚からは重要な情報が大量に得られています。当時の環境、水産資源の利用や埋葬行為のみでなく、縄文時代の人々の集団の豊かな資源利用、生活や思考についての情報も多く引き出されています。この素晴らしい情報は、日本の歴史に対して重要なだけではありません。完新世のユーラシア大陸で豊かな水産資源を背景にして発達した、多様な狩猟採集文化とその定住化のプロセスをより深く理解するためにも大きな価値があります。そのため、今後はさらに国際的に縄文貝塚の情報を広報していくべきだと思います。

また、貝塚は世界各地で「(発掘も、その後の整理作業も)大変な遺跡」だと言えますが、その分、ポテンシャルも高くなっています。縄文貝塚に関しては、報告書の作成や遺跡保存の目的にとどまらず、さまざまな分析を利用し、より詳細な研究に進んでいくことが望まれます。

ご清聴ありがとうございました。また日本で気楽にハマグリを食べられる日が来ることを願っております。

謝　辞

本講演に関する研究はポルトガル科学技術財団（ＦＣＴ）による博士課程研究助成金SFRH/BD/100329/2014およびシェフィールド大学Andrew Sherrat Fund 2017の助成を受けたものである。

Q&A

Q　動物骨や骨の研究をしている奈良文化財研究所の山崎健です。ポルトガルやフランスでは、貝層ばかりの調査をして、空間的利用がわからないということを述べられましたが、日本だと貝塚を掘るのは面倒なのであまり掘らず、貝塚の研究自体が遅れている状況です。ポルトガルだと貝層のほうが優先して調査されるということでしょうか。

A　助成金の関係で、ポルトガルでは貝塚全体より貝層の調査が集中しています。日本では貝塚全体が発掘されていて、貝層の外も発掘されていることが多いと指摘できると思います。

Q　それは、ポルトガルでは貝層を見て古環境などを検討することが優先されているからでしょうか。

A　ポルトガルでは貝層のほうが古環境、遺物や遺構等に関する情報量が多いという一般的なイメージがあります。そのため、貝層の外の積極的な調査のケースが少ないです。

Q　ヨーロッパ中石器時代の貝塚からは、どのような貝と魚骨が見つかっていますか。縄文貝塚との共通点や相違はありますか。

A　河口域の貝塚と沿岸部ではだいぶ異なりますが、一つの種類に集中しているのではなく、さまざまな海域環境の貝があります。基本的には沿岸部の貝塚では岩海岸に生息する貝、河口域の貝塚では河口干潟における貝が多いです。しかし、河口域の貝塚でもイワシ等の海の魚の骨が検出されたりするので、中石器時代の人々は身近な河口域内のテリトリーに限らず、海でも漁労を行っていたことがわかります。つまり、多様な水域環境へアクセスし、多くの種類の水産資源を利用していました。縄文貝塚と比べるとヨーロッパ中石器時代貝塚は数が少ないことはありますが、同様にさまざまな種類の貝塚がありますし、豊かな環境と多様な水産・陸産資源が利用されていたことがわかりますので、縄文時代のものと共通点があると思います。

参考文献

・阿部 芳郎（編）二〇一四『ハマ貝塚と縄文社会　国史跡中里貝塚の実像を探る』、雄山閣
・市原市教育委員会・財団法人市原市文化財センター 二〇〇五『市原市西広貝塚Ⅱ』、財団法人市原市文化財センター調査報告書第九三集
・植月 学 二〇〇一「縄文時代における貝塚形成の多様性」『文化財研究紀要』一四、一－二七頁
・小池 裕子 二〇一七「生業動態からみた縄文時代人の食料戦略 sustainable use の先駆者としての縄文文化」『第四紀研究』五六巻四号、一四九－一六八頁
・幸泉 満夫 二〇一六「中国・四国地方における縄文貝塚の多様性に関する基礎的考察」『愛媛大学法文学部論集

人文学科編』第四〇号、七五－一一八頁
・佐賀市教育委員会（編）二〇一七『縄文の奇跡！ 東名遺跡 歴史をぬりかえた縄文のタイムカプセル 国史跡がまるごとわかる！』、雄山閣
・佐賀市教育委員会（編）二〇一六『東名遺跡群Ⅳ 東名遺跡群総括報告書 第4分冊 総括編』、佐賀市埋蔵文化財調査報告書一〇〇集
・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会（編）二〇一三『粟津第3貝塚2・自然流路2（粟津湖底遺跡Ⅴ）』、琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書一三
・鈴木 公雄 一九八九『貝塚の考古学』、ＵＰ考古学選書五 東京大学出版会
・千葉市教育委員会二〇一七 『史跡加曽利貝塚総括報告書』
・樋泉 岳二 一九九九「東京湾地域における完新世の海洋環境変遷と縄文貝塚形成史」『国立歴史民俗博物館研究報告』八一、二八九－三一〇頁
・樋泉 岳二 二〇一四「漁撈の対象」『講座日本の考古学 4 縄文時代（下）』、青木書店、五四－八六頁
・東京都北区教育委員会事務局教育振興部飛鳥山博物館（編）二〇一八『史跡 中里貝塚 総括報告書』、東京都北区教育委員会
・戸沢 充則 一九八九『縄文人と貝塚』、六興出版
・西野 雅人 二〇〇七「大形貝塚の群集する地域社会」『考古学ジャーナル』五六三、一九－二二頁
・西山 太郎 一九九五「もう一つの貝塚研究史」『研究紀要』一六、五四六－五六四頁
・文化庁文化財部記念物課 二〇一八『埋蔵文化財関係統計資料 平成29年度』、文化庁文化財部記念物課
・村田 六郎太 二〇一三『加曽利貝塚―東京湾東岸の大型環状貝塚―』、日本の遺跡四六、同成社
・山口 雄治・山本 悦世・岩崎 志保 二〇一五「岡山県域の縄文時代貝塚」『第26回中四国縄文研究会高知大会 中四国の縄文貝塚【報告要旨集・貝塚集成】』、第二六回中四国縄文研究会高知大会事務局、八一－一二二頁
・Araújo, A.C. 2015. A few steps backwards … in search of the origins of the Late Mesolithic. In: Bicho, N., Detry, C. Douglas Price, T., and Cunha, E. (Eds.), *Muge 150th: The 150th Anniversary of the Discovery of Mesolithic Shellmidders - Volume 2*. Cambridge Scholars Publishing, Newcastle: 1-15.

- Arnaud, J.M. 1987. Os concheiros mesolíticos dos vales do Tejo e Sado: semelhancas e diferencas. *Arqueologia* 53-64.
- Bailey, G., and Milner, N. 2008. Molluscan archives from European Prehistory. In: Antczak, A., and Cipriani, R. (Eds.), *Early Human Impact on Megamolluscs*, BAR International Series. Archaeopress, Oxford: 111-134.
- Bailey, G.N. 1978. Shell middens as indicators of postglacial economies: a territorial perspective. In: Mellars, P. (Ed.), *The Early Postglacial Settlement of Northern Europe: An Ecological Perspective*. Duckworth, London: 37-63.
- Balbo, A., Madella, M., Godino, I.B., and Álvarez, M. 2011. Shell midden research: An interdisciplinary agenda for the Quaternary and Social Sciences. *Quaternary International* 239: 147-152.
- Cartailhac, É. 1886. *Les Âges préhistoriques de l'Espagne et du Portugal: résultats d'une mission scientifique du Ministère de l'Instruction publique Ch*. Paris: Reinwald, Libraire.
- Duarte, C., Iriarte, E., Diniz, M., and Arias, P. 2017 . The microstratigraphic record of human activities and formation processes at the Mesolithic shell midden of Pocas de São Bento (Sado Valley, Portugal). *Archaeological and Anthropological Sciences* 11: 483-509.
- Dupont, C., Schulting, R., and Tresset, A. 2007. Prehistoric shell middens along the French Atlantic facade: the use of marine and terrestrial resources in the diets of coastal human populations. In: Milner, N., Craig, O.E., and Bailey, G. (Eds.), *Shell Middens in Atlantic Europe*, Oxford: Oxbow Books: 123-135.
- Erlandson, J.M. 2013. Shell middens and other anthropogenic soils as global stratigraphic signatures of the Anthropocene. *Anthropocene* 4: 24-32.
- Fano, M.Á. 2019. The Mesolithic "Asturian" culture (North Iberia), one century on. *Quaternary International* 515: 159-175.
- Guiry, E.J., Hillier, M., and Richards, M.P. 2015. Mesolithic Dietary Heterogeneity on the European Atlantic Coastline: Stable Isotope Insights into Hunter-Gatherer Diet and Subsistence in the Sado Valley, Portugal. *Current Anthropology* 56: 460-470.
- Gutièrrez-Zugasti, I., Andersen, S.H., Araújo, A.C., Dupont, C., Milner, N., and Monge-Soares, A.M. 2011. Shell midden research in Atlantic Europe: State of the art, research problems and perspectives for the future. *Quaternary*

International 239: 70-85.
- Habu, J., 2004. *Ancient Jomon of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Habu, J., Matsui, A., Yamamoto, N., and Kanno, T. 2011. Shell midden archaeology in Japan: Aquatic food acquisition and long-term change in the Jomon culture. *Quaternary International* 239: 19-27.
- Leroi-Gourhan, A., and Leroi-Gourhan, A. 1989. *Un Voyage chez les Aïnous: Hokkaido 1938*. Albin Michel, Paris.
- Marchand, G. 2003. Les niveaux coquilliers du Mésolithique final en Bretagne. *Préhistoires Méditerranéennes* 12: 209-220.
- Marchand, G., and Dupont, C., 2019. *Beg-er-Vil à Quiberon. Un habitat de chasseurs-cueilleurs maritimes de l'Holocene*. CNRS, Université de Rennes 1, SRA Bretagne.
- Morse, E.S. 1877. Traces of Early man in Japan. *Nature* 17: 89.
- Morse, E.S. 1879. *Shell Mounds of Omori, Memoirs of the Science Department*. Tokyo: University of Tokyo Science Departmento.
- Péquart, M. and Péquart, S.-J. 1954. *Hoëdic, deuxième station-nécropole du Mésolithique cotier armoricain*. Anvers: De Sikkel.
- Péquart, S.-J. Péquart, M., Boule, M., and Vallois, H. 1937. Téviec: station nécropole mésolithique du Morbihan, *Archives de l'Institut de Paléontologie humaine*. Paris: Masson.
- Roche, J. 1972. *Le gisement Mésolithique de Moita do Sebastião, Muge, Portugal. Vol. 1 Archéologie*. Lisboa: Instituto de Alta Cultura.
- Rowley-Conwy, P. 2015. The Late Mesolithic of southwest Portugal: a zooarchaeological approach to resource exploitation and settlement patterns. In: Bicho, N., Detry, C., Price, T.D., and Cunha, E. (Eds.), *Muge 150th: The 150th Anniversary of the Discovery of Mesolithic Shellmiddens*, Newcastle: Cambridge Scholars: 255-272.

図版出典
図1　著者作成（Gutiérrez-Zugasti et al. 2011を基にQGISで作成）
図2　著者作成
（a、b）　著者撮影

図3　著者撮影
図4（a）　Marchand et al. 2019
（b）　G. Marchand提供（二〇一四年撮影）
図5　著者作成（文化庁文化財部記念物課平成29年3月発行の「埋蔵文化財関係統計資料―平成28年度」を基にQGISで作成）
図6　著者作成
（a）　岡山市教育委員会提供
（b）　佐賀市教育委員会提供
（c）　北区飛鳥山博物館提供
（d）　西野雅人提供（千葉市教育委員会二〇一七、図版二）
図7　著者撮影（二〇一七年）

第8講

日本考古学の魅力
―ドイツの考古学者の経験と印象

ブリッタ・シュタイン　ハレ大学文学部日本学科 研究員

ブリッタ・シュタイン　Britta Stein
一九八八年　ドイツ生まれ
二〇一〇年　ハレ大学　卒業
二〇一三年　ハレ大学修士課程　修了
二〇一四年　ハレ大学博士課程　入学
二〇一八年より　ハレ大学文学部日本学科　研究員・非常勤講師
専門は古墳時代の騎馬文化・ユーラシア東西交流・日本考古学史

著者紹介

日本料理も得意とされるブリッタさん。ＳＮＳに彼女が時おり投稿する手作りラーメンは、本当に美味しそうです。私が初めてお会いしたのは、二〇一八年に中国の南京で開かれたＳＥＡＡ（東アジア考古学会）のポスターセッション会場でのことでした。流れるような日本語のスムーズな発音にびっくりしたことを覚えています。ブリッタさんはヨーロッパには数えるほどしかいない、貴重な日本考古学の若手研究者でいらっしゃいますが、逆にそれだけに大変なご苦労もされているようです。ぜひ、そうした困難を乗り越えて、これからも日本の研究者との交流を続けながら、ヨーロッパでご活躍していただきたいです。

まず、お招きいただきましたことに感謝いたします。今年（二〇二二年）は日独交流一六〇周年であり、ドイツと日本の考古学の交流の歴史も同様に長いものであるため、本日講演できることを特に嬉しく思っています。

本日は、三つのパートに分けてお話しします。最初に、日本考古学に関する個人的な経験について話し、次に日本とドイツの考古学の持つ歴史的共通性について簡単に触れ、最後に、私の現在の研究について紹介します。

日本の考古学の魅力―個人的な印象

日本の考古学との出会いは高校生のときでした。当時、ベルリンの美術工芸博物館（Martin Gropius Bau）での展覧会『曙光の時（Zeit der Morgenröte. Japans Archäologie und Geschichte bis zu den ersten Kaisern）』で、火焔型土器、遮光器土偶、埴輪などを見て、日本考古学の魅力を感じましたが、将来、日本の考古学を専攻する考古学者、日本学者になるとは想像していませんでした。この展覧会を見た二年後、ハレ大学に入学して先史考古学と日本学を学び始め、二〇一〇年から一一年にかけて、上智大学に一年間交換留学したとき、埼玉県の埋蔵文化財調査事業団の発掘調査に参加しました。発掘作業をしているスタッフの数の多さにとても驚きました。また、二〇一三年には、小田原での発掘調査に参加する機会があり、小田原で

は一般の方を対象とした現地説明会にも参加して来場者の多さとその関心の高さに驚きました。日本では、ドイツに比べて考古学がメディアに取り上げられることが多く、発掘調査やその結果に対する一般の人々の関心が高いという印象を受けました。

二〇一四年と二〇一五年に現在の研究プロジェクトのために日本に留学した際には、日本の考古学者たちの親切さや助け合いの精神も知ることができました。これも日本考古学の魅力の一部です。

卒業論文のテーマは、江戸時代から大正時代までの日本考古学史です。明治時代の日本の考古学を研究しているうちに、ドイツの考古学と日本の考古学の持つ歴史的共通性に気づきました。

ドイツと日本の考古学史

日本の先史時代や遺物に関する情報は、おそらくフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（**図1**）の著書や紀行文によってドイツ語圏に初めて伝えられました。一八三二年にオランダのライデンで出版された日本研究の集大成『日本』には、日本の考古学に関する章があり、その中で勾玉などが紹介されています（**図2**）[注1]。

図1　フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト

一八六九年にドイツ人のフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの息子ハインリヒ・フォン・シーボルトが来日し、オーストリア・ハンガリー帝国公使館で通訳者として働き、滞在中、大森貝塚をはじめとするいくつかの遺跡を発掘しましたし、日本考古学に関する本も書き（図3）、いろいろな遺物を紹介しています（図4）[注2]。彼はモースとともに日本考古学の父と呼ばれることもありますが、日本の考古学に大きな影響を与えたわけではないと思っています[注3]。

幕末の一八六五年、トロイ遺跡の発掘で知られているドイツの考古学者ハインリヒ・シュリーマンが世界一周旅行の間に来日し

注1　Siebold 1832
注2　Kreiner 1980, 平田二〇〇八
注3　Stein 2018

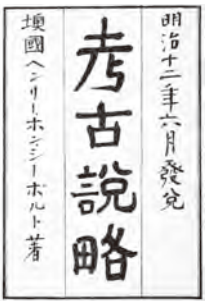


図3 『考古説略』

図4 『Notes on Japanese Archaeology with Especial Reference to the Stone Age』の遺物図版

図2 『Nippon』勾玉の図

ました。この訪問を、最近、八王子の活性化を目指す学生グループが取り上げ、今年（二〇二二年）の一〇月からシュリーマンをキャラクターにした特製まんじゅうの販売を始めました。この「シュリーまん」をSNSで見て、とてもびっくりしました。

一九世紀、考古学は学問として始まったばかりでしたが、その後の数十年間で急速に発展しました。戦後の考古学の発展は、ドイツと日本で多くの類似点があります。第二次世界大戦後の大規模な復興のため、多くの発掘調査が行われるようになり、両国において文化財保護のための法律の更新が必要となり、一九五〇年代に、文化財保護、埋蔵文化財保護に関する法律が制定されました。戦後、日本、東ドイツにもマルクス主義の唯物史観が考古学研究に大きな影響を与えたと考えられます。[注4]

日本とドイツ民主共和国の考古学に共通するもう一つの特徴は、一般市民が考古学的活動に参加したことです（**図5**）。ドイツ民主共和国では、協会が結成され、ボランティアが新しい発見や遺跡を報告するだけでなく、発掘を行いました。このような活動は日本の市民発掘に似ています。また、日本の現地説明会のように、発掘現場のガイドツアーも行われました。当時、約二〇〇〇人のボランティアが活動していたこれらの協会のうち、ドイツ再統一を経て現在も存在しているのは残念ながら一つだけです。[注5]

日本とドイツの考古学の組織も非常に似ています。ドイツには文化財保護と考古学のための州立機関があり、これは日本の都道府県の埋蔵文化財センターとよく似ていますが、大きな違いもあります。日本で

図5　ドイツ民主共和国のボランティア活動、「若い歴史学者」のサークル

は、埋蔵文化財の保存に関する法律は一つしかありませんが、一方、ドイツでは一六の州があるので、法律も一六種類あり、それぞれ少しずつ違いがあります。

古墳時代の騎馬文化とユーラシア東西交流

次に、ユーラシア騎馬文化が古墳時代の日本列島に与えた影響に関する研究プロジェクトについてお話しします。

学生の頃から、人、物、技術などの移動に魅了されていました。古墳時代の中・後期を研究テーマに選んだのは、ユーラシア大陸からの影響を示すものが日本列島に数多くもたらされたことが理由です。特に、ユーラシアの騎馬文化の影響を示す遺物、すなわち騎馬の武装と威信財に興味を持っています。

欧米の考古学では、ユーラシア大陸と日本の古墳時代の関係に着目し、その影響に関する研究はあまりありません。また、ドイツには（日本の）古墳時代についての研究自体がまったくないと言ってよい状況ですが、ユーラシア大陸の遊牧騎馬民族や、騎馬民族がヨーロッパや西アジアに与えた影響に関する研究

注4　Kossack 1999
注5　Coblenz 2002, Koschik 2002

は数多くあります。ただし、このテーマについて研究している多くの考古学者は、東アジアの遺物についてあまり考えていません。ときどき、中国と朝鮮半島の遺物について研究している考古学者もいますが、数は多くありません。欧米には日本の遺物についての研究はほとんどないうえ、ときには、すでに日本考古学では批判され、ほとんど引用されなくなった江上波夫（えがみなみお）の理論が引用されています。[注6] ですから、私どもの研究プロジェクトを進めることで、ドイツの考古学者に、ユーラシア大陸の影響を示す日本の遺物に関する資料や知見を提供することができます。これが研究プロジェクトの一つの目的です。

古墳時代における馬の利用法

古墳時代中期には、馬の飼育・繁殖に必要なノウハウ、騎馬用の甲冑などが渡来人とともに日本列島に入ってきたため、騎乗用馬具や戦闘に使われる騎馬用の装備などには大陸からの強い影響が見られます。[注7]

朝鮮半島南部では、紀元前一世紀にはすでに馬がいました。[注8] そこで、弥生時代や古墳時代初期には、日本列島と大陸との交流が盛んであったのに、なぜ馬の本格的な渡来が古墳時代中期までかかったのかという疑問が生じます。

四世紀には、東北アジアと東アジアで騎兵での戦い、特に重騎兵の広がりとともに、高句麗が南下しました。それは朝鮮半島の南部の国々と古墳時代の人々にとって危険な状態でした。[注9] すなわち、馬の導入に

軍事的な理由があったのです。[注10] ただし、馬が軍事的に必要であったとすれば、古墳時代の日本列島にも重騎兵がいたはずではないでしょうか。

古墳時代中期になると、武器・甲冑の副葬が急増します。[注11] このことから、古墳時代中期には常備軍や職業軍人がいたと考える研究者もいます。[注12] しかし、その甲冑や武器は、主に副葬された儀礼的なものであり、軍事的な様相より儀礼的な様相が強いと考えられます。そのため、副葬品から軍事組織を復元することは非常に困難です。[注13] それでは、重装甲の騎兵の普及についてはどうでしょうか。

松木武彦（まつぎたけひこ）先生がすでに指摘されたように、高句麗の騎兵に張り合う重騎兵軍隊を組織しようとした証拠はこれまで発見されていません。[注14] ただし、高句麗の壁画に見られるような重騎兵は、考古学的な証拠が朝鮮半島の南部まであります。有名なのは、慶州のチョクセム地区の新羅古墳遺跡から出土した馬の甲冑です（**図6**）。古墳では、埋葬された人は馬の甲冑の上に乗せられ、足元には小札冑（こざねかぶと）と

図6　慶州のチョクセム地区の新羅古墳遺跡から出土した馬の甲冑

注6　Jäger 2006
注7　白石二〇一六
注8　諫早二〇一九
注9　諫早二〇一九、신二〇一九
注10　白石二〇一六
注11　川畑二〇一五
注12　田中二〇〇二
注13　川畑二〇一八
注14　松木二〇一七

挂甲が副葬されていました。この騎兵の装備は、高句麗の壁画とまったく同じです。馬の甲冑の復元から、甲冑の重さは三六キログラムであることがわかりました。[注15]

日本列島には、古墳時代の馬具と馬の埋葬が数多く発掘されましたが、馬の甲冑は四例しか発見されていません。[注16] 馬の甲冑の少なさから、重騎兵が古墳時代の社会で重要な役割を持っていなかったと推定されます。実は、古墳時代には武器・武具が数多く出土していますが、戦いがあったという証拠は多くありません。古墳時代中期・後期の甲冑をさらに詳しく調べると、驚くべき発見があります。

鉄製品としての甲冑

大陸では騎兵のためのセットとして使われている挂甲と小札冑が、日本列島では使い分けられています。挂甲は衝角付冑と、短甲は眉庇付冑と組み合わせることが多くなっています。[注17] 埴輪にも、このような組み合わせが見られます（**図7**）。軍事的な観点からは、この組み合わせになる理由が認められません。そのうえ、補修や損害（たとえば、突き刺された穴）などの痕跡がある、実

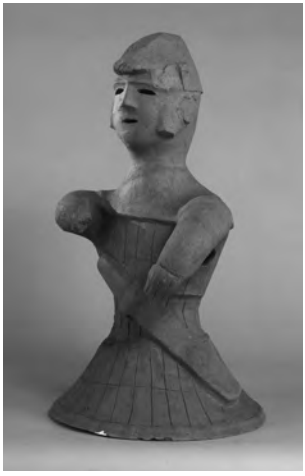


図7　武人埴輪、茨城県行方市小幡出土

際の戦闘で使われた可能性を示す武器や武具も多くありません。さらに、あまり実用的ではない金銅装飾甲冑もたくさん出土しています（図8）[注18]。このことから、甲冑や武器は戦闘を目的としたものではなく、古墳時代の社会では別の役割を持っていたと考えることができます。古墳時代の日本列島では、戦争などの武力紛争はほとんどなかったと考えられます。

この仮説は、武器による暴力で傷を負った人骨の数が少ないことからも裏づけられます。甲冑や武器が大量に出土した地域からは、傷痕のある人骨がほとんど検出されていません（図9）。関東地方などがそれに該当します。例外は、宮崎県の島内（しまうち）地下式横穴墓群です。傷痕のある人骨が何体も発見されました[注19]。古墳時代には地域紛

注15　Kang & Chang 2020
注16　小林 二〇〇八、諫早 二〇二〇
注17　小林 一九九〇
注18　鈴木 二〇一四
注19　竹中ほか 二〇〇一、竹中ほか 二〇一〇a・二〇一〇b

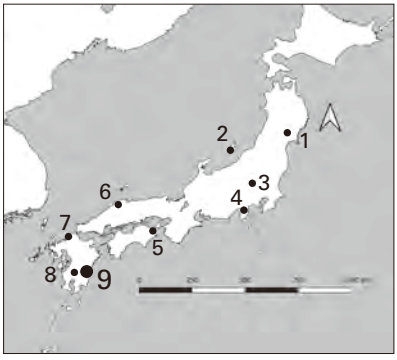


図9　傷痕のある人骨の出土地域
1 入の沢遺跡、2 ケラマき3号墳、3 鶴山古墳、4 沢平横穴墓、5 犬山天神山古墳、6 宗光寺横穴群、7 宮司井手の上古墳、8 常心原地下式横穴墓群 7号墓、9 島内地下式横穴墓群

図8　金銅装飾甲冑、五條猫塚古墳出土

争があったようです。

そうなると、古墳時代の馬や甲冑や武器は何に使われていたのか、という疑問がでてきます。

まず、鉄の価値から考えてみましょう。

古墳時代後期前半までは、日本列島では製鉄が行われず、輸入に頼っていました。つまり、原料の鉄は、非常に高い価値を持っており[注20]、その価値は鉄でできたものに移っていったと考えられます。鉄製品は、金銅製の装身具と同じように威信材となります。鉄製品を持つことは、エリートの経済的・政治的地位を示します。また、武器や甲冑には、厄除けや魔除けの意味があり、死者の魂や身を守る意味があったと考えられます[注21]。それ以外にも、祭祀的利用があった可能性もあると思います。つまり、ユーラシア大陸からの影響を示す騎兵に関する遺物は、古墳時代人にとっては原産地とは異なる使い方をしていると考えることができます。

装身具にも武器と非常に似た展開が見られます。古墳時代の冠には、ユーラシア大陸の冠にも広く見られる「生命の木」のモチーフが見られます（図10）。このモチーフは、おそらく大陸から来た工人が持ち込んだものと推定されます。ユーラシア大陸では、このモチーフは強い儀式的な意味を持っています。しか

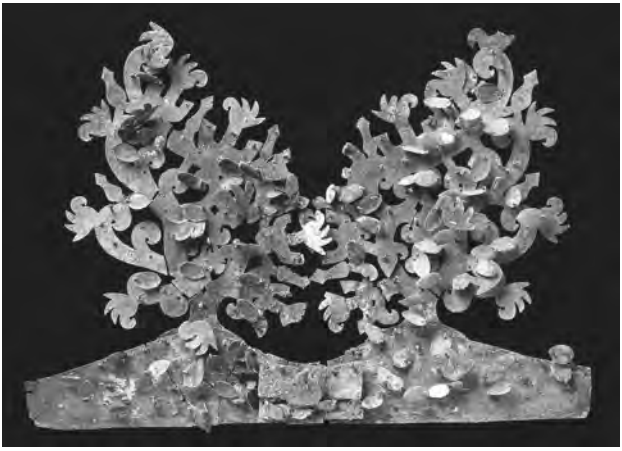


図 10　古墳時代の冠、藤ノ木古墳出土

し、古墳時代の宗教では、木々はあまり重要な役割を果たしていないようです。そのため、このモチーフは儀式的な役割を失い、装飾的な役割しか持たなかったと考えられます。[注22] このように、古墳時代人は輸入されたモノを自分のニーズにあわせて変化させました。モノの形も役割も変わりました。

埴輪に見る騎兵

実際に重騎兵が戦いに使われたかどうかを考える際、馬の大きさも考慮に入れなければなりません。古墳時代の馬はとても小さく、背高が一二五センチメートルほどしかありません（**図11**）。このような小さな馬が、重い甲冑や重装備の騎士を運ぶことができたかどう

注20　松木二〇一七
注21　塚本二〇一七、Gellert 2018
注22　Stein 2017

図11　古墳時代の馬、蔀屋北遺跡出土

かは疑問です。高句麗の壁画に描かれた重騎兵の装備は、小さな馬には重すぎたのでしょう。ローマ軍も同じような問題を抱えていました。騎兵の装備は馬にとって重すぎ、戦いでは非常に遅くなってしまいます。そのため、軍事的にはほとんど使われなかったと考える学者もいます[注23]。

古墳時代には、馬が軍事目的ではなく、主に威信財、儀礼的なものとして使われていたと考えることができます。また、馬が舟と同様に死者の魂を他界に運んだとの指摘もあります。馬の埋葬、馬の壁画、馬形埴輪、馬具の副葬などが馬の祭祀的な役割を表現します[注24]。それは、騎馬の埴輪にも表れています。現在、騎馬の埴輪は一八点ほどしか知られていませんが、騎乗した騎兵を描いたものはありません[注25]。騎馬の埴輪は大きく二つに分けることができます。第一のグループは、裸足で荷物を背負った小さな人物埴輪です（図12）。馬具は手綱だけで、鞍も鐙もなく馬に乗っています。第二グループは、装飾馬具をつけた「飾り馬」で構成されています。また、騎馬は王冠、帽子、耳飾り、首飾り、帯金具などの装身具を身につけています。武器を持っている埴輪もありますが、甲冑を着ている埴輪はありません。これらの騎馬は、騎兵を表すものではありません。

第一のグループは、騎馬像が描かれている王塚古墳の壁画に似ているので、儀礼的な使用を表すと考えています。第二のグループは、馬に乗って経済的・政治的権力を誇示するエリートの人たちを表現したも

図 12　騎馬埴輪、高林西原古墳群出土

のでしょう。武器ではなく、装身具や装飾馬具に焦点を当てていると考えています。要約すると、『隋書』に書かれている通りです：「雖有兵，無征戰」（戦士有り、戦争無し）。

古墳時代中期には、どうして馬が導入され、武器・武具・馬具・装身具などのユーラシア大陸の影響を示す遺物が急増したのか、またはその遺物はどうやって使用されていたのかという世界史的視点が、古墳時代の理解には必要であると思っています。

Q&A

Q 古墳時代に直接かかわる質問ではありませんが、日本とドイツの発掘で、どういったことが違うのでしょうか。

A まず、スタッフの数が違います。ドイツでは、参加するのは主に学生です。もう一つは、発掘調査期間です。日本では緊急発掘調査が長期間にわたって行われますが、ドイツでは四～六週間程

注23 Harl 1996, Junkelmann 1996
注24 辰巳 二〇一一
注25 南雲 二〇一九

Q　度が普通だと思います。使っている道具に違いはありますか。

A　あまり違いはありません。方法にも違いはあまりないと思います。

Q　ドイツで日本の考古学に興味を持って研究している人はどれくらいいるのでしょうか。

A　東アジアとヨーロッパの遺物を比較している人は、現在ドイツでは私しかいないと思います。東アジアや日本の考古学の研究をしている人は、ドイツでは非常に少ないと思います。

司会　（庄田慎矢）　貴重な存在ですね。私の知っている限りでは、昔九州大学にいらっしゃったバーバラ・ザイヨク（Barbara Seyock）さんが日本や韓国の陶磁器を研究されていましたが、こうして日本の考古学に興味を持ってくださるのは本当にありがたいですね。

Q　最近のＤＮＡ調査の結果から、騎馬民族説についてはどう思いますか？

A　これまで騎馬民族のＤＮＡ調査では、東アジアからのサンプルは少数あっても、日本からのサンプルは私の知る限りありません。これから調査が進むと面白い分野だと思います。

参考文献

・諫早直人 二〇一九「東アジアにおける馬文化東方展開」『馬の考古学』四八－五七頁、雄山閣

・諫早直人 二〇二〇「日本列島出の馬冑と馬甲―研究動向と出土事例の紹介」『말 갑옷을 입다』一六六－一八一頁、国立慶州文化財研究所・国立慶州博物館

・川畑純 二〇一五『武具が語る古代史―古墳時代社会の構造転換―』京都大学学術出版会

・川畑純 二〇一八「古墳時代の戦い―武器と武具を読み解く―」『平成30年度 考古学ゼミナール 戦いの考古学』九―二四頁、神奈川県埋蔵文化財センター
・小林謙一 一九九〇「歩兵と騎兵」『古代史復元7古墳時代の工芸』一四一―一五二頁、講談社
・小林謙一 二〇〇八『東アジアにおける武器・武具の比較研究』奈良文化財研究所
・白石太一郎 二〇一六「日本列島の騎馬文化はどのようにして始まったのか」『騎馬文化と古墳時代のイノベーション』八八―一〇三頁、角川文化振興財団
・鈴木一有 二〇一四「朝鮮半島出土の和系武装にみる日韓交流」『武器・武具와農工具・漁具：韓日三國古墳時代資料』三三―五一頁、「韓日交涉의 考古學―古墳時代―」研究會
・善通寺市教育委員会 一九九二『史跡有岡古墳群（王墓山古墳）保存整備事業報告書』
・竹中正巳・峰和治・大西智和・小片丘彦・染田英利 二〇〇一「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土の人骨」『えびの市埋蔵文化財調査報告書 二九―島内地下式横穴墓群』一―七五頁・図一―三三、宮崎県えびの市教育委員会
・竹中正巳・柄本優子・下野真理子 二〇一〇a「島内地下式横穴墓群から新たに出土した受傷痕を認められる古墳時代人骨」『鹿児島女子短期大学紀要』四五、一―五頁
・竹中正巳・柄本優子・下野真理子 二〇一〇b「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土の人骨」『えびの市埋蔵文化財調査報告書 四九―島内地下式横穴墓群Ⅱ』一二一―二〇七頁、宮崎県えびの市教育委員会
・辰巳和弘 二〇一一『他界へ翔ける舟―「黄泉の国」の考古学』新泉社
・田中晋作 二〇〇二「古墳時代の軍事組織について」『古代東アジアにおける倭と伽耶の交流、第5回歴博国際シンポジウム』一〇五―一一四頁、第5回歴博国際シンポジウム事務局
・塚本 敏夫 二〇一七「武具変遷の変遷―三段階の画期―」『平成29年度夏季企画展 鎮物としての武器・武具―武具埋納祭祀の展開―』四四―四七頁、元興寺文化財研究所
・南雲芳昭 二〇一九「人が乗る馬形埴輪」『集まれ！ぐんまのはにわたち』一二八―一三三頁、群馬県立歴史博物館
・平田健 二〇〇八「H.v.シーボルト著『考古説略』と明治期の日本考古学」『明治大学図書館紀』一二、一三九―一五六頁

- 松井章・丸山真史 二〇一四「古代の馬 日本在来馬の起源」『Biostory』二一、一四―一八頁
- 松浦晶央 二〇二一「在来馬の運動能力 ほんとうにタフなのか」『日本の馬―在来馬の過去・現代・未来』一四五―一六四頁、東京大学出版会
- 松木武彦 二〇一七『人はなぜ戦うのか―考古学からみた戦争』中央公論新社
- Chiga, H. 2004. “Eine neue Welle kultureller Einflüsse”, Zeit der Morgenröte. Japans Archäologie und Geschichte bis zu den ersten Kaisern, Reiss-Engelhorn-Museen: 336-341.
- Coblenz, W. 2002. “Archaeology under Communist control: the German Democratic Republic, 1945-1990”, Archaeology, ideology and society: The German experience, Peter Lang: 308-341.
- Gellert, C.A. 2018. From the Earthly to the Celestial: Material Culture and Funerary Practice at Japan’s Sixth-Century Fujinoki Kofun, Diss. Univ. California, Berkley, <https://escholarship.org/uc/item/6mw435f6> (2021.10.14閲覧).
- Harl, O. 1996. Die Kataphraktarier im römischen Heer-Panegyrik und Realität. *Jahrbuch des Römisch-Germanischen Zentralmuseums Mainz* 43(2): 601-627.
- Junkelmann, M. 1996. *Die Reiter Roms. Teil 2: Der militärische Einsatz*, Mainz: Philipp von Zabern.
- Kang, H.R., and Chung, E. 2020. Silla Dynasty horse armor requires a big lift: First-of-its-kind discovery will soon go on public display, Korea JoongAng Daily. 2020.04.13, <https://koreajoongangdaily.joins.com/2020/04/13/koreanHeritage/Silla-Dynasty-horse-armor-requires-a-big-lift-Firstofitskind-discovery-will-soon-go-on-public-display/3076003.html> (2022.01.02閲覧)
- Jäger, U. 2006. *Reiter, Reiterkrieger und Reiternomaden zwischen Rheinland und Korea: Zur spätantiken Reitkultur zwischen Ost und West, 4.-8- Jahrhundert n. Chr.,* Langenweißbach, Beier & Beran.
- Koschik, H. 2002. Zwischen ‘vaterländischer Alterthumskunde’ und moderner Landesarchäologie : Geschichte und Entwicklung des Faches. *Menschen, Zeiten, Räume : Archäologie in Deutschland, Theiss*: 20-28.
- Kossak, G. 1999. Prähistorische Archäologie in Deutschland im Wandel der geistigen und politischen Situation, Bayerische Akademie der Wissenschaften.
- Kreiner, J.1980. Heinrich Freiherr von Siebold: Ein Beitrag zur Geschichte der japanischen Völkerkunde und

Urgeschichte, Beiträge zur japanischen Ethnogenese – 100 Jahre nach Heinrich von Siebold, Japanologisches Seminar der Universität Bonn: 147-203.
- Matsugi, T. 2018. The Development of Metalworking and the Formation of Political Power in the Japanese Archipelago, Burial Mounds in Europe and Japan. *Comparative and Contextual Perspectives.* Oxford: Archaeopress: 173-181.
- Siebold, PF. 1832. *Nippon : Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzländern Jezo mit den südlichen Kurilen, Krafto, Koorai und den Liukiu-Inseln*, Leyden: Hoek.
- Stein, B. 2017. Granulation and the Tree of Life: How Goldsmithing Techniques and Religious Beliefs Connect the Far East with the West. *Crossroads: Studies on the History of Exchange Relations in the East Asian World* 15: 1-27.
- Stein, B. 2018. History of Archaeology in Japan. *Encyclopedia of Global Archaeology* https://doi.org/10.1007/978-3-319-51726-1_3370-1.
- 신광철 二〇一九「4－6세기 중장기병 문화의 유행과 신라・가야의 대응 전략」『가야학술제전 삼국시대 마주・마갑 연구 성과와 과제 토론영상』五三－九三頁、국립김해박물관

図版出典

図1 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Naturalis_Biodiversity_Center_-_Siebold_Collection_-_Philipp_Franz_von_Siebold_-_Portrait.JPG

図2 Kyushu University Library Collections

図3 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Siebold-Kokosetsuryaku-1879.jpg

図4 国際日本文化研究センター https://sekiei.nichibun.ac.jp/GAI/ja/detail/?gid=GG069014&hid=726

図5 Bundesarchiv, Bild 183-N0327-0008 / Raphael (verehel. Grubitzsch), Waltraud / CC-BY-SA 3.0

図6 National Research Institute of Cultural Heritage (NRICH), Korea Open Government License, https://portal.nrich.go.kr/kor/journalUsrDtlView.do?menuIdx=570&idx=&d_idx=170

図7 ColBase: Integrated Collections Database of the National Institutes for Cultural Heritage, Japan, https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-22288?locale=en

図8　ColBase: Integrated Collections Database of the National Institutes for Cultural Heritage, Japan, https://colbase.nich.go.jp/collection_items/narahaku/730-1?locale=en
図9　著者作成
図10　文化庁所蔵・奈良県立橿原考古学研究所附属博物館保管　http://www.kashikoken.jp/museum/yamatonoiseki/yamatonoiseki.html
図11　著者撮影
図12　著者撮影

第9講

鉄器研究から見た日本考古学

ジョセフ・ライアン　岡山大学文明動態学研究所 特任准教授

ジョセフ・ライアン　Joseph Ryan

一九八九年　アメリカ生まれ
二〇一〇年　ハワイ大学　卒業
二〇一五年　大阪大学修士課程　修了
二〇一八年　大阪大学博士課程　修了
二〇二二年　岡山大学文明動態学研究所　特任助教
二〇二三年より　岡山大学文明動態学研究所　特任准教授

専門は弥生～古墳時代の考古学・鉄器の生産と流通からみた集団間関係・東アジアにおける国家形成

著者紹介

ジョークまで上級の日本語を駆使するジョセフさんとは、イングランド東部にある都市ノリッジでの会合で初めてお会いしました。サイモンさんが作ってくださったご縁で、二〇一八年のことでした。それ以前から何度かメールでのやりとりはあったのですが、その度に直接お会いする機会を逃していました。ノリッジからロンドンへと移動しながらの旅の中で、好奇心の旺盛な、活発な方だなあという印象を受けました。その後、彼の研究について少しずつ知る機会があり、本当にこの人はアメリカ人なのだろうか、かたっぱしから実測をしまくるなど、むしろ最近の日本の学生がやりたがらないような、典型的な日本の考古学者のような研究の仕方をされているなあ、と感銘を受けた次第です。

はじめに

遺跡や古墳から出土する昔の鉄器は錆に覆われており、その形状がわかりにくい場合が少なくありません。ですので、本日はまず、私がなぜ、鉄器というやっかいな遺物に手を出したのかを簡単にお話しさせていただきます。大阪府藤井寺市にある古墳時代中期の野中（のなか）古墳は、大量の甲冑などの鉄製武器武具類が出土したことで有名です。[注1] その出土品は二〇一五年に重要文化財に指定されましたが、その指定に向けた再整理が、大阪大学の考古学研究室で私が入学した二〇一二年頃から始まり、運よく、入学直後から大量の鉄製武器武具類の観察と実測の日々を送るようになりました。この再整理の成果は、二〇一四年に大阪大学総合学術博物館より刊行された叢書に収められ、その二年後の二〇一六年に英語版も刊行されています。[注2] ご興味のある方はそのＰＤＦがインターネットに掲載されていますのでご確認ください。

鉄製品とその詳細な観察・実測との偶然の出会いが、その後の私の研究路線を大きく決定づけたと考えております。

本日は、古墳から出土する鉄製品を系統的に整理したうえで、古墳時代の地域有力者の在地社会における性格について考えてみます。

注1　北野 一 九七六
注2　高橋ほか編 二〇一四、Takahashi et al. Eds. 2016

理論的背景

細かな鉄製品の話に入る前に、理論的な背景について少し触れてみます。ご存じのように、古墳時代は日本列島の国家形成期と認識されていますが、その中心となる初期ヤマト政権の統治方法や成熟度合いについては、議論が続いています。特に、中心周辺関係や地域支配の実態が注目されます。海外でも、広域に広がる複雑化社会を巡る従来の研究は、政治的中心や、エリートのなかでも上位有力者に大きく偏重しており、周辺地域や下位層の主体性が十分検討されてきたとは言い難い現状にあります。結果的に、広範囲にその影響が確認できる中央集権的な国家や帝国は、揺るぎない一枚岩とされ、領土全般が強力な支配下に置かれているとされることが多いと言えます。

これに対して、近年、そうではなく、権力がより分散的である点、統治方式が多様である点[注3]、あるいは、「領土が一枚岩で権力の及ぼされるあり方が均質的」ではなく、政治中心の直接支配が及ぶ範囲がよりモザイクである状況を呈すると[注4]考えられるようになってきています。さらに、政治中心と周辺諸地域をつなぐ中間エリートや下位層のきわめて重要な役割[注5]、すなわち、政治中心の地域支配方式は、在地有力者の協力なしでは実現不可能であり、政治中心から地域へという一方的な力関係のみならず、地域勢力の主体性という多元的なベクトルも注目されています。中間エリートの研究は、ワリやインカなど古代中南米を対象としたものが多いものの、ヨーロッパの植民地・帝国主義時代や大航海時代においてもその重要性が指摘されており[注6]、広く注目されています。

古墳出現期の最高権力者

古墳時代の日本列島に話を戻します。古墳時代前期の政治中心は奈良盆地東南部にあって、大型前方後円墳や前方後方墳は奈良盆地を中心に瀬戸内海沿岸地域に色濃く分布しています（**図1**）。これら初現期の有力前方後円墳や前方後方墳（以下、「前方後円墳」）の副葬品のなかには、三角縁神獣鏡・素環頭大刀・小札革綴冑など中国の魏との政治交渉を表徴する貴重品（威信財という言い方もある）があり、それらは初期ヤマト政権の傘下に入ってくる地域有力者に優先的に配布されていると指摘されています。そして、地域有力者と初期ヤマト政権との関係が、前方後円墳という墳形

注3　Alcock et al., Eds. 2001; Feinman and Marcus Eds. 1998 ほか
注4　Smith 2005 ほか
注5　Elson and Covey, eds., 2006; Sinopoli 2001 ほか
注6　Robinson 1972; Sharman 2019 ほか

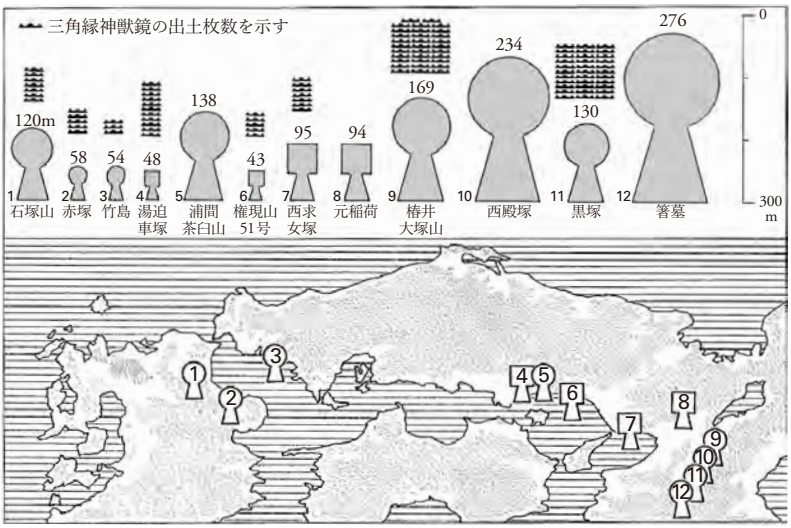


図1　古墳出現期の前方後円（方）墳分布

や、長大な割竹形木棺と竪穴式石室などの埋葬施設形態、そして副葬品の様子などに具現化されているとも指摘されています。こういった鏡や冑、非常に長い刀など豪華な副葬品の政治的器物が目立つため、初期ヤマト政権から地域へというベクトルのみが強調される場合が多いかと思います。

図1に、初現期の前方後円墳の分布図を示します。西殿塚古墳や箸墓古墳のように未発掘でブラックボックスの古墳もありますが、上位有力者の古墳において三角縁神獣鏡が基本的な副葬品であることがわかります。同様に、中国製の小札革綴冑も伴う場合があります。このように、地域有力者の性格も、初期ヤマト政権との関係のなかでしか理解されないケースが少なくありません。

この現状を打破するため、鉄鏃や刀剣類は重要な材料となります。すなわち、これらの鉄製武器は、在地社会における地域有力者の性格や役割、意義などを理解する一助になると考えています。

この問題を考えるうえで、岡山県岡山市にある浦間茶臼山古墳[注7]という全長約一四〇メートルの大型前方後円墳が非常に示唆的な存在と考えております。

浦間茶臼山古墳

浦間茶臼山古墳は、二八〇メートル前後の奈良県桜井市の箸墓古墳の半分ほどの規模を測ります。浦間茶臼山古墳より規模が大きい椿井大塚山古墳や西殿塚古墳は、副葬品や埴輪、土器などから時期的に下る

ことが明らかにされており、箸墓古墳と同時期の古墳としては、日本列島を見渡しても浦間茶臼山古墳がそれに次ぐ第二の規模を誇る、きわめて重要な古墳です。その被葬者は、初期ヤマト政権の連合体制のなかできわめて中核的な人物であったと言えます。

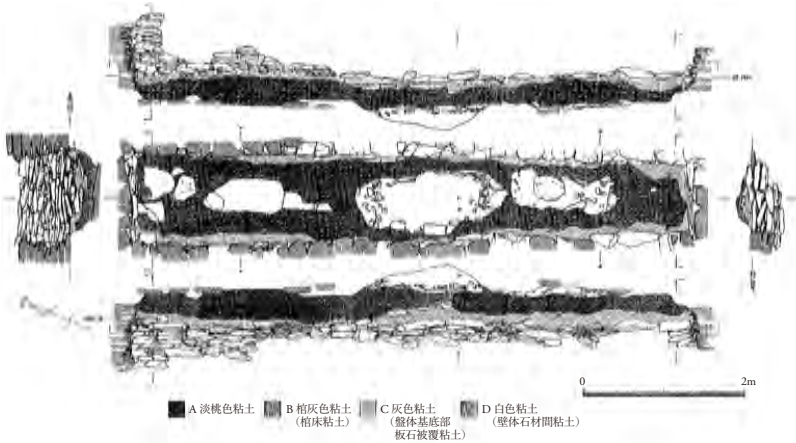
簡単に浦間茶臼山古墳について説明します（図2）。

岡山平野に所在する全長約一四〇メートルの大型前方後円墳であり、古墳時代前期初頭において箸墓古墳に次ぐ規模です。前方後円墳という墳形、長大な割竹形木棺と竪穴式石室、埋葬頭位が北であること、盗掘されているにもかかわらず、中国製の鏡、銅鏃二二本、鉄鏃四二本、刀剣二〇本以上、多くの農工漁具、小札一一枚以上と多種多様な貴重な副葬品が検出されていることを考えると、吉備の最高有力者の古墳であるだけでなく、古墳出現期の日本列島西部における重要人物であることも明白です。

浦間茶臼山古墳の鏃

浦間茶臼山古墳から検出されている鉄鏃と銅鏃について見ていきます。ここでは、どういった鉄鏃なのか、どういった銅鏃なのかが重要です。副葬品を系統的に整理する（いわば「解剖学的」なアプローチ）こ

注7　近藤・新納編 一九九一



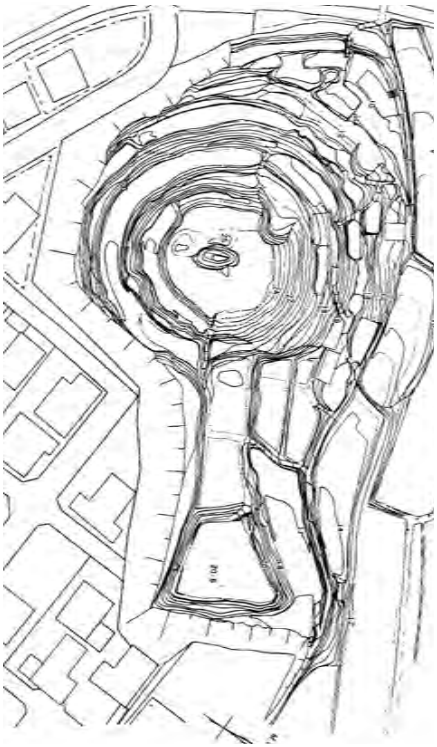


図 2　浦間茶臼山古墳

とによって、多くの重要な情報が得られます。古墳に副葬されている鏃には、さまざまな系譜、製作・入手背景を持つものが含まれており、これらの詳細な検討は被葬者像の解明につながると指摘されています。[注8]

まず銅鏃について簡単に触れておきます。**図3a**は有稜系柳葉式銅鏃で、まぎれもなくヤマト政権の象徴物と考えられる精美な形をしています。[注9] 一方、**図3b**は非常に珍しいタイプで、瀬戸内を特徴づける圭頭式銅鏃です。このように、浦間茶臼山古墳から出土した銅鏃には二種類が認められます。ヤマト政権という外部との関係を示すものと、瀬戸内という地域社会の系譜を汲むものです。

次に、鉄鏃の基礎的な話をします。松木武彦氏のご研究ですが、鉄鏃の形状は、大きく分けて次の三種類に分類できます（**図4**）。第一は、扁平かつ大型の平根系鉄鏃です。装飾的な個体が多く、儀仗鏃や非実用品と言われることが多いです。第二は、一般的な集落からも出土する単純な製作技術によるシンプルな形をした細根系鉄鏃です。実用的な鉄鏃と考えられ

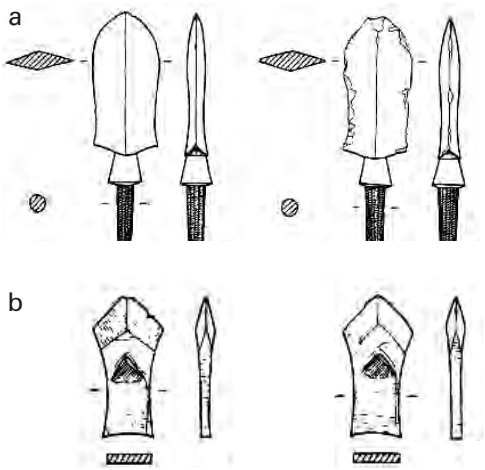


図3　浦間茶臼山古墳の銅鏃
a：有稜系柳葉式銅鏃、b：圭頭式銅鏃

注8　松木一九九六、池淵二〇〇二、川畑二〇一〇・二〇一五、ライアン二〇一九a
注9　松木一九九六

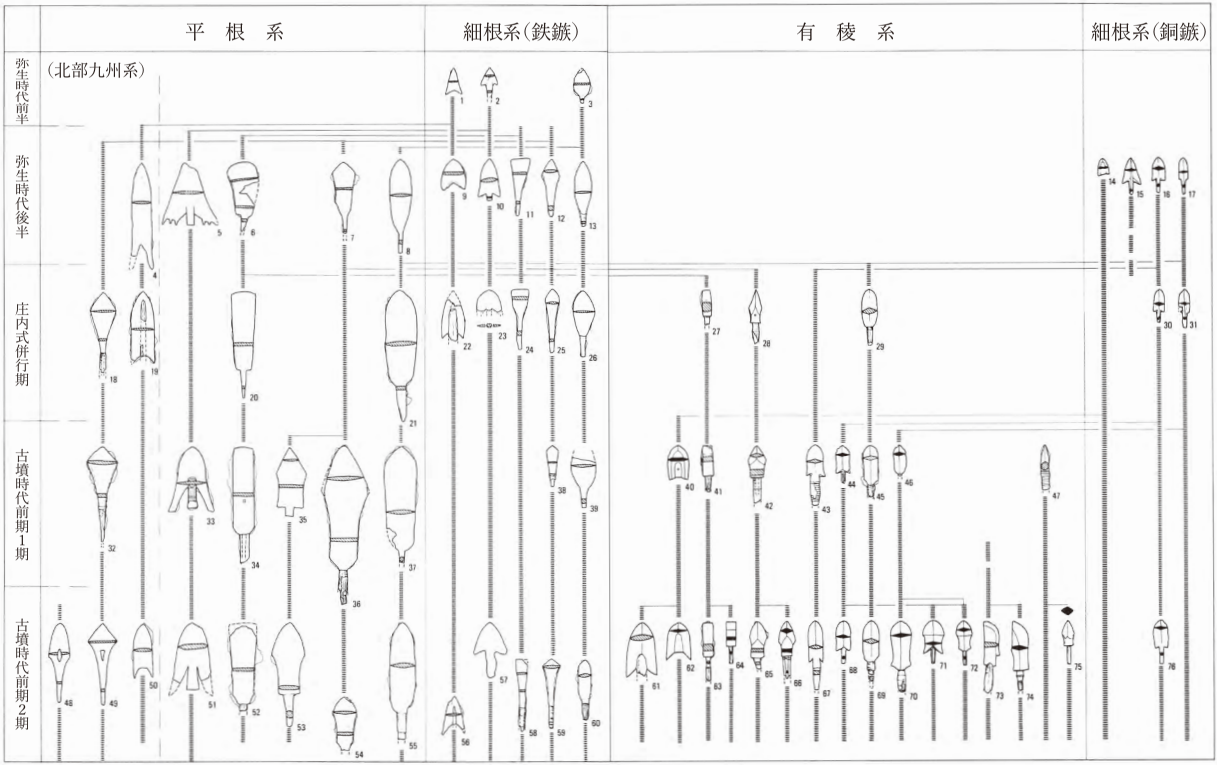
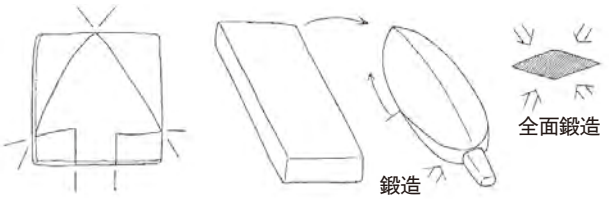


図４　古墳時代鉄鏃の３分類

ています。第三は、小型のわりに分厚く、複数の面や稜を持つ有稜系鉄鏃です。[注10]

鉄鏃の形状を理解するうえで、それらの製作技術が重要な鍵を握っています。鉄鏃の製作技術は、単純化すると、「鏨切り技法」と「丸鍛え技法」に大別できます（**図5**）。[注11] 鏨切り技法は、薄い板状鉄素材を鏨で切断する技法ですが、細根系鉄鏃や平根系鉄鏃に使われます。多少の研磨や鍛打を伴いますが、単純な製作技術でシンプルな形状の製品ができます。一方で、丸鍛え技法は、厚みのある鉄素材を多方向から鍛打して成形するもので、研磨も顕著に認められます。この技術を駆使した有稜系鉄鏃は、複雑な多面体状の形状を有し、造形意識の高い、美しい製品です。この観点から浦間茶臼山古墳の鉄鏃を分類すると**図6**のようになります。

古墳時代前期の一般的な集落から出土するシンプルな鉄鏃と古墳から出土する複雑な形状の鉄鏃を比較したものが、**図7**です。集落から出土する細根系鉄鏃は、形状も技術もシンプルで、厚みも薄いです。一方、古墳から出土する有稜系鉄鏃は、横断面形状を見るとわかるように、非常に分厚くて多様な面と陵を持つ複雑な形状をしています。こ



① **弥生時代鉄鏃**
板状鉄素材よりの
切断成形

② **古墳時代前期 小型柳葉式**
（丸鍛え造り）
厚みのある素材からの全面鍛造
加工後、鏃身研磨による鎬造り

図5　鉄鏃の製作技術と分類

注10　松木 一九九六
注11　村上 二〇〇三・二〇〇七、水野 二〇〇九ほか

のような有稜系鉄鏃は、有力者が所有する精美な武器形貴重品、すなわち威信財であり、以前は政治中心である初期ヤマト政権から配布されたと考える傾向がありましたが、近年、有力者同士が授受し合う場合もあったとみる見解が有力になりつつあります。

浦間茶臼山古墳から出土している鉄鏃は、錆が進行していて遺存状態が非常に悪く、全体的な評価が困難ですが、型式の特定可能な資料に限ると、大半が有稜系柳葉式鉄鏃です。初期ヤマト政権との関係が窺

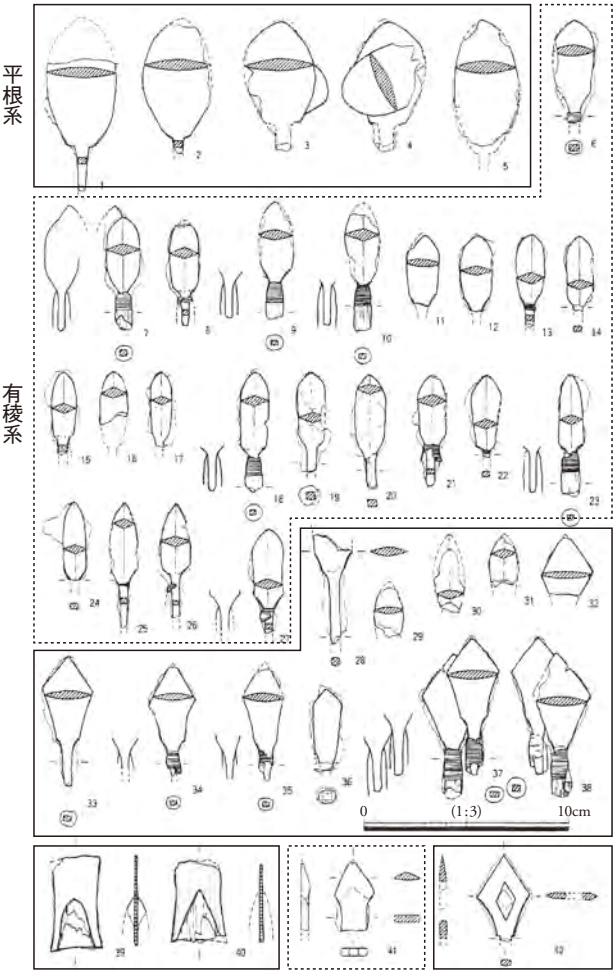


図 6　浦間茶臼山古墳出土鉄鏃の分類

えます。すなわち、政治中心から配布された可能性があります。

一方、**図8a**は浦間茶臼山古墳の平根系鉄鏃、**図8b**は岡山県域での類例です。ここで重要なことは、これらの鉄鏃が大型古墳だけでなく、みそのお古墳群のような在地的な伝統を引き継ぐような小型古墳からも出土しますし、一般的な集落からも出土することです。すなわち、外部から配布されたものではなく、在地社会との関係で理解できるものです。[注12]

もう一つの種類の平根系鉄鏃も出土しています（**図6**：33～35、37～38）。大型定角式鉄鏃という種類の鉄鏃で、その平面形態が特徴的です。同じような形状の鏃が、東部瀬戸内に集中しています（**図8c**）。初期ヤマト政権とは関係のない在地生産品で、大型古墳のみならず、集落からも出土する点が重要です。[注12]

これまでの内容を簡単にまとめます。

型式学的な検討により、浦間茶臼山古墳の鏃は大きく二相に分けることができます。一つは、初期ヤマト政権との交流が認められる製品です。有稜系柳葉式銅鏃と有稜系柳葉式鉄鏃がそ

注12　ライアン二〇一九a

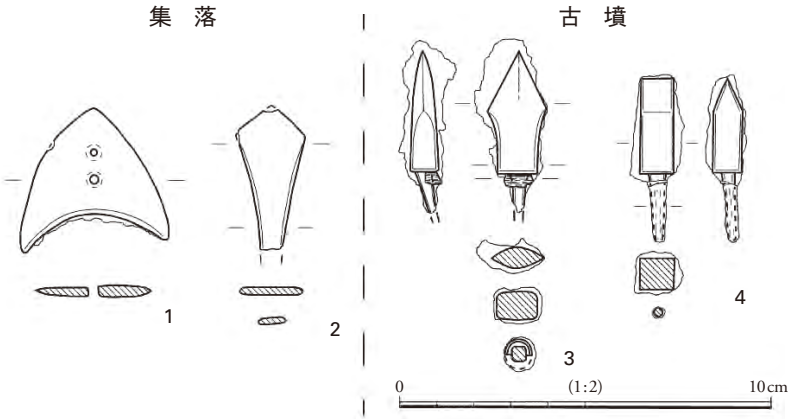
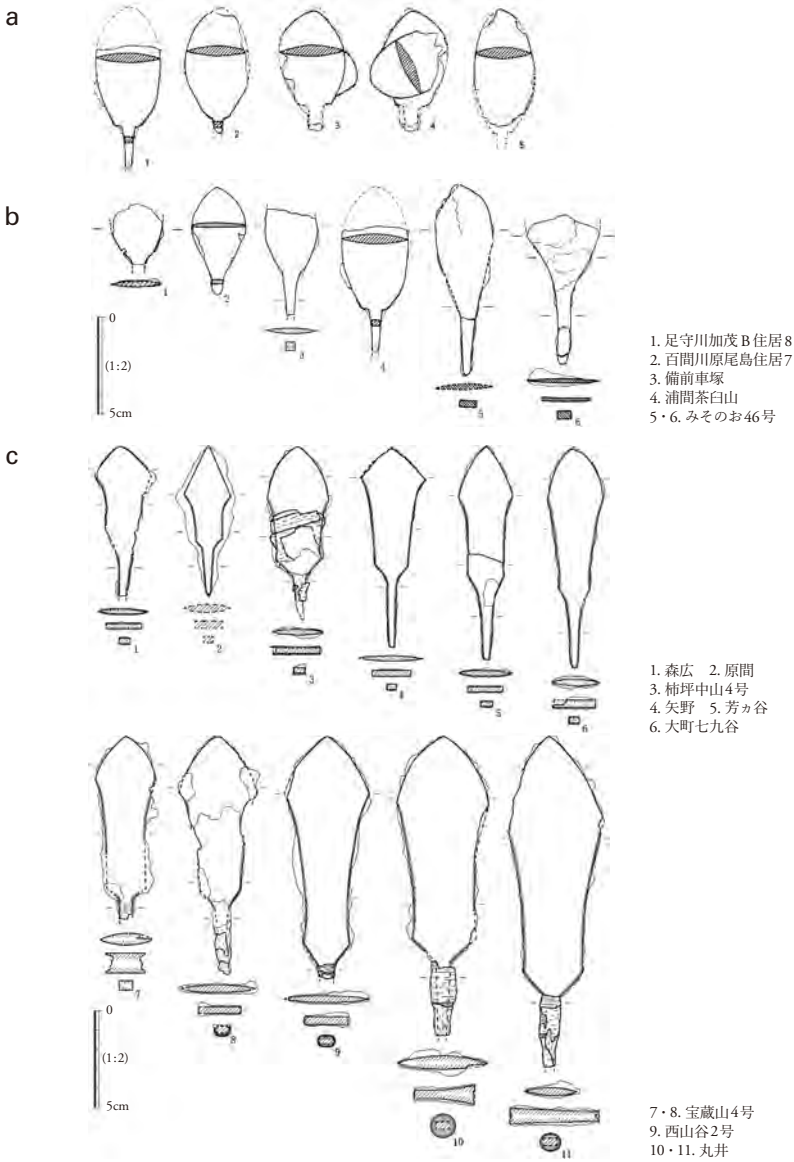


図7　古墳時代前期の集落出土鉄鏃と古墳出土鉄鏃の比較



1. 足守川加茂B住居8
2. 百間川原尾島住居7
3. 備前車塚
4. 浦間茶臼山
5・6. みそのお46号

1. 森広　2. 原間
3. 柿坪中山4号
4. 矢野　5. 芳ヵ谷
6. 大町七九谷

7・8. 宝蔵山4号
9. 西山谷2号
10・11. 丸井

図８　平根系鉄鏃の比較
ａ：浦間茶臼山古墳出土鉄鏃、ｂ：岡山県での出土例、
ｃ：東部瀬戸内から出土する平根系鉄鏃（大型定角式鉄鏃）

の代表例です。もう一つ、大型定角式鉄鏃を含む平根系鉄鏃は、在地社会の系譜を汲む製品です。

口巻きと矢柄先端処理の意義

従来の鉄鏃の研究は、鉄本体の形態的特徴に基づいた型式学的な検討にとどまるものが主体的でした。しかし、金属製の鏃は、矢の一部にすぎないという事実を忘れてはなりません。すなわち、金属製の鏃の茎を長い竹の筒（矢柄）に挿入し、繊維でできた口巻きを巻き付け、末端に矢羽根をつけることで、初めて「矢」として成立します。金属製の鏃以外のいろいろな有機物の部分に豊富な属性が含まれており、それらを総体として見ていく必要があります。しかし残念ながら、多くの場合、鉄鏃にきわめて近い部分以外は朽ちてしまって残存しません。

こういった口巻きの素材や巻き方、さらに矢柄先端部の加工法には多様性が認められ、その差異は生産単位の差異を表している可能性が高いと指摘されています[注13]。工人の特徴や癖、流儀を表しています。いくつか生産単位の違いを持つものが混在している場合、製作背景および入手経路が異なる鏃の集合体と見る見解が有力となりつつあります（前掲注）。

注13　川畑二〇一〇・二〇一五

浦間茶臼山古墳から出土した鏃の口巻きは、「糸巻き」と「樹皮巻き」に大別できます。**図9a**は、糸巻きです。絹糸の可能性がありますが、破壊分析がなされていないため、確証は得られません。いずれにしても、非常に細い糸を巻き付けています。**図9b**は、樹皮特有の光沢を持つより広い単位の樹皮巻きです。

そして、矢柄先端の形状も重要です。どのように削っているのかが非常に重要な属性で、大きく三種類に分けることができます（**図10**[注14]）。ここでは深入りはしませんが、系統的に見ていくと、多様な入手経路を推測できる事例がでてきます。

川畑純氏のご研究ですが、口巻きと矢柄先端形状は、一基の古墳から出土する鉄鏃の多様な系譜を紐解くうえで示唆的です。たとえば、滋賀県雪野山（ゆきのやま）古墳の鏃を見ると、樹皮の口巻きで矢柄先端が円筒形の群、また、同じ樹皮巻きでも矢柄先端形状が円錐台形の群があります。さらに、樹皮ではなく糸巻きで矢柄先端形状が楕円筒形の群もあります。これらは製作背景と入手経

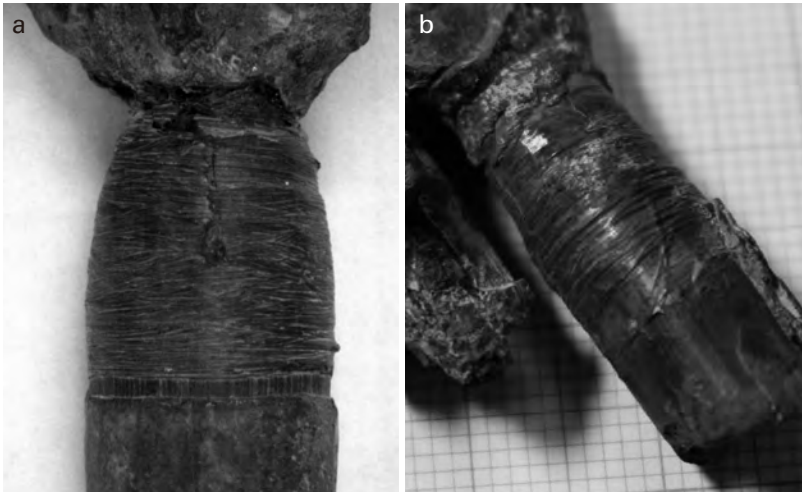


図9　鏃の口巻きの種類
a：糸巻き、b：樹皮巻き

路の異なるものが最終的に同じタイミングで副葬された鏃群である可能性が高いです。このように、鏃の平面形態や材質の違いだけではなく、口巻きや矢柄先端の加工方式などといった有機物の情報を細かく見ていくことにより、副葬されている鏃の多様な系譜や系統を明らかにすることができます。

このような研究手法は大変有効であると考え、浦間茶臼山古墳の鉄鏃を同じように分析したところ、口巻きと矢柄先端形状の違いは、これまで見てきた鉄鏃の形状による分類、すなわち在地系のものと外部系のものとの二系統とみごとに合致します。在地系は平根系鉄鏃の樹皮の口巻きで、矢柄先端形状は楕円筒形です。一方で、外部とのつながりを示す（配布された可能性が高い）有稜系鉄鏃は、すべて糸巻き、矢柄先端形状は円錐台形です。それだけではなく、口巻きの長さ、すなわち巻かれている範囲も系統ごとにまとまります。糸巻きの長さより樹皮巻きは長くなっています。それぞれ製作背景がまったく違うことがわかります。要するに、鉄鏃の形状から見えてきた初期ヤマト政権との関係を示す一群と、在地社会との関係を示す一群の差異は、金属製の部分だけでなく、有機物の側面からも追認することができます。この二群は、それぞれ異なる背景のもとで製作・入手された可能性が高いと考えられます。[注15]

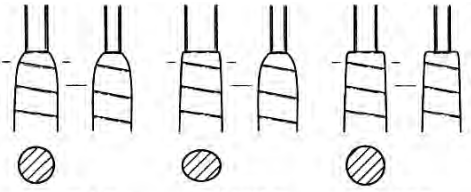


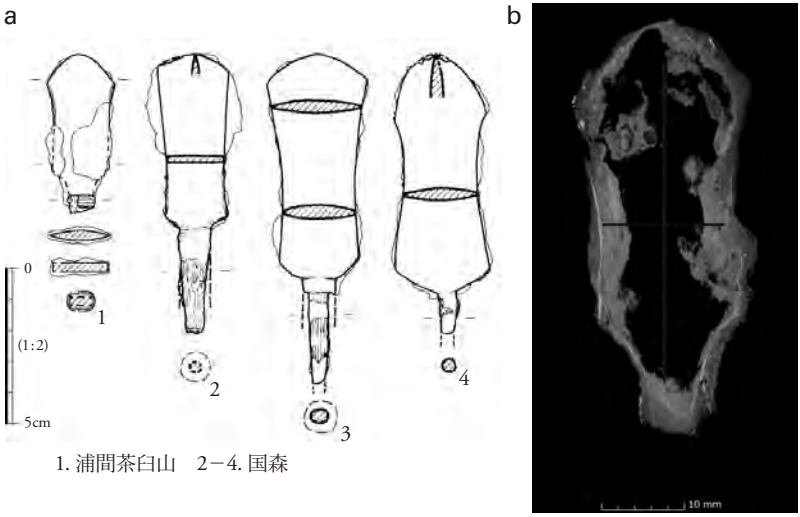
図 10　矢柄先端形状の分類

注14　川畑二〇一〇・二〇一五
注15　ライアン二〇一九a

有稜系鉄鏃の再検討

浦間茶臼山古墳出土の鉄鏃を少し細かく見ていきます（**図11a**）。この個体は、報告書では有稜系鉄鏃、つまり外部とのつながりを示す資料とされていましたが、肉眼観察によって私は有稜系鉄鏃ではなく、外形線の湾曲により特徴づけられる平根系鉄鏃の可能性が高いと考えました。このようなタイプの平根系鉄鏃は、山口県国森古墳をはじめとする地域の古墳からも出土しています。ただし、錆びている鉄製品は肉眼観測だけでは限界があるため、別の手段で検証する必要があります。そこで、X線CTを用いて検討してみました。その結果、平根系鉄鏃であることが確実視できました（**図11b**）。

そうなると、在地的な平根系鉄鏃と同じような評価ができます。さきほど、在地系の鉄鏃の口巻きと矢柄先端の形状が外部のものと異なる点を指摘しま



1. 浦間茶臼山　2－4. 国森

図 11　浦間茶臼山古墳出土有稜系鉄鏃の再検討
a：形態による比較、b：X 線 CT 撮影像

したが、有稜系鉄鏃ではなく平根系鉄鏃と位置付け直した場合、この傾向と整合的かどうかが大きな問題となります。もし、平根系だが糸巻きであれば、私の論は崩れてしまいます。

この個体の有機物を検討したところ、ほかの平根系鉄鏃と同じような樹皮巻きで楕円筒形の矢柄先端を有しており、同一の属性を持つことがわかりました（図12）。

まとめ

古墳の副葬品総体はそのままの形状で完成されたパッケージとし

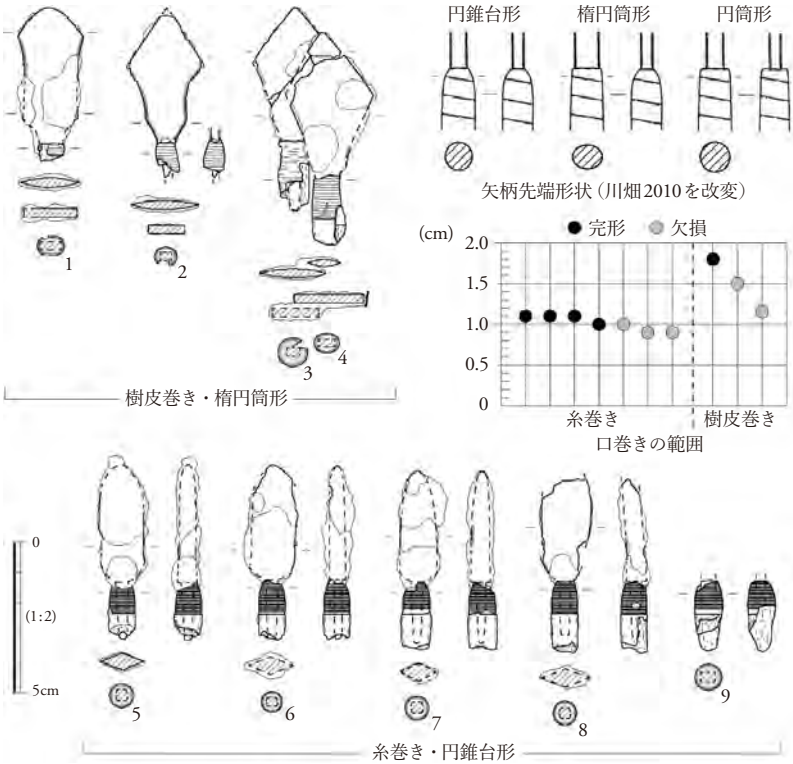


図 12　在地系と広域流通系の鉄鏃

て入手されたのではなく、さまざまな製作背景や来歴を持つ器物の集合体と見るべきです。これらの背景を検討することで、被葬者の生前の諸活動や地域関係がより明らかになることが期待できます。浦間茶臼山古墳は、巨大な墳丘と長大な竪穴式石室、北頭位、多種多様な副葬品などから、ヤマト政権を中心とする社会政治的体制、都出比呂志氏の提唱された前方後円墳体制[注16]のような社会政治的体制における中核的な存在であったことは明白です。このような被葬者でも、鏃には二相が認められます。すなわち、ヤマト政権に連なる広域の有力者という「外部」との共通性と、吉備または瀬戸内の地域社会との共通性です。吉備の最高有力者とはいえ、中小古墳や場合によっては集落の出土品との共通性が見いだせ、被葬者の在地社会との密接な関係が読み取れます。これは、有力者の二面性、あるいは有力者が持つ二つの顔と言い換えることができるかもしれません。

　このことは鏃だけではなく、刀剣類にも認めることができます。**図13**の左半分は、浦間茶臼山古墳から出土した刀剣類の一部です。**図14**において縦軸が岡山県域の鉄剣の最大幅です。幅広い鉄剣は、基本的に

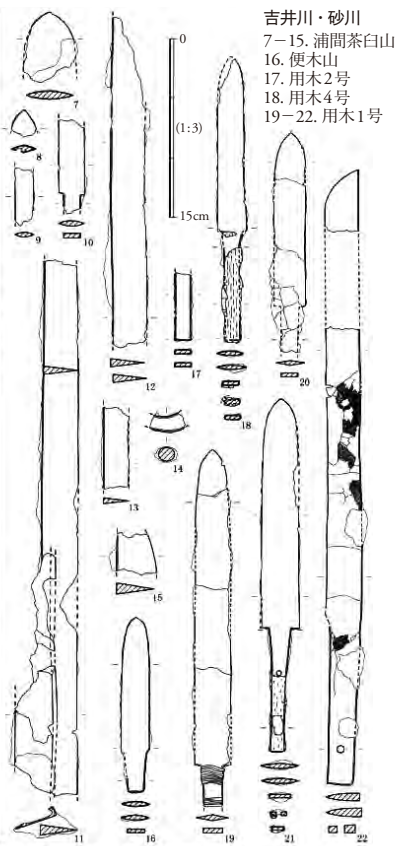


図13　古墳出土刀剣

大型の前方後円墳などの有力古墳に優先的に副葬されるのに対して、細身の鉄剣は在地的な小型古墳から検出される傾向にあります。にもかかわらず、浦間茶臼山古墳からは広域の大型前方後円墳と共通性を示す幅広の鉄剣だけでなく、在地的な古墳や集落から検出されるような細身の鉄剣も出土している事実に注意が必要です。

鉄剣の身部の厚みを見ても、五ミリメートルより分厚いものと、薄いものに分けられますが、大型古墳で三角縁神獣鏡と共伴する刀剣類は、重厚な厚手の資料が多いです。一方で、集落や在地的で伝統的な系統をひくような小型古墳から出土する刀剣類は、薄手の資料が目立ちます。浦間茶臼山古墳は両方とも出土していますので、鏃に見られる二相だけでなく、刀剣類、金属製武器全般においても二相が確認できました。

ここで冒頭で触れた中間エリートの話に戻ります。

これまで古代中南米が主な研究対象となっていた中間エリートの存在を、考古資料から抽出するのは非常に困難です。しかし、日本列島の古墳時代研究は、精緻な編年的・型式学的研究に裏付けられた詳細なデータが蓄積しており、中間エリートの存在の抽出のみならず、各地域における有力者の性格や地域間関係、諸活動などの解明に迫りえます。このように、古墳時代

注16　都出 一九九一

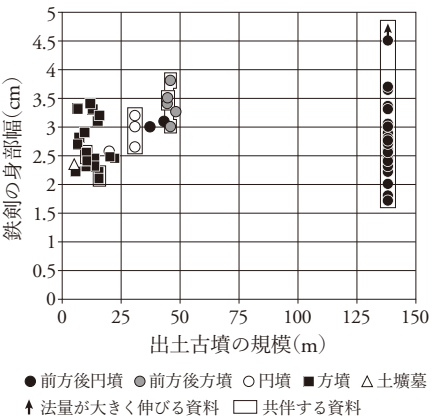


図 14　鉄剣の身部幅と古墳の規模

研究も、中間エリート論に大きく貢献できると期待できます。さらに議論を広げれば、世界の国家形成論に有益かつ具体的なデータを提供することができるので、日本考古学の強みをいかしていきたいと考えております。

おわりに

最後に、いま取り組んでいる研究について少し触れます。さきほど述べましたように、錆びて肉眼観察ではよくわからない鉄製遺物の内部構造や断面形状をX線CTで検討しております。

もう一つ、デジタルマイクロスコープを用いて、ヤリや鉄鏃に巻き付けて

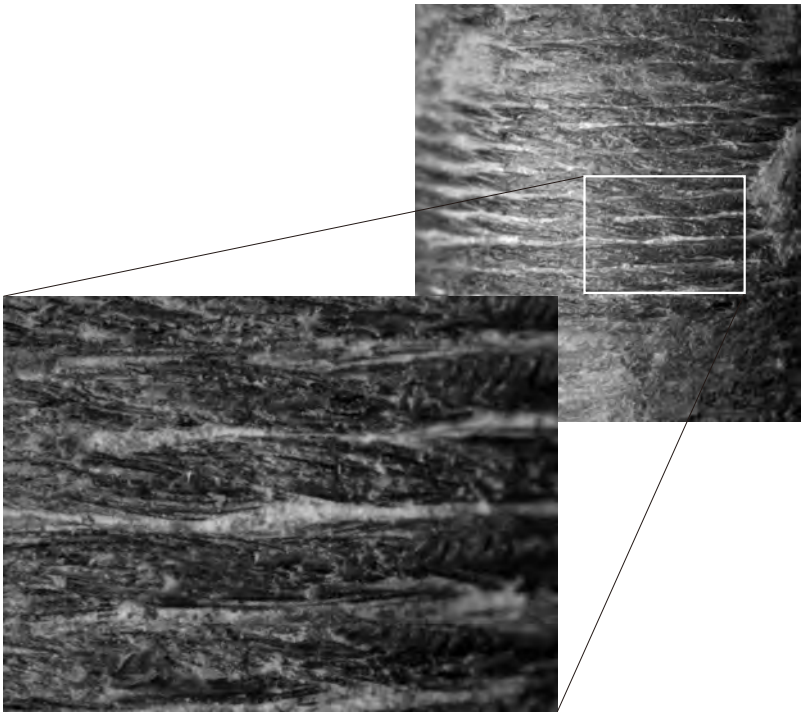


図15　デジタルマイクロスコープを用いた繊維の観察

ある繊維について検討しております。たとえば、図15は浦間茶臼山古墳の鉄鏃ですが、糸が二本一組になった撚糸です。撚糸の場合、その回転方向、すなわちS撚りなのかZ撚りなのかが重要な着眼点となります。こういった有機物情報を細かく分析することで、より多様な系統分けが可能になります。これは現在進行形の研究ですので成果が上がれば改めて発表したいと思います。ご清聴ありがとうございました。

Q&A

Q　浦間茶臼山古墳において、広域流通品と在地副葬品の量的な差異はあるのでしょうか。あるとすれば、そこからそれぞれの社会とのかかわりを読み取ることはできるのでしょうか。

A　おっしゃるとおり、量的な濃淡からそれぞれの社会とのかかわりを読み取ることができると考えております。有稜系鏃はまとまった単位で靫に入った状態で検出されることがあります。その意味では数量的な比較は少し難しいかもしれません。ただし、浦間茶臼山古墳の鉄製品全般でいうと、外部とのかかわりを示す副葬品が多く、在地系の副葬品はそれに次ぎます。その比率を見ることで、有力者の外部とのかかわりだけではなく、当時の人々が葬送儀礼を通して、どういった被葬者像を描き出そうとしていたのかがわかるのではないかと思います。演出の問題を含んでい

るので、考古学で議論するのは容易ではありませんが、多岐にわたる課題を秘めていると思います。

Q　広域と在地との二つに分けて議論されていますが、広域のなかでも別の地域というか、たとえば、大和のど真ん中からのものしかないのか、別の地域から複数持ち寄っているのかは、見えてくるのでしょうか。

A　きわめて重要なご質問、ありがとうございます。時間の関係でかなり単純化しましたが、先に示した滋賀県雪野山古墳から出土している平根系鉄鏃は二本一組で、透かしを持った大型鉄鏃ですが、同じような二本一組で透かしを持った大型鉄鏃が、佐賀県の西一本杉ＳＴ００９号墳からも出土しています。これらは、型式学的な類似性だけでなく、糸巻き・楕円筒形という有機物の部分も一致しています。仕上げ方も一緒なので、おそらく有力者同士の横のつながりを考えるうえでも重要な示唆を与えてくれると考えております。ほかにも、浦間茶臼山古墳からは有稜系鉄鏃がたくさん出土していますが、確実にヤマトとのつながりを示す柳葉式鉄鏃以外にも形状がよくわからない有稜系のものが多く出土しています。これがＸ線ＣＴを撮るきっかけでもあったのですが、有機物情報とＸ線ＣＴの結果をつきあわせて、柳葉式以外にどういった有稜系鉄鏃が出てくるかを検討することが今後の課題です。これを整理していくことで、有力者同士の畿内以外の地域とのつながりが見えてくると思います。

Q　とても面白い展開になりそうですね。もう一つ、絹糸で巻いているということですが、着色が確認できるものや染色していたことのわかる資料はあるのでしょうか。

A　西求女塚古墳のものとかいくつか見ておりますが、黒漆がべったり塗ってあったりするので、黒以外の染色についてはよくわかりません。漆は全般に塗られているため、撚りの様子もわからないものもあります。でも、そういった視点は面白いと思います。これからの課題ですね。

Q　矢柄に差し込んで巻いてから接着するためには、漆液で固定しているんですか。

A　そうです。染色以外にも繊維を中心とした有機物の固定に必要だったと思います。

Q　今回のご研究は、地域の中央に対するリアクションと、中央の意図の二つを検討できる内容かと思うのですが、どのようなお考えでしょうか。

A　いくつか検討可能なベクトルがあると思います。中央の地域に対するベクトルと、地域がどう受け入れるか、あるいは拒否するのかです。また、中央と在地社会という双方向的なベクトルや、地域有力者と他地域有力者との横の関係などです。それらをすべて網羅することは考古学的には難しいのですが、浦間茶臼山古墳だけでなく、ほかの古墳も含めて複眼的に見ていくことでより理解が深まるのではないかと思います。

Q　浦間茶臼山古墳の被葬者は、在地の豪族と考えてよいのでしょうか。その場合、国家形成論とは違い、地域社会の形成や地域の生態系利用という視点から、ご研究を進める可能性はあるのでしょうか。

A　重要なご指摘、ありがとうございます。今回は、浦間茶臼山古墳の被葬者のヤマト政権との関係、そして地域社会との関係を、副葬品の系統的整理により明らかにしようとする試みです。こういった課題を確かめたうえで、おっしゃるような地域社会の内部の復元が可能になると思っており

ます。そこは今後の課題です。

Q　浦間茶臼山古墳の鉄鏃の口巻きに使われた絹糸は、大陸からの輸入品である可能性と、国内生産の可能性の、どちらでしょうか。

A　浦間茶臼山古墳の場合、破壊分析がなされていないので、実証的に検討するのは困難ですが、この時期、国内で絹糸の生産が認められるので、両方ともありうると思います。黒塚古墳などではよくわからない大量の有機物が検出されていますが、それらには大陸からの輸入品が少なからず含まれていると思います。はっきりこうだとは言いにくいのですが、多様な来歴を持つ器物と同じように混在しているのではないかと思います。

引用文献

・池淵俊一　二〇〇二「神原神社古墳出土鑿頭式鉄鏃に関する試論」『神原神社古墳』加茂町教育委員会、二一二－二四二頁
・川畑純　二〇一〇「古墳副葬矢鏃の生産・流通・保有・副葬」『古代学研究』第一八五号　古代學研究會、一－二〇頁
・川畑純　二〇一五『武具が語る古代史―古墳時代社会の構造転換―』京都大学学術出版会
・北野耕平　一九七六『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室
・近藤義郎・新納泉編　一九九一『浦間茶臼山古墳』真陽社
・高橋照彦・中久保辰夫（編）二〇一四『野中古墳と「倭の五王」の時代』大阪大学総合学術博物館叢書一〇　大阪大学出版会
・都出比呂志　一九九一「日本古代の国家形成論序説―前方後円墳体制の提唱―」『日本史研究』三四三　日本史研

究会、五－三九頁
・福永伸哉 二〇〇一『邪馬台国から大和政権へ』大阪大学出版会
・松木武彦 一九九六「前期古墳副葬鏃群の成立過程と構成―雪野山古墳出土鉄・銅鏃の検討によせて―」『雪野山古墳の研究』考察篇、八日市市教育委員会、三五一－三八四頁
・水野敏典 二〇〇九『古墳時代鉄鏃の変遷にみる儀仗的武装の基礎的研究』平成一八年度～平成二〇年度科学研究費補助金基盤（C）研究成果報告、奈良県立橿原考古学研究所
・村上恭通 二〇〇三「大和における古墳副葬鏃の形成」『初期古墳と大和の考古学』学生社、三四〇－三五〇頁
・村上恭通 二〇〇七『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
・ライアン・ジョセフ 二〇一五「The Archaeology of Weapons Burials in Ancient Japan」『待兼山論叢』第四九号 史学編、大阪大学文学研究科、五七－八〇頁
・ライアン・ジョセフ 二〇一九ａ「古墳出現期の瀬戸内における鉄鏃の生産と流通―浦間茶臼山古墳出土鉄鏃を中心に―」『古代吉備』三〇 古代吉備研究会、一三－三二頁
・ライアン・ジョセフ 二〇一九ｂ「古墳出現期における刀剣類の生産と流通の二相―吉備地域を中心に―」『日本考古学』四九 日本考古学協会、二三－四四頁
・Alcock, S.E., D'Altroy, T.N., Morrison, K.D., and Sinopoli, C.M. (Eds.). 2001. *Empires: Perspectives from Archaeology and History.* Cambridge: Cambridge University Press.
・Elson, C.M., and Covey, R.A. (Eds.). 2006. *Intermediate Elites in Pre-Columbian States and Empires.* Tucson: University of Arizona Press.
・Feinman, G.M., and Marcus, J. (Eds.). 1998. *Archaic States.* Santa Fe: School of American Research Press
・Robinson, R. 1972. Non-European Foundations of European Imperialism: Sketch for a Theory of Collaboration. In: Owen, R., and Sutcliffe, B. (Eds.), *Studies in the Theory of Imperialism.* London, Longman Publishing Group: 117-140.
・Sinopoli, C.M. 2001. Empires. In Price, T.D., and Feinman, G.M. (Eds.), *Archaeology at the Millennium.* Berlin/Heidelberg: Kluwer/Plenum: 439-471.
・Sharman, J.C. 2019. *Empires of the Weak: The Real Story of European Expansion and the Creation of the New World Order.*

Princeton: Princeton University Press.
・ Smith, M.L. 2005. Networks, Territories, and the Cartography of Ancient States. *Annals of the Association of American Geographers* 95(4): 832-849.
・ Takahashi T., Nakakubo T., Ryan, J., and Ueda, N. (Eds.). 2016. *Nonaka Kofun and the Age of the Five Kings of Wa: The Government and Military of 5th-Century Japan*. Osaka: Osaka University Press.

図版出典

図1　福永二〇〇一
図2・3　近藤ほか編一九九一
図4　松木一九九六
図5　水野二〇〇九
図6　近藤ほか編一九九一に加筆
図7　ライアン二〇一五
図8　ライアン二〇一九a
図9　筆者撮影
図10　川畑二〇一〇
図11・12　ライアン二〇一九a
図13・14　ライアン二〇一九b
図15　筆者撮影

第10講

分析が明かす古代の鍛冶

スコット・ライオンズ　*カリフォルニア大学バークレー校博士課程

スコット・ライオンズ　Scott Lyons

一九八五年　アメリカ生まれ
二〇〇七年　ワシントン大学セントルイス校　卒業
二〇一三年　京都大学修士課程　修了
二〇二二年　カリフォルニア大学バークレー校博士課程　修了
二〇二二年　九州大学比較社会文化研究院　外国人特別研究員
専門は古墳時代の鍛冶技術・環境考古学

*二〇二二年当時

著者紹介

カリフォルニア大学バークレー校にて羽生淳子先生の薫陶を受けた、新進気鋭のライオンズさん。初めてお会いしたのはおそらく七〜八年前。日本にもよく来られていて、お名前は聞いていました。仕事で立ち寄った橿原考古学研究所で、その時ちょうど鍛冶関連遺物の調査にこられていた彼に偶然会いました。彼も私のことを知っていてくれて、これは新しく人に会う時によくあることですが、共通の知り合いを多数見つけて、とても嬉しかったことを覚えています。リレートークの講演会では、博士論文の仕上げの時期に、しかも深夜の参加というご無理をお願いしてしまいました。さらにご本人のPCのトラブルまで重なってしまいましたが、見事に修羅場を乗り切ってお話ししてくださいました。

本日は、日本における古代鍛冶に関する科学的分析について、大阪府柏原市の大県（おおがた）遺跡という古墳時代中後期の鍛冶遺跡を例に説明し、次にヨーロッパで開発された新しい分析法について紹介します。

まず、今回のリレートークに関して、日本考古学の魅力の一つは、奈良文化財研究所のような海外の学生・研究者を歓迎してくださる研究機関があり、研究者がいることです。それらの方々のご協力・ご支援がなければ研究はほぼ不可能です。このリレートークの視聴者のなかには、直接私の研究を支援してくださった方が少なくないかと思います。日本の考古学や埋蔵文化財のコミュニティに深く感謝しております。

それに加えて、鍛冶技術の考古学的研究は、母国のアメリカで非常に限られた範囲でしか存在していませんし、他の国でも鍛冶技術を専門としている研究者も片手で数えることができるほどです。日本では、古代鍛冶技術の研究が可能であるうえに、考古学の大事な研究テーマとしてみなされていることも、鉄にハマった私にとっては、とても魅力的です。

鉄の魅力

私が鉄とその技術に興味を持ったのは、鍛冶職人が金属の特性を調整してあらゆる役割を果たす道具を製作できるからです。さまざまに成形できるだけでなく、硬くも柔らかくもできます。これらの特性は、

その化学的組成、微細構造の特性から生じるもので、鍛冶職人は熱処理や鍛接などさまざまな工程で炭素率を調整していきます。このような調整は、鉄製品を製作した人、匠の技術や意図を示すものであり、古代社会のさまざまな側面を検討するうえで興味深いものです。しかし、これらの属性は金属の微細構造に由来するため、X線写真などを用いた通常の考古学的な分析では観察することはほぼ不可能です。

幸いなことに、鉄製遺物は顕微鏡をはじめとするさまざまな手段を使ってミクロレベルで分析することができます。それにより、鍛冶技術、純度などがわかり、製造工程を分析することができます。たとえば、中世の日本刀の断面を分析すると（**図1**）、炭素含有量の多い部分と少ない部分が観察できます。すなわち、硬化したマルテンサイトやパーライト、フェライトをあわせて製作し、さらに刃の付近だけを焼入れという熱処理を行っていることがわかります。また、鉄滓（スラグ）が点在していることから、鉄素材の純度をある程度評価することができますし、溶剤や鉄滓などの介在物の観察によって、鍛鉄がそれほど精巧でないこ

図1　中世日本刀の断面図

とがわかります。

しかし、発掘調査で出土する鉄製品は、きれいに遺存しているわけではありません。基本的に完全に腐食していることが多く、金属鉄はまったく残っていないことも多いため、有益な情報をもたらすと考えられていても、情報を引き出すことはほぼ不可能です。

では、どのような分析が可能なのでしょうか。それにより、どのようなことがわかったのでしょうか。ここでは、時間の都合上、鉄の物質的な詳細や技術の基礎知識などは省略せざるを得ませんが、分析の目的と成果がわかるよう簡単に説明することにします。

製錬（製鉄）の工程

まず、基本的な製錬工程から（図2）、分析できることを確認してみます。極端に単純化すると、製鉄工程は、低炭素の鉄[注1]、または、何らかの鉱石（砂鉄も含む）、鋳鉄（ずく）から作られますが、どちらの工程からも金属鉄と一緒に金属中に包含された不純物、つまり鉄滓が発生するため、二次

注1　近世以降は鉄（けら）と呼ぶ

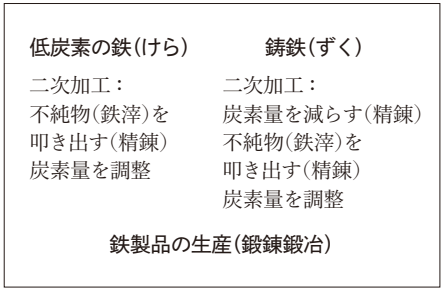


図2　製錬の工程

加工としての脱炭の工程が必要となります。

さらに炭素量を調整して、鉄製品に適した素材に加工していきます。この工程を「精錬」と呼びます。一般的に「精錬」と言うと、低炭素の鉄からスラグを、鋳鉄からは炭素量を減らす工程を指すことが多くなっています。混同を招く用語ですが、この工程を経て金属鉄を加工して製品にします。鉄製品の生産する工程を、一般的に鍛錬鍛冶と呼んでいます。

以上の工程は、日本ではいずれも木炭を燃料とした炉と送風を伴うもので、発掘調査で出土する鍛冶関連遺構・遺物のなかには、炉壁や送風管である羽口が含まれています。炉壁や羽口は土製品ですから、土製品に関するあらゆる分析を適用することが可能です。そして、ここで最も興味深いのは、土製品からの融解温度に関する情報です。羽口の状態などとあわせると、炉内温度と時間をある程度推測することができ、それによって工程を少し理解することができます。さらに、鉄滓と鉄塊系遺物も出土することがあります。土製品、鉄滓、鉄塊系遺物の三つが技術的に関連した分析対象となります。

鉄塊や鉄塊系遺物という曖昧な言葉ですが、文字通り、鉄の塊です。鍛冶のあらゆる工程に関連する可能性と、製錬系に関連するもの、鋳鉄系の鉄塊もあります。そのため、出土状況などの文脈や他の資料から区別することはできません。残念ながら化学的分析では理解を深めることはできません。

しかしながら、鉄塊は通常、出土した遺跡で加工された金属資料と考えられ、金属の特性を垣間見ることができる重要なものです。他の鉄製品と同様、完全に腐食していることが多いものの、金属鉄が残存している場合、どのような炭素濃度で使用されていたかなどを知ることができます。また、鉄滓は鍛冶関連遺物のなかで最も一般的に発見されるもので、どの工程で発生したかによって分類することができます。

製錬（製鉄）は非常に複雑なテーマで、大県遺跡での研究から少し離れてしまうため、本日は主に、製錬工程と製品の生産工程から発生する鉄滓に焦点を当ててお話しさせていただきます。

分析でどのようなことがわかるか

それでは、鉄滓とはどのようなものでしょうか。低炭素鉄の精錬は、不純物（滓）を含む鉄塊を熱し、叩いて、不純物を出す工程です。これにより鉄素材の純度を高めていきます。その工程で生じる鉄滓は、鍛冶滓と呼ばれます。鉄滓は叩く工程で生じますが、鉄製品の生産工程はよく似ているため、製錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓に区別することは、分析によってしかできません。

ただし、その素材は、精錬鍛冶滓も鍛錬鍛冶滓も腐食片と、燃料である木炭の灰、鉄滓、羽口の先端や炉壁、鍛錬に使う溶剤などが炉内で溶け合って発生するものです。炉の底部に付着したりします。鉄滓の大きさによっては、炉の形を保存している場合があります。

では、鉄滓の分析によって、どのような情報が得られるのでしょうか。まず、炉の温度がわかります。また、顕微鏡で鉱物組成などを観察することで化学組成の理解を深めることができます。ただし、鉄滓の一部を取り切って分析するため、資料は破壊されます。そのため貴重な資料は化学分析しないほうがよいとよく言われています。ただし、普通は資料のプレパラートが残るので、再観察は可能です。

化学組成分析により製鉄原料に関する情報が得られます。たとえば、チタンやジルコンの量により、原料が砂鉄か鉱石かがわかります。それに加えて砂鉄であった場合、どんな砂鉄であったかが推測可能です。

精錬で鉄滓が排出されると、それまで巻き込まれていた鉄滓と腐食片や燃料灰などの割合が変化するため、鉄滓中の鉄分から精錬滓か鍛錬滓かを推定することができます。全鉄分が五五％以上の鉄滓は鍛錬鍛冶滓、五五％未満は製錬鍛冶滓と考えられています。さらに、鉱石中の微量元素量から同様の区別が可能です。古代の鍛冶生産活動では、精錬と生産の境界が曖昧ですが、これの分析法は日本の優れたものであり、多くの遺跡の理解に大きく貢献しています。

ただし、鉄の産地同定は非常に難しく大きな課題です。金属考古学における「聖杯」のようなものです。近年、日本でもヨーロッパでも飛躍的な進展を遂げていますが、現状ではまだ限られた範囲でしか産地同定はできていません。

大県遺跡での分析結果

次に、このような分析によって大県遺跡でどのようなことが明らかになったかをお話しします。

大県遺跡は大阪府柏原市にある古墳時代中期から後期にかけての大規模な鍛冶遺跡です。一九八〇年代以降、多くの羽口や鉄滓、鉄塊系遺物などが出土して分析されてきました（図3）。

羽口の分析から炉内温度は一二五〇度に達し、その温度で鍛冶作業が行われていたことがわかりました。また、鉄塊系遺物の分析から、高炭素の鋼を含むさまざまな炭素量の鉄素材が存在していたようです。このことから硬い道具を作るための素材が生産されていたと考えられます。一部の道具には焼入れを行っていた可能性がありますが、製鉄鉄塊に不均質性があるため確実ではありません。

ただし、鉄滓や鉄塊系遺物の分析によれば、鍛冶工人は滓を多く含む低炭素の鉄素材を製錬していたようです。また、鉄滓に銅が含まれていることから、銅メッキした馬具などの鉄製品や金銅、銅板を製作していたか、それらをリサイクルして素材としていた可能性も指摘されています。実際に鉄鏃や馬具の一部など未成品の可能性がある鉄製遺物も出土しています。ただし、遺跡の規模や活動の幅広さを考えると、確実にそこで製作していたとは言い切れません。

これらは科学的な分析なしでは得られない重要な発見であり、その重要性は計り知れません。しかし、これまで一般的に行われてきた分析では、より保存状態のよい遺物や特徴的な遺物が

図３　大阪府・大県遺跡出土の鉄滓

出土するまで、得られる結論や解釈には限界がありました。それに対して、近年ヨーロッパで新しい分析法が開発され、それを大県遺跡にも利用することで、鉄滓からの製産工程に関する新たな情報を得られるものと期待されています。

新しい分析法

改めて鍛造滓とは何かを考えてみます。

鍛冶滓は、鉄の腐食片（つまり錆）と燃料灰、鉄塊からでた滓、羽口の先端や炉壁、溶剤などが熱で溶け合って発生するものです（**図4**）。しかし、よく考えると、これらはどの鍛冶工程でも均等に発生するわけではありません。

この鍛冶滓に対して、鉄製品のように化学組成だけではなく鉱物の微細構造も分析できるという考え方がヨーロッパで始まりました。鉄滓の微細構造は、炉内の温度や冷却速度に左右されます。鍛冶工程（鍛造、鍛接、熱処理）によって異なりますし、送風が止まると同時に鍛冶炉内温度は下がり始めるため、鍛冶滓には形成過程に関連した微細構造がマクロレベルに配置されることになります。

このことにスイスの研究者が気づき、その原理に基づいた分析方法を開発してヨーロッパの考古学遺跡からの出土鉄滓に適用しています[注2]。最近、飛鳥周辺から出土したものにも適用していますので、その方法

をもう少し詳しく説明します。

従来の分析との大きな違いは、鉄滓の表面だけでなく、その断面全体を観察しなければならないということです。鉄滓の形成過程から推測できるように、その性質は非常に多様であり、しばしば不均質です。ガラス状のものもあれば、結晶化したものもあります。鉱物が残留しているものや、融液から結晶化したもの、埋没中に変質して生じたものなどがあります。最も一般的なのはファイヤライトです。外縁にしばしば不純物の多い部分を含みます。酸化鉱物やケイ酸塩と一緒になっていることもあります。純度から鋼、鋳鉄までの金属鉄の粒子も点在します。さらに、溶けていない岩石や土製品の破片の存在も観察できます。化学組成は基本的に鉄とケイ素の酸化物が主で、鉄の酸化物が少ないものから多いものまでさまざまです。ケイ素酸化物量も変化しています。

そして、鉄滓は存在する物質から大きく三種に分類することができます。一つは、さまざまな量の酸化鉄を含むファ

注2　Serneels and Perret 2003

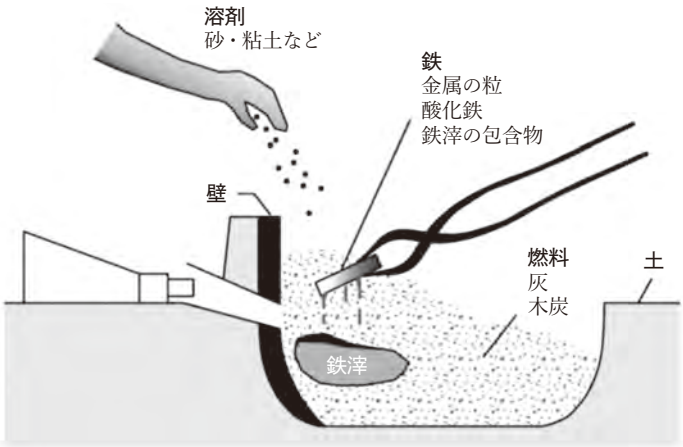


図4　鉄滓の形成過程

イヤライトの集合体で、少量の磨質性のガラスが含まれているものです。これをフランス語でscorie grise dense、SGDと呼んでいます。緑がかった灰色の塊で、低炭素鉄の製鉄工程で生成する滓に非常によく似ており、その組成は、主にケイ素の酸化物・鉄酸化物系の低温融解物です。完全に溶解していないと思われる酸化鉄鉱物によって形成された丸、または細長い、いわゆるゴースト構造を確認できるものもあります。

第二は、花崗岩質の一般的な岩石に含まれるケイ素やその他の元素を豊富に含むSAS（scorie argilo-sableuse）と呼ぶものです。鉄の含有量は常にナトリウムやカリウム、カルシウムより少なく、マグネシウムはさらに少なくなっています。多くはガラス質で、石英の残存粒子を多く含んでいます。色は黒、茶から青や緑のような明るい色のものもあります。場合によっては、岩石や土製品の融合していない粒子や、破片、いわゆるゴースト構造を確認することもできます。

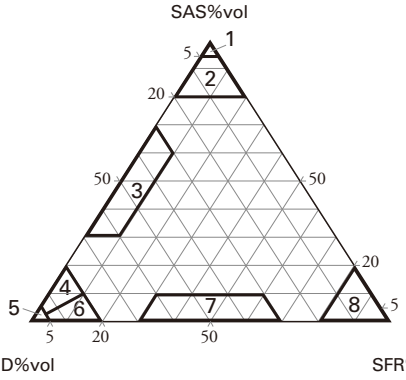
第三は、SFR（scorie ferreuse rouillée）と呼ぶもので、鉄を豊富に含み、鉄は金属酸化物または水酸化物の粒子として存在します。金属粒子は溶融物から結晶化したものです。このほかに、木炭の介在物も頻繁に見られ、ファイヤライトも存在しています。ちなみに金属鉄は、埋没中で部分的に水酸化物に変化します。

一つの鉄滓は一種類の材質で構成されることもありますが、多くの場合、異なる材質が複数のゾーンや層として存在しています。

この方法を開発した研究者は、材料間の比率に基づいて鍛冶鉄滓を八種類に分類しています（**図5**）。鉄滓の形状、色、多孔性、磁性、比重、鉱物学的・化学的組成などは、この分類にある程度リンクしてい

るようです。たとえば、典型的なＳＦＲは、密度が高く、錆びて磁性を帯び、形状は丸みがかっていることが多くなっています。それに対して、典型的なＳＡＳは色がさまざまで、形状は不規則、みかけの密度は高くありません。典型的なＳＧＤは、規則的な形状をしており、破断面は灰色で、気泡は少なく、上面は滑らかで濃い灰色か赤っぽい色をしており、下面は灰色の錆びた色をしていることが多くなっています。

この分類案を開発した研究者によると、鉄滓の化学的・鉱物的組成は主に鍛冶炉における作業を反映し



	形　式		%SAS 砂や粘土分が多い物質	%SGD 灰色で、高密度の物質	%SFR 鉄分の多く、錆だらけな物質
1	SAS		100		
2	SAS-M		80～90	10～20	10～20
3	SAS-SGD		50	50	
4	SGD-B		10～20	80～90	
5	SGD			100	
6	SGD-SFR		0～10	70～90	10～20
7	SFR-M			50	50
8	SFR				100

図５　鉄滓の多様な性質と形状

ています。つまり、異なる材質の割合（ＳＡＳ／ＳＧＤ／ＳＦＲ）に基づいて提案された分類で、鍛冶工程を反映しています。一方、鉄滓の寸法（サイズ、重量）は、他の特性とは無関係のようです。重さは製品の種類とも関係はなく、作業時間と関係があると考えられています。ただし、現時点では、ある種類の鉄滓と特定の鍛冶工程を明確に関連付けることはできません。実際、鍛冶工程は連続的であるため、その特定は不可能でしょう。それでも、いくつかの知見を得ることができます。

たとえば、ＳＧＤは、主に金属の高温酸化によって生成されるため、鉄素材を加熱する際にケイ素を少量投入します。この工程で失われる酸化鉄の量は、素材のサイズと作業時間に関係しているはずです。

また、ＳＦＲは、主に圧縮率の低い金属の加工中に金属粒子が失われることで発生します。さらに、鍛接作業中、つまり鉄素材を別の鉄素材の破片に溶接する、金属の融点に近い温度で作業している場合にも発生することがあります。つまり、高温で作業するときに発生します。

ＳＡＳは、鍛冶工人が金属表面に大量の溶剤を加えることで発生します。鍛接作業では、砂や粘土汁が溶剤の役割を果たすため、その成分が鉄滓にはいることになります。また、鉄を加工する際には、脱炭を防ぐために溶剤を金属にかけることがあります。さらに、製品が完成した後にも腐食を防ぐために溶剤をかけることがあり、その場合にもＳＡＳが発生すると考えられています。砂は鉄の酸化を最小限に抑えるために使われることがあります。

一種類の材質しか含まれていない鉄滓は、作業期間中にほとんど変化のない作業の結果です。一方、二種類あるいは三種類の材質からなる鉄滓は、一連の活動の成果であり、最初の段階で特定の材料が作られ、次の段階では別の種類の材料が作られます。そのため、ごく一般的なタイプの鍛冶滓は、下側に大き

なSGD部分（約九〇％）があり、その上側は小さなSASの塊で構成されています。このような構造が形成されるのは、長い鍛造作業でSGDができ、金属を守るための溶剤を塗布して仕上げる最終段階でSASがその上に生成するためと考えられます。その順序が逆転した資料はまったく確認されていません。そのことからも、分析の解釈は妥当であると考えられています。

材料に基づく分類と鍛冶滓のその他のデータとあわせることで、複数の遺跡における鍛冶工人の活動を比較することができます。幸運なことに、大県遺跡出土品を含めて、この新しい分析法を古墳時代の鍛冶滓に適用することができました。残念ながら現時点では結果を発表することはできませんが、この分析法は過去の鍛冶工人の活動をより詳細に明らかにする可能性があり、今後、皆様の研究のお役に立てば嬉しく思います。

発表は以上で終わります。ご清聴ありがとうございました。

Q&A

Q　この新しい方法には名称があるのでしょうか？

A　まだありません。セレニールズ、ペレ、ソルニャックの三人により開発された方法で、ヨーロッ

パやアフリカ以外ではあまり使われていないようです。

Q 鉄滓があった炉内の原位置がわからなくても、鉄滓の上下は見ればわかるのでしょうか？

A 炉内から出土すれば最高ですが、土坑や廃棄ピットから出土したものでも分析可能です。鍛冶炉の形状は、この分析には関係ありません。鉄滓自体が炉の形をしていることが多いものの、材質の構成はあまり関係がないと言えます。原位置から出土していない遺物でも有効な分析方法です。ただし、原位置からのものでないと、いつの時期のものかわからないことが多いので、その意味では有効とは言えないかもしれません。

Q 大県遺跡で帯金型甲冑が製作されていた可能性が指摘されていますが、分析結果などからその可能性についてどのように考えられていますか？

A その可能性は何人かの研究者が指摘しています。私自身は十分可能性があると思いますが、直接的な証拠はまだ得られていません。南郷（なんごう）遺跡群で生産された可能性が指摘されていたりしますが、なかなか複雑な問題です。

Q この分析をすることで、どのような製品を製作していたかがわかるということでしょうか？

A この分析によって、具体的にどのようなものを製作していたかはわかりません。この分析方法によってわかるのは、どのような技術で製作していたかということです。たとえば、焼き入れの熱処理や、溶剤を使って腐食を防ぐために高温作業が行われていたことなどがわかります。不純物の多いけらから精錬されていることも想定できます。

Q 複数の遺跡における鍛冶工人の活動を比較することができるということでしたが、古墳時代中期

から後期にかけて、この分析法を使用することで製錬・鍛錬以外の製作法についても適用することはできますか？

A　けら、つまり低炭素の鉄を製錬していたかどうかはこの分析法で特定できると思います。基本的に化学組成分析で製錬という活動が特定できますが、この分析法でも同様に指摘できます。比較資料として、森遺跡の出土品を比べると、別の製錬法を使っていたことが指摘できると思います。

Q　鉄生産の周囲の生態系との関連について、この分析によってどのようなことがわかるのでしょうか？

A　簡単に言えば、作業温度がある程度推測できます。作業温度が高ければ高いほど、燃料の使用量が多くなります。つまり高温度の作業がよく行われていると、その分燃料を必要とするので、周囲の森林をどの程度伐採したかをある程度考えることはできると思います。周囲の古環境の花粉分析などとの成果とつきあわせれば、その影響を見いだすことができると私は考えています。

参考文献

・天辰正義 二〇〇三「出土鉄滓の化学成分評価による製鉄工程の分類」『鉄と鋼』第九一巻一号、（社）日本鉄鋼協会
・大澤正己 一九八三「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』たたら研究会
・宮野淳一ほか編 二〇一六『大県遺跡・東高野街道―一般国道（旧）１７０号交通安全施設等整備事業に伴う発掘調査―』大阪府教育委員会
・Serneels, V, and Sébastien P. 2003. Quantification of Smithing Activities Based on the Investigation of Slag and Other Material Remains. In Archaeometallurgy in Europe, Proceedings of the International Conference, 24-25-26 September

2003, Milan: Associazione Italiana di Metallurgia

図版出典

図 1　著者撮影
図 2　著者作成
図 3　著者撮影
図 4　Serneels and Perret 2003 を改変
図 5　Serneels and Perret 2003 を改変

第11講

データサイエンスと比較考古学から見た日本の考古学

エンリコ・R・クレーマ　ケンブリッジ大学考古学部 准教授

エンリコ・R・クレーマ　Enrico R. Crema

一九八〇年　群馬県生まれ
二〇〇五年　ボローニャ大学　卒業
二〇〇七年　ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン考古学研究所修士課程　修了
二〇一三年　ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン考古学研究所博士課程　修了
二〇二〇年より　ケンブリッジ大学考古学部　准教授
専門は数理考古学・古人口学・集落論・文化進化論

著者紹介

人の縁というのは不思議なもので、クレーマさんが特別聴講生として東大の考古学研究室に初めて来た時に、当時博士課程学生であった私には、将来私たちがこのように緊密に共同研究をすることはまったく予想できませんでした。お互いに大学を離れた後も彼の活躍の話は聞いていましたが、直接会う機会を持てずにいました。二〇一四年にロンドンで十数年ぶりの再会を果たしましたが、その時に交わした会話は、ポップサイエンスなどを交えた刺激的なもので、大学者の片鱗を感じたものでした。従来の日本考古学の枠組みにとらわれず、数理考古学の立場から日本考古学の特徴を見直すことで、世界の他の地域との比較など、違う視点から日本を見ることにつながるのではないか、という期待もあり、話をしてもらうことになりました。

はじめに

私の専門はいわゆる考古学データの統計分析で、考古学の仮説を数理的に分析したり検証したりしています。特に、それらの情報を使用して、縄文時代の人口変動や集落の変遷、最近では弥生時代の稲作の伝播について研究しています。

いちおう数理考古学が専門なので大学でも統計学の講義を任せられていますが、皮肉なことに高校生のころは数学が大嫌いで、人文系分野に進めば数学と一切かかわらずにすむと思っていました。本日はなぜ、そんな私が毎日のように数学や統計学を使って縄文時代や弥生時代の研究をしているか、お話ししたいと思います。

このシリーズのテーマは「日本考古学の魅力」なので、最初に、私がどうして縄文・弥生時代に関心を持ち始めたのか、その関心がなぜ考古学データの統計分析になったのかをお話しし、次に、比較考古学から見た縄文文化、そして私の研究テーマでもある考古学での時間の問題と先史人口学について自分の研究を含めてお話しします。最後に、今後の課題として、日本考古学だけでなく世界考古学の膨大な資料をこれからどう使っていくのか、データサイエンスの視点からひと言述べさせていただきます。

きっかけ―縄文考古学の魅力

私はイタリア人の父と日本人の母を持ち、日本で生まれ、その後小学校のころからずっとイタリアで育ち教育を受け、二〇〇〇年代初頭ごろからボローニャ大学の学部生として考古学を学んでいました。そのころの専攻はインダス文明でした。なぜか、日本生まれでイタリア育ちなのに日本やイタリアの考古学には特に興味を持っていませんでした。縄文土器や土偶が魅力的だとは思っていましたが、それを研究対象にしたいという志はありませんでした。

縄文文化を研究対象として勉強したいという気持ちになったきっかけは、学部生のころの指導教官マウリツィオ・トージ（Maurizio Tosi）先生のおかげです。イタリア人のトージ先生は中央アジアの青銅器文化が専門で、そのころアラビア半島の東端にあるオマーンの貝塚の研究をされていました。オマーンの発掘調査に参加することになった私と打ち合わせしているとき、縄文貝塚関連の英語文献を手渡してくれ、「狩猟採集民と貝塚の研究をするのだから絶対に読んでおきなさい」と言われました。トージ先生が、なぜ日本考古学の文献に関心を持っておられるのか、そのころ不思議でした。貝塚といえば、デンマークの資料などが一般的に紹介されていたので、こんなかたちで日本考古学や縄文に出合えるとは思ってもいませんでした。

あとから聞いた話ですが、トージ先生は昔バグダッドで赤澤威（あかざわたける）先生と同じ研究室で働いていて、その後、赤澤先生や渡辺仁（わたなべひとし）先生、小山修三（こやましゅうぞう）先生などの研究に強い関心を持たれたそうです。もちろん縄文文

化自体にも興味を持たれたのですが、それより赤澤先生たちによる、縄文文化を事例として使っての社会論や仮説に注目されたわけです。

このようないきさつで縄文文化の文献を読むことになった私は、その魅力の虜になり、卒論のテーマをインダス文明から縄文文化の集落論に変更しました。

日本人の母親を持つものの、日本語の文字が読めず、何回も漢字の勉強をしろと言われても拒んでいたのですが、目標ができたおかげで漢字を読めるように取り組むことができ、その翌年、東京大学の考古学研究室に特別聴講生として留学しました。奈文研の庄田さんはそのときの先輩で、それ以来いろいろとお世話になっています。

来日するまでに、英文で書かれた縄文文化や日本考古学関連の資料をできるだけ読みました。日本語の文献に比べれば圧倒的に数は少ないのですが、そのなかでよく覚えているのは、最初に読んだジーナ・バーンズ（Gina Barnes）先生の『The Rise of Civilisation in East Asia』[注1]や、今村啓爾（いまむらけいじ）先生の『Prehistoric Japan : new perspectives on insular East Asia』[注2]、ピアソン（Pearson）、バーンズ、ハトラー（Hutterer）編集の『Windows on the Japanese Past』[注3]などです。二〇年前のことですが、こうしてジーナ先生と一緒に講演ができるとは想像もできませんでした。

これらの英語文献を読んで個人的に一番印象に残ったことは、複雑狩猟採集民（Complex Hunter-

注1　Barnes 1999
注2　Imamura 1996
注3　Pearson, Barnes, Hutterer eds. 1986

Gatherer）という概念、そして縄文文化やほかの複雑狩猟採集民が、私のそのころ知っていたヨーロッパや西アジアの視点で考慮した先史狩猟採集民のイメージと違う、ある意味で例外的な存在として紹介されていることでした。いわゆる、旧・中・新石器といった時代の枠組みからはずれた存在である縄文は、西田正規先生が英文で述べるように「もう一つの新石器時代」[注4]であり、その枠組みのルーツである単純な社会進化論を覆す事例のなかで最も優れた研究史を持つケースとして紹介されていました。イギリスの考古学者ローリー・コンウィ氏（Peter Rowley-Conwy）が縄文文化のことを「考古学で最も優れた研究史を持つ複雑狩猟採集民文化」というかたちで紹介していたことは、複雑狩猟採集民に興味を持った私にとっては特に印象的であり、縄文を研究したいという気持ちにさせてくれました。

縄文文化が「例外」というイメージはいまだに強く、一般的な社会進化論に反論する際、頻繁に登場します。去年欧米でベストセラーになり、考古学界のなかだけでなく話題になっているデイヴィッド・グレーバー（David Graeber）とデイヴィッド・ウェングロウ（David Wengrow）氏の『The Dawn of Everything: A New History of Humanity』[注5]でも、縄文文化は進化論的予想が考古学資料と膨大的に激突する事例として紹介されています。もちろん、縄文文化は世界で唯一の先史複雑狩猟採集民ではなく、世界各地に高い定住性や階層化社会、高度な物質文化を持つ狩猟採集民の事例は多くあります。高度な組織の存在を暗示するような大型建物を持つ先史文化の事例も多くあります。これらの共通点や相違点をテーマにして、縄文文化を他地域の先史文化と比較する研究も少なくありません。このようなことは論文や本だけでなく、学会のテーマや博物館の展示でも見られます。こうした比較研究は考古学のなかでも重要な役割を持ち、個別の文化を考慮する際に新しい視点を提供したり、人類全体を視野に入れた研究の土台にもなっています。

比較考古学の課題

しかし、このような研究のほとんどの場合、比較自体は間接的に行われていると私は思っています。言い換えてみれば、比較対象になる文化は独自に研究して、その結果や解釈が比べられたというかたちが一般的だと思います。ある意味、考古学データ自体は直接比較されていない場合が多くなっているわけです。

データを統計的に分析して先史文化を直接比較する研究は、世界的にも限られています。その最大の理由は、考古学データ自体が乏しいからです。まず、生業・社会・文化などの要素を「測る」ために使用するプロキシ、そのプロキシのもとになる考古学資料を抽出した発掘調査の多様性や、そもそも異なった研究史が生んだ異なった標準や特徴を持つデータをどう比べるかという問題は、比較考古学にとって昔も今も大きな課題だと思います。そもそも考古学データのほとんどが、そのような目的を考慮して生まれてきたわけではありません。一〇〇年近くかけて世界各地で集められた膨大な考古学資料を、今後どのように活かし、それをどのように比較していくかという重要な問題とも関連しているかと思います。

この挑戦に挑むには、どう「測るか」という測り方が、どのようなかたちで比較自体に影響を及ぼすかを考えていかなければなりません。これはけっして容易ではなく、数多くの妥協を許さなければ不可能であると思っています。

注4　Nishida 2002
注5　Graeber and Wengrow 2021

不平等性の比較考古学

日本考古学のデータが比較対象ではありませんが、そのような研究方針の課題を例示する事例の一つとして、アメリカのティム・コーラー（Tim Kohler）先生がリードした研究チームが「富の不平等性」といったテーマにどうアプローチしたかを簡単に紹介します。

縄文考古学でもよく議論されている階層化社会や不平等性といったテーマを研究する際、最初に問題になるのは、そのような社会現象の存在をどう把握し、どう測るかということです。一般的に考古学では特定の遺物の存在・不在や副葬品などの価値やお墓の立地、大きさなどから不平等性を推定したうえで、これら要素の時間的変化を見ていきます。このようなプロキシでは分析対象である不平等性の変化をどこまで把握しているのかがわからない場合が多くなっています。結果的に、同じ地域内でも限られた時間軸のなかでしか立証できないという問題点を持っていますし、世界全体を対象に、異なった物質文化を持った文明を比較するのには困難な場合が少なくありません。さらに、埋葬儀礼や交流圏が変われば、不平等性が変わらなくてもこれらプロキシが変化することもあります。このような問題のせいで、まったく違った物質文化や儀礼から推定した不平等性を、世界全体を舞台として把握するのは、不可能と言っても過言ではありません。

そこで、コーラーらは考古学資料のなかでも世界的に豊富である住居の面積を基準にして不平等性を測ろうという方向をとりました。彼らの発想は、経済学で富の不平等性を測るときによく使用されるジニ係数（Gini coefficient）という数値を各集落の住居面積の分布から計算して、その数値の変動を比較対象に

したわけです。集落内の住居の大きさがほぼ均等な場合は、ジニ係数は0に近く、富の不平等性が低いと解釈し、逆に少数の比較的大きな住居があった場合、ジニ係数は高くなり、富の不平等性が高いと彼らは推定したわけです。このようなジニ係数を世界各地の遺跡から計算して、その係数を時間的、地域的変化、生業との相関性などを測り、平等性の進化を考慮したじつに興味深い研究です。[注6]

もちろん、住居の大きさだけで不平等性が測れるわけではありませんし、不平等性以外の要素で住居面積分布の変化する可能性はおおいにあります。しかし、そのような妥協を許さない限り、世界全体を対象にした比較研究が成り立たないわけです。問題は、このような分析を可能にする妥協がどんなバイアスにつながるかをしっかりと考慮することですが、個人的には、このような研究がなければ、そういった議論も始まらないと思います。

実年代と相対年代

考古学の比較研究で共通する一番重要な要素は、やはり実年代に基づく遺物や遺構の測り方であると私は思っています。最近では放射性炭素年代などを使った遺構や遺物の精密な年代測定が増えていますが、

注6　Kohler et al. 2017

考古学データのほとんどはいまでも遺物の特徴などから推定した相対年代に基づいています。日本考古学でも一般的には実年代ではなく、「○○期」や「○○時代」といった土器編年や文化的な時間が時間軸になっています。コスト・パフォーマンスの視点からは、限られた地域のなかで歴史を復元するのには、このような馴染み深い時間軸を応用する利点も多くあります。しかし、比較性の視点から見ると、相対年代のみでの比較には問題があります。世界的にもトップクラスを誇る縄文考古学の土器編年ですら、地域差や並行関係が曖昧な場合もあり、国内レベルでの比較にも問題がある場合があります。

実年代をベースにした古環境データや広い地域の比較が目標である場合、最も一般的に使われる方法は時間軸を間接的に比べることです。つまり、「○」地域の「△」時代の遺物の炭素年代などから「△」時代の実年代をまず想定し、それを基準にして他の地域の「×」時代の想定実年代と比較していきます。しかし、相対的年代の時間幅・区切り・地域差などの要素によって結果が大きく変わっていく可能性があるわけです。

相対年代の時間軸では研究が困難

一般的にこの問題は、相対年代を実年代にしてから比較を行うというかたちをとっていますが、比較対象となる各地域の実年代化に関連する不確実性の問題をどう考慮しているかにもつながる問題です。そもそも実年代化自体も議論の対象となり、ひどければ土器編年の段階でも統一見解がない場合があります。

弥生時代開始の実年代の論争は、この問題の典型的な事例です。もちろん、相対年代を使った時間軸で検証できる仮説もあります。しかし、文化と社会の変動と環境変動の因果関係を明白にするといった、時間的関係が重要になる仮説を検証するのには、相対年代では不十分な場合が多く、信頼性が高く、なおかつ不確実性を考慮したうえでの研究が望ましいと思います。

「時間」の問題

私が考古学で「時間」の問題に興味を持つきっかけとなったのは、今村啓爾先生の関東・中部の縄文住居数の変動の研究です。皆さんもよくご存知の**図1**に引用した今村一九九七のグラフは、今村先生が英文で書かれた『Prehistoric Japan』だけでなく日本語の著書でも紹介されており[注7]、人口学に興味がある人に限らず、多くの人にとって印象的なグラフだと思います。「縄文中期の始まりにどうしてこんなに人口が増えたのか」「四五〇〇年近く前とされる寒冷期がほんとうに縄文中期の人口をここまで激しく減少させたのか」といった面白い仮説をかき立てる図です。

住居数の時間的変化を表すという、一見簡単そうなグラフですが、基になるデータは土器編年をベース

注7　今村一九九七

にしているので、これを実年代の時間軸で表すのは容易ではなく、数理的問題と対応させなければなりません。

まず最初の問題は、遺構の相対年代はそもそも発掘状況により大きく異なり、たとえば「加曽利E」、「縄文中期」、「縄文中期後半」、や「縄文中期」、最も大雑把な場合「縄文時代」とのあるデータの場合、何千という大きなサンプルのなかで一番細かい土器編年で区分されている住居は全体のほんの一部しかありません。

二つ目の問題は、一つの土器型式の時間軸のなかで「いつ」その住居が存在したかということです。時間幅が数十年の場合はたいした問題ではありませんが、数百年となると、そのなかで生じる不確実性や同時存在の問題にも大きく影響を及ぼすことになります。

そして、そもそも土器型式の時間軸を数少ない炭素年代測定値からどう推定するかという問題です。つまり、「〇〇時期」の「始まり」と「終わり」の年代測定の不確実性で

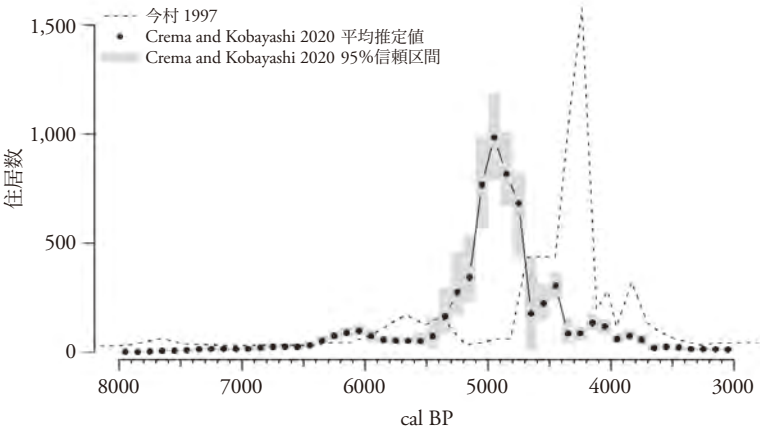


図1　Crema and Kobayashi 2020 による南西関東における竪穴住居跡数の時間的変動（今村 1997）の再検討

す。炭素年代測定自体の不確実性、比較的サンプル数が小さいときに生じるサンプリング誤差など、いろいろ考慮しなければなりません。

これらの要素以外にも、さきほど述べた土器編年の定義や地域差・並行性なども考慮する必要がありますが、まずこれら三つの要素を数理的に処理し、各要素から生じる不確実性をどう測って、実年代の時間軸で表すべきなのかが問題です。このような時間的不確実性問題を解決しない限り、住居数の変動を信頼性と比較性のある実年代時間軸で表示することすらできません。これは先史人口学の研究の問題だけではなく、相対年代から実年代に転換し、日本考古学のレガシーデータを今後どう使っていくのかという課題にもかかわる重要なポイントだと思います。

人口考古学の研究事例

私はこの三つの不確実性要素を考慮する方法について、中央大学の小林謙一（こばやしけんいち）先生との共同研究で、ケーススタディの一つとして今村先生のグラフを再検討しました（**図1**）。詳しい数理的な話は時間の関係で省きますが、基本的には土器編年の実年代は小林先生の編年研究[注8]に基づき、炭素年代測定値を使って始まり

注8　小林 二〇一七

と終わりの推定はベイズ解析を使って、住居の実年代はモンテカルロ法という統計分析法を使用して、三つの不確実性の要素を考慮したうえでの数値を推定しました。[注9]

分析結果は、実年代を利用し、不確実性は百年単位で住居数の確率分布で表現しました。この結果を従来のグラフと比較してみると、基本的には住居の増加・減少パターンはほとんど変わりませんが、そのタイミングが前の分析より数百年古かったことがわかりました。特に人口減少が始まった年代が、四五〇〇年前や四二〇〇年前といわれている寒冷期より古く、紀元前五千年紀であることが明白になり、環境変動との因果関係を再考する必要性を示唆しました。

このような方法論は、他の地域でも可能なのですが、まず膨大な発掘調査から出土する遺構数、細かい土器編年、そしてその実年代を推定するための数多くの炭素年代の測定値が必要です。残念ながらこれら三つの条件がそろっている先史狩猟採集民文化は、日本の縄文ぐらいだと思います。私の知っている限り、このような研究に他国で使われているのは、もっと新しい時代のデータです。

炭素年代と先史人口学

このような状況のなかで、現在、世界各地の先史人口研究で最も活用されているプロキシは、放射性炭素年代測定値の数の時間的な変化です。これは相対年代をベースにした住居数や遺跡数とは異なり、間接

的に「人が多ければ物の数も多く、物の数が多ければ炭素年代測定値の数も多い」という、連鎖的な相関関係に基づいた仮定を中心にした方法論です。

この連鎖関係の信頼性はタフォノミーやサンプリング、発掘のバイアスなど複数の要素に影響され、けっして完全な分析法ではありませんが、客観的な実年代の時間軸と相対年代に制限されないという利点を考慮すれば、活用性のある魅力的な分析法だと思っております。この一〇年間に世界各地で一般的に使われるようになってきた方法論で、いまではヨーロッパでは初期農耕期の人口爆発のあと人口破滅があったといった新しい仮説や、イースター島での環境破滅説の再検討といった幅広い実績を積んでいます。

事例　櫛目文土器時代の人口変動

炭素年代測定値をもとにした先史人口の研究が、人口変動と古環境変化の研究にどう役に立つかという事例の一つとして、オレゴン大学のイ・ギョンア（Gyoung-Ah Lee）先生、キム・ハボム（Habeom Kim）さんとの共同研究を紹介します。

縄文中期と同じように朝鮮半島の櫛目文土器時代中期でも、激しい人口増加と減少が推定されており、

注9　Crema and Kobayashi 2020

後者のきっかけも寒冷化が原因との仮説になっています。

そこで我々は、不確実性を数値化できるベイズ統計を使用し、人口減少がいつ始まり、花粉データやアルケノンなどを使った古環境復元分析で推測された寒冷化のタイミングとの時間的関係を推定しました。古環境プロキシはもちろん地域差や時間差が多少ありますが、全体的に結果を見てみると、人口減少はいまから五〇〇〇年前ごろから始まり、寒冷期より先に起こった可能性は八〇%から一〇〇%という結果がでました。[注10] このことからも寒冷化と人口減少の因果関係はまだ検証できていない仮説にすぎないことがわかりました。

ちなみに、関東と中部の人口変動と朝鮮半島の人口変動が連携しているということは興味深い事実であり、今後東アジアの他地域での人口変動を考慮しながら比較研究していきたいと思います。

縄文から弥生への移行期の人口変動

いま紹介した研究で使った分析法は、人口増加率が変化した時期を統計的に抽出できる新しい方法なのですが、それを最初に使用した事例は、九州での弥生早期から前期の人口変動についての研究です。これは庄田慎矢（しょうだしんや）さんとの共同研究で、欧州研究評議会が助成している縄文・弥生移行期をテーマにしているENCOUNTERプロジェクト（https://www.encounterproject.info/）の研究成果の一部です。

我々は九州での水田稲作伝来が人口増加率にどういった影響を及ぼしたのか、そして伝来からほかの初

期農耕文化でよく見られる人口爆発までどのくらい時間がたったのかを推定することを目標としました。遺跡や住居数ではなく、炭素年代測定値の数を基にしてこの問題を検討した理由は、この時期の土器編年から実年代を推定した研究は存在するのですが[注11]、サンプル数が限られていることや、炭素年代のキャリブレーションにおいての問題等があるため、時間関係や増加率などを正確に測るのが難しい状況であり、したがって上記とは異なる方法で分析を行おうとしたわけです。

分析の結果、九州での人口転換は紀元前八〇〇年から六〇〇年ころに起こり、その後の増加率が年間〇・一八～〇・三九%と推定しました（**図2**）[注12]。年代的には、九州において現時点で一番古い炭化米の年代[注13]から約一五〇年たって人口転換が起こったことになります（**図3**）。

注10　Kim et al 2021
注11　藤尾二〇〇九
注12　Crema and Shoda 2021
注13　宮本二〇一八

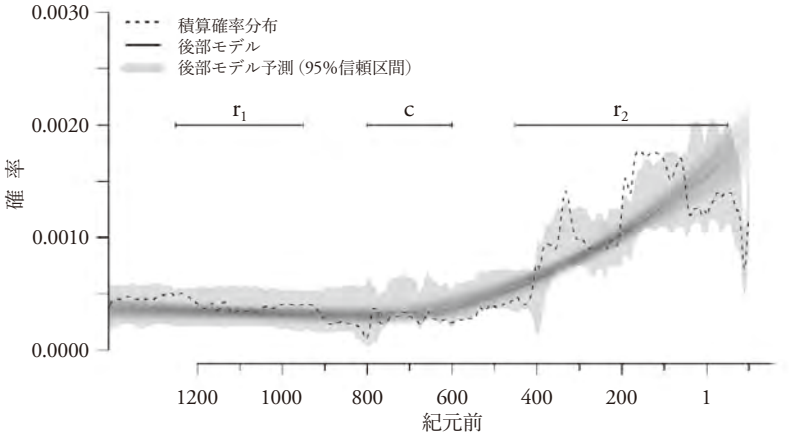


図2　ベイズ統計と炭素年代測定密度から復元した九州での縄文～弥生移行期の人口変動。cは増加率の変化点、r_1とr_2それ以前とそれ以後の増加率（図3参考）。詳しくはCrema and Shoda 2021

実際、それ以前の江辻SX−1段階に存在している可能性もありますし、人口転換が考古学的に把握できるまでの時間誤差などを加味すると、この急激な人口増加が生じるまでの時間差がさらに長かった可能性が高いと思います。

このような研究はまだ世界的にも少なく、今後は同じような農耕伝来から人口爆発までの時間差をまず関東や東北など日本国内の他の地域で行い、その後世界各地の初期農耕文化とそれを比較したいと考えています。

データサイエンスと今後の課題

相対年代から実年代へと基準を変えることで、これまで数値化が難しかった現象も直接的に比較することが可能となります。近年日本考古学でも実年代を基準にした研究が増えているので、今後世界を対象とした比較研究が可能になっていくことを大きく期待しております。もちろん、このような視点での研究可能なテーマは限られ

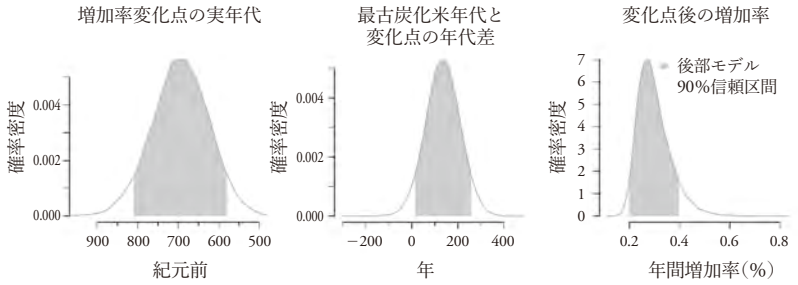


図3　九州の炭素年代測定密度の分析結果。人口増加率変化点のベイズ推定(左)、宇木汲田遺跡の炭化米の実年代（宮本 2018）との時間差（中)、変化点後の推定人口増加率（右、図2の r_2 参考)。詳しくは Crema and Shoda 2021

ていますが、羽生淳子先生が紹介したレジリエンスやさきほど紹介した不平等の起源といった、人類全体を視野に入れた考古学研究のなかでも比較考古学は重要な役割を持っていると思います。しかし、このような研究を可能にする一番の鍵は、これまでに集められてきた膨大な考古学データをどう扱うか、だと思います。データのアクセスから標準化、そしてさきほど紹介した研究事例のようなデータの再利用性・再分析性、そしてそのデータをどう数値化するかという方法論的問題から始まり、そのデータがどのようにして生まれてきたのかという発掘段階の事情や知識の多様性が及ぼす影響、バイアスなどを考慮することによって進んでいく研究だと思います。これらの数々の課題を乗り越えなければ、信頼性の高い結果が得られることはないと思います。

　このような考古学でのデータサイエンスやオープンサイエンスのチャレンジは比較考古学にとっても重要であり、奈文研の『全国遺跡報告総覧』や歴博が公開している『遺跡発掘調査報告書放射性炭素年代測定データベース』などは、日本考古学がけっして容易ではない課題に取り組んでいることを証明する素晴らしい事例だと思います。つい最近、ヨーロッパの考古学情報基盤ARIADNE Plusが、奈文研が収集・整理している全国遺跡データとの連結を開始したようです。日本考古学データのグローバル化が現実化していることを示す素晴らしい例だと思います。さきほど紹介したローリー・コンウィ氏が「考古学で最も優れた研究史を持つ複雑狩猟採集民文化」と紹介した縄文研究の土台になる考古学データは、ある意味膨大すぎて管理ができないほどの状況です。さきほど紹介した縄文時代の住居数の時間的変動も全国レベルで実行するためのデータベースがいま存在していなくて、それを作成するのには膨大な資料の数値化・標準化が必要です。そのような研究方針を採用すれば、いままで集められた膨大な情報から新しい知識が得ら

れると私は確信しています。これまで蓄積したデータと日本考古学が生み出していく新しい情報や研究が、今後世界考古学のなかでどう発展していくのかが楽しみです。

ご清聴ありがとうございました。

Q&A

Q　カリフォルニア大学の羽生淳子です。櫛目文土器時代中期と関東の縄文中期において、寒冷化より数百年前に人口減少が起こったとすると、その原因は何だとお考えでしょうか。私が東北で行った人口減少に関する分析結果ともぴったり一致します。五〇〇〇年くらい前だと思いますが、その原因ですね。今日のデータからだけでは言えないと思いますが、何かお考えがあれば。

A　難しいですね。少なくとも、櫛目文中期と縄文中期は、人口減少だけでなく人口増加のタイミングも似たようなパターンなので、何百年たつと、時間制限ではありませんが、環境だけでなく集落内でセトルメント・パターンが保てなくなるので、拡散する時間のタイムリミットみたいなものかもしれませんね。紹介した櫛目文の遺跡は、内陸と海岸沿いに区別して分析すると、海岸沿いではそこまで明確な増加・減少のパターンは見られません。つまり韓国全体がこのようなパタ

ーンと一致するわけではないのです。同じように、縄文の関東地方でも、たとえば、千葉県だと後期になると異なった人口変動が明確になるので、地域差が激しいですね。

自分では、まず環境データをもっと整理する必要があるということと、もう一つは、時間的なタイムリミットで、それ以上増加を続けられないような状況を起こしたのかなあと思っているのですが、そこまで話が進んでいる状況ではないので、まだ答えはないですね。そこを考えないといけないと示唆できるくらいの立場にとどまっています。

Q（羽生）最近、アグロエコロジーの人たちとよく話をするのですが、そのなかでレジリエンス理論に関して、私の発表では8の字モデルを使いましたが、それではなく、もう少し生態学の基本のスタビリティモデルに戻って、一つだけの安定性よりも多重安定性で考えるとうまく説明できるという話をいましているところです。今日伺ったお話だと、住居が増えた状態を保てる時間がある程度しかなかったという考えともつながると思います。

A いまのお話とちょっと関連している例の一つは、ヨーロッパの新石器時代の人口変動ですね。さきほど紹介したように欧州の各地では農業の定着とともに人口が増加し、その後人口減少があったのですが、そのタイミングは、バラバラなんですね。ただし、時間軸を農業伝来にあわせると、ほんとうに同じくらいのタイミングで、何百年かたつと人口が同時に減少するという興味深い事例があるので、同じように生業の水準が保てないという話がかかわってくると思っている考古学者がいます。もちろん、人口減少はけっして悪いことというわけではないですし、人口の減少率を見ると、激しい速度で減っているわけでもありません。ある意味ポジティブなレスポンスの事

例かもしれないですね。集落が分散したり、セトルメント・パターンが変わったりしたことは何かに対応して生き延びたということなので、このような人口減少をコラプス（崩壊）と呼ぶのはあまり好きではないですね。

Q（羽生）　縄文の場合だと、前期の後半にいっぺん上がっていたのが下がるじゃないですか。それはちょっと試してみて、上手くいかなかったので下がって、そこで学習して、うまくいくようになったのでうわーっと上がったけど、学習しすぎて、集中しすぎて、一極集中になったので下がったんじゃないかなという漠然としたイメージはあるのですが、それを実際に考古学データから検証するためにはやはりPaleoethnobotany（古民族植物学）のデータとか、いくつかのエビデンスが必要だと思うので、そのあたりをまたみんなで議論できればいいかなあと思っています。

司会（庄田慎矢）　いま話題に上がっている朝鮮半島や日本での遺跡数減少期と同時期に、中国の東北部でも遺跡数が急激に減少すると、昔大貫静夫（おおぬきしずお）先生が書いておられますが、そういった広域現象はこれまでなんとなく気候変動などのグローバルな現象と結びつけて議論しがちだったと思います。新しいデータを見せていただいたことで、また新しい考古学的な疑問が増えて非常に面白いなあと思いました。

Q　おはようございます。セインズベリー研究所のサイモン・ケイナーです。デイヴィッド・グレーバーらの本を紹介されていましたが、彼らの考え方はすごく面白いと思います。一九世紀の概念としては、社会進化論については意義があると思いますが、エンリコさんはどう思われますか。これから日本語訳も出版されるということですが、日本の考古学にどういった影響を与えると思いますか。

A

彼らの本は、読者に考古学者と一般人を含めているので、批判の対象が区別しづらいところがあると思います。たとえば、いまどき社会進化論的な考え方をしている考古学者はほとんどいないのにもかかわらず、そこを批判されても、誤解をまねいてしまう恐れがあると思います。しかし、不平等性という視点からの議論は、専門家にとっても面白い新しい考え方を含んでいると思います。デヴィッド・ウェングローさんはUCL（ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン）に所属していたので私もいろいろと話す機会がありましたが、彼の本は比較考古学の視点で何が測れるか測れないかという議論にも関連していると思います。個人的には、これから考古学を勉強したいという学生さんはその本を読んでいる可能性が高いので、絶対読んでおかないといけないと思います。不平等性がどう生まれて進化したかという重要なテーマの議論の種になると思うので、非常に重要な本になると思います。考古学者の書いたベストセラーってあまりないじゃないですか。考古学者が書いている本のなかで最初にベストセラーになったというのは、考古学者として非常に重要な結果なので、その内容をもとに議論していかなくてはいけないと思います。

参考文献

・今村啓爾 一九九七「縄文時代の住居跡数と人口の変動」藤本強編『柱の考古学』同成社
・小林謙一 二〇一七『縄紋時代の実年代：土器型式編年と炭素14年代』同成社
・藤尾慎一郎 二〇〇九「弥生時代の実年代」西本豊弘編『弥生農耕のはじまりとその年代』雄山閣
・宮本一夫 二〇一八「弥生時代開始期の実年代再論」『考古学雑誌』一〇〇巻 第二号

- Barnes, G.L. 1999. *The Rise of Civilization in East Asia: The Archaeology of China, Korea and Japan*. New York, Thames & Hudson.
- Crema, E.R., and Kobayashi, K. 2020. A multi-proxy inference of Jōmon population dynamics using bayesian phase models, residential data, and summed probability distribution of 14C dates. *Journal of Archaeological Science* 117, 105136.
- Crema, E.R., Shoda, S. 2021. A Bayesian approach for fitting and comparing demographic growth models of radiocarbon dates: A case study on the Jomon-Yayoi transition in Kyushu (Japan). *PLOS ONE* 16, e0251695. https://doi.org/10.1371/journal.pone.0251695
- Graeber, D., and Wengrow, D. 2021. *The Dawn of Everything: A New History of Humanity*. London, Allen Lane
- Imamura, K. 1996. *Prehistoric Japan: New perspectives on insular East Asia,* London: UCL Press.
- Kohler, T., Smith, M., Bogaard, A. et al. Greater post-Neolithic wealth disparities in Eurasia than in North America and Mesoamerica. Nature 551, 619-622 (2017). https://doi.org/10.1038/nature24646
- Kim, H., Lee, G.-A., and Crema, E.R. 2021. Bayesian analyses question the role of climate in Chulmun demography. *Scientific Reports* 11, 23797. https://doi.org/10.1038/s41598-021-03180-4
- Kohler, T.A. et al. 2017. Greater post-Neolithic wealth disparities in Eurasia than in North America and Mesoamerica. *Nature* 551, 619-622.
- Pearson, R.J., Barnes, G.L., and Hutterer, K.L. (Eds.) 1986. *Windows on the Japanese Past: Studies in Archaeology and Prehistory*, Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Nishida M. 2002. Another Neolithic in Holocene Japan. Documenta Praehistorica. 29:21, DOI: 10.4312/dp.29.2
- Rowley-Conwy, P. 2001. Time, change, and the archaeology of hunter-gatherers: how original is the 'Original Affluent Society', In: Panter-Brick, C., Layton, R.H., and Rowley-Conwy, P. (Eds.), *Hunter-Gatherer: An Interdisciplinary Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press: 39-72.

第12講

選択の一つひとつ―日本考古学者への道のり

ジーナ・L・バーンズ　ダーラム大学 名誉教授・SOASロンドン大学日本研究センター 専門研究員

ジーナ・L・バーンズ　Gina L. Barnes

一九四七年　アメリカ生まれ
一九六九年　コロラド大学　卒業
一九八三年　ミシガン大学博士課程　修了
二〇一二年　通信制大学（Open University）学士号（地質学）　取得
二〇二四年現在　英国ダーラム大学　名誉教授
専門は日本地質学と考古学

著者紹介

日本と東アジアの考古学を国際的に牽引されてきた第一人者でいらっしゃるジーナ・バーンズ先生。直接の教え子であるサイモンさん、マークさん、イローナさんは勿論のこと、彼女の著作に影響を受けなかった人は、このリレートークの演者の中に一人としていないでしょう。私がイギリスに住んでいた二〇一四年に、ダーラムのご自宅に家族でお招きいただき、手料理でおもてなしいただいたのは、大変光栄なことでした。学会などで会話を交わすことはあったはずですが、いろいろなことをゆっくりお話しできたのは、おそらくこの時が初めてだったかと思います。音楽を愛し、ユーモアあふれる方だということを知りました。今回の講演では、先生の若かりしころのお宝写真や、プライベートのエピソードなどが盛りだくさんで、いただいた原稿を読んですぐに、思わず、「ハリウッドに売り込みませんか」と冗談のメールを送ってしまったほどでした。

このトークシリーズも最終回となりますが、最終走者として皆様にお礼申し上げます。

まず、本日の話の軸になる私の履歴書の抜粋を紹介します。このシリーズで発表された人の多くは、学者としてのキャリアが初期か中期にさしかかっていますが、私はアメリカ人としてイギリスの大学で二五年間東洋考古学を教え、現在は引退しています。本日は、学問的な話ではなく、私の若いころを中心に、自分の人生の旅へ招待します。なぜ日本の考古学に興味を持ち、どのように古墳時代の研究をすることができたかという話です。

古墳、日本考古学との出合い

日本とのかかわりは五七年前からです。一九六五年に家族（兄弟姉妹四人）六人で日本に一年間、滞在することになりました。私は一八歳で高校を卒業したばかりで（図1）、遺伝学を勉強したかったのです。その当時、日本がどこにあるか、日本文化について何も知りませんでしたが、家族から離れて日本人の家に下宿して、東京の国際基督教大学（ＩＣＵ）で留学

図1　1965年日本滞在時の著者

生として一年だけ勉強しました。ICUで日本語中級のプログラムを受講しながら、J・E・キダーJr.先生の美術史の授業を発見し、生物学をやめてインド、中国、日本の美術、さらには日本考古学を勉強し始めたのです。先生がお書きになった『日本の先史美術 古墳と副葬（Early Japanese art）』を夢中で読み、一九六六年の春には修学旅行で京都と奈良のお寺や遺跡を初めて見物しました。

また、キダー先生が授業で紹介された古墳時代の古墳とその出土遺物（埴輪、王冠、勾玉）に興味を惹かれました。特に、直弧文を不思議に思い、先生の著書や、まだ日本語を読めなかったので日本語の論文の図面だけを眺めていましたし、それらを参考にして、直弧文についてレポートを書きました。それから三七年後に、直弧文に対して自分の解釈を加えて論文を書きました。[注1]

日本語、日本文学、東アジア文明

大学二年生のときアメリカに戻ってコロラド大学に入りました。私は日本考古学もしくは日本美術史を勉強したいと考えていたのですが、そのようなコースはその当時ありませんでした。そのため東アジア史とともに日本語学を専攻し、一九六九年に日本語・日本文学で学位を取得し、東アジア文明学を修了して、さて、次はどうしようか、と悩みました。

三年生の夏、スタンフォード大学の日本語サマープログラムに参加し、そこでの同級生がプリンストン

大学で日本美術史を専攻していたことから、「これだ！　私がやるべきことは大学院の美術史コースで勉強することだ」と考え、ハーバード大学大学院の日本美術・日本考古学プログラムに入学しました。でも、大変失望しました。なぜかと言うと、当時の美術史学者がものの真贋やその価値を決めることを主眼にしているように感じたためです。それが私の大きな間違いだったのですが、とにかく期待していたこととまったく違っていました。埴輪や勾玉のような素晴らしいものを製作した、古墳時代の社会に興味を抱いていたのです。それでも、鏡についてエッセイを書き、ローゼンフィールド先生が編纂された『日本美術の伝統（Traditions of Japanese art）』に掲載していただきました[注2]。ハーバード大学大学院は一学期過ごしただけでした。

ところで、コロラド大学を卒業する前に、一九七〇年に開催される「大阪万国博覧会七〇」でのアメリカ館のガイド募集案内を見ており、応募しました。三年間のブランクのあと日本に戻るチケットを手にしたのです。

万博でのガイド仲間の一人が、ミシガン大学日本学研究センターの日本人類学者リチャード・K・ビアズリー教授のもとで修士号を取得したばかりでした。教えられたビアズリー教授のことを頭の奥にしまっておいたことが、二年後、とても重要になりました。

ところで、万博が始まる前にホームステイしたお宅が奈良の桜井市にあり、奈良の博物館や遺跡に観光

注1　Barnes 2003
注2　Barnes 1970

に連れていってくれました。そして、そのお宅のお父さんが勤めていた桜井商業高等学校を訪ねたとき、学校の建設中に出土して窓に置いてあった小型丸底壺をくださいました（図2）。びっくりしました！

ちなみに、その壺は数年後、文化庁の許可を得て大英博物館に寄贈しました。

図2　贈られた小型丸底壺

万博終了後

万博が終わってから奈良でひと月過ごし、奈良県立図書館へよく行って日本語の古墳時代に関する本で結構勉強しました。そのときから専門用語を習い始めました。橿原公苑考古博物館（現奈良県立橿原考古学研究所）も訪ね、橿原地域の並木道に魅了されました。橿原は運命的な自分の心の故郷だと感じました。奈良に住み着いて残りたかったのですが、ビザが切れてしまいました。

ホームステイ先の方々に、「万博が終わったらヨーロッパを二、三か月旅行したい」と言っていたのですが、日本人のボーイフレンドと一緒に東南アジアからオーストラリアまで旅行することにしました。これは秘密でもなんでもありませんが、言葉が上手くなるのにもっともよい方法は、自分の言語を話さないよ

い友人を持つことです。大学で言葉を勉強した私にとっても、この経験はとても貴重でした。

東南アジアを旅行しながらさまざまな冒険をしたことはとても面白かったのですが、最終的にオーストラリアのメルボルンへ落ち着きました。そして、一九七一年、スウィンバーン高等専門学校（現スウィンボルン工科大学）で一年間の日本語教師の職を得ました。週末や大学の休み期間中はメルボルンのモナシュ大学図書館やキャンベラにあるオーストラリア国立大学の図書館へ足をのばし、日本考古学の読むべき文献リストを作り始めたのです。

この経験で、二つのことがわかりました。まず、日本語教師の仕事はあまり好きではなく、日本語教師として経験を積んでいきたいわけではないということです。そのため、暇な時間はいつも図書館で過ごし、一心不乱に日本考古学を勉強していました。日本考古学のことが頭からまったく離れなかったので、大学院に戻ろうと考え、ミシガン大学大学院を受験し、一九七二年八月に大学のあるアン・アーバーに行きました。

夢を追う決定木

ここで一服して、夢を追う人々が、どのようにゴールにたどり着くか、考えてみます（図3）。振り返ってみると、私のそれまでの人生における決定で、一番重要であったことは、家族の勧めでした。友人か

らの影響もありましたが、自分自身でいろいろな機会を掴むようにしました。キダー先生の講義やスタンフォード大学のサマーコース、万博でのガイドなどを経験しました。あちこち迷いながら、心の奥底にある興味がはっきりしだし、自分の夢を実現する方法を見つけました。大学院に戻るということです。

ミシガン大学ではビアズリー教授の指導を受け、人類学博物館の先生たちのもとで一般的な考古学理論や方法論の勉強を始めました。ただ、博物館の先生たちは、日本考古学について何も知らなかったため、また自分で文献を読み自習することになりました。

ミシガン大学では、自分の専門とは別に、もう一つ専門を持つことが勧められていました。なぜかと言うと、現在と同じように一つの分野だけでは職を得ることが難しいからです。副次的な専門として、たとえば、動物相分析、年代測定、統計学分析などの選択肢のなかから、日本語を教えるより翻訳の仕事が自分にあうと考え、三木文夫氏の『埴輪』を翻訳して[注3]、それをミシガン大学の野外研究の単位に振り替えたのです。それまで発掘に二、三回参加したことはありま

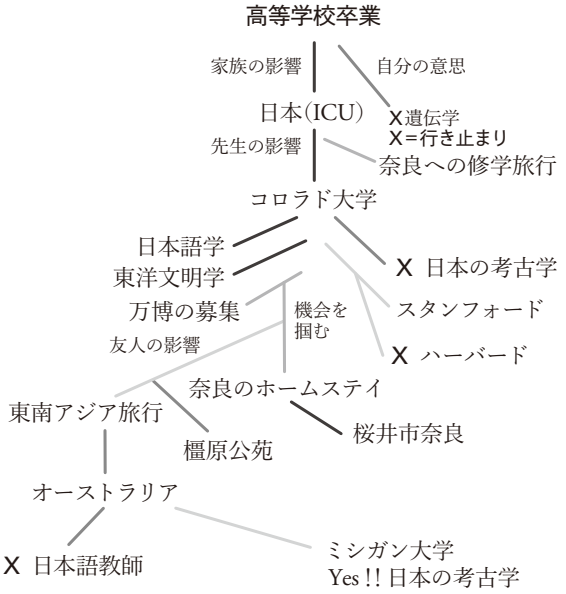


図3　人生の決定木

したが、大学院生としてフィールドを持った経験はありませんでした。これは後でおおいに後悔しました。

その当時、ビアズリー教授は、戦後五〇年代に行われた岡山県新池の村の文化人類学の研究を再調査されていました。その関係で、一九七四年の夏、岡山大学の近藤義郎（こんどうよしろう）先生の研究室を訪れ、吉備路風土記の丘公園の設立について調べることになりました。毎日、岡山大学の考古図書室に論文を読みに行っていたある日、近藤先生に「どうして図書室にこもっているんだ。考古学者に会いに現場に行きなさい」と叱られました。そのお陰で、考古学者の仲間と友人ができました。その研究成果は、日本考古学界の官僚制度をまとめた『The origins of bureaucratic archaeology in Japan』として出版されました。[注4]

結　婚

ミシガン大学に戻った翌年の一九七五年に、結婚しました。夫のデイヴィッド・W・ヒューズと私は、ビアズリー先生のもとで一九七二〜七七年の五年間を過ごしました。彼は民族音楽学者で、日本民謡グループを組み、私は横笛を習って、練習や演奏旅行で楽しく過ごしました。いまでも演奏を続けています。

注3　三木 一九七四
注4　Barnes 1990

また、彼はもともと言語学者でしたから、私の家内制編集者として、キャリアの一番大事な支えとなってくれました。彼には大変お世話になっています。

このミシガン大学考古学科で、自分が求めていたものを見つけました。美術史の対象ではない本当の考古学です。しかし、ビアズリー先生は日本考古学を教えていたわけではありません。彼の専門はカリフォルニア考古学と日本の人類学でした。そのため、日本考古学が専門の指導教員がいても、細かなところは自分で勉強するようにと勧められました。そこで小さなシンポジウムに参加して、ピーター・ブリード氏と金関恕（かなせきひろし）氏を知りました。ブリードさんは私の先輩で、そのころ縄文土器に関する博士論文を書き終えたところでした。一方、金関先生の興味、関心は弥生・古墳時代で、私が求めていたものと合致していました。私は金関先生の勧めにしたがって日本財団の博士課程研究奨励金を受け、一九七七年の秋から京都大学の樋口隆康（ひぐちたかやす）先生と奈良文化財研究所（以下、「奈文研」）で田中琢（みがく）氏のお世話になることになります。

京都大学研究生時代

奈良で住居を見つける前にホームステイした三軒のうちの一軒で、北田さんたちと仲良くなり、その後、数十年にわたって私の興味や研究をサポートしていただいております。

さて、奈文研の援助を受けて西大寺にあった文化住宅から研究生として京大に通いました。樋口先生

は最初に、「必要なものがあれば何でも言いなさい。自分から聞いてくれれば、喜んで手を貸しましょう」と。つまり、自分自身で研究を進めろということです。これは、人生における重要な教訓の一つです。

京大では、小野山節（おのやませつ）先生、都出比呂志（つでひろし）先生や同級生の和田晴吾（わだせいご）さんと交流し、土器の実測を教えてもらいましたし、その後も大きな助けを差し伸べてもらいました。さらに、これよりもっと後になりますが、樋口先生のアフガニスタンでの研究成果を翻訳し、英文で出版しました。[注5]

一九七八年、私の指導教官のビアズリー先生が急逝されたため、ヘンリー・ライト先生が寛大にも私の指導を引き受けてくださいました。ライト先生は国家形成論の第一人者で、考古学の方法論と理論に深い造詣を持っておられますが、日本については専門ではありません。これでまた二つのことがわかりました。まず、指導教員と専門が違ってもよいことと、日本研究のための繋がりを自分で育てていかなければならないということです。

そして、ビアズリー先生の追悼のために、博士論文の審査員であり、いまでは友人であるリチャード・ピアソン先生が、一九七九年にミシガン大学での日本考古学の企画展の準備と、それと関連したシンポジウムの開催と本の制作をお手伝いするために日本から帰国し、多くの先生方が執筆した論文をまとめて刊行しました。[注6] 私の提出した論文は、桜井市でもらった小型丸底壺に刺激されて研究した、弥生土器・土師器を対象にしたものです。[注7]

注5　Higuchi and Barnes eds. 1995
注6　Pearson and Barnes eds. 1986
注7　Barnes 1986

ちなみに、そのとき作成した土器分析の統計学的な図面を、準備段階で奈文研の田中琢さんに見せたところ、その分析法が日本でも採用されるようになりました（**図4**）。その特色は、生の測定値ではなく、比率分析法で作っていることです。

奈良の西大寺に滞在している間、金関先生が勤めていた天理大学の考古学者たちを紹介してもらいました。また、布留遺跡の発掘調査に参加し、現場担当者の置田雅昭さんのお世話になりました。この布留遺跡では、当時日本ではあまり見られなかったシステマティック・サンプリングを試させてもらいました。置田さんとはその後も長い共同研究が続きました。

一九七八年には奈文研に籍を置いて、田中さん、佐原さん、町田さん、伊藤さん、西村さん、工楽さん、田辺さん、光谷さん、岩永さん、八賀さんの研究にとても刺激を受けました。その後、研究仲間や友人になった人が少なくありません。その

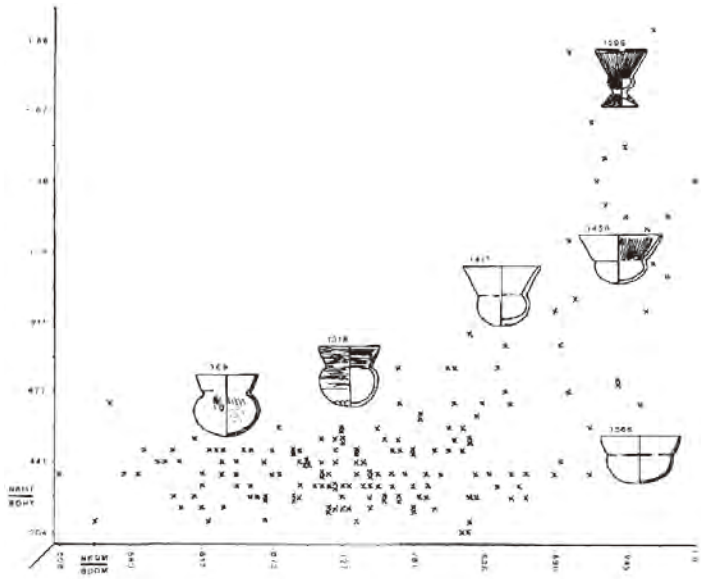


図4　弥生土器・土師器の比率分析法による分析（Barnes 1986）

当時、有光教一先生にも紹介されて橿原考古学研究所の学者とも親しくなりました。特に寺沢薫・寺沢知子さん、吉村和昭さんとは、数十年交流が続いています。この二つの研究所の皆さんにはとても親切にしていただき、感謝の念でいっぱいです。奈良で過ごした二年間は、私の研究生活のなかで最も劇的な変化の年月であり、その後の研究や執筆したものの基礎となりました。

一九八〇年の春、私は日本百科事典『Encyclopedia of Japan』の編集補佐として講談社で働き、夫のデイヴィッドは東京藝術大学で音楽の研究を進めました。その年の秋のある日、岡山の近藤義郎先生から突然の電話があって、「ケンブリッジ大学で極東の先史時代を教えられる人を探している。もし申請するなら推薦します」と仰ってくださいました。

えっ！　イングランドのケンブリッジですか。アメリカのケンブリッジにあるハーバードを離れたら、今度はイングランドのケンブリッジに仕事があるって。

それからすぐに申請書類を出し、公式の面接などないまま、日本からの電話のやりとりだけで職を得ることができました。

ケンブリッジ大学考古学科

日本を出る前、デイヴィッドが「安陽はどこか知ってる?」と尋ねました。「知らない」と答えると、彼

は張光直（Chang Kwang-chih）の書いた『The Archaeology of Ancient China』をクリスマスプレゼントに贈ってくれました。イェール大学で学んだデイヴィッドは、張光直の仕事をよく知っていたのです。そこで、イングランドに行く前に中国に立ち寄ることに決めました。そうでなければ、いったい、どうやって中国について教えることができるというのでしょうか。

一九八一年の元旦に沖縄から香港へ飛び立ち、一〇日間のツアーで香港から上海と北京、そしてロンドンへ。ヨーロッパの地を踏むのは初めてでした。

一人のアメリカ人として、イギリスへ行く前に日本で四年間を過ごしたことは大変よかったと思います。社会のなかでの上下関係、物事を進める伝統的なやり方、そして人とのかかわり方を学んだからです。これらの経験は、新しい用語や仕組みを覚えながら、非常に伝統的な教育機関の要求に慣れていくときにとても役立ちました。

ケンブリッジ大学考古学科で教えることは大変でした。なぜかと言うと、それまでに私が正式に受けた極東の先史時代についての授業といえば、一八歳のときに受けたICUのキダー先生のコースだけで、三三歳にして大急ぎで教えられるレベルまで達しなければならなかったからです。学生より一歩だけ先に学ぶ、という課題を自分に課し、これまでと同じ自読学習を東アジアの考古学に活用して、学生のために本を書こうと考えました。その前に、自分の博士論文『大和の原始時代（Yayoi-Kofun settlement archaeology in the Nara Basin）』を書き終えました。[注8]

そして、日本考古学について書こうと考えた早い段階で、田中琢さんに言ったら、「そんなことは無理だ！一人で日本考古学を網羅できる人なんていないよ」と言われました。しかし、天邪鬼の私は、『東アジア文明

の台頭（China, Korea and Japan: the rise of civilization in East Asia）』という題名で東アジア全体に関する本を出版し、その改訂版を六年前に出しました（図5）。言うまでもなく、この本を書くにあたり[注9]、それまでの学びはすべて糧になりました。日本語と中国語、ICUやハーバードでの美術史の授業、コロラド大学での東アジア文明論、ミシガン大学で学んだ考古学の方法論と理論、すべて役に立ちました。しかし、朝鮮半島については学んだことがありませんでした。

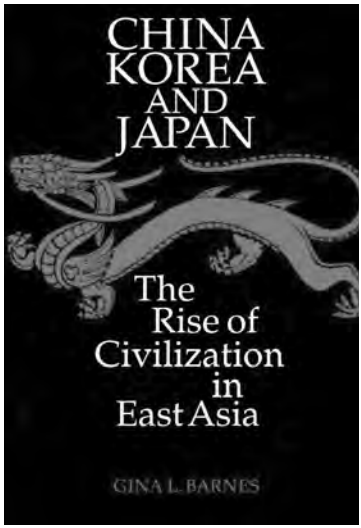


図5 『東アジア文明の台頭』
（Barnes 1993）

ライデン大学日本語教師

ケンブリッジ大学での契約が切れる一九八五年一二月の前に、ヨーロッパにあるいくつかの大学に連絡

注8 Barnes 1983; 1988
注9 Barnes 1993; 2015

をとって、日本語教師の職が空いていないか尋ねました。幸いなことに、ライデン大学からＹｅｓの回答を得ました。ライデン大学では三〇〇人の新入生がいるのに十分な教師がいなかったのです。一九八六年、ライデンへ引っ越し、日本韓国研究所で教えながら、坪井清足（つぼいきよたり）さんが編纂された本の翻訳[注10]や、デイヴィッドとともに坪井さんと田中さんが編纂された平城宮についての本を翻訳しました[注11]。

ライデン大学以外で、日本列島と朝鮮半島をあわせて対象としている研究所の例を知りませんが、朝鮮半島の考古学は日本の歴史を理解するのに不可欠です。『渡来人の考古学と歴史（Archaeology and History of Toraijin）』[注12]を読めばそれがよくわかるでしょう。

一九八七年に私はケンブリッジ大学に戻り、コリン・レンフルー教授の寛大な計らいで、セント・ジョンズ・カレッジの上級研究員として赴任しました。

ライデン大学にいる間に韓国での奨学金があることがわかり、一九八七年・八八年の夏にはソウル、ソンナム、そしてプサン市に滞在し、韓国語を習いながら韓国の遺跡を調べる機会を得ました。その成果は、二〇〇一年に本にしました[注13]。

そして、ケンブリッジ大学で日本語を学ぶ学生たちにも、韓国語を教える羽目にもなりました。しかし、二〇〇〇年代までに日本で教育を受け、日本式の書き方をする韓国考古学界の古い世代は、漢字を使わずハングルで書き、異なる表現をする若い世代に交代していきました。そのため、私は文章を読めなくなってきました。漢字を使わないことで、コミュニケーションの技術がどれほど失われてしまったことでしょう！

奈良盆地の復元

一九八〇年代、ケンブリッジ大学の考古学科で教えていたころ、学生を海外調査に連れていくよう勧められました。一九八四年春の最初の調査（**図6**）では、私の博士論文研究から派生した空撮写真による分析をもとに奈良盆地の地形復元をする手法[注14]を試してみたいと考えていました。天理大学の置田先生と奈良教育大学の西田史朗先生とプロジェクトを組んで、数人の学部生に参加してもらい、地形復元を確認するためにボーリング調査を行いました。その学部生のなかにサイモン・ケイナー君がいて、それが縁で日本考古学への興味が湧き、その後、彼は縄文時代の研究者としての道を歩み始めました。

さらに、一九八八、八九年には、桜井市三輪にある天理教の敷島教会の敷地内で発掘調査を行いました（**図7**）。それには、ケイナー君とマーク・ハド

図6　奈良盆地地形復元プロジェクトでのボーリング調査風景

注10　Tsuboi ed. 1987
注11　Tsuboi and Tanaka 1991
注12　Rhee & Aikens, with Barns 2021
注13　Barnes 2001
注14　バーンズ一九八二

ソン君（その後、弥生時代研究を続け研究者となった）も参加し、天理参考館の職員と現場長のオランダのロエル・ブラントさんに大変お世話になりました。私にとっては現場長の仕事はとても無理でした。私自身、フィールドワークをするための訓練を受けていなかったからです。覚えているでしょうか、ミシガン大学では野外研究の要件から逃げました！

さて、三輪プロジェクトの目的は、四世紀の崇神天皇の磯城瑞籬宮がその周辺にあったかどうかを明らかにすることでした。結果として、この問いに答えるのに必要なデータは得られず、少しがっかりしましたが、英日報告書をまとめることができました。[注15]

後年、この二つのプロジェクトの報告書刊行に、置田先生と西田先生が共著者になってくださいました。[注16] また、博士論文を書いていたころからずっと国家形成論と並行して、地形学に関連した考古学に関心を抱いてきましたが、西田先生との共同研究によって、日本における地質学にさらに目を向けることになりました。

図7　三輪プロジェクト発掘調査風景

中国・牛河梁女神廟の再調査

一九九四年、中国遼寧省で世界銀行が行っていた牛河梁女神廟の再調査に参加しました。率直に言って、この調査はうまくいきませんでした。私が日本で培ってきた人脈やこれまでの研究などは役に立たず、もっと中国語を話せたらと残念に思いました。加えて、当時は中国以外のチームが発掘調査をしたり、発掘調査の許可申請をするのにあまりよい時期ではありませんでした。すでに中国考古学について実績のある張光直先生の申請ですら、許可を得るのに時間がかかっていました。

しかし、この調査に参加したことで、中国考古学を内部から見ることができたことは貴重な経験でした。牛河梁女神廟にかかわるあれやこれやの面倒ごととあわせて、時間、資金、気力をつぎ込んで東アジアで考古学調査をすることは、得られるものに見合わないと悟りました。一方、日本考古学のシステムは非常にしっかりと組織されており、膨大なデータを生み出す発掘調査を一年中行っています。しかし、そのデータを統合する時間はほとんどありませんし、比較研究に費やせる時間はさらに少ない状態でした。だからこそ、そのときから国内で出されたデータを処理して、本を書くことに労力をかけようと決めました。

注15　Barnes & Okita eds. 1993
注16　Barnes et al. 2005

ダーラム大学

セント・ジョンズ・カレッジでの任期の終わりを迎えた一九九五年代の中頃、北東イングランドにあるダーラム大学に職があるという話を聞きました。その話を教えてくれた人に「どんな仕事？　締め切りはいつ？」と尋ねたところ、「昨日だ。いますぐに応募するように!!」と。こうして、私はダーラム大学の東アジア学科で教えることになりました。

近年の大学・大学院の卒業生が、何年も何年も、何十もの職に応募し、その結果得たのが非常勤だったり、任期の定めのある職だったりする人たちの話を聞くと、とても悲しい気持ちになります。私はとんとん拍子に進みすぎ、まったく普通ではありませんでした。助けてくださった方々へ感謝したいと思います。

一九九六年にダーラム大学に着任してすぐ、韓国や日本の考古学で行われている素晴らしい仕事の数々をまとめ、解釈して英文の本を書き、世界に紹介することに注力して、国家形成について二冊を出版しました。韓国について、一九八七年と一九八八年の夏に行った研究論文を纏めて本として出しました。[注17] 日本の古墳時代の考古学については基礎的な教科書として書いたものです。[注18] このとき友人の寺沢さんたちの研究に大変お世話になりました。また、この本の執筆は、常に不思議に思っていた「古墳文化はなぜ急速に日本中に広まったのか？」ということへの理解を深めるきっかけになりました。その問題を、卑弥呼についての仮説を書いた論考のなかで発展させ、古墳前期時代の文化についての問いに答えることができたと満足しています。[注19] ただし、私の答えに賛同する考古学者はほとんどいないようです。

翡翠の研究

ダーラム大学で学科長を務めた一九九七年は、非常に心労の多い時期で、自分自身に、日本考古学のなかで研究したいことは何かを問いかけました。得た答えは、「翡翠」でした。私が指導したイローナ・バウシュさんの博士論文[注20]の研究に刺激を受け、翡翠についてもっともっと知りたくなり、地質学の勉強を始めました。これが、私の人生の新しい章の始まりとなったのです。東京大学出版会の古臭い日本地質学と鉱物学の概説本に四苦八苦しながら、新しい扉の前に立ったのです。ダーラム大学の地質学のクラスの授業をすっかり聞き終わり、さらにこの分野の教育を受けることを決心しました。

二〇〇〇年、日本文化国際研究所に研究提案書を持ち込んで、日本の考古学と地質学との関係を調べようと考えていました。しかし、私の受入研究員であった以前からよく知っていた赤澤威（あかざわたける）先生が、その提案書を書き換えてくださり、国家形成論を調べるべきだと勧めてくれたのですが、その提案には強い興味が持てなかったので、勧めを無視して景観考古学を研究し始めました。[注21]

注17　Barnes 2001
注18　Barnes 2007
注19　バーンズ二〇一一
注20　Bausch 2003
注21　Barnes 2010

日文研に半年ほどいたあと、群馬県の早田勉（そうだつとむ）さんの火山灰考古学研究所で一か月、この新しい分野のいろいろを教えてもらいました。それがきっかけとなり、帰国後イギリスの通信制大学（Open University）に入学しました。

二〇〇七年にダーラム大学の東アジア学科が閉鎖されることになり、その前年に退職しましたが、その後でも履修を続けました。いまからちょうど一〇年前、六五歳で理学士（地球科学：地質学）の学士号を修得しました。プレート・テクトニクスは本当に面白かったのです!! 通信制大学では日本の地質について直接扱うコースはなかったので、また独学で学ぶことになりました。何かを新しく学ぶことは、スポンジが水を吸うようなものです。ときおり、スポンジをぎゅっと絞って、吸い込んだ情報を他の人の役に立つよう吐き出さなければなりません。だからこの大学で学んだ原理をもとに、日本列島の成り立ちについて、地質学者でない人にも理解できるように論文を書きました。そうして二〇一〇年からは地質学を基礎にした、考古学の新しい分野（地震考古学、津波考古学、火山灰考古学）で次々と論文を書き始めました。

二〇一六年に早田さんと一緒に太平洋北部の火山灰考古学の会議パネルを組んで京都で開かれたWorld Archaeological Conference（世界考古学会議）で国際的な発表を指導して、二〇一九年に編纂した論文を本として出しました。英語ですが、出版社のウエブサイトから誰でも無料でe-bookとしてダウンロードできます。[注22]

ついに、翡翠についての問いに戻ることができたのです。驚いたことに、翡翠はプレート・テクトニクスに関係が大有りでした！ 大英国学士院で講義をすることになった私は、中国のネフライト（軟玉）と、その問題点について話しました。[注23] 現在、地質学的観点から翡翠の研究を進め、日本のジェダイト（硬玉）

についても研究しています。日文研に地質学と考古学の関係の提案書を提出した二二年後、『テクトニック考古学』を書きました。[注24] その内容は、日本列島の成り立ち、プレート・テクトニクスに関連する地震考古学、津波考古学、そして火山灰考古学です。その第十二章で「翡翠」について記述しています。日本の科学者と考古学者が、この列島で暮らす人々の暮らしに繰り返し影響を与えてきた災害について研究して得た知見に関する本です。この本が、こうしたことに関心を持っている人たちにとっての入門書となることを願っています。この本も無料のe-bookとして公開しています。地質学についての私の本が、誰かが同じように二〇年間学ぶことを節約できるのであれば、私の時間は無駄ではなかったと言えるでしょう。

次の世代へ

自分のキャリアを振り返ると、もし遺伝学者としての道を歩み続けていたら、どの段階で考古学の研究をすることになっていただろうかと考えます。考古学は、これまでにない新事実を明らかにする、刺激的で活気のある分野であることは間違いありません。もっとデータとにらめっこして、あれこれと扱うこと

注22　Barnes and Soda 2019
注23　Barnes 2018
注24　Barnes 2022

に長けていたらよかったのにと思います。

また、私は一度も教師になろうと思って何かを始めたことはありませんでした。大学教授の職を退いたあと、教室を懐かしく思ったことはありません。しかし、自分自身や他の人々によって得られたり、簡単には得られない知識を書くことを通じて研究仲間や若い世代に伝えていくことはとても楽しいことでした。

夢や興味を追うことは、必ずしもまっすぐではっきりとした道筋で達成できるものではないということを皆さんは学ぶかもしれません。海外へも動き回れること（mobility）も大事です。いまのような、飛行機で飛び回るより、画面越しにあちこちへ行ける時代では、それはそんなに重要ではなくなるのかもしれませんが、コミュニケーションは基本です。興味をかきたてる人たちと話してください。そして、あなたが何者か、何に興味を持っているのかを伝えてください。夢にも思わなかった機会が生じる可能性があります。

最後に、私の驚くべき旅を助けてくれたたくさんの方々にお礼を申し上げたいと思います。また、日本の考古学者の皆さんに敬意を表します。既にこの世を去った先生や先輩にも敬意を払います。ここでお名前をあげることのできなかった皆さん、数十年にわたり私に時間と労力をかけてくださった方々、ご自分の研究や成果を分かちあってくれた人、そして友人たちに、深く感謝いたします。

私の出版物は、皆様の研究のうえに成り立っています。これらが、英語の読者、特に若い人の興味を刺激し、日本の考古学が魅力的なテーマであることを示せたらと願っています。これからその旅をする人たちに、素晴らしい道が続いているようにと祈念しながら、締めくくりたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

文献一覧

- バーンズ・L・ジーナ 一九八二「地形復元と遺物出土地の最近隣法による解析」『考古学と自然科学15』一一三―一三一頁
- バーンズ・L・ジーナ二〇一一「古墳時代前期における統治支配権仮説」『古代学研究190(June)』一―一四頁
- 三木文夫 一九七四『埴輪』(translated by G.L. Barnes. Tokyo: Weatherhill.)
- Barnes, G.L. 1970. Bronze mirror. In: Rosenfield, J. and Shimada, S. (Eds.) *Traditions of Japanese art: selections from the Kimiko and John Powers collection*. Cambridge, MA: Fogg Art Museum, Harvard University: 375-6.
- Barnes, G.L. 1983. *Yayoi-Kofun settlement archaeology in the Nara Basin, Japan*. Ph.D. dissertation, Ann Arbor: Univ. of Michigan.
- Barnes, G.L. 1986. The structure of Yayoi and Haji ceramic typologies. In: Pearson, R.; K. Hutterer and G.L. Barnes (Eds.) *Windows on the Japanese past: studies in archaeology*. Ann Arbor: Center for Japanese Studies, Univ. of Michigan: 449-76.
- Barnes, G.L. 1988. Protohistoric Yamato: archaeology of the first Japanese state. *Museum of Anthropology, Anthropological Papers No. 78 and Center for Japanese Studies (CJS), Paper No.17*. Ann Arbor: Univ. of Michigan.
- Barnes, G.L. 1990. The origins of bureaucratic archaeology in Japan. *Journal of the Hong Kong Archaeological Society* 12 (1986-88): 183-96.
- Barnes, G.L. 1993. *China, Korea and Japan: the rise of civilization in East Asia.* London: Thames & Hudson [paperback edition, 1999]
- Barnes, G.L. 2001. *State formation in Korea: historical and archaeological perspectives*. London: Curzon/ Routledge
- Barnes, G.L. 2003. Chokkomon and the 'art of death'. *East Asia Journal: studies in material culture* 1.2: 43-64.
- Barnes, G.L. 2007. *State Formation in Japan: Emergence of a 4th-century ruling elit*e. London: Routledge.・
- Barnes, G.L. 2010. *Landscape and subsistence in Japanese history.* In: P. Martini P & Chesworth W (Eds.) *Landscapes and societies: selected cases*, Dordrecht: Springer. [Errata on p. 332: "Swidden cultivation survived into the late twelfth century", change to twentieth century] : 321-340.
- Barnes, G.L. 2014. A hypothesis for Early Kofun rulership. *Japan Review* 27: 3-29.

- Barnes, G.L. 2015. *Archaeology of East Asia: the rise of civilization in China, Korea and Japan* (new rewrite of Barnes 1993 & 1999. Thames & Hudson books of different titles). Oxford: Oxbow Books.
- Barnes, G.L. 2018. Understanding Chinese jade in a world context. *Journal of the British Academy* 6: 1-63.
- Barnes, G.L. and Masaaki O. (Eds.) 1993. The Miwa Project Report: survey, coring and excavation at the Miwa site, Nara, Japan. British Archaeological Reports BAR SI 582. Oxford: Tempvs Reparatvm.
- Barnes. G.L, 2022. Tectonic Archaeology Subduction Zone Geology in Japan and its Archaeological Implications. Oxford: Archaeopress
- Barnes, G.L, and Soda, T. (Eds.) 2019. *Tephro Archaeology in the North Pacific*. Oxford: Archaeopress.
- Barnes, G.L, Nishida, S. and Okita, M. 2005. Geoarchaeological studies in Nara: the integrated findings. *Geoarchaeology: an international journal* 20(8): 837-60.
- Bausch, I. 2003. *Jade, amber, obsidian and serpentinite: the social context of exotic stone exchange networks in central Japan during the late Middle Jomon period*: Ph.D. dissertation, University of Durham.
- Chang, K.-C. 1977. *The archaeology of ancient China*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Higuchi, T. and Barnes, G.1995. Bamiyan: Buddhist cave temples in Afghanistan. *World Archaeology* 27(2): 282-302.
- Kidder, J.E. Jr. 1959. *Japan before Buddhism*. London: Thames & Hudson.
- Kidder, J.E. Jr. 1964. *Early Japanese art: the great tombs and treasures*. London & Princeton: Thames & Hudson and Von Nostrand.
- Pearson, R, Hutter, K., and Barnes, G.L. (Eds.) 1986. *Windows on the Japanese Past: studies in archaeology.* Ann Arbor, MI: Center for Japanese Studies, University of Michigan.
- Rhee, S.-N., Aikens, C.M., and Barnes, G.L. 2021. *The Archaeology and History of Toraijin.* Oxford: Archaeopress.
- Tsuboi, K. (Ed.) 1987. *Recent archaeological discoveries in Japan*, translated by G.L. Barnes. Paris/Tokyo: UNESCO/Centre for East Asian Cultural Studies.
- Tsuboi, K., and Tanaka, M. 1991. *The historic city of Nara: an archaeological approach*, translated by David W. Hughes & G.L. Barnes. Paris/Tokyo: UNESCO/Centre for East Asian Cultural Studies.

図版出典

図1　本人写真、本人提供
図2　デンバー美術館撮影、現在著作権は著者が保持
図3　著者作成
図4　Barnes 1986
図5　Barnes 1992
図6　置田雅昭撮影、著作権は著者が保持
図7　著者撮影

パネルディスカッション

羽生淳子　貴重なお話ありがとうございました。私たちは先生の本を読んで勉強した世代です。私はいまアメリカで教えていますが、しょっちゅう、こんな大変なこと辞めたい、と思います。今日のお話を伺っていると、ジーナ先生のほうがもっともっと大変だったことがよくわかりました。こんなことで辞めたいといってはいけないなと深く反省しました。

質問です。ジーナ先生や井川史子（いかわふみこ）先生、サラ・ネルソン先生を含めた、東アジア考古学を七〇年代、八〇年代に作り上げてくださった先生方がいて、私たちの世代の少なくとも二〇〜三〇人は、英語圏やヨーロッパの大学に行って交流を進めようという勢いが、日本の経済状況も手伝ってありました。また、サイモンさんやマークさんなどもいてくださり、心強かったんですね。就職先もどこかにあるだろうと、確信ではありませんが、楽観的な見通しがありました。

しかし、日本考古学の専門の人は、北米で言うと、この前トロント大学のゲイリー・クロフォードさんが退職されたので、非常に数が減ってきています。イギリスではエンリコさんがポジションをとられたので頼りにしていますが、現実問題として日本考古学を勉強できるところが減ってきている状況にあります。そのなかで、どのように次世代の基盤を作っていくか。今日のパネリストの皆さんを見ていると、日本の考古学の将来は明るいという気持ちがある一方で、現実問題、

どのように次世代につなぐかを考えていけばよいか、アドバイスをいただければと思います。

ジーナ・バーンズ　最近の就職状況はよく存じております。日本以外で日本考古学を勉強できるところは非常に限られています。私の経験から、勉強したいと思ったら日本へ行かなければなりません。でも、日本へ行ったら、もっと広い世界の考古学を勉強しなければなりません。その二つを組み合わせることが難しいですね。私はすべて自習でやってきました。それは将来の世代でも必要かもしれません。皆さんはどう思いますか？

庄田慎矢　本日のパネリストのなかにジーナ先生の教え子さんがたくさんいらっしゃいますので、ご意見をお聞きしたいと思います。

サイモン・ケイナー　ジーナ先生は、置田先生や早田先生などとたくさんの共同研究をなさってこられましたが、日本国外の者は、そうしたパートナーシップをどのように作ればよいのでしょうか。

バーンズ　パートナーシップを作るには長い時間が必要です。付き合いながら信頼関係を築いたうえで共同研究が可能になります。それがなければ、外国人として日本で発掘調査をすることはとても大変です。どうしても日本側のパートナーが必要です。私は博士課程研究を始めて一〇年後、皆さんのサポートを受けて文化庁に申請を出し、桜井市の三輪遺跡の発掘調査の許可を得ました。そのような協力がなければできないと思います。一つ残念に思っていることは、一九八九年の発掘調査後、外国人が日本での発掘調査の主任研究者として携わっていないことです。

イローナ・バウシュ　お話はとても楽しく、大学生のころをいろいろと思い出して懐かしくなりました。次世代について、私もとても心配しています。いまライデン大学日本語学部で教えていますが、

日本考古学に興味のある学生はいます。しかし、勉強できる場が非常に少なくなっています。現在、オランダの大学だけではありませんが、中国考古学が盛んですから、中国考古学の教授を求めています。その意味では、エンリコさんがイギリスの大学に職を得たのはとてもよかったと思います。

一方、こちらの大学生は日本にとても行きたがっています。すごく期待し、楽しみにしているのに、行けないんです。もう二年以上行けない状態です。そのことが、日本学や日本考古学に将来的に悪い影響を与えると思います。学生たちは日本に愛情を持っていますが、行けないので（二〇二二年三月時点）、あきらめて違う分野に進んでしまいます。そのような例を見て、非常に心配しています。

サイモンさんが言ったように、共同研究はとても重要なので、学者だけでなく日本政府も少し協力してほしいと思っています。

温品ディアナ　私が住んでいるポルトガルには日本人は少なく、日本研究者もほとんどいないので、お話からさまざまなインスピレーションをいただきました。今日のお話でお聞きしたいことは、比較的最近、地質学や火山考古学について勉強をされたとのことですが、どうして変更されたのですか。困難はなかったのでしょうか。

バーンズ　翡翠についてもう少し調べたかったからです。翡翠が何でできているか不思議に思っていました。東大出版会が出した日本地質学の英文本を読み始めたのですが、なかなか自分の考えと一致しなくて理解できませんでした。そこで、ダーラム大学の地質学の授業を受けさせてもらった

あと通信制大学の地質学コースをとったりしました。

大人になってから大学で勉強をすることの一つの欠点は、自分の知りたいことだけを勉強するということです。そうではなく、教えられることをすべて身につけ、それを追求しなければなりません。そのなかで、私はプレート・テクトニクスに興味を惹かれました。それまでに日本列島の形成について書いたこともあり地質学の話題として知っていましたが、一〇年勉強してやっと、翡翠はプレート・テクトニクスと非常に深い関係があったことがわかりました。長年、翡翠について疑問に思っていたことがやっと解決しました。しかし、翡翠は何でできているのかという新しい疑問がでてきました。私は勉強家で、なんでも疑問に思ったらより深く勉強したいのです。

温品　新しい世代は、ジーナ先生のようにさまざまな分野を勉強するというより、より狭い専門家になることを目的にしているように思います。それについてはどう思われますか。先生のように、ものすごくいろいろな分野を勉強され、さまざまな経験があることはすごく大事なことだと思いますが、これからの世代はどうしたらよいのでしょうか。もっと広い方向に目を向けるべきか、もっと専門的に勉強するべきでしょうか。

バーンズ　若い人に言いたいのは、チャンスがあったら掴んでくださいということだけです。どこにいくかわからないけれど、途中で、何か可能性がでてきます。少し回り道をしてみたら、つながるかもしれません。自分の人生に何が起こるかは予見できません。若いときからできるだけいろいろな経験することが一番よいと思います。

庄田　励ましの言葉をいただいた感じです。若い世代というと、エンリコさんはさらに若い世代を組織

して、日本考古学へ名乗りをあげているところですが、前の世代から引き継いで、どういった新しい展開を考えているのか、話していただけますか。

エンリコ・クレーマ　ジーナ先生、発表ありがとうございました。本当に素晴らしく、いつも勉強を続けておられ、新しい分野に飛び込む勇気があることを知り、すごく勉強になりましたし、すごい刺激をいただきました。

さて、日本考古学を勉強するのに、ある意味で、これまで難しかったことが簡単になったこともあります。たとえば、僕が日本考古学を勉強するときの一番の壁は、日本語自体を読める、話せるようになることでした。私はハーフだったので話すことはできましたが、平仮名すら読めない状態でとても苦労しました。私の学生たちは、いまグーグル翻訳とかDeepLとかを使って、スマートフォンで文章の写真を撮って、その場で読んだりしています。それが結構ちゃんとした翻訳なんです。数年前はグーグル翻訳はあまり信用できませんでしたが、最近はちゃんとした翻訳になっています。報告書のすごく細かいことも読めるようになっています。さらに、奈文研の報告書がネットに載っていることもあって、これまで不可能であったことが可能になっていることは事実です。それによって日本考古学を勉強する機会が増えたため、将来性が一番の不安になっています。日本考古学をやっている私の学生も、日本考古学では食っていけないということをとても心配しています。私が考古学を教えていることも一つの理由でもあるのですが、博士論文の次は、日本以外の地域でやっていくというのがパターンになっているみたいです。

残念に思うのは、日本考古学が専門というかたちがなくなってしまうのではないかというこ

とです。私はいちおうケンブリッジ大学に籍がありますが、日本考古学のポストではありません。日本考古学の講義はできません。一つのコースのなかの一つの講義で話すくらいです。本当に、日本考古学を教える機会がなくなっています。日本考古学だけでなく、世界考古学を教えるコンテキストを中心とした講義自体もだんだん外されてきています。たとえば、中央アジアとかヨーロッパの新石器、ギリシャ・ローマの考古学は大丈夫ですが、そのほかの地域の考古学は困難な状況になっています。今後どうなっていくか心配ですね。

私としては共同研究が鍵だと思っています。日本との交流が増え、たとえ自分の専門が日本考古学でなくても、一部でも関わりがあれば日本の考古学者と一緒に働いていくのが、今後一番のかたちになるのかなあという、予測ではありませんが、そういう雰囲気ではと思っています。

庄田　ブリッタさんは日本の古墳時代をドイツにいながらにして研究されていますが、エンリコさんの話に共感するところとか、いやあそうじゃあないんだとか、ありますか。

ブリッタ・シュタイン　ドイツはちょっと特殊という気がします。アメリカやイギリスと違って、日本考古学を勉強できる大学はまったくありません。日本考古学について研究したかったら、自分で勉強しなければなりません。私は、先史考古学と日本学の二つの専門を勉強しました。それを組み合わせて日本考古学の研究をしました。現在、教師としてハレ大学で働いていますが、博士論文を書き終わったらどうなるか、まったくわかりません。どんな大学で、日本考古学を専門として働けるかどうかはわかりません。そういう専門がドイツにはないからです。

ドイツの学生が日本考古学に興味がないというわけではありませんが、日本学のなかで考古学

を研究している人はまったくいません。そのため、若い世代には、できるだけ早く学会に入って、あちこちの会議に参加して、いろいろな研究者に会うことが一番大事だと。何かプロジェクトが始まるといった情報と、日本との個人的な関係がすごく大事だと思いますが、でも、難しいですね。

庄田　ここで鍵になる、日本で活躍しているライアンさん、これからどうしていきましょうか。

ジョセフ・ライアン　日本考古学への懸念はもう出つくしているので、新たに付け加えることはあまりないのですが、その前に言っておきたいことがあります。中学生のころバーンズ先生の本をむさぼり読んでいた身からすると、今日の発表はとても面白く聞かせていただきました。僕が日本考古学の勉強を始めたのも、バーンズ先生のおかげがすごく大きいと思います。そして、今日ご発表を聞いて、英語圏で日本考古学を勉強できる枠組みがまだないなか、どれほど先生がご苦労なさったのかがよくわかり、大変感銘を受けました。

　これからどうするかというと、僕は日本の大学に就職しているので、ある意味、問題をこじらせているかもしれませんが、エンリコ先生が指摘されたように共同研究がけっこう大きいと思っています。岡山にも留学生がちょくちょく来ます。そういうかたちでの交流がこれからの時代、あっていると考えています。私もいまの状況は非常に不安です。

庄田　では、羽生さんに何か秘策があるのか伺ってみましょう。

羽生　秘策はありません。半年ほど前に九州大学の溝口孝司さんと話をしていたのですが、私の周りにいた北米で日本考古学をやっていた方々が、次々とリタイアして、危機感がひとしおです。イ

ギリスの場合、まだ周りに複数の方がおられますが、カナダを含めて大変なことになっているという危機感を、パネリストの皆さんはもちろんですが、日本の方々にも共有していただかないと、一〇年後、アメリカに留学できるところはなくなります。共同研究もです。さきほどから庄田さんの横に映っている西原和代さんはバークレーに二年きてくださり大変ありがたかったのですが、そういう貴重な方が以前より確実に減っています。半年でも、一か月でも二か月でもよいですから、まずは来て、何ができるか見てもらわないと、これまで普通にできていたことがどんどんできなくなります。そうなってから、もう一度、ジーナ先生たちが作ってくださった基盤をゼロから作るのは大変です。

地域研究（エリア・スタディーズ）が英米の大学で非常に厳しくなっています。時間や手間暇のかかるものは切り捨てていくという流れになっているなかで、いまあるものをなんとかしないと、という危機感を日本の皆さまに共有していただきたいというのが一つです。

もう一つ、溝口さんと話していたのは、とにかく私たちはお互いの論文を引用して、それが存在していることを、もっとみんなに見ていただかないと大変だということです。日本考古学ってある意味、みんな好きだからやっている、自分の好きなことをやる人が集まっている分野だと思うんですよ。共同研究ももちろんですが、お互いがやっていることを学んで、引用し、他の人にも読んでもらう努力を意識的にしないと、かなり厳しいだろうと。逆に言えば、まだここにこれだけの人がいて、今日もたくさんの人が集まってきてくださっているので、関心のある方はいます。でも五年後には、何かしないとこの状況はもっと厳しくなるという危機感を共有していただ

きたい。危機感といっても楽しくやらなければしょうがないので、ジーナ先生がおっしゃったように信頼と親しみをもとにして、共同研究をやっていく必要があると、今日のお話を伺ってつくづく思いました。

庄田　エンリコさんからも何かありますか。

クレーマ　私からは、日本の考古学者にお願いが一つあります。私の世代も、前の世代も、日本人の考古学者が英語で書いてくれた論文を読んだことが最初のきっかけとなって、勉強することになりました。さきほども述べましたが、まったく関係ない中央アジアの考古学者が日本考古学の論文を読んだことで、私はいまここに立っています。日本の考古学者が英語で書いた論文を読むことで、日本考古学面白いな、日本語勉強しようという気持ちになりました。みんな同じようにしてはいってきたと思います。日本の考古学の次を担うのは皆さんなので、よろしくお願いします。さきほど危機感を強調しましたが、逆に言うと、いまカリフォルニア大学バークレー校には日本考古学をやっている学生が複数います。日本語もとても上手に話す学生もいます。大変ありがたいことです。その理由の一つに、アメリカで日本考古学を勉強できるところがないので、みんなバークレーに集まっている状況もあると思いますが、彼らのやっていることを見ると、本当に頑張っていて、育っていることは確かです。なので、いかに助け合えるかにかかっていると思います。その意味で、日本の皆さんも海外から学生さんが来たとき、「助けてください」とは言いませんが、長い目で見たらお互いのメリットになるということを考えながら……。違いはどうしようもないと思います。私もアメリカに二〇年いますが、英語が母語の人のように話せるわけでは

ありません。その点で比べられたらハンディーはあります。なので、私が提供できることを評価してもらえなかったら、ここにいる意味はありません。逆に海外の学生が日本に行ったときに日本の学生と同じことをするのではなくて、新しい違う考え方を持ってきてくれるところで評価していただけるといいなと思います。

ケイナー　エンリコさんや羽生さんがお話しされたことはとても大事です。それと関連して、溝口幸司さんや佐々木憲一さんと一緒に日本考古学協会で発行している英文の雑誌『Japanese Journal of Archaeology』は、皆さんがオンラインで無料でアクセスできます。このような雑誌は、日本の考古学者によいチャンスとなります。自分の研究を英語で発表していただけると、読んでもらえる可能性が広がります。ぜひ、この雑誌を使ってください。今日は本当に素晴らしい発表を聞けて嬉しく思います。ありがとうございました。

バーンズ　『Japanese Journal of Archaeology』だけではなく東アジア考古学会がだしている『Society of East Asian Archaeology（SEAA）https://seaa-web.org/』で交流を続ける方法もあります。SEAA は東洋学者が『Society of American Archaeology（SAA）』や『Association for Asian Studies（AAS）』などの厳しい学会に出る前に、英語で発表できるようにと考えて作りました。それをもっと使っていただければ嬉しいです。

庄田　いろいろな提案をいただき、明るい希望も見えてまいりました。時間もオーバーしておりますので、これで締めたいと思います。ありがとうございました。

編者紹介

庄田 慎矢（しょうだ しんや）

一九七八年　北海道生まれ
二〇〇一年　東京大学文学部歴史文化学科卒業
二〇〇七年　忠南大学校博士課程修了　文学博士
現　在　国立文化財機構奈良文化財研究所企画調整部国際遺跡研究室長

西原 和代（にしはら かずよ）

一九九〇年　広島生まれ
二〇一六年　京都大学大学院文学研究科修士課程修了　文学修士
二〇二二年　京都大学大学院文学研究科博士課程研究指導認定退学
現　在　国立文化財機構奈良文化財研究所企画調整部国際遺跡研究室アソシエイトフェロー

村上 夏希（むらかみ なつき）

一九八七年　福島生まれ
二〇一〇年　東京学芸大学教育学部文化財科学専攻卒業
二〇一七年　東京藝術大学博士課程修了　博士（文化財）
現　在　国立文化財機構奈良文化財研究所企画調整部国際遺跡研究室アソシエイトフェロー

奈良文化財研究所国際遺跡研究室リレートーク

海外から見た日本考古学の魅力

発　行　2024年1月31日　第1版第1刷

監　修　独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2-9-1
https://www.nabunken.go.jp/

編　集　庄田慎矢・西原和代・村上夏希

本書の内容を無断で複写・複製・転載することを禁じます。
©2024 Nara National Research Institute for Cultural Properties

ISBN978-4-911002-42-1